よし　たけ

吉武遺跡群

XIII

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書6

—第Ⅰ・Ⅱ次調査の縄文時代・
古墳時代から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集

2001

福岡市教育委員会

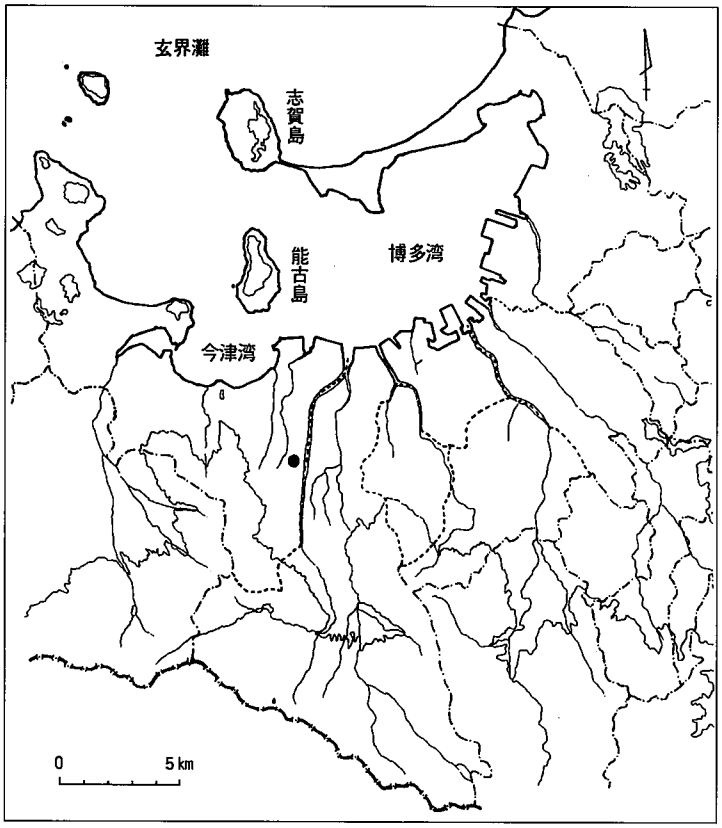
吉武遺跡群

XIII

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 6

—第Ⅰ・Ⅱ次調査の縄文時代・
古墳時代から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集



遺跡略号：ＹＳＴ
1・2次
調査番号
8102, 8234

2001

福岡市教育委員会

Ⅷ区全景（手前がＳＤ－02）（北から）

Ⅸ区西側遠景（ＳＣ－80他）（南東から）

巻頭図版

序

古来より大陸の門戸であった福岡市域には、アジアとの交流を示す多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも特に、市西郊の室見川左岸に広がる吉武遺跡群は、弥生～奈良時代にわたる長期の遺跡が数多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では昭和56年度より飯盛・吉武地区農業基盤整備事業の施工に伴い、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀に遡る弥生時代の豊富な青銅器を多く副葬した特定集団の墓地や大型建物群、紀元前後の弥生時代の墳丘墓、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群及び集落址、奈良時代末～平安時代にかけての官衙あるいは寺院址など各時代の遺構が検出されました。本書は第Ⅰ・Ⅱ次調査の内、縄文時代・古墳時代から平安時代までの遺構を収録したものです。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める手助けとなり、また学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にかかる飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員および市農林水産局の方々、報告書にかかわった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定について強力なご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対し、心より感謝申し上げる次第です。

平成13年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する吉武遺跡群、第Ⅰ・Ⅱ次調査の内、縄文時代・古墳時代から平安時代の遺構についての発掘調査報告書である。

2．発掘調査は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財課が昭和56年度から昭和60年度にわたって実施した。

3．発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土壙をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、竪穴住居址をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、ピットをＳＰ、甕棺墓をＫと表記した。

4．本書は調査された各時代遺構の内、縄文時代の貯蔵穴、古墳時代から平安時代の遺構について報告するものである。

5．本書に使用した遺構実測図の作成は、二宮忠司が行い、また、遺物実測は大庭友子が行った。

6．本書に使用した図面類の整図および製図は、大庭友子が行った。

7．本書に使用した写真は、二宮忠司が行った。

8．本書で使用した方位は、すべて磁北である。真北は西偏に6°21′である。

9．本書の執筆・編集は、二宮忠司・大庭友子が行った。

10．発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基づき整理し、埋蔵文化財センターに保管・管理する予定である。

11．挿図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。又，写真図版内にある番号は遺物登録番号・挿図番号・写真番号である。

12．表紙題字は杉山悦子氏にお願いした。記して感謝いたします。

本 文 目 次

第一章　はじめに …… 1
第二章　第一次調査 …… 9
　第一節　第一次調査の概要 …… 9
　第二節　第一次調査の記録 …… 11
　　1．第一次調査Ⅱ区―古墳時代の遺構― …… 11
　　住居址 …… 11
　　掘立柱建物 …… 15
　　ＳＸ（不整形土壙） …… 21
　　出土遺物 …… 24
　　2．第一次調査Ⅳ区―奈良時代以降の遺構― …… 27
第三章　第二次調査 …… 29
　第一節　第二次調査の概要 …… 29
　第二節　第二次調査の記録 …… 30
　　1．第二次調査Ⅴ区―縄文時代の遺構― …… 30
　　貯蔵穴 …… 30
　　出土遺物（1）土器 …… 53
　　（2）石器 …… 59
　　（3）柱材 …… 59
　　（4）種子 …… 59
　　2．第二次調査Ⅴ区―奈良時代以降の調査― …… 62
　　ＳＸ（不整形土壙）と埋甕 …… 62
　第三節　第二次調査Ⅵ区―奈良時代以降の遺構― …… 62
　第四節　第二次調査Ⅶ区―奈良時代以降の調査― …… 65
　第五節　第二次調査Ⅷ区―古墳時代の遺構― …… 71
　　検出遺構 …… 71
　　掘立柱建物 …… 71
　　ＳＸ（不整形土壙）・井戸状遺構 …… 81
　　出土遺物 …… 84
　第六節　第二次調査Ⅸ区―古墳時代の遺構― …… 99
　　検出遺構 …… 99
　　住居址 …… 99
　　掘立柱建物 …… 99
　　ＳＸ（不整形土壙）・井戸状遺構 …… 119
　　溝状遺構 …… 123
　　出土遺物 …… 123
　第七節　第二次調査Ⅹ区―古墳時代の遺構― …… 152
　　検出遺構 …… 152
　　溝状遺構 …… 152
　　出土遺物 …… 152
第四章　まとめ …… 153

挿 図 目 次

Fig. 1　吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000)…… 4
Fig. 2　吉武遺跡群位置図(縮尺1/20,000)…… 5
Fig. 3　吉武遺跡群と周辺遺跡(縮尺1/4,000)…… 6
Fig. 4　調査区配置図(第一～第六次調査)(縮尺1/4,000)…… 7
Fig. 5　調査区配置図(第1次調査)(縮尺1/1,000)…… 8
Fig. 6　第1次Ⅱ区全体図(縮尺1/400)……10
Fig. 7　古墳時代遺構全体図(縮尺1/300)……12
Fig. 8　古墳時代住居址実測図―1(縮尺1/60)……13
Fig. 9　古墳時代住居址実測図―2(縮尺1/60)……14
Fig.10　古墳時代掘立柱建物実測図―1(縮尺1/80)……16
Fig.11　古墳時代掘立柱建物実測図―2(縮尺1/80)……17
Fig.12　古墳時代不整形土壙実測図―1(縮尺1/60)……19
Fig.13　古墳時代不整形土壙実測図―2(縮尺1/60)……20
Fig.14　古墳時代不整形土壙実測図―3(縮尺1/60)……22
Fig.15　古墳時代不整形土壙実測図―4(縮尺1/60)……23
Fig.16　第1次Ⅱ区出土遺物実測図(縮尺1/1, 1/3)……24
Fig.17　第1次Ⅳ区遺構配置図(縮尺1/300)……25
Fig.18　溝状遺構実測図(縮尺1/200)……26
Fig.19　第2次調査Ⅴ・Ⅵ区全体図(縮尺1/300)……28
Fig.20　第Ⅴ区縄文時代貯蔵穴配置図(縮尺1/200)……31
Fig.21　SU－01～05・07・45平面・断面図(縮尺1/40)……32
Fig.22　SU－06・08・09平面・断面図(縮尺1/40)……34
Fig.23　SU－43・44平面・断面図(縮尺1/40)……35
Fig.24　SU－21・36・42平面・断面図(縮尺1/40)……36
Fig.25　SU－10・11・13平面・断面図(縮尺1/40)……38
Fig.26　SU－12・32・35平面・断面図(縮尺1/40)……39
Fig.27　SU－37・38・41平面・断面図(縮尺1/40)……40
Fig.28　SU－19・23・39・46平面・断面図(縮尺1/40)……42
Fig.29　SU－15・16平面・断面図(縮尺1/40)……43
Fig.30　SU－14・17・18平面・断面図(縮尺1/40)……44
Fig.31　SU－20・22・40平面・断面図(縮尺1/40)……46
Fig.32　SU－29・30・34平面・断面図(縮尺1/40)……47
Fig.33　SU－28・31・33平面・断面図(縮尺1/40)……49
Fig.34　SU－24～27平面・断面図(縮尺1/40)……51
Fig.35　Ⅴ区出土遺物実測図－1(縮尺1/3)……54
Fig.36　Ⅴ区出土遺物実測図－2(縮尺1/3)……56
Fig.37　Ⅴ区出土遺物実測図－3(縮尺1/2, 1/3)……57
Fig.38　Ⅴ区出土遺物実測図－4(縮尺1/2, 1/3)……60
Fig.39　第2次調査Ⅴ区土壙平面・断面図(縮尺1/3, 1/10, 1/100)……63
Fig.40　第2次調査Ⅵ区溝平面・断面図(縮尺1/100)……64
Fig.41　第2次調査Ⅶ区検出遺構全体図(縮尺1/300)……66
Fig.42　溝平面・断面図、木器実測図(縮尺1/3,1/250)……67
Fig.43　溝・畦畔状遺構実測図(縮尺1/50,1/100)……68
Fig.44　Ⅷ区遺構配置図(縮尺1/300)……69
Fig.45　Ⅷ区掘立柱建物実測図―1(縮尺1/80)……70
Fig.46　Ⅷ区掘立柱建物実測図―2(縮尺1/80)……72
Fig.47　Ⅷ区掘立柱建物実測図―3(縮尺1/80)……73

Fig.48 Ⅷ区掘立柱建物実測図―4（縮尺1/80）…… 74
Fig.49 Ⅷ区掘立柱建物実測図―5（縮尺1/80）…… 76
Fig.50 Ⅷ区掘立柱建物実測図―6（縮尺1/80）…… 77
Fig.51 Ⅷ区掘立柱建物実測図―7（縮尺1/80）…… 78
Fig.52 Ⅷ区不整形土壙実測図―1（縮尺1/60）…… 82
Fig.53 Ⅷ区不整形土壙実測図―2（縮尺1/40,1/60,1/80）…… 83
Fig.54 Ⅷ区不整形土壙実測図―3（縮尺1/80）…… 85
Fig.55 Ⅷ区出土遺物実測図―1（縮尺1/3,1/4）…… 86
Fig.56 Ⅷ区出土遺物実測図―2（縮尺1/3,1/4）…… 88
Fig.57 Ⅷ区出土遺物実測図―3（縮尺1/3,1/4）…… 90
Fig.58 Ⅷ区出土遺物実測図―4（縮尺1/3）…… 91
Fig.59 Ⅷ区出土遺物実測図―5（縮尺1/3,1/6）…… 93
Fig.60 Ⅷ区出土遺物実測図―6（縮尺1/3）…… 94
Fig.61 Ⅷ区出土遺物実測図―7（縮尺1/3）…… 96
Fig.62 Ⅷ区出土遺物実測図―8（縮尺1/4,1/8）…… 97
Fig.63 Ⅸ区遺構検出状態―1（縮尺1/400）…… 100
Fig.64 Ⅸ区遺構検出状態―2（縮尺1/400）…… 101
Fig.65 Ⅸ区検出竪穴住居址実測図（縮尺1/80）…… 102
Fig.66 Ⅸ区掘立柱建物実測図―1（縮尺1/80）…… 104
Fig.67 Ⅸ区掘立柱建物実測図―2（縮尺1/80）…… 105
Fig.68 Ⅸ区掘立柱建物実測図―3（縮尺1/80）…… 106
Fig.69 Ⅸ区掘立柱建物実測図―4（縮尺1/80）…… 108
Fig.70 Ⅸ区掘立柱建物実測図―5（縮尺1/80）…… 109
Fig.71 Ⅸ区掘立柱建物実測図―6（縮尺1/80）…… 110
Fig.72 Ⅸ区掘立柱建物実測図―7（縮尺1/80）…… 112
Fig.73 Ⅸ区掘立柱建物実測図―8（縮尺1/80）…… 113
Fig.74 Ⅸ区掘立柱建物実測図―9（縮尺1/80）…… 114
Fig.75 Ⅸ区掘立柱建物実測図―10（縮尺1/80）…… 116
Fig.76 Ⅸ区掘立柱建物実測図―11（縮尺1/80）…… 117
Fig.77 Ⅸ区不整形土壙実測図―1（縮尺1/60）…… 118
Fig.78 Ⅸ区不整形土壙実測図―2（縮尺1/60）…… 120
Fig.79 Ⅸ区不整形土壙実測図―3（縮尺1/60）…… 121
Fig.80 Ⅸ区検出SD―07平面・断面図（縮尺1/80）…… 122
Fig.81 Ⅸ区出土遺物実測図―1（縮尺1/3）…… 124
Fig.82 Ⅸ区出土遺物実測図―2（縮尺1/3）…… 126
Fig.83 Ⅸ区出土遺物実測図―3（縮尺1/4）…… 128
Fig.84 Ⅸ区出土遺物実測図―4（縮尺1/4）…… 129
Fig.85 Ⅸ区出土遺物実測図―5（縮尺1/4）…… 130
Fig.86 Ⅸ区出土遺物実測図―6（縮尺1/4）…… 132
Fig.87 Ⅸ区出土遺物実測図―7（縮尺1/3）…… 133
Fig.88 Ⅸ区出土遺物実測図―8（縮尺1/3）…… 134
Fig.89 Ⅸ区出土遺物実測図―9（縮尺1/4）…… 137
Fig.90 Ⅸ区出土遺物実測図―10（縮尺1/4）…… 138
Fig.91 Ⅸ区出土遺物実測図―11（縮尺1/3,1/4）…… 139
Fig.92 Ⅸ区出土遺物実測図―12（縮尺1/3）…… 141
Fig.93 Ⅸ区出土遺物実測図―13（縮尺1/3）…… 142
Fig.94 Ⅸ区出土遺物実測図―14（縮尺1/3）…… 143
Fig.95 Ⅸ区出土遺物実測図―15（縮尺1/3）…… 145
Fig.96 Ⅸ区出土遺物実測図―16（縮尺1/4）…… 146

Fig.97　Ⅸ区出土遺物実測図—17(縮尺1/3,1/8)…… 147
Fig.98　Ⅸ区出土遺物実測図—18(縮尺1/3)…… 148
Fig.99　Ⅹ区遺構検出状態(縮尺1/200)…… 150
Fig.100 Ⅹ区出土遺物実測図(縮尺1/3)…… 152

図　版　目　次

巻頭図版 第２次Ⅷ区全体写真　第２次Ⅸ区全体写真
PL. 1　Ⅱ区検出遺構—1　PL. 2　Ⅱ区検出遺構—2　PL. 3　Ⅱ区検出遺構—3
PL. 4　Ⅳ・Ⅴ区検出遺構　PL. 5　Ⅴ区検出遺構　PL. 6　Ⅴ区検出貯蔵穴—1
PL. 7　Ⅴ区検出貯蔵穴—2　PL. 8　Ⅴ区検出貯蔵穴—3　PL. 9　Ⅴ区検出貯蔵穴土層断面
PL.10　Ⅴ区検出貯蔵穴土層断面と柱穴　PL.11　Ⅴ区貯蔵穴柱穴と遺物検出及びⅥ区溝状遺構
PL.12　Ⅶ区検出遺構　PL.13　Ⅶ・Ⅷ区検出遺構とⅦ区遺物検出状況
PL.14　Ⅷ区検出遺構—1　PL.15　Ⅷ区検出遺構—2
PL.16　Ⅷ区検出遺構—3　PL.17　Ⅷ区検出遺構—4
PL.18　Ⅷ区検出遺構と遺物検出状況　PL.19　Ⅸ区検出遺構—1
PL.20　Ⅸ区検出遺構—2　PL.21　Ⅸ区遺物検出状況—1
PL.22　Ⅸ区出土遺物とⅩ区検出遺構　PL.23　出土遺物—1
PL.24　出土遺物—2　PL.25　出土遺物—3
PL.26　出土遺物—4　PL.27　出土遺物—5
PL.28　出土遺物—6　PL.29　出土遺物—7
PL.30　出土遺物—8　PL.31　出土遺物—9
PL.32　出土遺物—10　PL.33　出土遺物—11
PL.34　出土遺物—12　PL.35　出土遺物—13
PL.36　出土遺物—14　PL.37　出土遺物—15
PL.38　出土遺物—16　PL.39　出土遺物—17
PL.40　出土遺物—18

表　目　次

Tab. 1　吉武遺跡群調査一覧 …… 2
Tab. 2　吉武遺跡２次Ⅴ区検出貯蔵穴一覧 …… 61
Tab. 3　１・２次(Ⅱ区・Ⅸ区)住居址計測一覧 …… 155
Tab. 4　１次Ⅱ区掘立柱建物計測一覧 …… 156
Tab. 5　１次Ⅱ区不整形土壙計測一覧 …… 157
Tab. 6　２次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧—１ …… 158
Tab. 7　２次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧—２ …… 159
Tab. 8　２次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧—３ …… 160
Tab. 9　２次Ⅸ区掘立柱建物計測一覧—１ …… 161
Tab.10　２次Ⅸ区掘立柱建物計測一覧—２ …… 162
Tab.11　２次Ⅸ区掘立柱建物計測一覧—３ …… 163
Tab.12　２次Ⅸ区掘立柱建物計測一覧—４ …… 164
Tab.13　２次Ⅸ区掘立柱建物計測一覧—５ …… 165
Tab.14　２次Ⅷ・Ⅸ区不整形土壙・Pit・井戸計測一覧 …… 166

付　図　目　次

付図—１　吉武遺跡群第１・２次全体図
付図—２　吉武遺跡群第１次全体図（縮尺　1/400）
付図—３　吉武遺跡群第Ⅷ区全体図（縮尺　1/200）
付図—４　吉武遺跡群第Ⅸ区全体図（縮尺　1/300）

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

吉武遺跡群発掘調査のきっかけとなったのは、昭和55(1980)年6月11日に農林水産局農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課に提出された福岡市西区の『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』計画である。

当初の整備計画では、対象面積46.4haの内、昭和55年度―3.6ha・昭和56年度―9.0ha・昭和57年度以降－33.8haを整備するものであった。このうち昭和55年度対象地区は、地形的に明らかに東側を流れる室見川の比較的新しい氾濫源であることと、工事施工の上で殆ど影響を受けないために本調査からは除外した。

昭和56年度以降の対象地は、昭和44年に行われた九州大学による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって、全域に弥生～古墳時代の遺物が散布することがしられていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地(対象7.5ha)について試掘調査(56年6月16～19日・7月8～10日)を実施して遺構内容の把握を行ったところ、弥生時代前期～中期にかけての甕棺墓群や、竪穴式住居址・溝・柱穴群など弥生時代～古墳時代にかけての遺構が、全体に広がっていることが明らかとなった。この後、この成果をもとに対象地のうち、造成工事に伴って遺構の失われる切土・構造物(道路・水路)部分などの範囲を確定するために事業者と協議を重ね昭和56年11月1日より本格的な調査を開始した(第一次調査)。

第一次調査以降、工事施工と発掘調査が時期的に重複するため、各事業年度での発掘調査規模を設計変更などで調査面積を最低に押さえるための協議が土地改良組合、文化課、事業指導課(農業土木課)とで定期的にもたれ、事業の円滑な推進が計られた。

また、圃場整備で六次にわたって調査された吉武遺跡群のうち、豊富な青銅製武器・鏡・玉などの副葬品を伴う吉武高木弥生墓地(第四・五次)や吉武大石弥生墓地(第六次)の一部は、弥生時代の墓制を考える上で学術的に非常に価値が高く、地権者の理解をえて国史跡『吉武遺跡』として永久に保存されることとなった。

2．調査の組織

昭和56年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】　農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】　福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調査総括】　文化課　甲能貞行

埋蔵文化財係長　柳田純孝

【調査庶務】　文化課　岡島洋一

【調査担当】　発掘調査　二宮忠司、田中壽夫、小林義彦　試掘調査　横山邦継

【整理調査員】　大庭友子

【整理作業員】　牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子、太田順子、武田祐子

【調査作業員】　青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、

Tab. 1　吉武遺跡群調査一覧（平成13年１月現在）

次数	調査番号	次数名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	担当者	報告書
1	8102	国場整備第1次	西区大字飯盛字本名地内	19811101～19820315	12,000	二宮忠司・小林義彦 田中寿夫	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第437・514・580・600・650・675集
2	8234	国場整備第2次	西区大字飯盛地内	19820901～19830215	21,000	二宮忠司	437・514・580・600・650・675集
3	8235	田・飯盛線第1次	西区大字飯盛字トイ他地内	19820922～19830212	5,200	山崎龍雄	127集
4	8335	国場整備第3次	西区大字吉武字桜町110他地内	19830912～19840324	25,000	横山邦継 下村　智	143・461・514・580・600・650集
5	8415	田・飯盛線第2次	西区大字飯盛地内	19840413～19840531	1,600	浜石哲也	194集
6	8416	国場整備第4次	西区大字吉武字高木194他地内	19840701～19850320	26,000	横山邦継・下村　智 常松幹雄	143・437・461・514・580・600・650集
7	8426	野方・金武線第2次	西区大字吉武三十六146他地内	19850326～19850531	2,300	横山邦継 下村　智	187集
8	8518	国場整備第5次	西区大字吉武字高木地内	19850702～19850724	470	横山邦継	143・461・514・580・600・650集
9	8535	国場整備第6次	西区大字吉武字大石地内	19850801～19860331	28,000	力武卓治・下村　智 常松幹雄・加藤良彦	143・461・514・580・600・650集
10	8650	国場整備第7次	西区大字吉武字大石36他地内	19861116～19870227	5,000	力武卓治 常松幹雄	未　刊
11	8662	野方・金武線第6次	西区大字飯盛地内	19860301～19860510	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	303集
12	8714	野方・金武線第7次	西区大字飯盛字トイ地内	19870601～19870909	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	303集
13	8752	国場整備第8次	西区大字吉武地内	19880301～19880331	1,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
14	8838	国場整備第9次	西区大字吉武高木地内	19880725～19880916	724	山崎龍雄	未刊

尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
倉光三保、倉光ユキエ、菰田洋子、榊スミ子、榊太郎、榊光雄、柴田大正、
白坂フサヲ、新町ナツ子、惣慶トミ子、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、
中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、能美八重子、浜田澄美枝、
林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、
又野栄子、真名子千恵子、真名子時雄、八尋君代、山下サノエ、結城君江、
結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、
吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、
米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和57年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調 査 総 括】 文化課 生田征生

埋蔵文化財係長 柳田純孝

【調 査 庶 務】 文化課 岡島洋一

【調 査 担 当】 発掘調査 二宮忠司、山崎龍雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子
太田順子、武田祐子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、
牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、
尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
倉光三保、倉光ユキエ、小林ツチエ、菰田洋子、榊スミ子、榊太郎、榊光雄、
坂田セイ子、柴田大正、柴田常人、清水フミ代、白坂フサヲ、新町ナツ子、
惣慶トミ子、高田マサエ、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、舎川春江、
中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、西納トシエ、西納テル子、
能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、
藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、松尾鈴子、松尾キミ子、松尾久代、
真名子千恵子、真名子時雄、真鍋チエ子、八尋君代、山下サノエ、山西人美、
結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、
吉岡アヤ子、吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、
吉岡文子、米島ハツネ、脇坂ミサヲ

凡　例

第一・二次調査での遺物登録番号を下記のように定めた。

福岡市では、遺物に対して五桁の番号を与える。そこで今回、第一・二次の遺構と遺物に対して区別を与えるため下記のように記した。ただし、10区は区の番号を0とする。

区	遺構	0	0	1

遺構は　0—掘立柱建物
1—住居址内遺物
2—溝出土遺物
3—甕棺墓及び副葬品
4—土壙墓
5—井戸
6—縄文時代貯蔵穴
7—石器
8—木製品
9—不明土壙

甕棺墓出土のうち、下棺、上棺の順で登録番号を付している。

ただし10区は0とした。

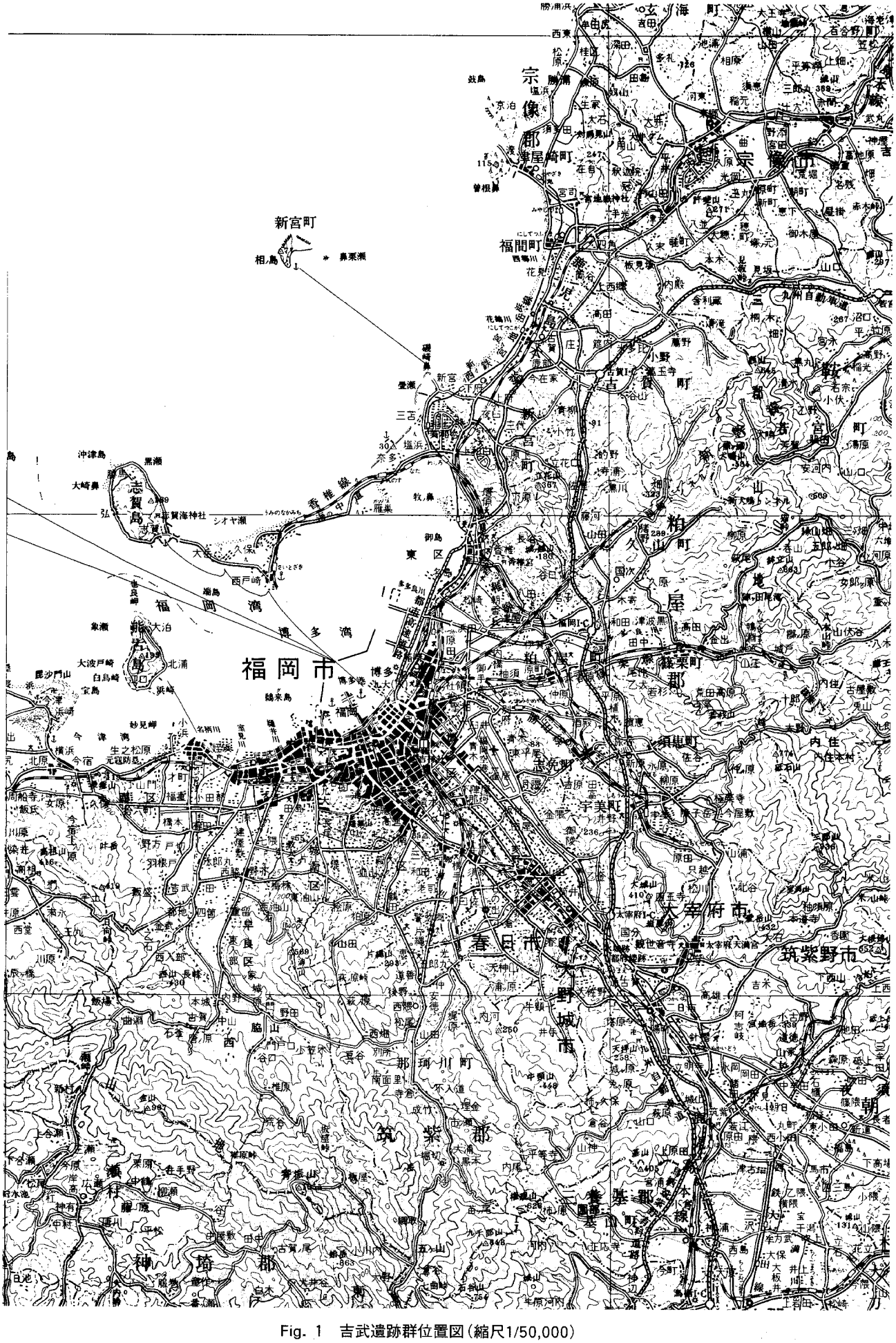


Fig. 1　吉武遺跡群位置図（縮尺1/50,000）

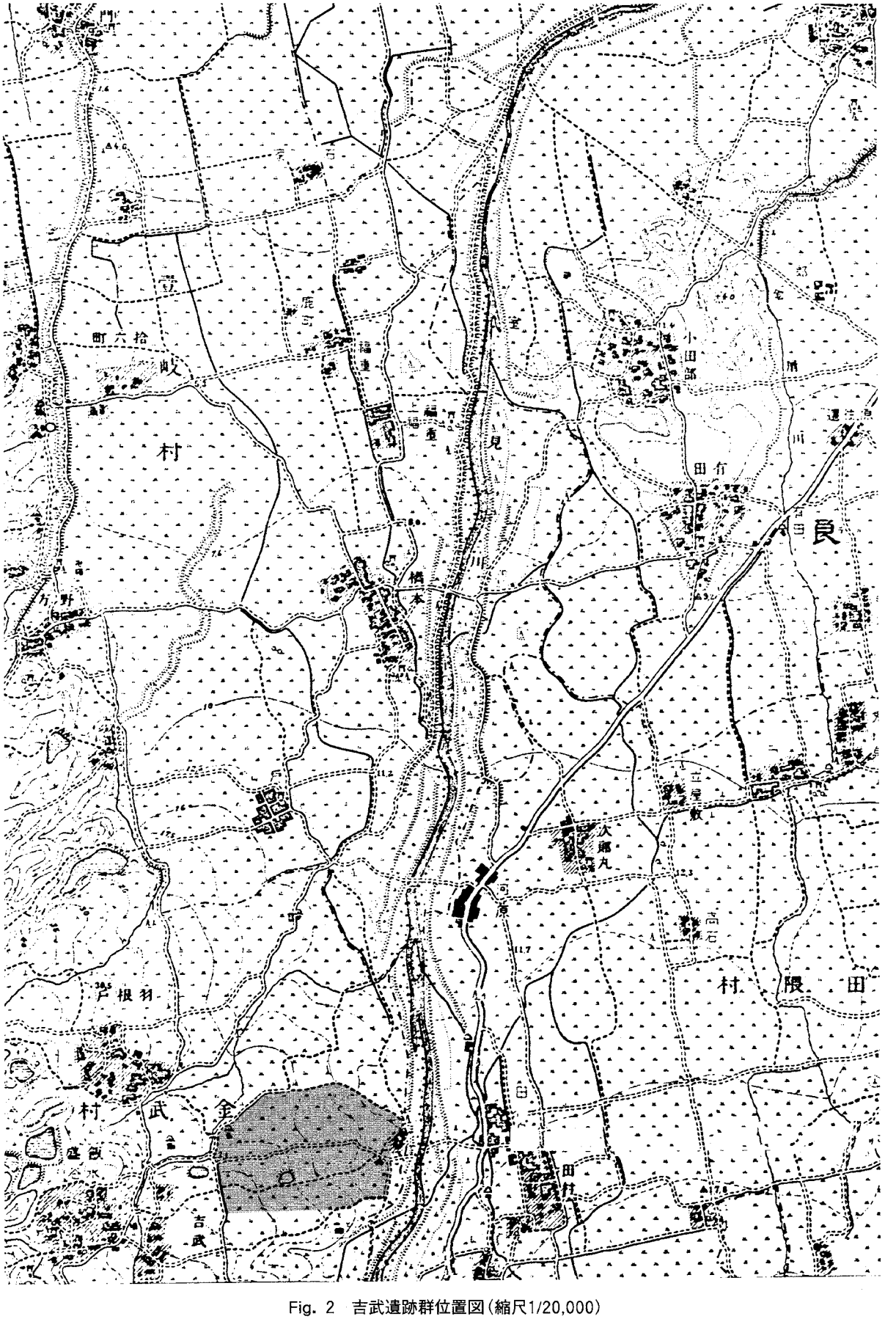


Fig. 2　吉武遺跡群位置図（縮尺1/20,000）

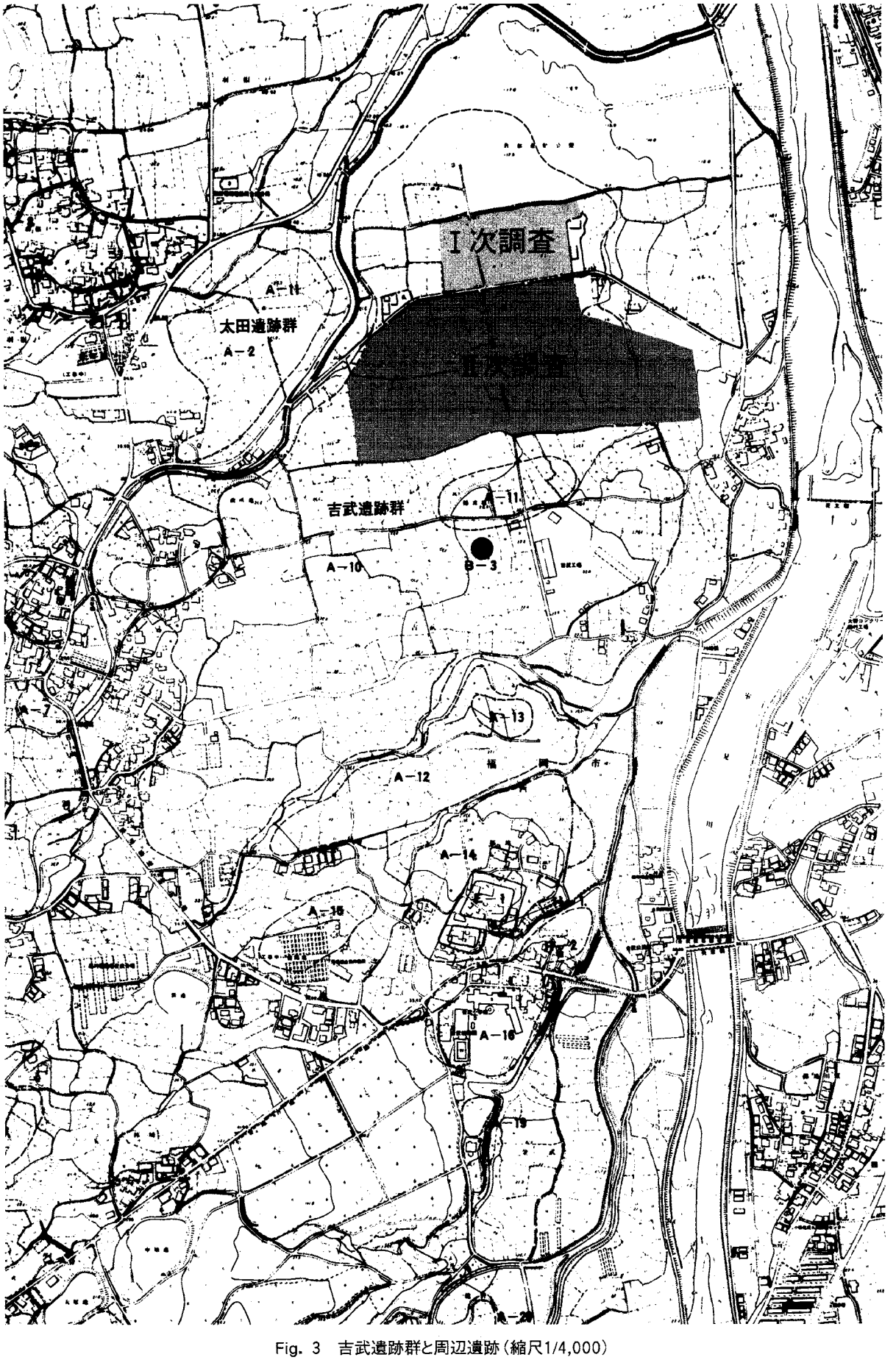


Fig. 3　吉武遺跡群と周辺遺跡（縮尺1/4,000）

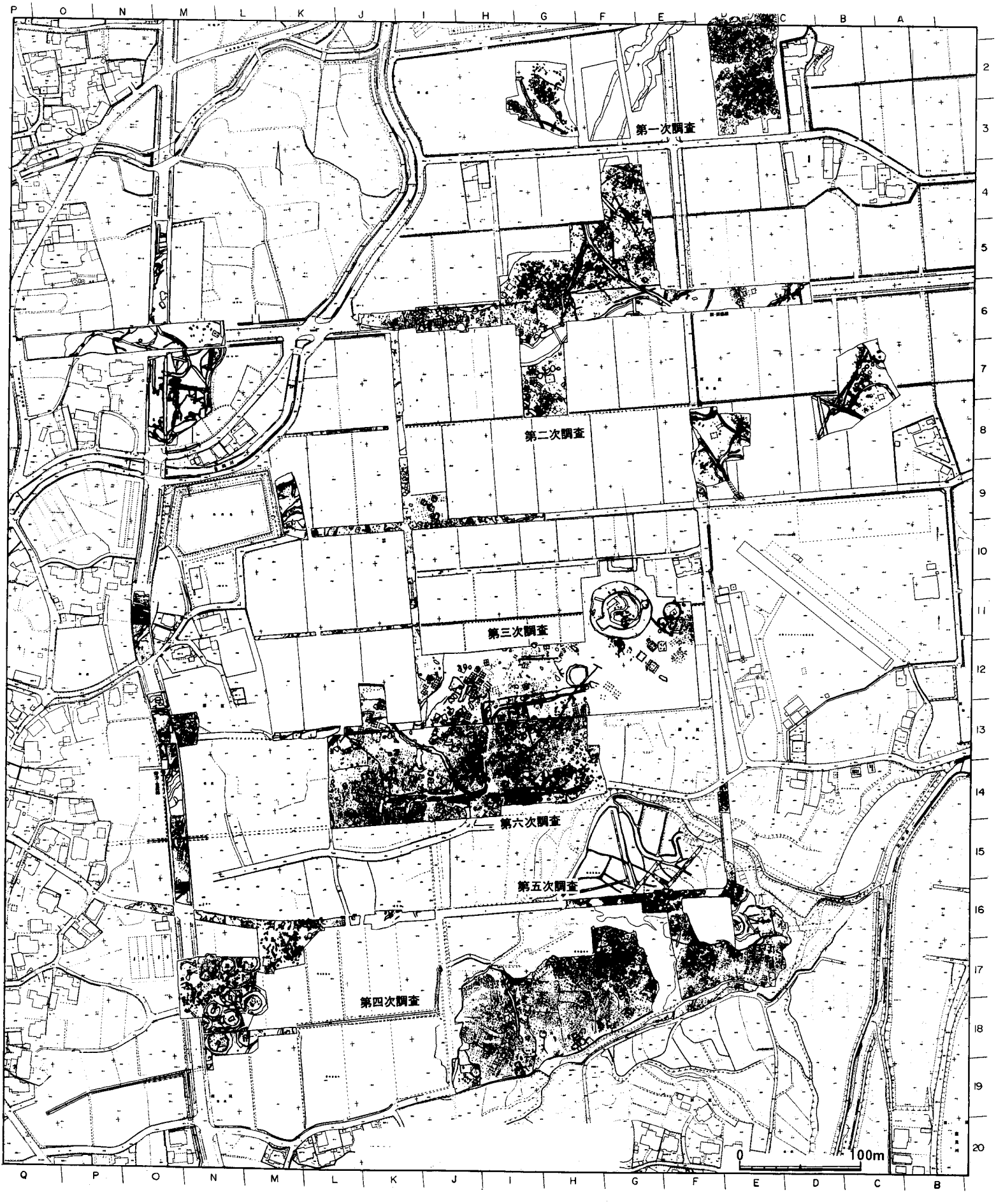


Fig. 4　調査区配置図（第一～第六次調査）（縮尺1/4,000）

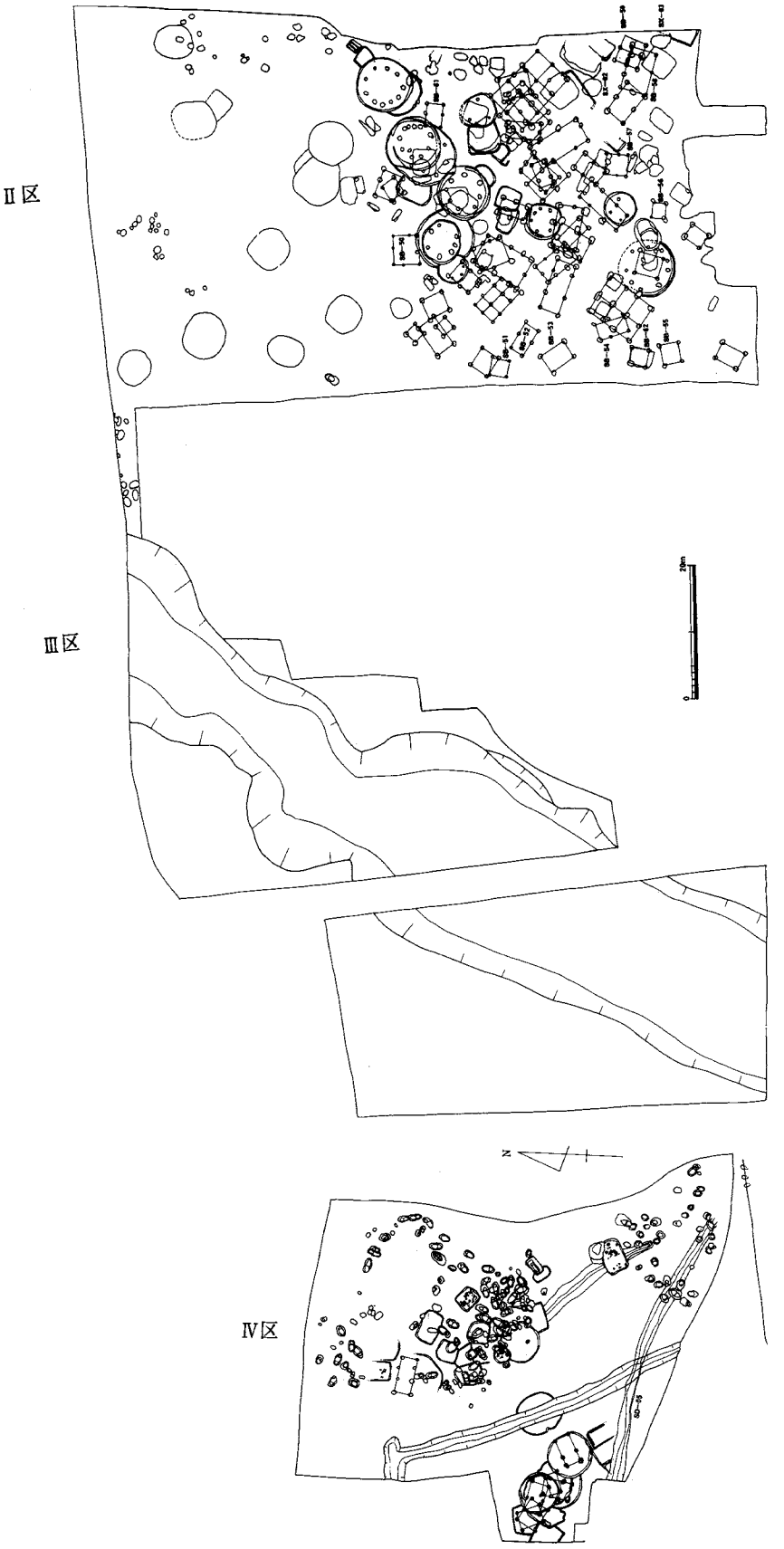


Fig. 5　調査区配置図（第一次調査）（縮尺1/1,000）

第二章　第一次調査

第一節　第一次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地　：　福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積　：　61 ha

発掘調査対象面積　：　2.5 ha

発掘調査年月日　：　昭和56年11月9日～昭和57年3月10日

昭和56年7月に試掘調査を行い、発掘対象面積を盛土する部分を除いた2.5haの中で著しく削平を受ける1.2haを実際の調査面積とした。ただ耕作土排除後にすぐ検出される甕棺墓は破壊を免れないため調査の対象とした。全体の2.5haの内、区割りによりⅠ区からⅣ区とした。これとは別に磁北を区割りの中心線として東西・南北に100m単位でグリットを設定し、将来の基準線とした。

Ⅰ区の調

掘立柱建物1棟と柵列を検出した。東側は段落ちとなり、室見川の氾濫源か、もしくは水田の可能性が考えられたが、削平されず土盛り対象地であることから調査から除外した。

Ⅱ区の調査

今回の対象区の中でⅣ区とともに最も削平される部分が多く、8,000㎡ある。この内、完掘の必要な面積は4,000㎡であった。Ⅳ区とともにⅡ区も遺構の遺存状態がよく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層からは弥生時代後期・中期の住居址等が検出された。また、弥生時代前期末の甕棺墓が44基と木棺墓4基を検出した。

古墳時代初期の住居址・掘立柱建物・祭祀遺構・土器溜等が検出でき、弥生時代後期の住居址9軒を検出したが、その内の1軒（ＳＣ－06）から石戈・石剣を出土した。弥生時代中期の円形住居址は16軒検出した。遺構の遺存状態は非常によく壁高が40～50㎝程度残っているものも少なくない。弥生時代中期の小児甕棺墓を2基検出した。

弥生時代に属する掘立柱建物は33棟、古墳時代に属する掘立柱建物は13棟検出した。なお従来の報告書で古墳時代の掘立柱建物は20棟としていたが、明らかに古墳時代のものは13棟であった。

Ⅲ区の調査

Ⅲ区全体で表土排除作業を行った面積は、4,000㎡であるが、検出した遺構は甕棺墓14基と台地を切断する幅12～20mの河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に杭列を検出し、底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土していることから河川を人工的に使用した可能性がある。また、人工的に手を加え使用した時期は、底面から出土した土器を基準に考えてよい。ただ最上層から須恵器片が出土していることから、河川は急激に埋まったものと考えられ、時期も弥生時代から古墳時代の時期に人工的な河川として利用した可能性が高い。甕棺墓は河川を挟んで弥生時代中期中葉の5基が西側にあり、東側に弥生時代中期後半の9基が検出された。

Ⅳ区の調査

Ⅳ区の調査対象面積は、6,000㎡で表土排除作業面積が4,500㎡である。検出した遺構は、弥生時代前期末の甕棺墓・住居址・溝、弥生時代中期初頭～後半にかけての住居址・甕棺墓・井戸・掘立柱建物・中世の溝・井戸等を検出した。甕棺墓は165基検出し、その内24基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓であり、122基が中期、19基が後期に属する。

Fig. 6　第1次Ⅱ区全体図(縮尺1/400)

第二節　第一次調査の記録

1．第一次調査Ⅱ区　－古墳時代の遺構－

第一次調査の内、古墳時代の遺構が検出されたのは、Ⅱ区とⅢ区の河川のみである。Ⅱ区も全体に広がるものと思われるが、中央部から北側は、遺構検出面での観察で詳細には確認できないが、円形住居址や甕棺墓を切る住居址が検出されているが古墳時代の可能性もある。調査区は全体的に広がるが、削平を受けていることから散発的ではある。Ⅱ区は全体的に弥生時代の遺構が主体であり、古墳時代の遺構は南側に広がるものと思われる。検出された遺構は住居址８棟、掘立柱建物13棟、土壙墓15基、土壙47基が確認された。

住居址（Fig.8・9　Tab.3）

古墳時代の住居址には1000番台の記号を付した。ＳＣ－1000～1007の８軒である。このほかに北側表土剥ぎ作業段階で、古墳時代の住居址が数件検出された。**住居址番号が精査した段階で、吉武遺跡群Ⅸ(福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集　1997)の番号と異なる。ⅨのＳＣ－1015が1002、1017が1003、1010が1004、1013が1006に変更する。**

ＳＣ－1000（Fig. 9　Tab. 3　PL. 1・2）

調査区中央部東側から弥生時代のＳＣ－24を切る形で検出された。また、ＳＸ－04から切られる。形状は方形、主軸は北東－南西、長軸方向はN-22°30′-Eである。規模は3.15m×3.0mで、床面積9.6㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.12mしかない。主柱穴は４穴で、円形３・方形１で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

ＳＣ－1001（Fig. 9　Tab. 3）

ＳＣ－1001はＳＣ－1000の建替えで、同じ場所からわずかに方向をずらして検出された。形状は方形、主軸は北西－南東、長軸方向はN-66°30′-Eである。規模は3.6m×3.3mで、床面積11.9㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.13mしかない。主柱穴は２穴で、方形２で構成される。細片の土師器が壁溝覆土内より出土している。

ＳＣ－1002（Fig. 8　Tab. 3　PL. 1・3）

調査区中央部の弥生時代円形住居址ＳＣ－18・19を切る形で検出された。また、不整形土壙から切られる。形状は方形、主軸は東－西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は3.8m×3.5mで、床面積12㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.20mしかない。主柱穴は不整形土壙の攪乱で不明であるが、恐らく４穴で構成されると思われる。不整形土壙から土師器が出土しているところからこの時期より古い時期と考えられる。

ＳＣ－1003（Fig. 9　Tab. 3　PL. 3）

調査区中央部の弥生時代円形住居址（ＳＣ－20）中に位置し、ＳＣ－20を切る形で検出された。また、ＳＸ－07～09・20から大半を切られる。形状は方形、主軸は北－南、長軸方向はN-8°-Wである。規模は5.18m×1.2＋αmで、床面積6.21＋α㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は不明。出土遺物はないが、ＳＸ－07～09から土師器が出土していることからこれよりも古い時期と考えられる。

ＳＣ－1004（Fig. 8　Tab. 3　PL. 2）

調査区の南東側隅から検出された。形状は方形、主軸は北西－南東、長軸方向はN-44°-Wである。規模は4.7m×4.5mで、床面積21.15㎡を測る。削平が著しい為、遺構の遺存状態は悪く深さ0.12mし

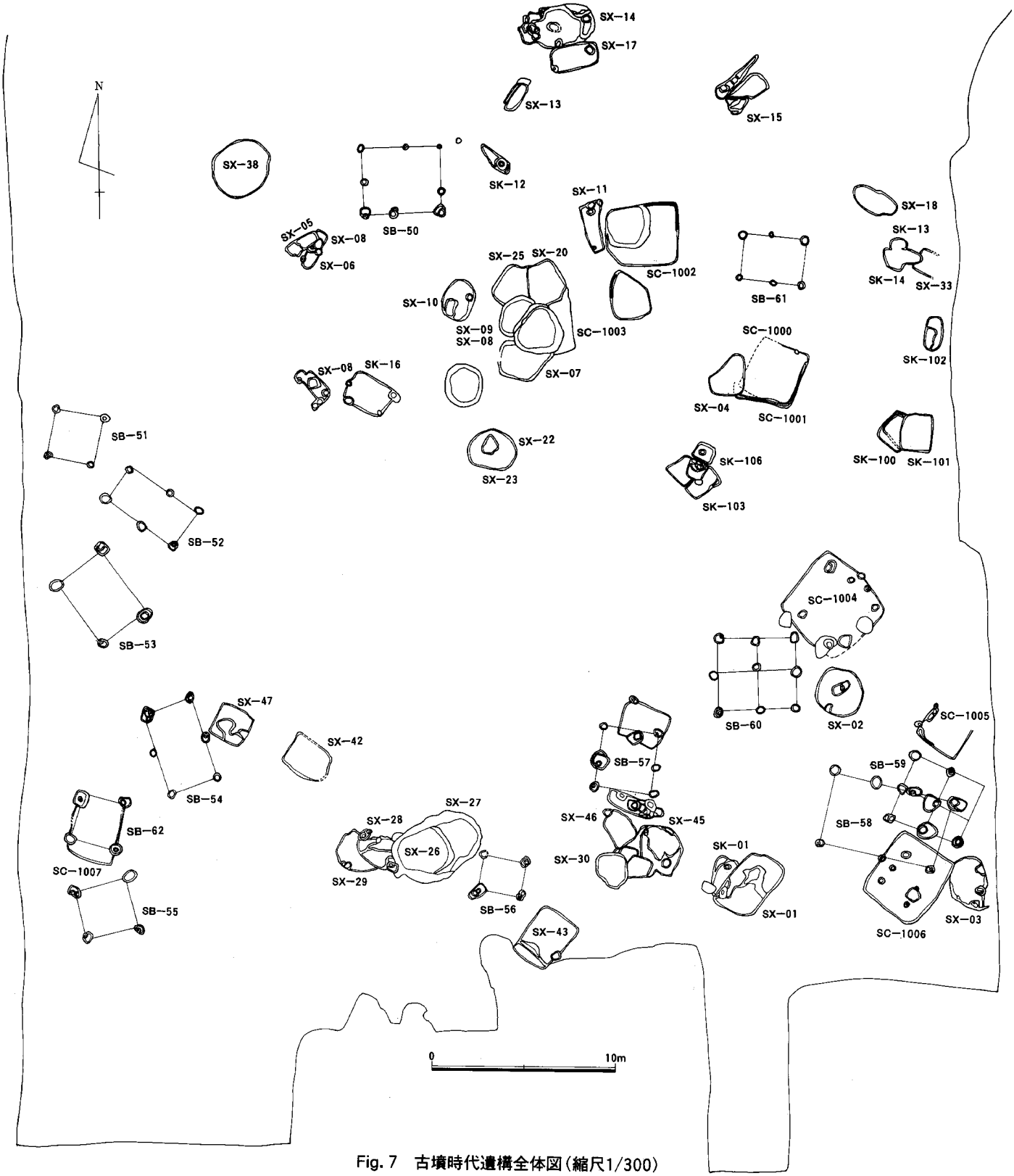


Fig. 7　古墳時代遺構全体図（縮尺1/300）

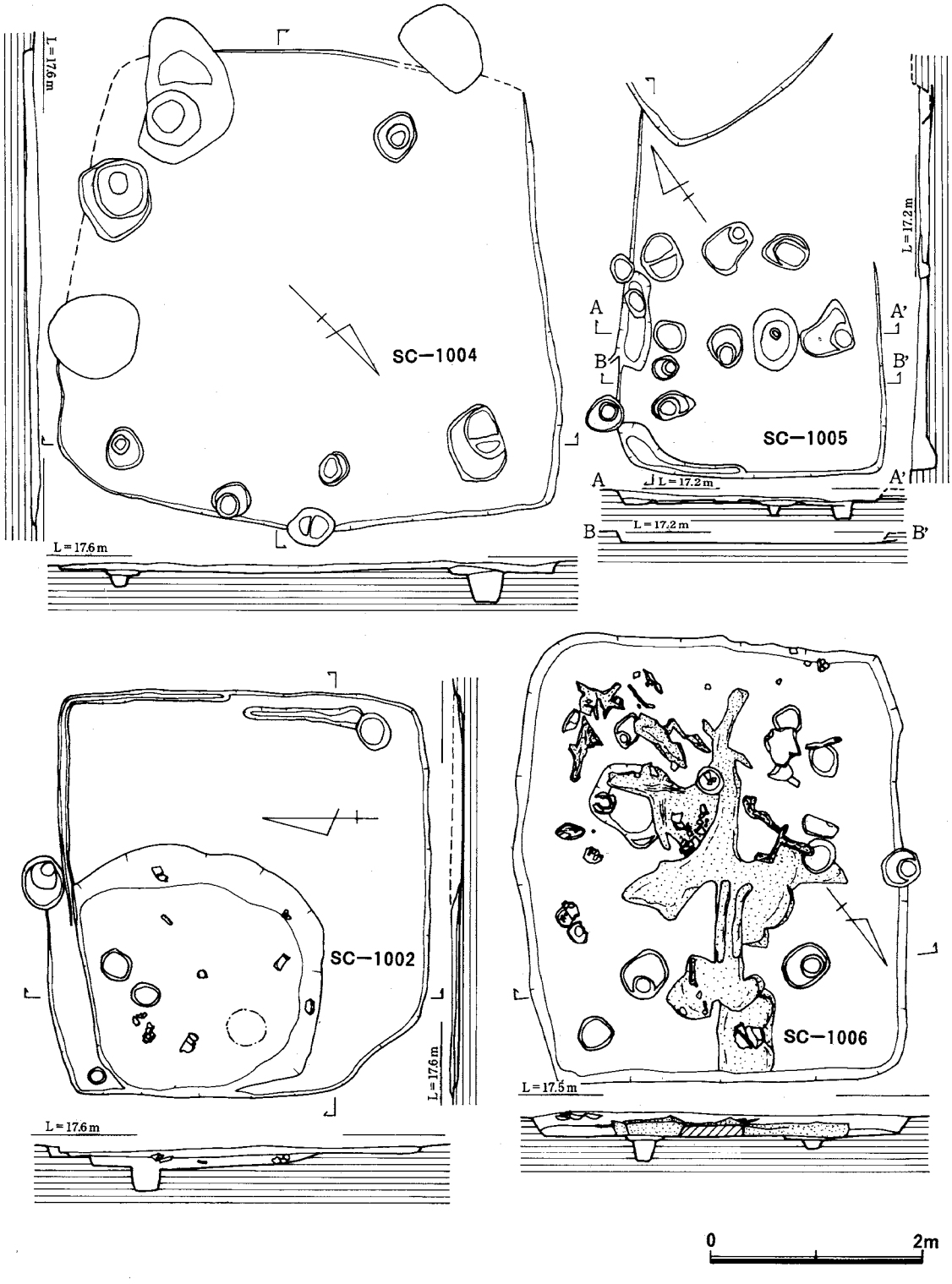


Fig. 8　古墳時代住居址実測図−1（縮尺1/60）

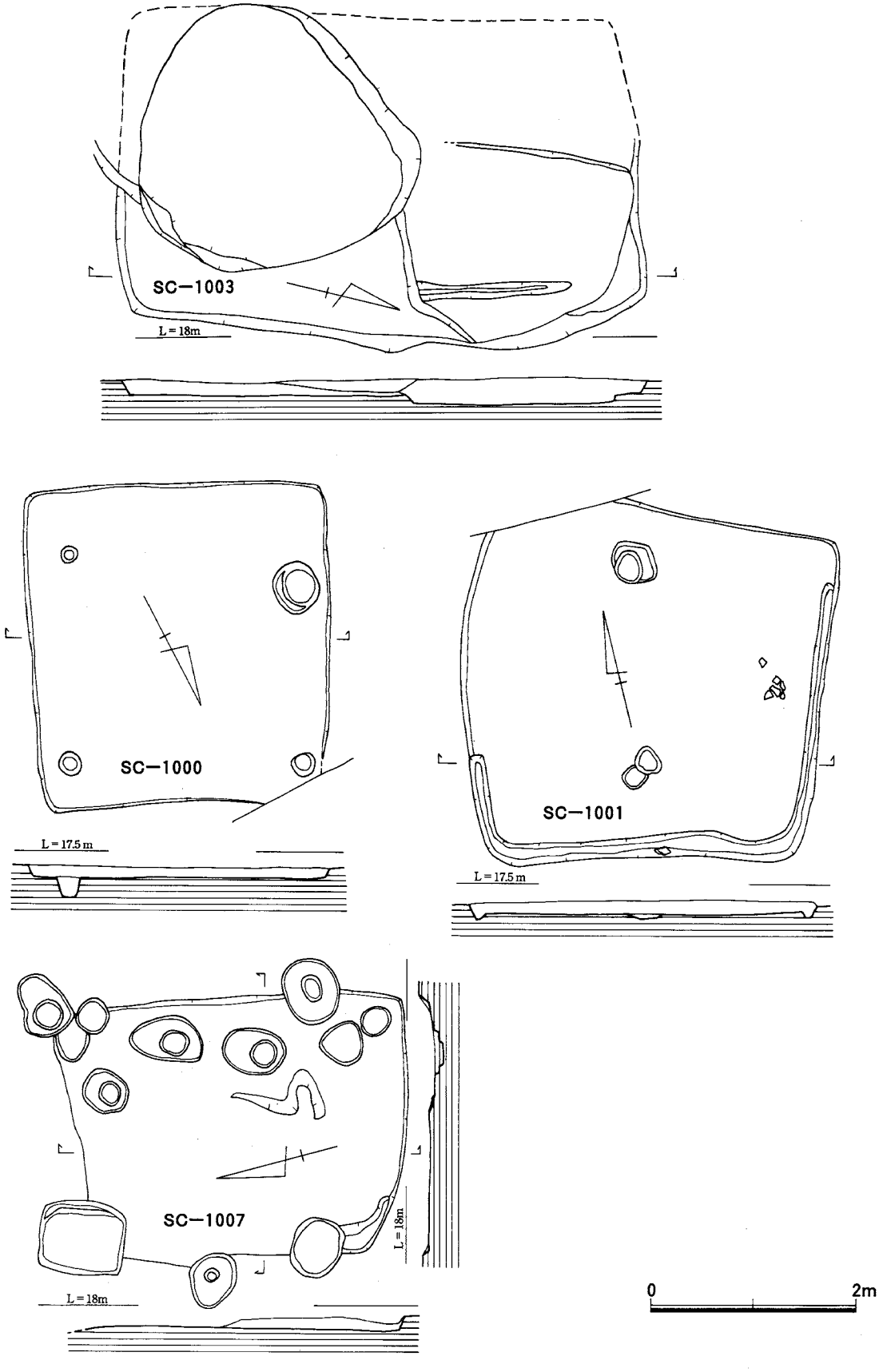


Fig. 9　古墳時代住居址実測図−2（縮尺1/60）

かない。主柱穴は４穴で、方形３・不整方形１で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

ＳＣ－1005（Fig. 8　Tab. 3　PL. 1・2）

調査区南東隅から北側半分が削平されて検出された。切り合い関係は無い。形状は長方形を呈し、主軸は北西－南東、長軸方向はN-40°-Eである。規模は3.9＋αｍ×2.55mで、床面積9.95＋α㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は２穴と思われるが、明確には不明。壁溝より土師器の破片が出土している。

ＳＣ－1006（Fig. 8　Tab. 3　PL. 1）

調査区南東隅から検出され、ＳＸ－03から壁面の一部を切られる。形状は方形、主軸は北東－南西、長軸方向はN-34°-Eである。規模は4.3m×3.7mで、床面積15.91㎡を測る。遺構の遺存状態は良い方で深さ0.22m残っている。主柱穴は４穴で、方形２・不整方形２で構成される。住居址内には炭化材及び焼土・土器が散乱しており、また、全体的に炭化物を含む覆土で覆われているところから焼失住居の可能性が高い。

ＳＣ－1007（Fig. 9　Tab. 3　PL. 2）

調査区南西隅から検出された。切り合い関係はない。形状は長方形を呈し、北側が著しく削平を受けており壁面はない。主軸は北－南、長軸方向はN-12°30′-Eである。規模は3.46m×2.56mで、床面積6.02㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は削平が著しいため不明。覆土より須恵器片が出土している。

掘立柱建物（Fig. 10・11　Tab. 4）

Ⅱ区より検出された掘立柱建物は13棟であるが、このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱痕内から出土したものを基準としているため、時期が多少下がる可能性がある。建物の内、１間×１間も図示したが、削平が著しいため住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はＳＢ－50からを古墳時代の掘立柱建物の番号としている。なお、桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 4に表示している

ＳＢ－50（Fig. 11　Tab. 4）

調査区中央部から検出された２間×２間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形を呈し、全体的に残りが良好で、深さ24～44㎝を測る。⑤の柱穴には18×30㎝の柱痕が残る。主軸は東－西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は4.2m×3.6mで、床面積15.1㎡を測る。桁行・梁行の間隔が不揃いで、狭いところで1.2m、広いところで2.6mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－51・53・55・56・62（Fig. 10　Tab. 4）

この５棟は１間×１間であるが、柱間の間隔が広いＳＢ－53を除いてほぼ同間隔である。これらは竪穴住居址が削平され、柱穴だけが残った可能性は否定できないが、一応掘立柱建物として捉えておく。**51**は調査区南西隅から検出された１間×１間の掘立柱建物である。弥生時代の掘立柱建物との切り合い関係はあるが、出土遺物から区別した。柱穴の形状は円形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北－南、長軸方向はN-15°-Eある。規模は2.6m×2.5mで、床面積6.5㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。**53**は調査区南西隅から検出された１間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は楕円形が主で、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北西－南東、長軸方向はN-34°-Wである。
規模は4.0m×2.8mで、床面積11.2㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

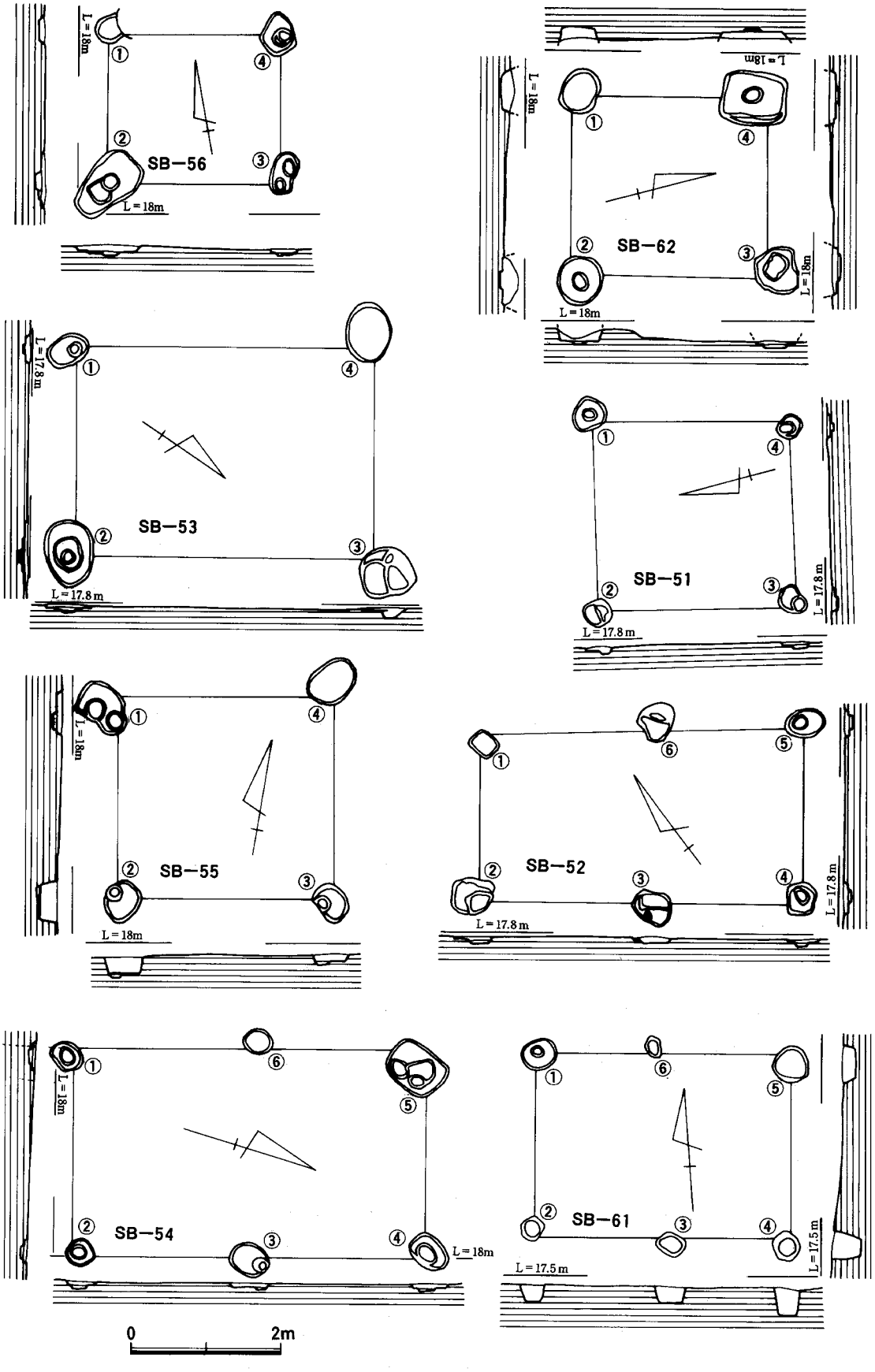


Fig. 10　古墳時代掘立柱建物実測図−1（縮尺1/80）

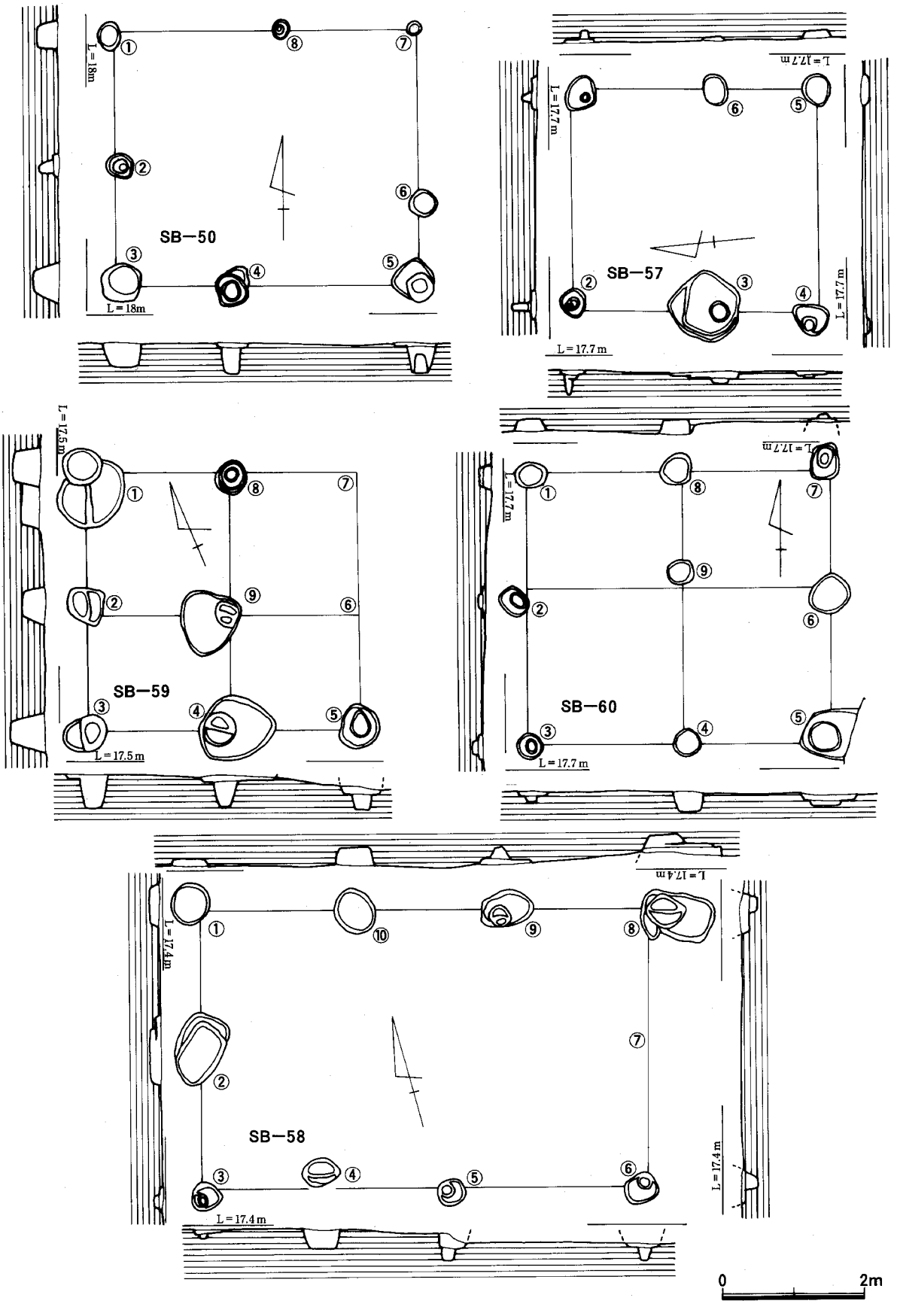


Fig. 11　古墳時代掘立柱建物実測図−2（縮尺1/80）

55 は調査区南西隅から検出された１間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東－西、長軸方向はN-81°-Eである。規模は2.9m×2.7mで、床面積7.83㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

56は調査区南側中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。他の遺構との切り合い関係はなく、西側にＳＸ－26・27が隣接する。柱穴の形状は不整方形で、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は西－東、長軸方向はN-80°-Wである。規模は、2.3m×2mで、床面積46㎡を測る。柱痕内より土師器が出土している。**62**は調査区南西隅から検出された１間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はＳＣ－1007の壁面を破壊するところから住居址より新しい。柱穴の形状は長方形・円形・不整形と様々である。全体的に削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北東－南西、長軸方向はN-16°30′-Eである。規模は2.6m×2.4mで、床面積6.24㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－52・54・57・61（Fig. 10・11　Tab. 4　PL. 2）

この４棟は２間×１間であるが、柱間の間隔が広いＳＢ－57を除いて長方形を呈する構造である。

52 は調査区中央西隅から検出された２間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・長方形・楕円形等様々である。全体的に削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北西－南東、長軸方向はN-52°30′-Wである。規模は4.3m×2.8mで、床面積12.04㎡を測る。桁行の間隔が2.0mと2.3mで梁行は2.8mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。**54** は調査区南西隅から検出された２間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係は弥生時代の掘立柱建物ＳＢ－25と切り合いはあるが、他の古墳時代の遺構とは切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・長方形・円形等がある。全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北西－南東、長軸方向はN-17°30′-Wである。規模は4.8m×2.8mで、床面積13.44㎡を測る。桁行の間隔は2.2～2.5mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

61 は調査区中央東隅から検出された２間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係は弥生時代のＳＣ－１８を切る形で検出された。柱穴の形状は方形・円形・長方形・楕円形と様々な形状を呈する。全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東－西、長軸方向はN-86°-Wである。規模は3.4m×2.5mで、床面積8.5㎡を測る。桁行は1.8・1.5mの間隔である。柱痕内より土師器片が出土している。**57**は調査区南隅から検出された２間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はＳＤ－24を切る形で検出された。柱穴の形状は方形であり、全体的に削平を受けており遺構存状態は悪い。主軸は北－南、長軸方向はN-6°-Eである。規模は3.5m×3.1mで、床面積10.85㎡を測る。桁行の間隔が不揃いで、狭いところで1.5m、広いところで2.0mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－59・60（Fig. 11　Tab. 4　PL. 1・2）

この２棟は２間×２間の総柱建物である。**59**は調査区南東隅から検出された２間×２間の掘立柱建物である。他の遺構との切り合い関係はないが、調査区隅である為削平が著しく、主柱穴⑥⑦は確認できなかった。他の柱穴は遺存状態が良く、形状および大きさに統一性がないが、ほとんどの柱穴が40㎝以上の深さをもつ。主軸は北西－南東、長軸方向はN-67°-Wである。規模は3.8m×3.6mで、床面積13.68㎡を測る。桁行・梁行の間隔は1.8～2.0m間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。**60**は調査区南東部から検出された２間×２間の掘立柱建物である。上面の検出であることから切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東－西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は4.2m×3.8mで、床面積15.96㎡を測る。桁行・梁行の間

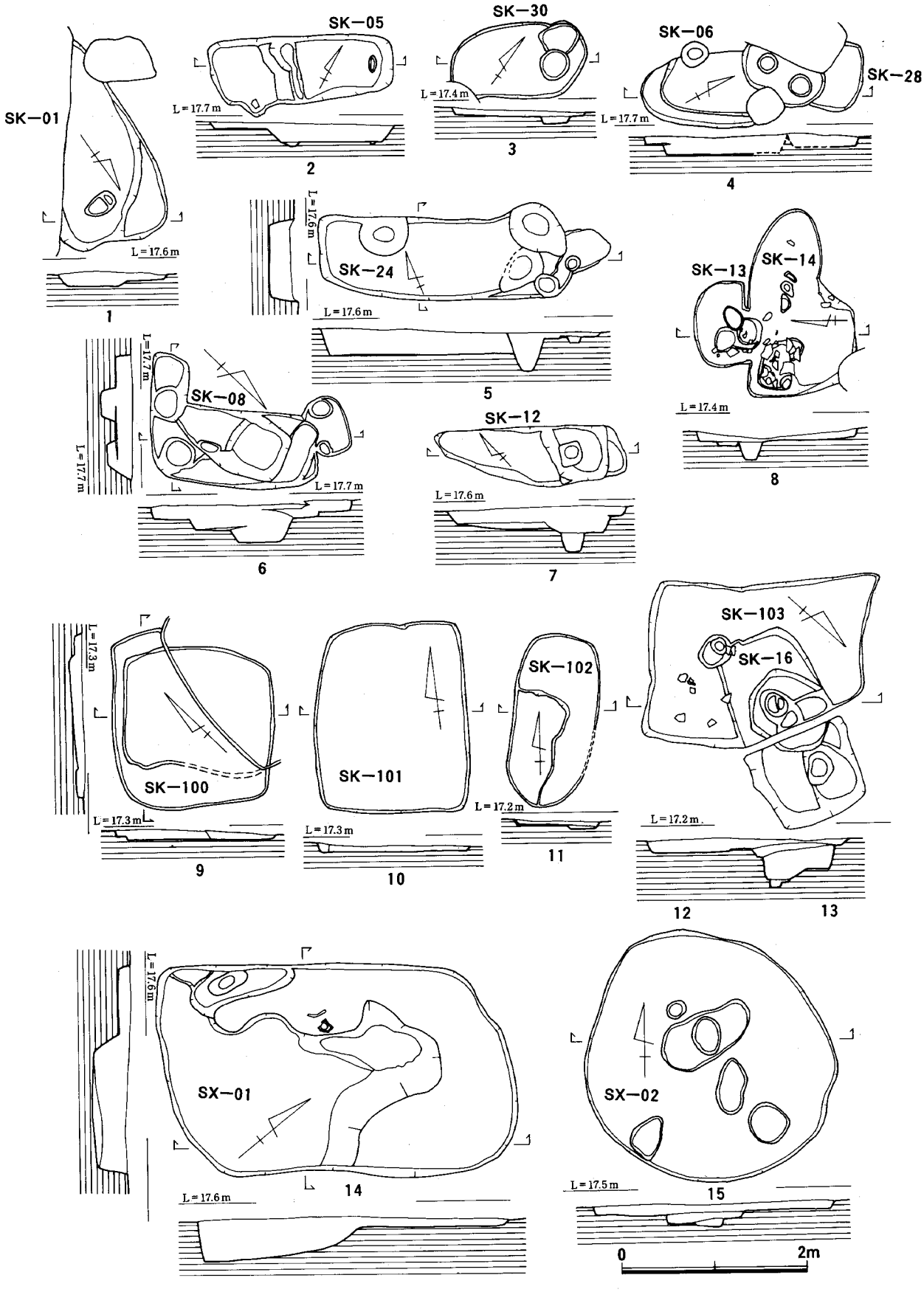


Fig. 12　古墳時代不整形土壙実測図−1（縮尺1/60）

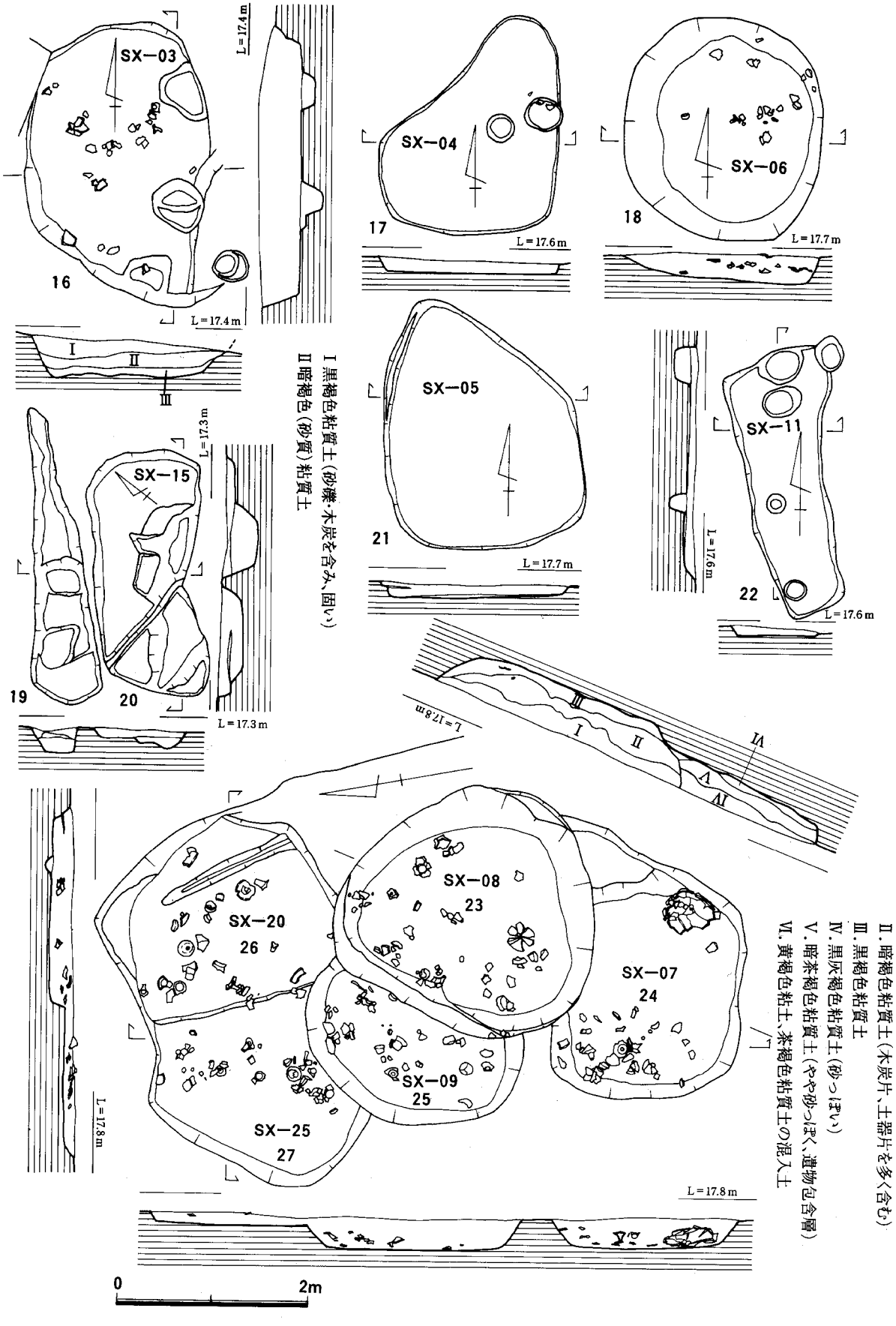


Fig. 13　古墳時代不整形土壙実測図−2（縮尺1/60）

隔は1.8～2.1mを測り、柱穴の形状も円形・長方形が主体である。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－58（Fig. 11　Tab. 4　PL. 1）

58は調査区南東隅から検出された３間×１間の掘立柱建物である。切り合い関係はＳＣ－1006とＳＢ－59があるが、ＳＣ－1006との関係は上面から柱穴が検出されているところから、ＳＣ－1006より新しい。ＳＢ－59との関係は不明である。柱穴の形状は長方形であり、部分的に著しく削平を受けているところと残りが良い所がある。主軸は西－東、長軸方向はN-75°-Wである。規模は6.3m×4.0mで、床面積25.2m²を測る。桁行の間隔が不揃いで狭いところで1.8m、広いところで2.8mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＸ（不整形土壙）（Fig. 12～15　Tab. 5　PL. 1～3）

不整形土壙は52基検出したが、図示したものは50基である。図示した中でＳＫとＳＸを表示しているが、区別は形状により区別しただけで、ＳＫとしたものも最終的には不整形土壙（ＳＸ）としてとらえた。ただ図面等の整理上ＳＫの表示は残しておく。混乱を招く恐れがあるため表示は図面下に１からの番号を付し、遺構内には従来の遺構名称（ＳＫ・ＳＸ）を表示している。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 5に表示しているので、参照していただき、土器が多量に出土している土壙について記述する。ただ遺物は、台風時に土器が散乱し出土地点がわからなくなったため、今回は遺構のみの記述とした。

1～22（Fig. 12・13　Tab. 5　PL. 1～3）

1～8の形状は不整形で他の遺構及びPit等によって切られる形状を呈する。長径も230～380㎝様々で短径も同様である。深さも浅いものが殆どである。用途的には不明。9～14は長方形・方形の形状を呈す。15～22は形状が様々有り円形・楕円形・不整形の形状を呈する。

23～27（Fig. 13・14　Tab. 5　PL. 3）

調査区中央部ＳＣ－20を切る形で検出した。形状は円形・隅丸方形で、各遺構に切り合い関係がある。新しいものから番号を付しているが、各遺構とも多量の土器が出土している。**23**は楕円形を呈し、最も新しい土壙である。**24～26**を切り、その下のＳＣ－20の床面まで破壊している。
23・24の土層を図示しているが、第Ⅰ層が砂混じりの暗灰褐色粘質土、第Ⅱ層が炭化物・土器片を多く含む暗褐色粘質土、第Ⅲ層が黒褐色粘質土、第Ⅳ層が砂粒を多く含む黒灰褐色粘質土、第Ⅴ層がやや砂が多い暗茶褐色粘質土で、遺物を多量に含んでいる、第Ⅵ層が茶褐色粘質土を含む黄褐色粘土である。24は23の南側に位置し、23から切られ、ＳＣ－20を切る。隅丸方形を呈し、床面に土器が散乱していた。25は23の西側に位置し、23から約半分削平を受けている。この遺構にも高坏等の土器が床面に散乱していた。26は23の北側に位置し、方形の形状を呈する。これも床面に高坏等の土器が散乱して出土した。27は25・26によって切られ恐らく最初に造られた土壙と考えられる。形状は方形を呈し、ＳＣ－20を切る。調査時の所見では古い方から27→26→25→24→23の順となるが、時期的には殆ど差がないと考えられた。土器は台風時に散乱し出土地点がわからなくなったため今回は遺構のみの記述とした。

37・38（Fig. 15　Tab. 5　PL.3）

調査区南側ＳＣ－27を切る形で検出した。形状は楕円形・方形で、各遺構に切り合い関係がある。新しいものから番号を付しているが、各遺構とも多量の土器が出土している。**37**は方形を呈し、38を切り床面も破壊している。**38**は楕円形を呈し、深さは深くない。両方とも土器を包蔵するが時期的には殆ど差がない。

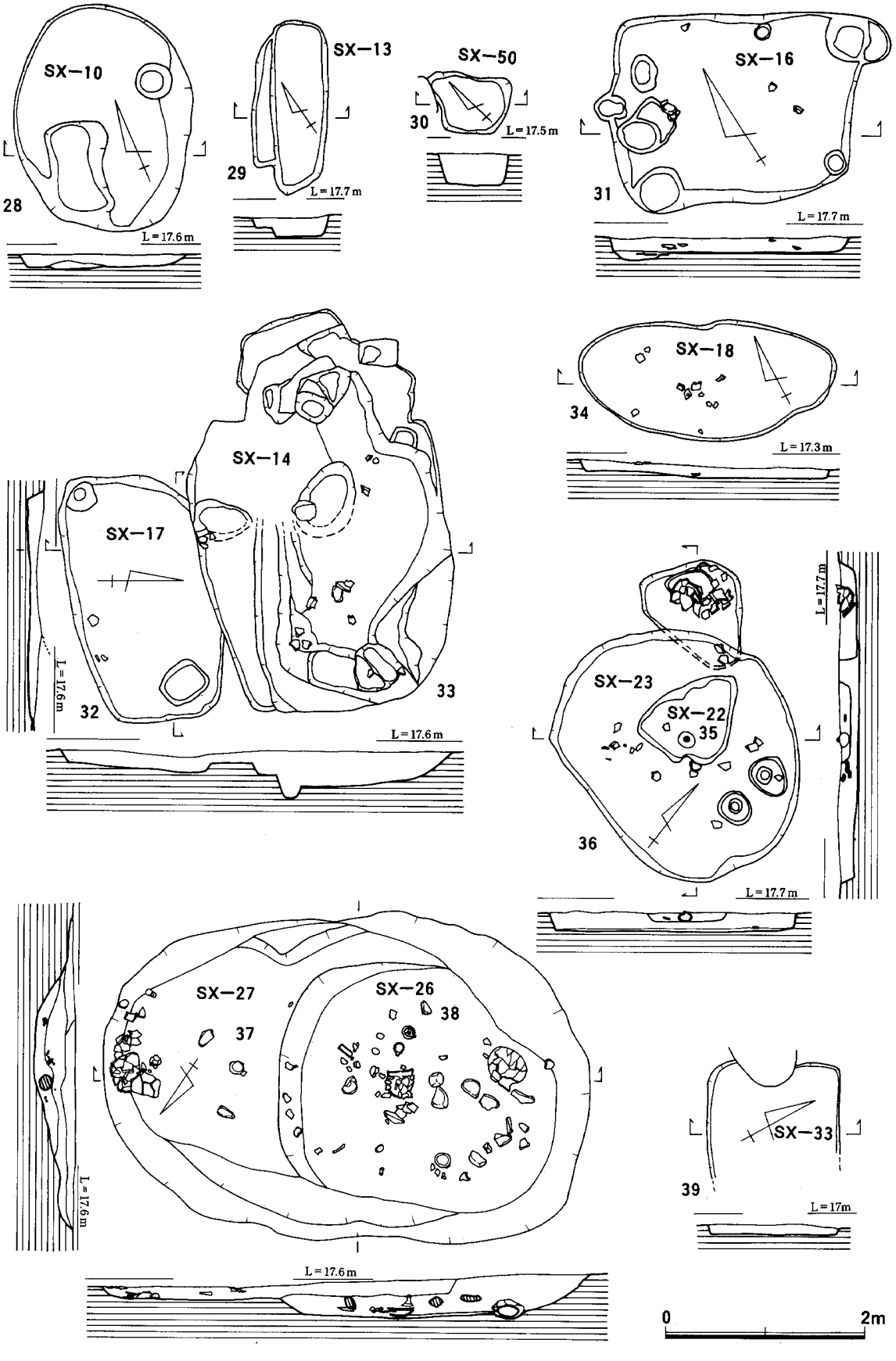


Fig. 14　古墳時代不整形土壙実測図−3（縮尺1/60）

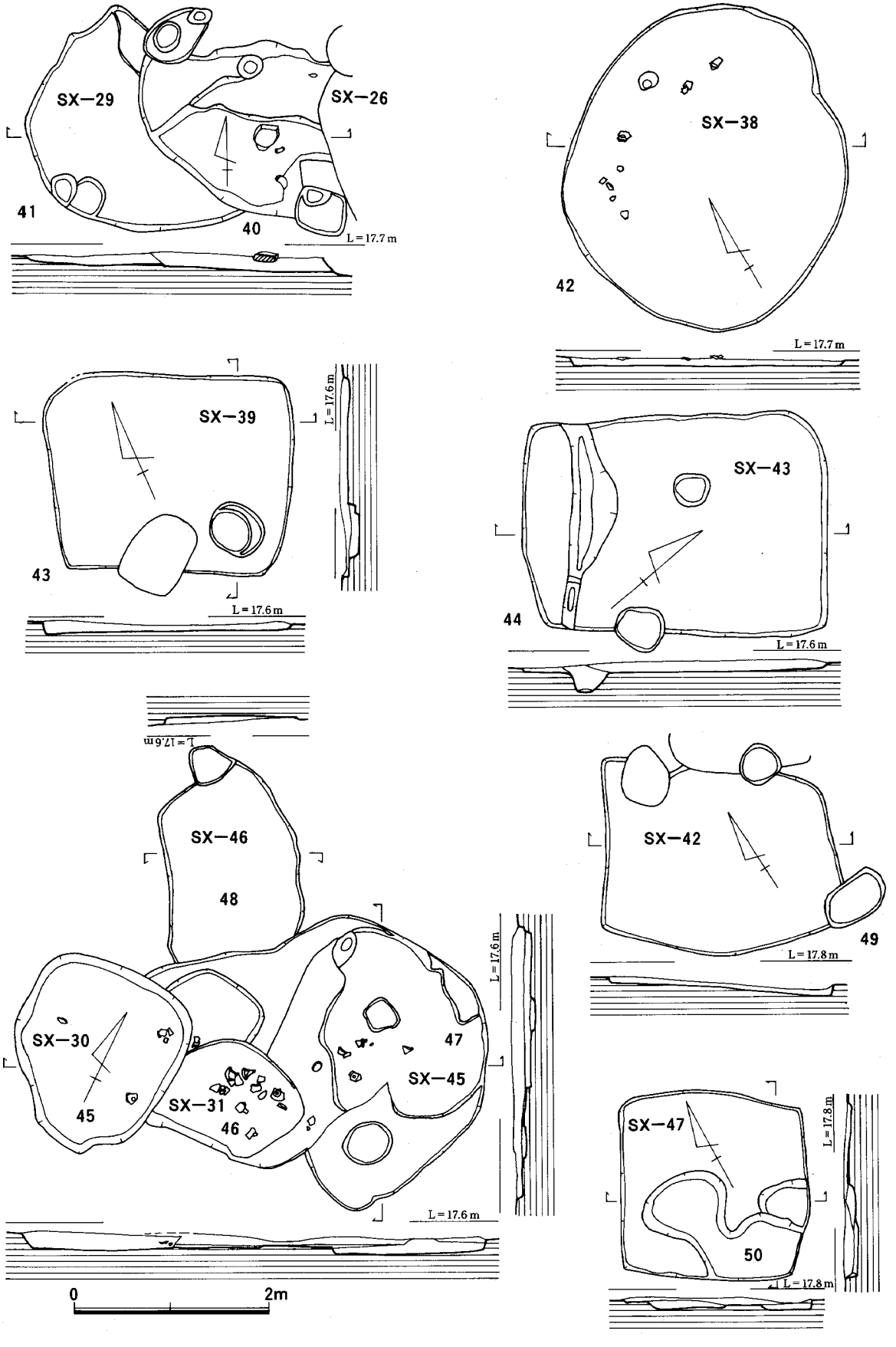


Fig. 15　古墳時代不整形土壙実測図−4（縮尺1/60）

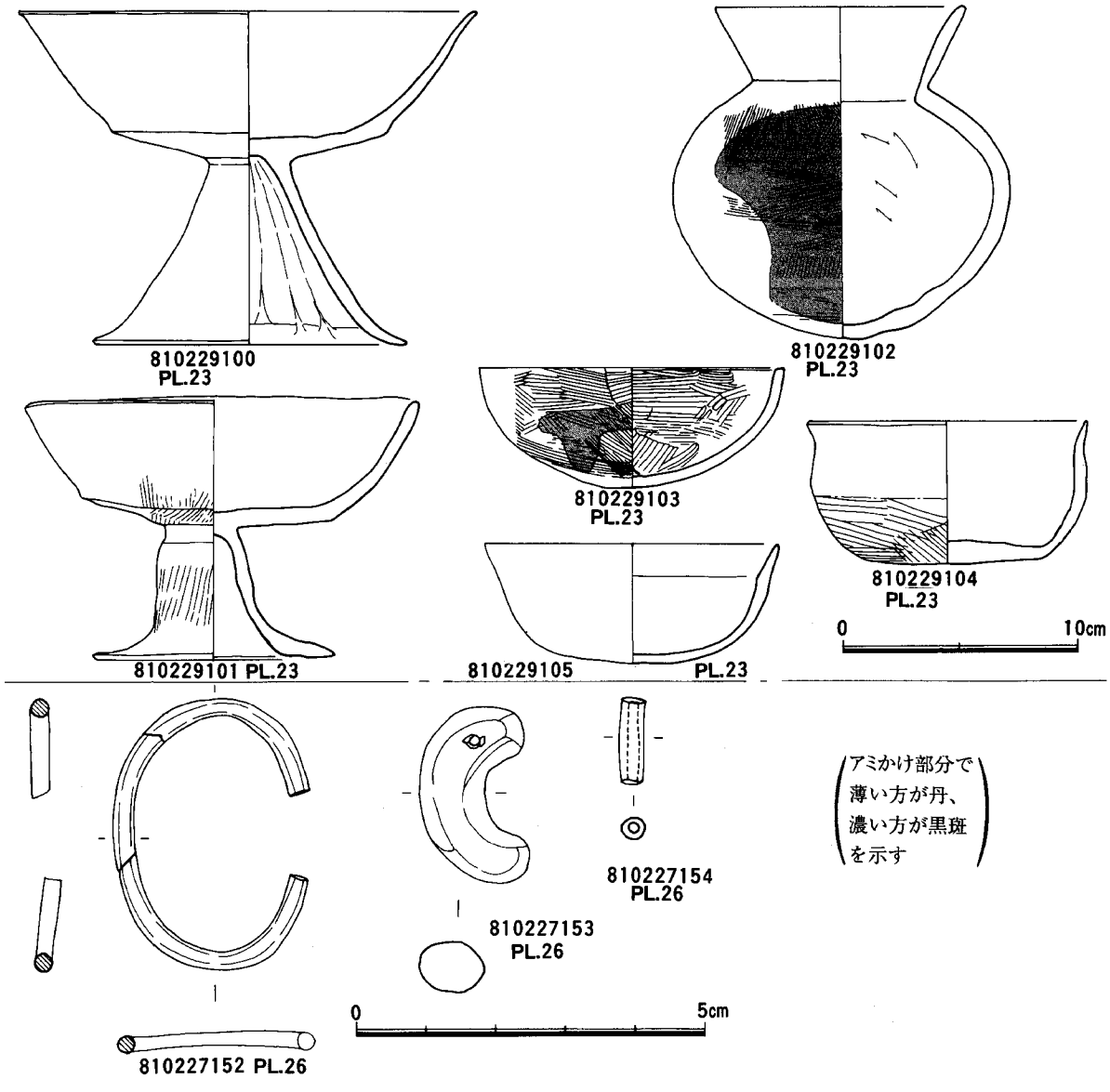


Fig. 16　第1次II区出土遺物実測図(縮尺1/1,1/3)

ＳＸ－28～36・39～50（Fig. 14・15　Tab. 5　PL. 3）

その殆どが不整形の形状を呈するがその内31・39・43・44・49・50はどちらかといえば方形を呈する。むしろＳＫ(土壙状遺構)として登録されてよいものである。この中で45～48は調査区の南側中央端に位置し、切り合い関係がある。新しい順に番号を付しているが、ほぼ同時期（時間差はあるが）に掘られたものであろう。また43・44・49・50は遺存状態が悪いが、形状だけをみるかぎり竪穴住居址の形状を呈し、大きさも約2mから3m、床面積では43が5.35m²、44が7.3m²、49が6.0m²、50がやや小さく3.82m²である。ただ柱穴がまったく認められないことからＳＸとした。

出土遺物（Fig. 16　PL. 23・26）

住居址・掘立柱建物・不整形土壙から出土した遺物は台風時に土器が散乱し出土地点がわからなくなった。管理が不十分で誠に申し訳ない。この中で、一部埋蔵文化財センターに展示していたものだけが出土場所が判明しているので図示した。

Fig. 17　第1次Ⅳ区遺構配置図（縮尺1/300）

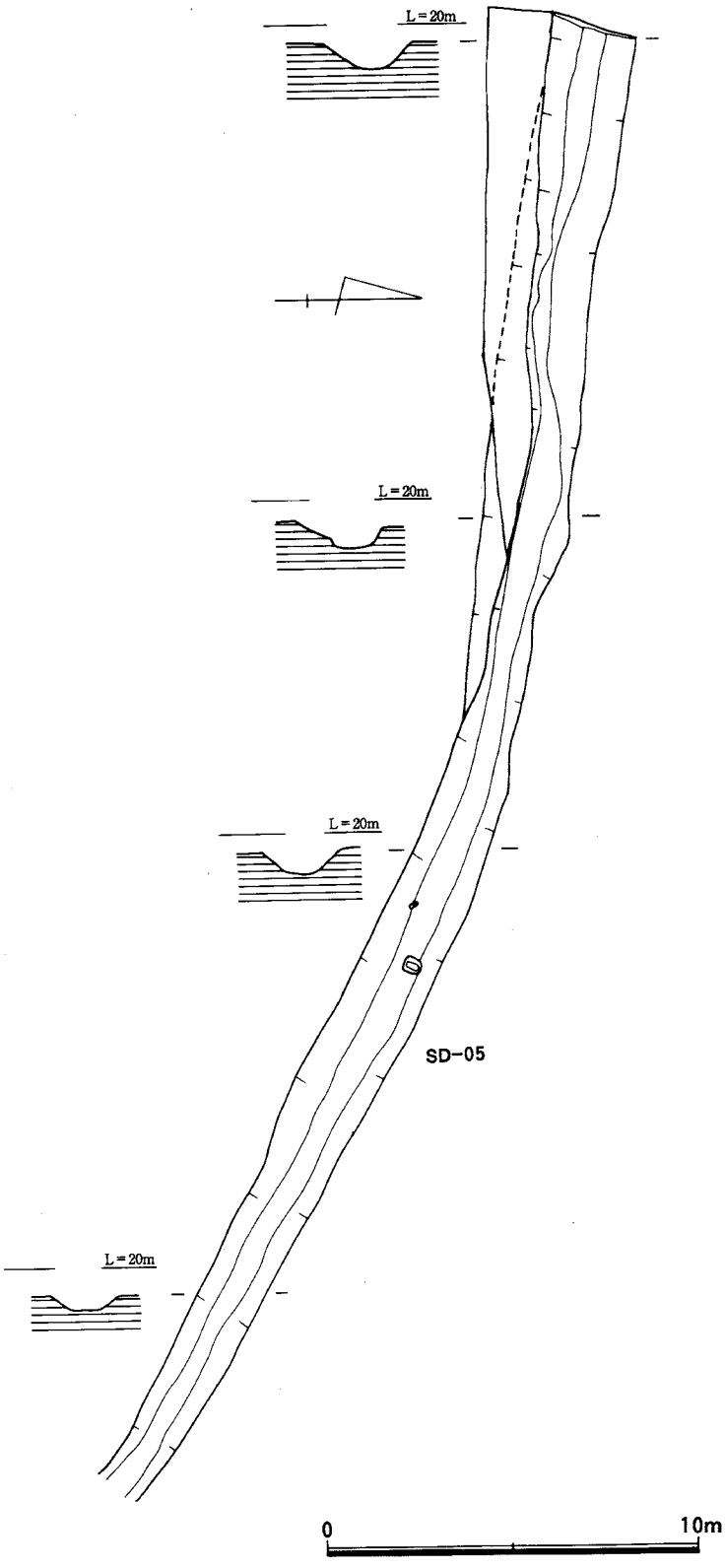


Fig. 18　溝状遺構実測図（縮尺1/200）

高坏(Fig. 16　PL. 23) SX−07·20から土師器の高坏が出土した。07からは登録番号**810229100**が出土し、口径19.6cm、器高14.1cm、脚高9.2cm、脚袖径13.4cmを測る。坏部の外面仕上げは回転ナデを施し、一部に煤が付着している。内面は表面剥落のため仕上げは不明。脚部外面は横ナデを施す。内面は横からの篦削りとナデ仕上げである。胎土は細砂及び2～4mm大の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が黄褐色＋赤茶褐色＋暗赤茶褐色を呈し、内面は暗赤茶褐色＋暗褐色＋明黄褐色を呈する。20からは**810229101**の高坏が出土した。口径16.9cm、器高11.3cm、脚高5.5cm、脚裾径10.2cmを測る。坏部の外面仕上げは全体に摩耗しており明確ではないが、僅かに刷毛目痕が認められる。内面はナデ仕上げ。脚部外面はナデと刷毛目を施す。内面はナデ仕上げである。胎土は1～3mm大の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も含む。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。

壷形土器(Fig. 16　PL. 23) 27からは**810229102**が出土し、口径10.7cm、器高14.1cmを測る。丸底を呈し、最大径が胴部中位に位置し、14.1cmを測る。頸部は締まり、口縁部は大きく外反し「く」字口縁を呈する。外面調整は口縁部が横ナデ、胴部上位が縦方向の刷毛目を施し、胴部中位下は横・縦の刷毛目を施す。胴部外面4分の1強に黒斑が認められる。内面は口縁部が横ナデ、胴部が粗い篦削りを施す。胎土は細砂及び2～5mm大の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が淡赤黄褐色＋暗黄褐色＋黒斑を呈し、内面は淡赤黄褐色を呈する。

椀形土器(Fig. 16　PL. 23) 椀形土器は、SX−27から**810229103**、SX−20から**810229104**、SX−07から**810229105**が出土した。810229103は底部が丸底を呈し、口径13.0cm、器高5.1cmを測る。外面仕上げは横刷毛目をやや雑に施し、一部に黒斑が認められる。内面は横刷毛目の後、口縁部付近では篦磨きを施している。胎土は細砂及び2～5mm大の石英・長石を多く含み雲母も混入している。色調は外面が黄褐色＋明赤茶褐色＋黒斑、内面は暗赤茶褐色を呈する。**810229104**は、底部が平底を呈し、胴部がやや内湾しながら真っ直ぐに立ち上がり、口縁部が僅かに外反し端部は丸く納める。口径12.0cm、器高6.1cm、底径7.3cmを測る。外面仕上げは全面に刷毛目を施した後、胴部中位まで横ナデを施し刷毛目を消している。内面はナデ仕上げを行っているが、底面に煤が付着している。胎土は1～2mmの砂粒を多く含み、また4～6mm大の長石・赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が赤茶褐色＋暗赤茶褐色＋黒斑を呈し、内面は暗赤茶褐色＋煤付着を呈する。**810229105**は、底部がやや丸底を呈し、胴部からやや外反しながら立ち上がり、内面に段を有し口縁端部は丸く納める。口径12.6cm、器高5.1cmを測る。外面仕上げはナデを施す。内面もナデ仕上げを行っている。内外面に黒斑が認められる。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含み雲母も含む。色調は外面が赤茶褐色＋黒斑、内面は暗赤茶褐色＋黒斑を呈する。

銀環・勾玉・管玉(Fig. 16　PL. 26) 銀環がSX−07、勾玉・管玉がSX−08から出土した。SX−07·08はFig.13のSX−07～09、20、25の切り合い関係の激しい不整形土壙でSX−08がSX−07を切っている。銀環は長さ3.9cm、径2.8cmを測り、楕円形を呈する。両端部はきれいに研磨されている。勾玉は全面に研磨が施され光沢を持つ。長さ2.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cmである。硬玉製と思われるが分析はしていない。管玉は長さ1.25cm、幅0.35cm、厚さ0.35cmである。碧玉製と思われるが分析はしていない。

2．第一次調査Ⅳ区　ー奈良時代以降の遺構ー

溝(Fig. 17,18　PL. 4)

Ⅳ区は弥生時代前期～中期にかけての住居址・甕棺墓・溝等が検出されたが、これらを切る形で、古代の溝が調査区南側から1条検出された。ほぼN-72°-Wにやや弧を描きながら西から東に流れている。現長は42m、幅2.1m、深さ0.8～0.5mを測る。出土遺物は青白磁が出土している。

Fig. 19　第2次調査 V・VI区全体図（縮尺1/300）

第三章　第二次調査

第一節　第二次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地　：　福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積　：　61ha

発掘調査対象面積：　7.8ha

発掘調査面積　：　2.1ha

発掘調査年月日　：　昭和57年9月15日～58年2月15日

試掘調査の結果、約6haに遺構を確認し、その内の約4haについては盛土、2.1haが削平することとなり、発掘調査面積を2.1haとした。調査区は五ヶ所となり、第二次調査はVからX区の調査区を設定した。V・Ⅵ区が3,400㎡、Ⅶ区が3,300㎡、Ⅷ区が2,800㎡、Ⅸ区が7,100㎡、X区及び道路・水路部分の調査で4,168㎡、計20,768㎡を調査した。

V・Ⅵ区の調査

検出された主な遺構は、縄文時代中期から後期初頭の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・掘立柱建物と奈良時代の溝である。

縄文時代後期の遺構

貯蔵穴を46基検出した。中央部に柱・柱痕を残すものが約半数ある。最大の物はSU－16で、径3.9m、深さ1.6mである。最小のものはSU－38で、径1.9m、深さ1.8mである。形状は擂鉢状やわずかに袋状を呈するもの、ほぼ垂直に立ち上がるものの三種類に大別できる。出土遺物は土器のほか種子(ドングリ等)が約1／3の貯蔵穴から出土した。土器形式は中期から後期初頭に比定される阿高式土器、鐘崎式土器、北久根式土器を中心に出土している。早良平野で縄文時代中期から後期初頭の遺構が発見されたのは四箇遺跡・有田遺跡についで三例目である。

弥生時代中期の遺構

五条の溝と掘立柱建物一棟を検出した。溝は台地を北西から南東に切断するSD－10にSD－11・12が流れ込む状態で検出された。SD－10の南東端は台地が段落ちする部分まで続く形状を呈する。土器は多量に出土し、特に祭祀用に使用された丹塗りの高坏形土器・甕形土器・壷形土器が多い。

SD－10は幅3m、深さ1.5mの大溝であり、溝より多量の土器と共に三叉鍬・平鍬の柄・用途不明の木器が出土した。SD－11が幅1.9m、深さ0.4m、SD－12が幅1.6m、深さ0.27mである。掘立柱建物は2間×2間の建物で、SD－11に囲まれた中に検出した。

VⅡ区の遺構

弥生時代中期の遺構と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構

溝五条・甕棺墓1基・掘立柱建物2棟・ピット多数を検出した。溝はSD－14・15・16・17・18が弥生時代中期に属する。SD－14は調査区中央部の約6mに出入口が設けられ、両側に巡る環濠である。SD－16はSD－02の下層から検出したもので、二叉・三叉鍬や浮子等が出土した。

甕棺墓はただ1基のみしか検出されていない。時期は弥生時代中期に属する。遺構が散発的にあるため理解しやすいが、甕棺墓が1基だけしか検出されていないところが、不可解である。

ＳＤ－15は台地の端部に造られたものであるが、両端に杭を打ち込み取水口状遺構としている。この中からスコップ状木器等が出土した。甕棺墓は１基だけ出土したが、殆ど削平され約1/4しか遺存していない。掘立柱建物はＳＤ－14内から２棟検出した。

Ⅷ区の遺構

Ⅷ区の調査で検出した遺構は旧河川ＳＤ－02と掘立柱建物33棟、不整形土壙状遺構32基、井戸状遺構１基を検出した。北側に位置し、東西に流れるＳＤ－02は幅14～21mで台地を二分する。下層から出土する土器は城ノ越式土器が主である。ただ、この旧河川の上面にあるＳＸ－21・27から出土する土器は須恵器出現の初期段階のものであることからこの以前に埋まったことが明らかである。この他には弥生時代に属する遺構は見られない。古墳時代の掘立柱建物が旧河川を境にして、北側は古式土師器を主体とするのに対して、南側は須恵器を主体とした掘立柱建物群である。

Ⅸ区の調査

Ⅸ区は7,100㎡を発掘調査した。Ⅸ区はＳＤ－01（旧河川：おそらく旧日向川及びその支流と思われる）ＳＤ－02（ＳＤ－01と同様に旧河川）に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複している。特に古墳時代初期の遺構はⅨ区全域に広がっている。

この台地を三分する溝が四条（ＳＤ―05～08）がある。この二つの溝は合流してＳＤ－05となりＳＤ－01に流れ込む。これによって台地が三分される。時期は弥生時代中期に形成されており、合流点には堰状遺構が検出された。

ＳＤ－01は第一次調査のⅢ区から検出された旧河川の上流部分であり、時期はⅢ区の下層で出土した弥生時代前期から中期初頭と考えられる。

古墳時代の遺構は竪穴式住居址１軒、掘立柱建物64棟、溝状遺構23条を検出した。

第二節　第二次調査の記録

１．第二次調査Ⅴ区　―縄文時代の遺構―

貯蔵穴

第一次・二次発掘調査を通して、縄文時代の遺構を検出したのは、第二次調査の第Ⅴ区だけである。Ⅴ・Ⅵ区は弥生時代中期の環壕集落と奈良時代の溝を検出したが、調査中に弥生時代中期の溝に切られる円形の土壙を検出した。これにより再度精査した結果、埋土が弥生時代の基盤層である小石・砂を含む褐色土であるため非常に検出しにくく、弥生時代の遺構調査終了後に再度一面下げ、遺構検出を行った。その結果、縄文時代の中期から後期初頭にかけての貯蔵穴46基が北北東から南南西の方向に列をなして検出された。南限は弥生時代の環壕であるＳＤ－11で、北限は台地が落ちる部分まで検出された。台地の落ち際は人工的に掘削された部分であることから北に延びる可能性も考えられる。南北方向約60m、東西方向約20mの範疇に位置する。一時期、中央部に１個の柱穴が有るところから落とし穴とも考えたが、あまりにも集中していることや、土器・石器・種子等が検出されることから貯蔵穴として捉えた。貯蔵穴間で切合関係が認められるものとして、ＳＵ－03が02と04に切られ、36が37と12に切られる。12は32に切られ、35は12・32に切られる。また46は39に、23は22に、31は33によって切られる。

貯蔵穴から出土する遺物は少量であるため時期を決定できる資料は少ないが、遺物が出土した貯蔵穴はＳＵ―02・05・08～11・13・15・16・20・22・28～36・38～41・43～46の二十八ケ所から土器、ＳＵ―10・17・22・38・40から石器、柱痕及び建築材はＳＵ－9・30・33・35・40・42・44の七ケ所から検出した。また種子は06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44の十三ヶ所から出土した。

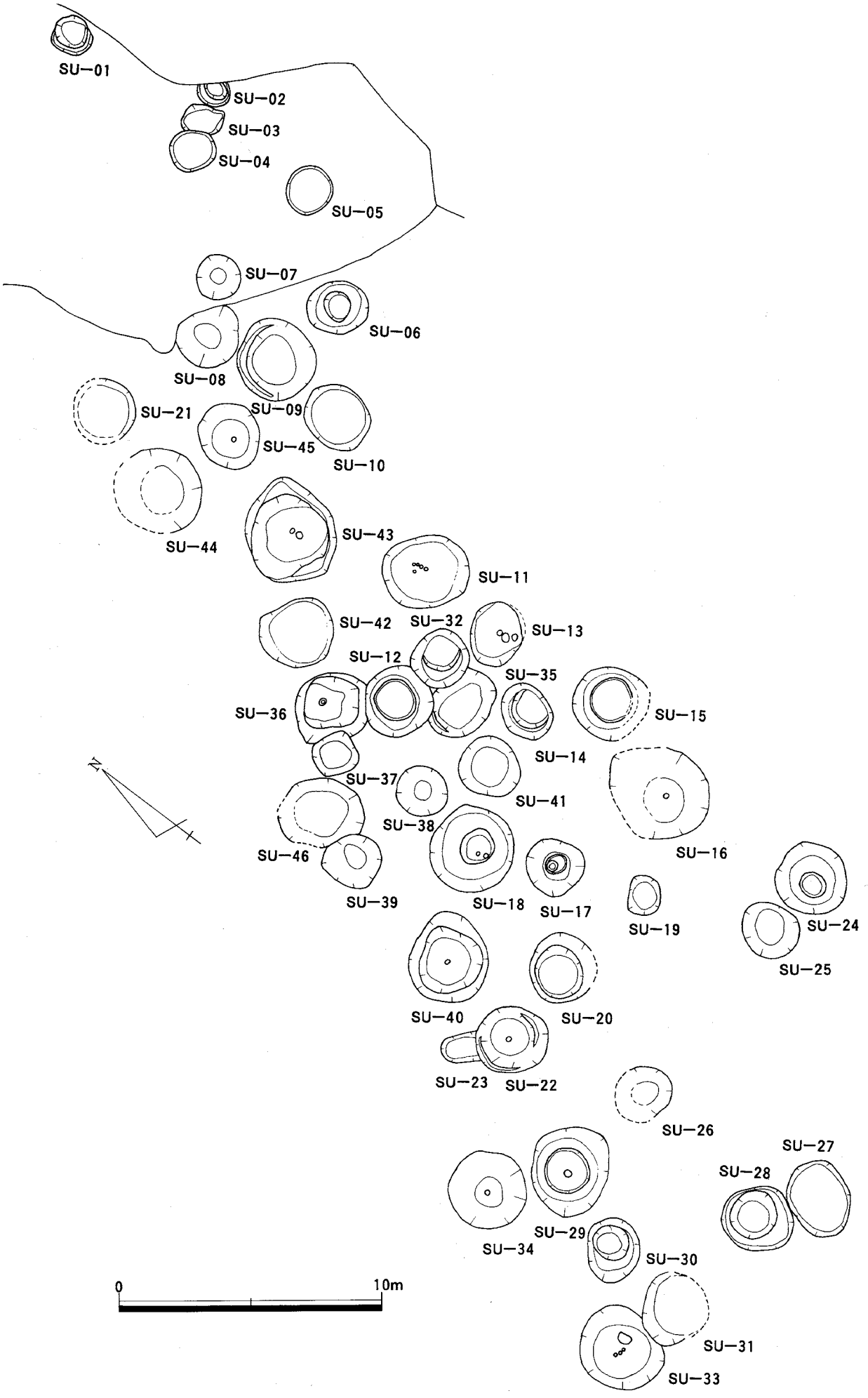


Fig. 20　第Ⅴ区縄文時代貯蔵穴配置図(縮尺1/200)

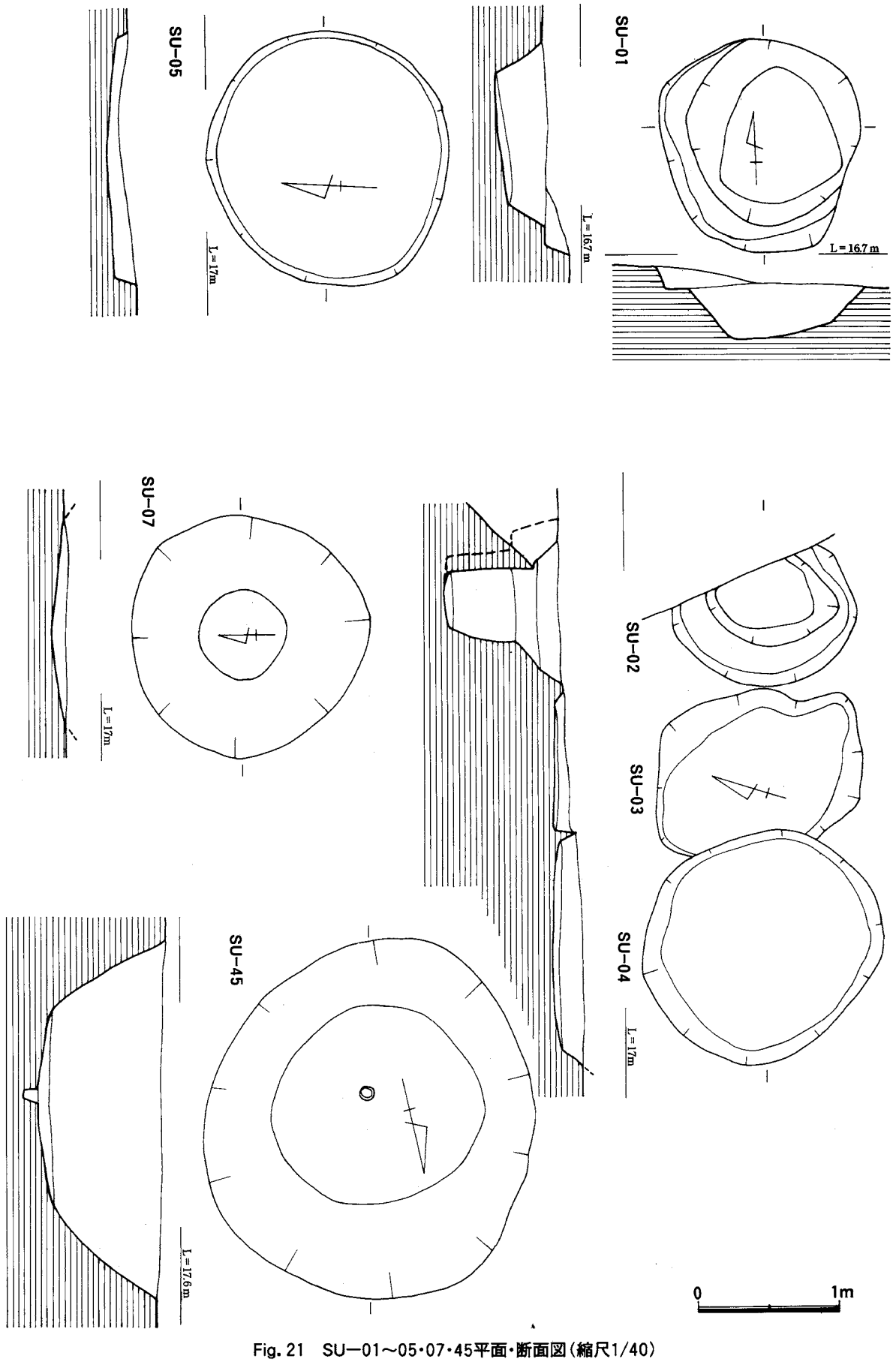


Fig. 21　SU—01～05・07・45平面・断面図(縮尺1/40)

ＳＵ－01～05・07・45（Fig. 21）

調査区の一番北側から検出されたもので、全体的に削平を受けている。二段掘りされているが、片方は削平のため一段となっている。形状は不整形の楕円を呈する。長さ154cm×幅140cm×深さ50cmを測る。底面はやや斜めの傾斜をもち平坦である。出土遺物はない。

02～04は調査区の北側、01の南東側に位置し、一直線に並ぶ。04→03→02の切り合い関係を持つ。全体的に削平を受けており、03・04は約10cmから30cm程度しか残っていない。

02　02はそれでも深さ80cmが遺存する。形状は東側が台地削平時に破壊されていることから大まかにしか判断できないが、円形で二段に形成され二段目はほぼ垂直に掘込まれている。底面は平坦で、柱穴等はない。規模は長軸125cm×短軸80＋α（120）cm×深さ80cmを測る。二段目は長軸100cm×短軸70cm＋α×深さ50cmを測る。02は縄文時代中期に属する。**03**　03は出土遺物がないが02により、中期以降であることが判明した。形状は不整形の楕円形で、長軸150cm×短軸135cm＋α×深さ24cmで04から切られる。**04**　04はほぼ円形を呈し、規模は長軸170cm×短軸165cm×深さ19cmを測る。出土遺物がないため時期は確定できないが、03を切ることから最も新しいと考えられる。

05・07は02から一段、段落ちした部分から検出された。

05　段落ち部分からの検出であるため削平が著しく底面しか残っていない。規模は長軸185cm×短軸170cm×深さ15cmを測る。柱穴等は検出されていない。出土遺物は細片であるが、土器が出土している。**07**　07も削平が著しく遺構の残りは悪く、規模は長軸175cm×短軸170cm×深さ8cmを測る。遺物・柱穴等は検出されていない。

45　45は07等より一段高い部分、調査区の北側で、8～10の西側、44の東側に位置する。規模は長軸255cm×短軸230cm×深さ101cmを測る。柱穴は中央に位置し、規模は10×10cm、深さ15cmを測る。出土遺物は細片であるが鐘ヶ崎式土器であることから時期は縄文時代中期に比定できる。

ＳＵ－06・08・09（Fig. 22　PL. 6・8・9）

06・08・09は台地北側の段落ちする手前に位置し、45の東側に位置する。

06　06はＳＸ－01の西側、09の東側に位置する。二段に構築され、規模は長軸226cm×短軸200cm×深さ146cmを測る。柱穴は中央に位置し、規模は26×20cm、深さ12cmを測る。出土遺物は炭化物・ドングリ等が出土したが、時期を決定する土器の出土はない。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が黒褐色土、第Ⅲ層が炭化物を含む淡褐色粘質土、第Ⅳ層が暗青灰色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む暗黒灰粘質土、第Ⅵ層が青灰色粘質土、第Ⅶ層がドングリ等を含む砂、第Ⅷ層が青灰色シルトである。

08　08は北側の一段目の段落ち部分に北東部分が一部削られているが、09の北側に位置し、09と接する。形状は円形を呈し、やや浅い。規模は長軸253cm×短軸248cm×深さ80cmを測る。上面第1層に弥生土器を混入するが、この第1層の小石混じりの褐色土は弥生時代の基盤層であることから、混入したと思われる。出土遺物はドングリ等および、鉢型土器の底部が出土した。土層は第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が暗褐色粘質土、第Ⅲ層が褐色粘質土、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む砂、第Ⅵ層が灰褐色粘質土である。**09**　09は南に10，北に08、東に06、西に45の十字部分の中央に位置する。08と接するが切り合い関係はない。北側部分に僅かな平坦面を有するがほぼ円形の形状を呈し、柱穴はない。規模は長軸300cm×短軸296cm×深さ122cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗褐色土、第Ⅱ層が暗褐色土、第Ⅲ層が黄褐色土、第Ⅳ層が褐色粘質土、第Ⅴ層が暗褐色土、第Ⅵ層が茶褐色粘質土、第Ⅶ層が暗褐色シルト土、第Ⅷ層が砂礫、第Ⅸ層が黄褐色土、第Ⅹ層が砂、第XI層がドングリ等を含む暗黒褐色粘質土、第XII層が暗褐色粘質土、第XIII層が砂

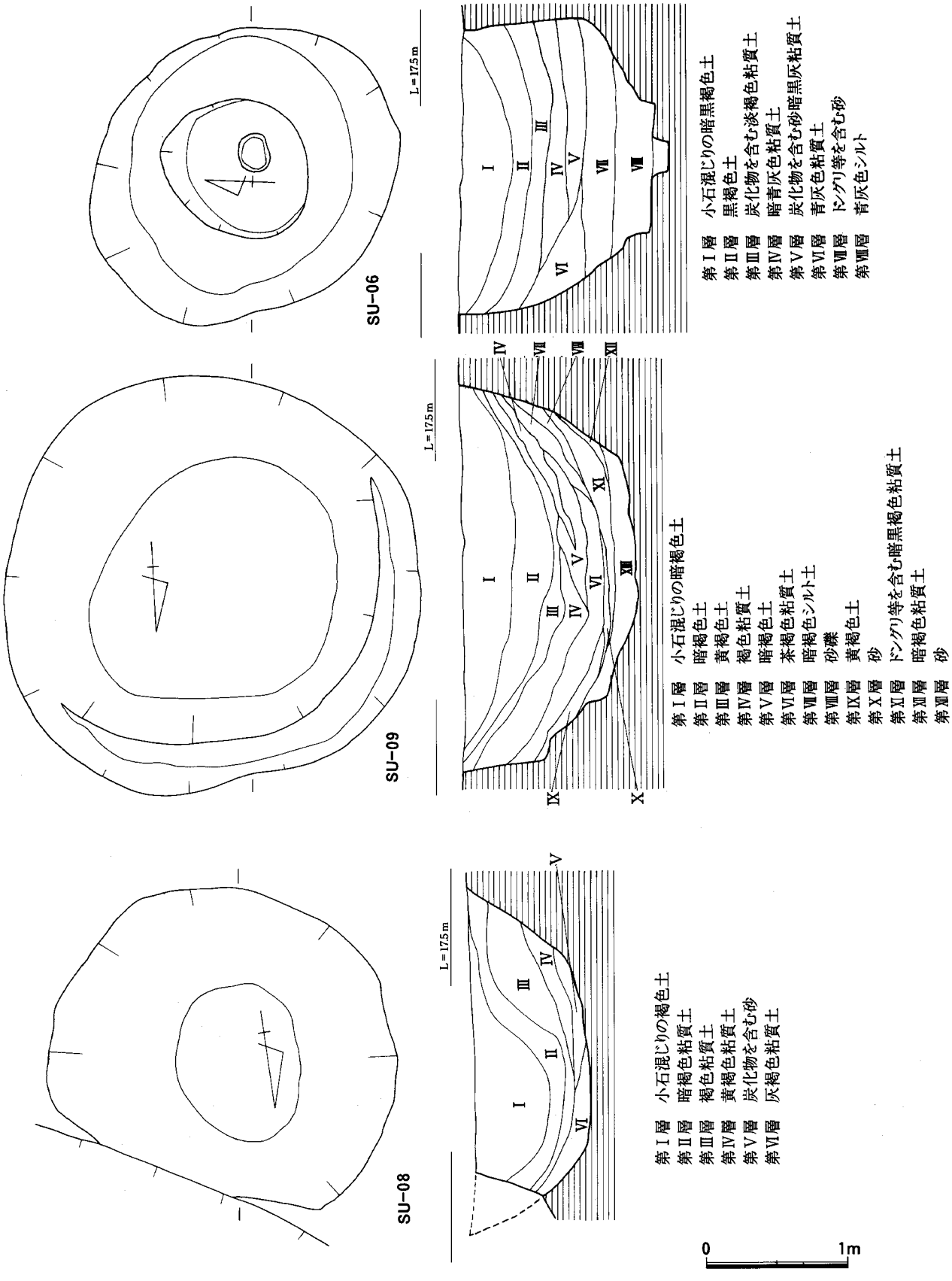


Fig. 22 SU—06・08・09平面・断面図(縮尺1/40)

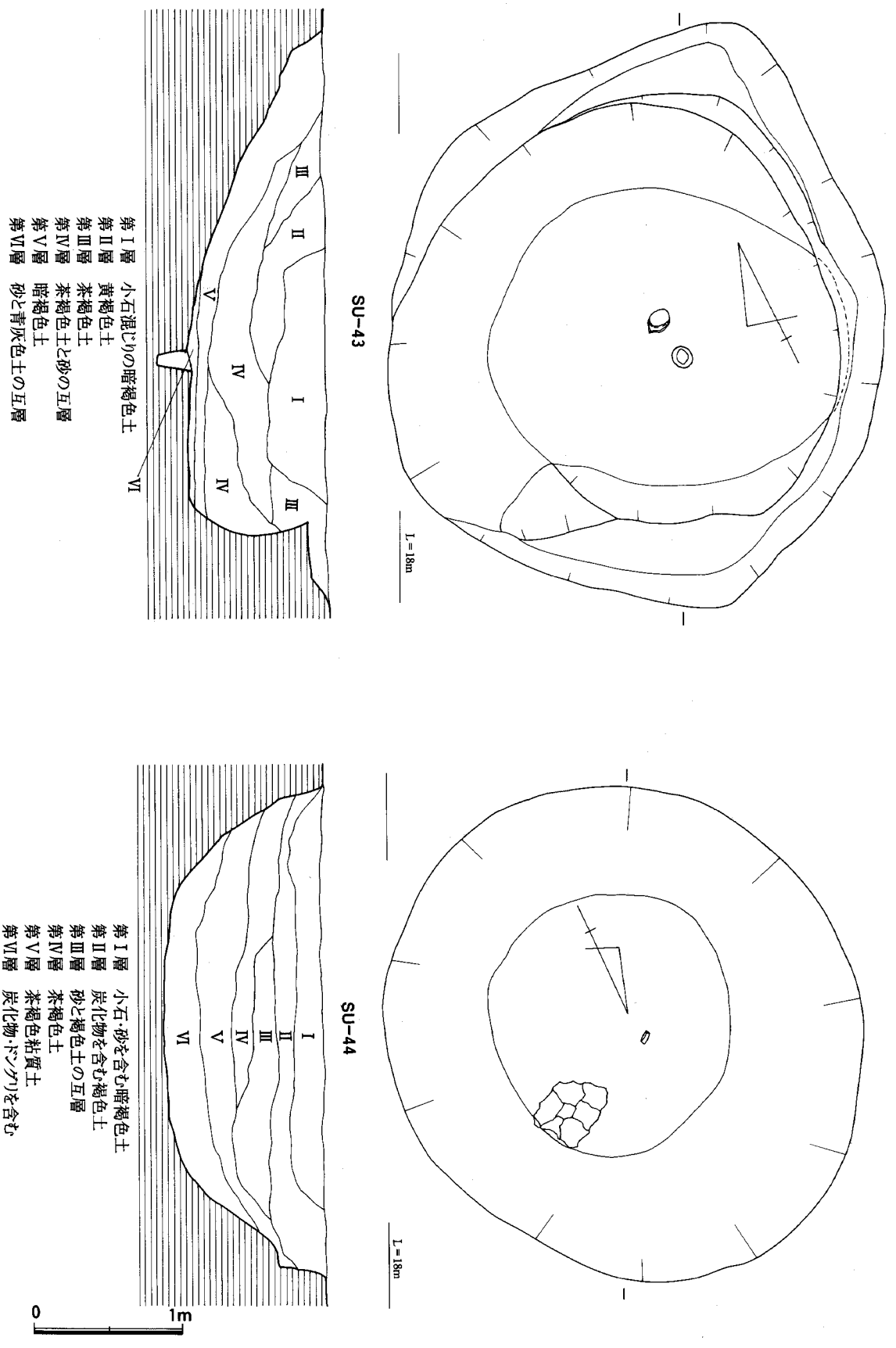


Fig. 23　SU−43・44平面・断面図（縮尺1/40）

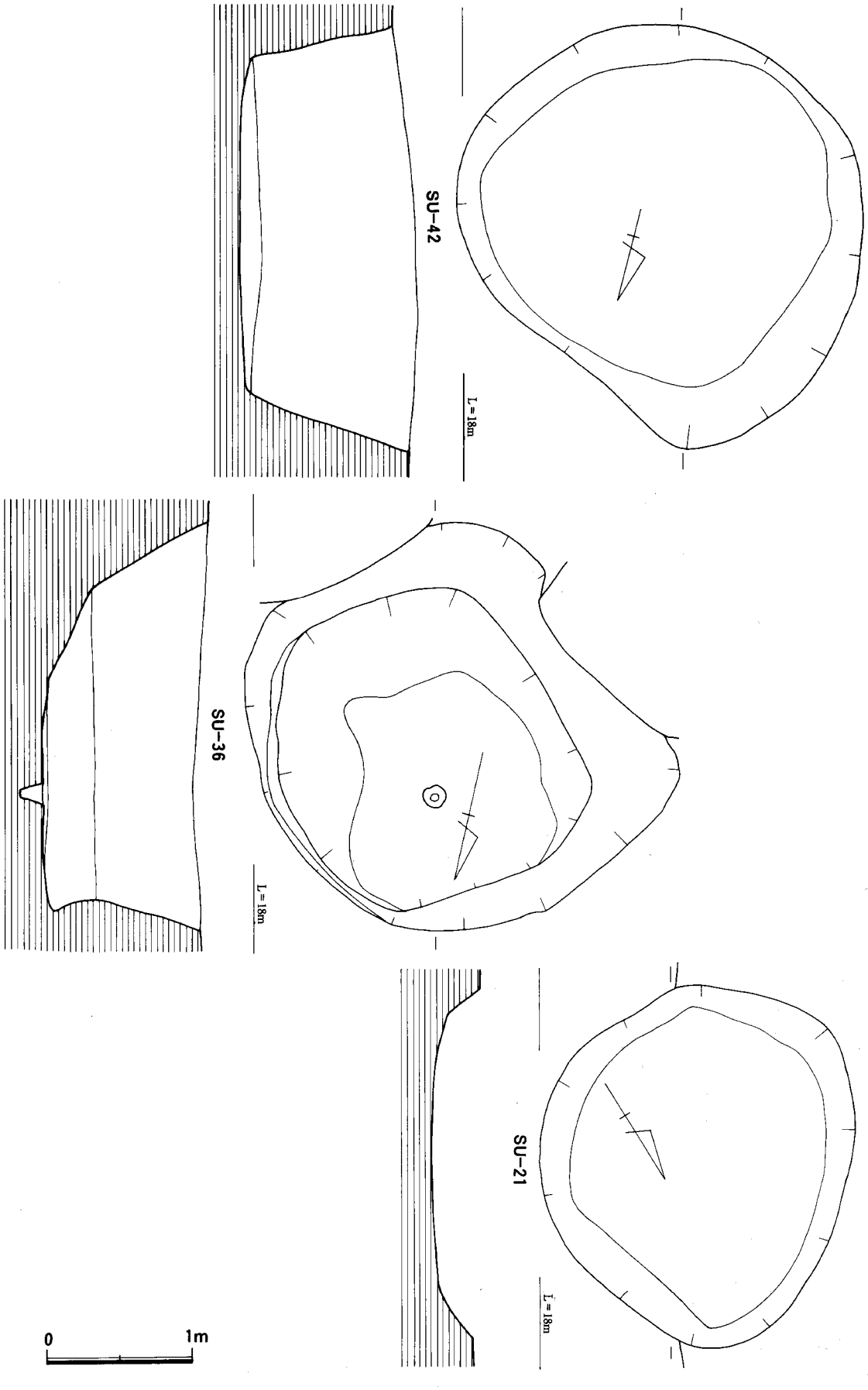


Fig. 24　SU—21・36・42平面・断面図（縮尺1/40）

である。出土遺物はドングリの他に土器が出土しているが、この遺物が44出土の土器と接合するところから、両方とも北久根式土器で、時期は縄文時代後期初頭に比定できる。

ＳＵ－43・44　(Fig. 23　PL. 5・10・11)

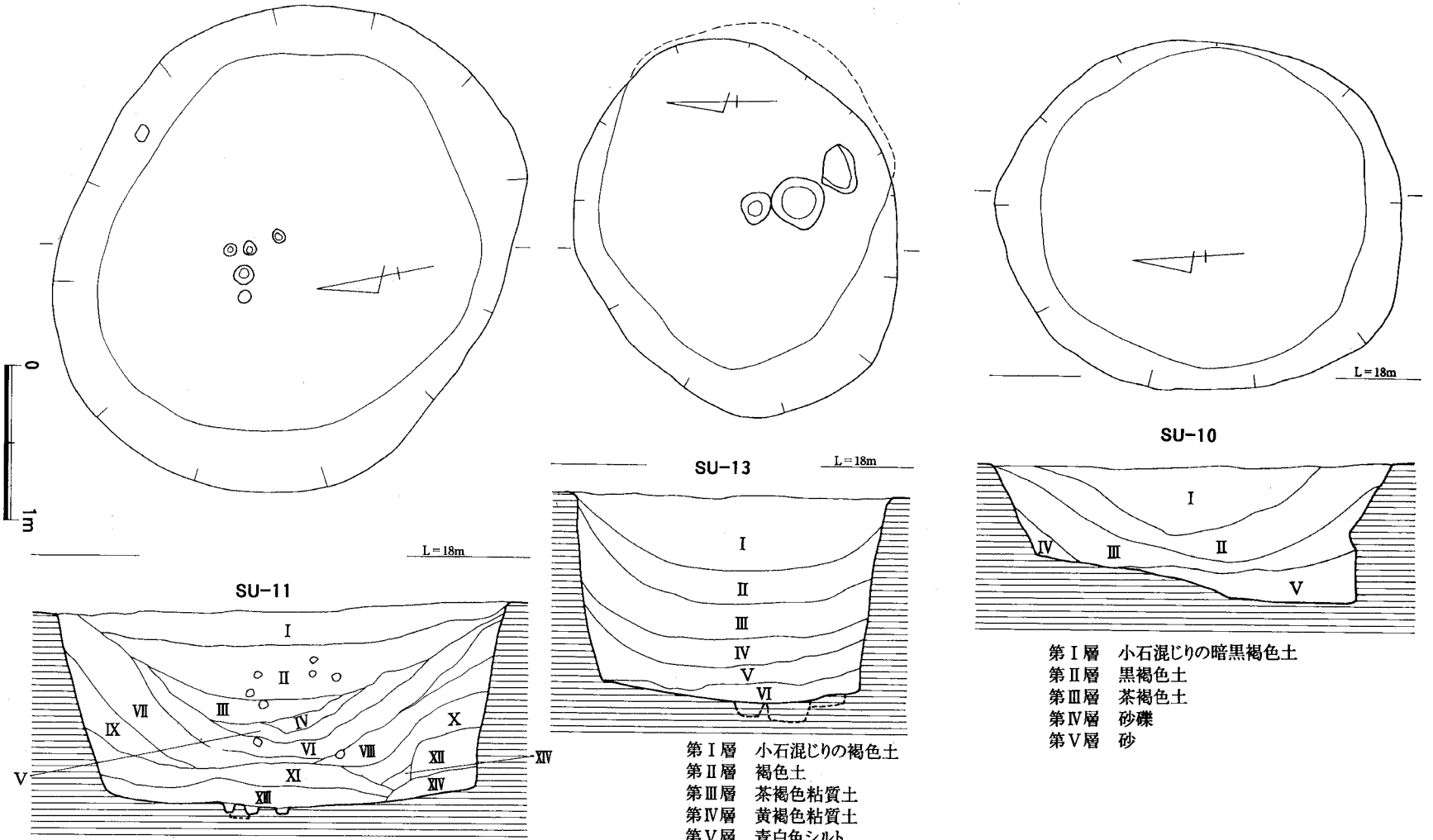
43・44は台地北側部分に位置し、43は42の北側に位置する。44は45の西側、21の南側に位置する。**43**　43は隅丸の楕円形を呈するが、北東側が浅く、南西側が深くオーバーハングした形状を呈する。中央部に２個の柱穴をもつが、柱材はない。規模は今回検出された貯蔵穴の内２番目に大きなもので、長軸393cm×短軸335cm×深さ118cmを測る。柱穴の大きさは、13×13cm、深さ24cmと20×13cm、深さ24cmを測る。出土遺物は土器底部が出土しているが、この土器から時期は縄文時代中期に比定できる。土層は単純で第Ⅰ層が小石混じりの暗褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が茶褐色土、第Ⅳ層が茶褐色と砂の互層、第Ⅴ層が暗茶褐色土、第Ⅵ層が砂と青灰色土の互層である。**44**　44は弥生時代中期の溝であるＳＤ－12によって約半分を切られる。形状は円形を呈し、柱穴はない。長軸335cm×短軸327cm×深さ98cmを測る。出土遺物は炭化物・種子の他に鉢形土器(Fig. 36)及び09出土の土器と接合した台座状の形状を呈する土器(Fig. 37)で、時期は縄文時代後期初頭に比定できる。土層は単純で、第Ⅰ層が小石・砂を含む暗褐色土、第Ⅱ層が炭化物を含む褐色土、第Ⅲ層が砂と褐色土の互層、第Ⅳ層が茶褐色土、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物・ドングリを多量に含む青灰色粘質土である。

ＳＵ－21・36・42　(Fig. 24　PL. 5)

21　21は44の北側に位置し、弥生時代の溝ＳＤ－12によって切られる。全体的にこの部分は台地が下がり気味で、遺構の遺存状態は悪い。形状は楕円形を呈し柱穴はない。規模は長軸250cm×短軸220cm×深さ24cmを測る。**36**　36は貯蔵穴が一番集中する中央部の北側に位置し、12・37から切られる。形状は本来は隅丸方形を呈していたものと考えられるが、12・37から切られるため不整形を呈する。規模は長軸280cm×短軸250cm×深さ125cmを測る。北側底面は抉れた状況を呈しており、これに反して南側は緩やかな斜面となっている。中央部に柱穴がある。規模は18×18cmで、深さ16cmを測る。出土遺物は縄文時代中期の底部が出土していることからこの貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。**42**　42は36の北側、43の南側に位置する。不整形の形状を呈し、規模は長軸286cm×短軸250cm×深さ117cmを測り、柱穴はない。最下層からドングリが出土している。土層は44とほぼ同じである。

ＳＵ－10・11・13　(Fig. 25　PL. 5・6・9・10)

10　10は台地の北側で、９の南側、ＳＸ－01の西側に位置する。形状は円形を呈し、南側底面は抉り込んでいる。柱穴はない。底面付近の第Ⅴ層から土器の細片が出土している。規模は長軸265cm×短軸226cm×深さ85cmを測る。土層は単純で、第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が黒褐色土、第Ⅲ層が茶褐色土、第Ⅳ層が砂礫、第Ⅴ層が砂である。**11**　11は中央部の貯蔵穴が集中する一角の北東隅に位置し、13の北側、32の北東側にある。形状は隅丸方形を呈し、底面中央部の僅かに北側にずれた部分から小さな柱穴がまとまって５個検出した。壁面の立ち上がりは、ほぼ垂直である。規模は長軸320cm×短軸293cm×深さ125cmを測る。柱穴の大きさはいずれも13×13cmで深さ９cmを測る。出土遺物は土器底部等とドングリが出土した。土層はやや複雑で埋まり方にやや時間がかかった形跡が見られる。第Ⅰ層が茶褐色土、第Ⅱ層が小石・土器を含む茶褐色土、第Ⅲ層が炭化物を多量に含む褐色土、第Ⅳ層が砂、第Ⅴ層が黄褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物を多量に含む暗黄褐色シルト、第Ⅶ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅷ層が炭化物を含む黄褐色粘質土、第Ⅸ層が砂と黄褐色土の互層、第Ⅹ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅺ層　砂・炭化物を混入する青灰色シルト、第Ⅻ層が明黄褐色粘質土、

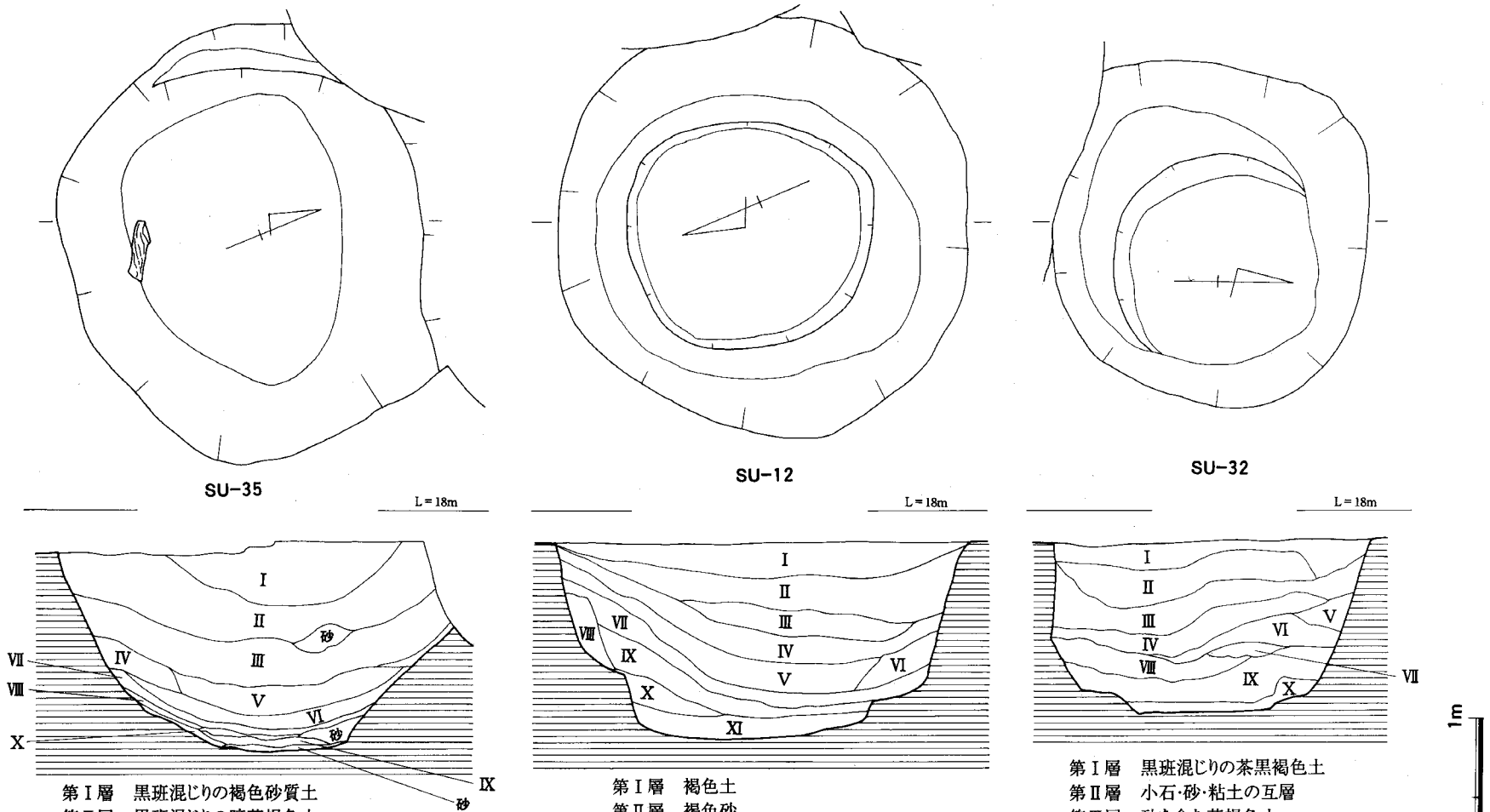


第Ⅰ層　茶褐色土
第Ⅱ層　小石・土器を含む茶褐色土
第Ⅲ層　炭化物を多量に含む褐色土
第Ⅳ層　砂
第Ⅴ層　黄褐色粘質土
第Ⅵ層　炭化物を多量に含む暗黄褐色シルト
第Ⅶ層　暗茶褐色粘質土
第Ⅷ層　炭化物を含む黄褐色粘質土
第Ⅸ層　砂と黄褐色土の互層
第Ⅹ層　暗茶褐色粘質土
第Ⅺ層　砂・炭化物を混入する青灰色シルト
第Ⅻ層　明黄褐色粘質土
第XIII層　砂
第XIV層　明茶褐色シルト

第Ⅰ層　小石混じりの褐色土
第Ⅱ層　褐色土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土
第Ⅳ層　黄褐色粘質土
第Ⅴ層　青白色シルト
第Ⅵ層　砂

第Ⅰ層　小石混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　黒褐色土
第Ⅲ層　茶褐色土
第Ⅳ層　砂礫
第Ⅴ層　砂

Fig. 25　SU−10・11・13平面・断面図（縮尺1/40）

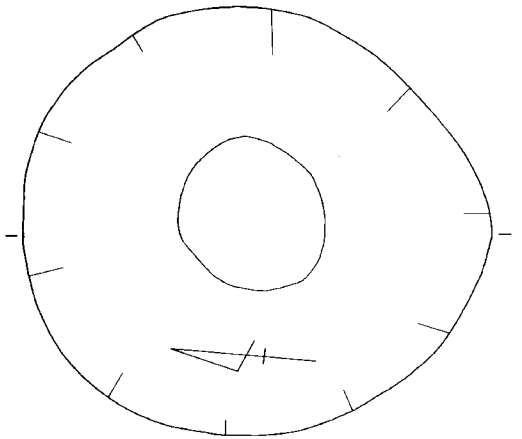


第Ⅰ層　黒班混じりの褐色砂質土
第Ⅱ層　黒班混じりの暗茶褐色土
第Ⅲ層　黒班と八女粘土のブロックを含む茶褐色土
第Ⅳ層　炭化物を多く含む砂質の暗褐色土
第Ⅴ層　炭化物を多く含む茶褐色粘質土
第Ⅵ層　炭化物・ドングリを含む暗褐色粘質土
第Ⅶ層　暗灰色粘質土
第Ⅷ層　黄褐色粘質土
第Ⅸ層　砂を若干含む暗灰色粘質土
第Ⅹ層　黄褐色土と暗灰色粘質土の互層

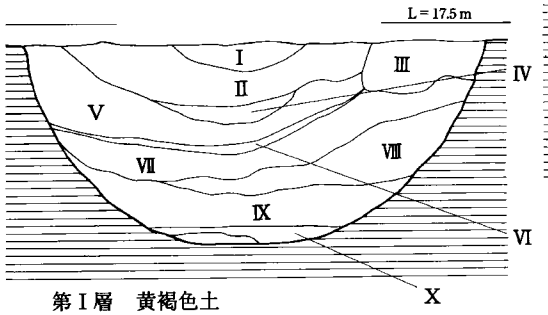
第Ⅰ層　褐色土
第Ⅱ層　褐色砂
第Ⅲ層　細砂
第Ⅳ層　黄褐色粘質土
第Ⅴ層　暗茶褐色粘質土
第Ⅵ層　砂
第Ⅶ層　褐色粘質土
第Ⅷ層　砂
第Ⅸ層　灰褐色粘質土
第Ⅹ層　褐色粘質土
第Ⅺ層　青灰色砂

第Ⅰ層　黒班混じりの茶黒褐色土
第Ⅱ層　小石・砂・粘土の互層
第Ⅲ層　砂を含む茶褐色土
第Ⅳ層　小石混じりの荒砂
第Ⅴ層　灰褐色粘質土
第Ⅵ層　黄褐色土
第Ⅶ層　褐色粘質土
第Ⅷ層　炭化物混じりの茶褐色土
第Ⅸ層　灰褐色粘質土
第Ⅹ層　砂

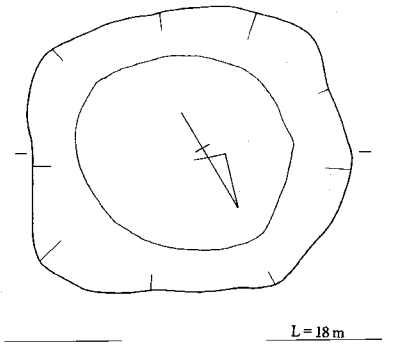
Fig. 26　SU−12・32・35平面・断面図（縮尺1/40）



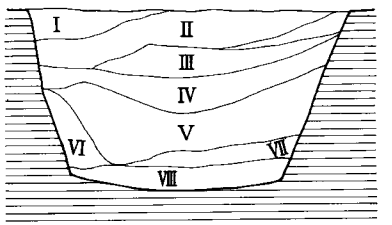
SU-38



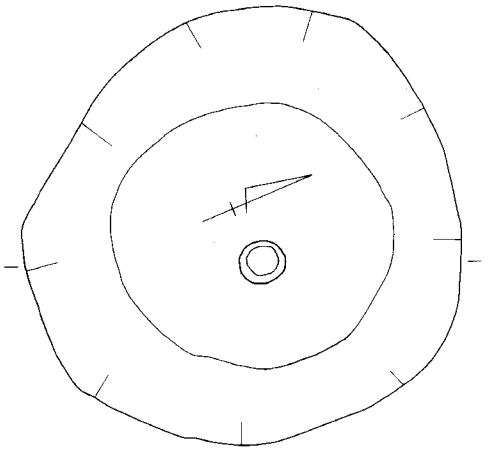
第Ⅰ層　黄褐色土
第Ⅱ層　小石混じりの暗褐色土
第Ⅲ層　暗黒褐色土
第Ⅳ層　砂質土
第Ⅴ層　茶褐色土
第Ⅵ層　砂
第Ⅶ層　黄白色土のブロックが混じる暗黒褐色土
第Ⅷ層　砂を含む褐色土
第Ⅸ層　黄白色と砂の互層
第Ⅹ層　暗黒灰色粘質土



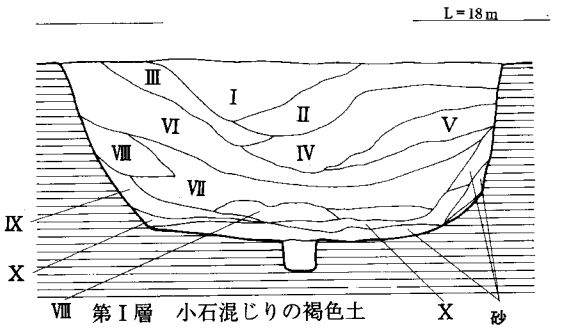
SU-37



第Ⅰ層　小石混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　黄褐色粘土
第Ⅲ層　褐色砂質土
第Ⅳ層　茶褐色粘質土
第Ⅴ層　砂と炭化物を含む暗黒褐色土
第Ⅵ層　小石を含む砂
第Ⅶ層　暗黒褐色シルト
第Ⅷ層　灰褐色砂



SU-41



第Ⅰ層　小石混じりの褐色土
第Ⅱ層　黄褐色土
第Ⅲ層　黒斑混じりの暗黒褐色土
第Ⅳ層　砂を多く含む褐色砂質土
第Ⅴ層　茶褐色粘質土
第Ⅵ層　炭化物を含む暗茶褐色粘質土
第Ⅶ層　炭化物を含む茶褐色砂質土
第Ⅷ層　白色粘土と褐色粘質土の互層
第Ⅸ層　褐色砂質土
第Ⅹ層　黄褐色粘土

Fig. 27　SU−37・38・41平面・断面図（縮尺1/40）

第XIII層が砂、第XIV層が明茶褐色シルトである。**13**　13は台地中央部の貯蔵穴が集中する一角の東側に位置し、32・35の東側、14の北側にある。形状は、やや長い円形を呈し、南北の壁面の立ち上がりは垂直であるが、東側が抉り込んでいる。底面は平坦で、柱穴が中央部から南側に3個一直線に列ぶ。規模は長軸245cm×短軸208cm×深さ145cmを測る。柱穴の大きさは中央から20×20cm、深さ9cmと35×30cmで深さ15cmと32×20cmで深さ9cmである。出土遺物は土器底部が出土した。土層は単純で、基準となる土層を呈する。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が褐色土、第Ⅲ層が茶褐色粘質土、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が青白色シルト、第Ⅵ層が砂である。

ＳＵ－12・32・35（Fig. 26　PL. 5・6）

12　12は台地中央部に位置し、32に切られ、35・36を切る形で検出した。この4基の貯蔵穴の内、2番目に新しい貯蔵穴である。形状は円形で、底面近くで平坦部をもつ二段構造になっている。底面は平坦で、柱穴はない。規模は長軸260cm×短軸255cm×深さ123cmを測る。土層は第Ⅰ層が褐色土、第Ⅱ層が褐色砂、第Ⅲ層が細砂、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅵ層が砂、第Ⅶ層が褐色粘質土、第Ⅷ層が砂、第Ⅸ層が灰褐色粘質土、第Ⅹ層が褐色粘質土、第XI層が青灰色砂である。**32**　32は12・35を切る形で検出した。形状は隅丸方形を呈し、底面近くに平坦部をもつ二段構造になっている。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は長軸210cm×短軸200cm×深さ108cmを測る。土層は第Ⅰ層が黒班混じりの茶黒褐色土、第Ⅱ層が小石・砂・粘土の互層、第Ⅲ層が砂を含む茶褐色土、第Ⅳ層が小石混じりの荒砂、第Ⅴ層が灰褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色土、第Ⅶ層が褐色粘質土、第Ⅷ層が炭化物混じりの茶褐色土、第Ⅸ層が灰褐色粘質土、第Ⅹ層が砂である。出土遺物は炭化物と縄文土器の口縁部が出土しており、これによって貯蔵穴の時期が決定される。**35**　35は12・32から切られ、この3基のうち一番古い貯蔵穴である。形状は隅丸方形と思われるが、両方から切られているため定かではない。底面はやや丸味をもち柱穴はない。底面近くに炭化材が出土している。規模は長軸278cm×短軸227cm×深さ132cmを測る。土層は第Ⅰ層が黒班混じりの褐色砂質土、第Ⅱ層が黒班混じりの暗茶褐色土、第Ⅲ層が黒班と八女粘土のブロックを含む茶褐色土、第Ⅳ層が炭化物を多く含む砂質の暗褐色土、第Ⅴ層が炭化物を多く含む茶褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物・ドングリを含む暗褐色粘質土、第Ⅶ層が暗灰色粘質土、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が砂を若干含む暗灰色粘質土、第Ⅹ層が黄褐色土と暗灰色粘質土の互層である。出土遺物は炭化物・炭化材・鉢形土器で、時期は縄文時代中期に属する。

ＳＵ－37・38・41（Fig. 27　PL. 5・7・9）

37　37は台地中央部の西側に位置し、46と接し、36を切る形で検出された。形状は隅丸方形で、底面形は円形に近い。底面は平坦で柱穴等は検出されていないが、炭化物が出土した。規模は小型で、長軸170cm×短軸150cm×深さ95cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が褐色砂質土、第Ⅳ層が茶褐色粘質土、第Ⅴ層が砂と炭化物を含む暗黒褐色土、第Ⅵ層が小石を含む砂、第Ⅶ層が暗黒褐色シルト、第Ⅷ層が灰褐色砂である。土層の埋まり方は西側からである。**38**　38は台地中央部の中央、12の南側、46の東側、41の西側に位置する。上面形状は円形を呈し、底面は椀状を呈し、柱穴等は検出できなかったが、底面近くで縄文時代中期の底部が出土していることから、この貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。規模は長軸250cm×短軸230cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が黄褐色土、第Ⅱ層が小石混じりの暗褐色土、第Ⅲ層が暗黒褐色土、第Ⅳ層が砂質土、第Ⅴ層が茶褐色土、第Ⅵ層が砂、第Ⅶ層が黄白色土のブロックが混じる暗黒褐色土、第Ⅷ層が砂を含む褐色土、第Ⅸ層が黄白色と砂の互層、第Ⅹ層が暗黒灰色粘質土である。

41　41は台地中央部の貯蔵穴が集中する部分から検出された。西側に38、東側に14北側に35が

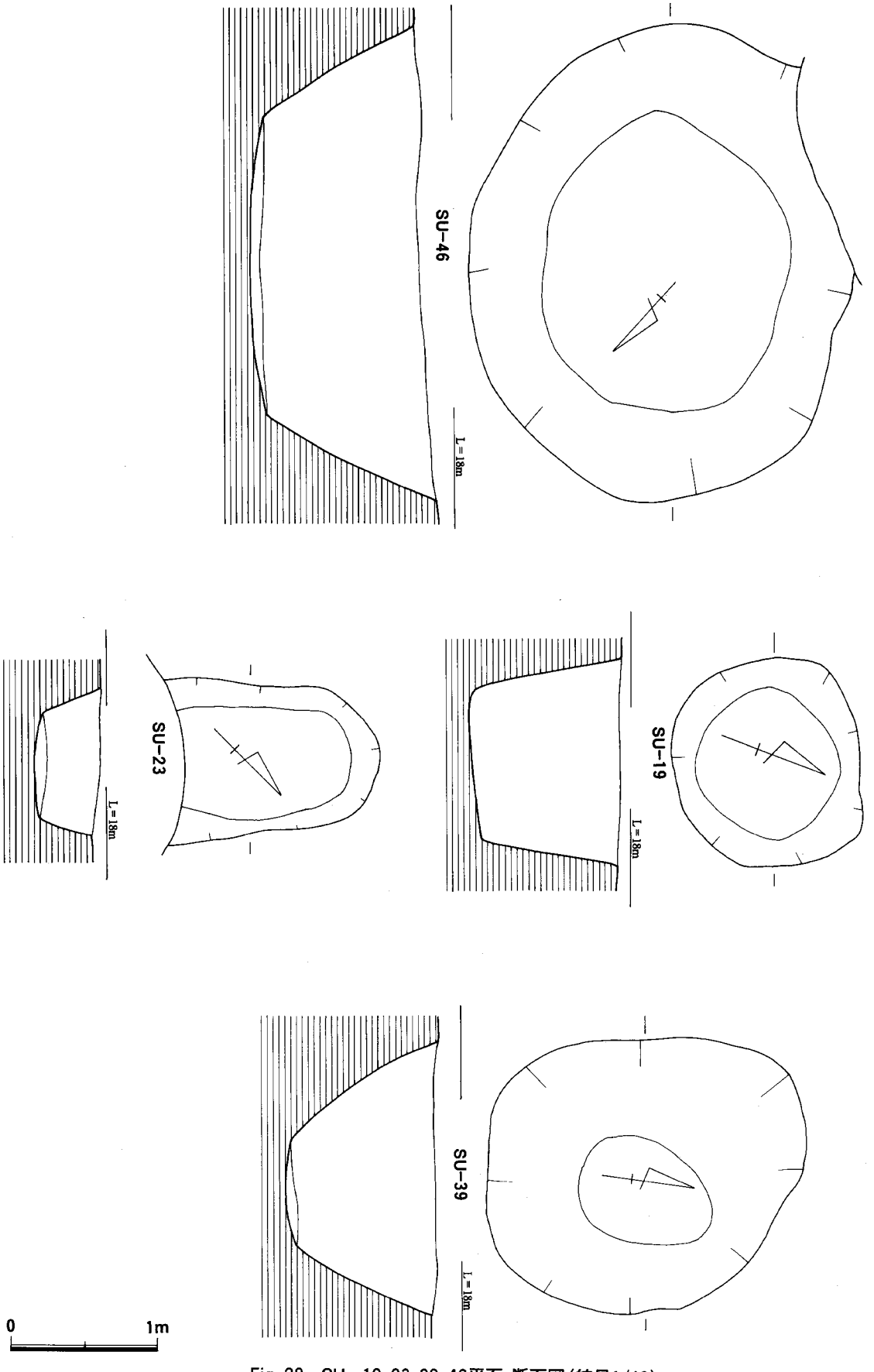
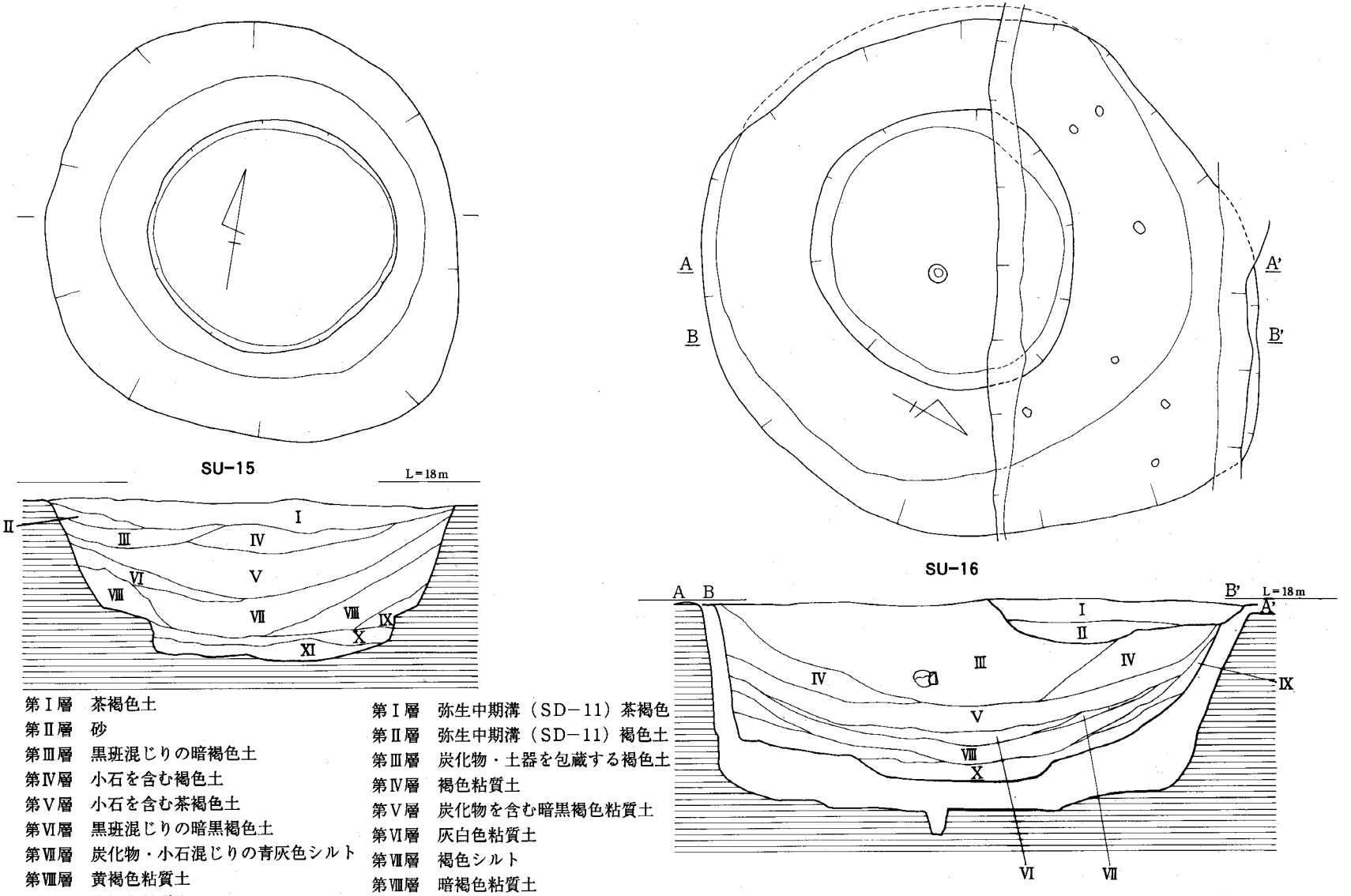


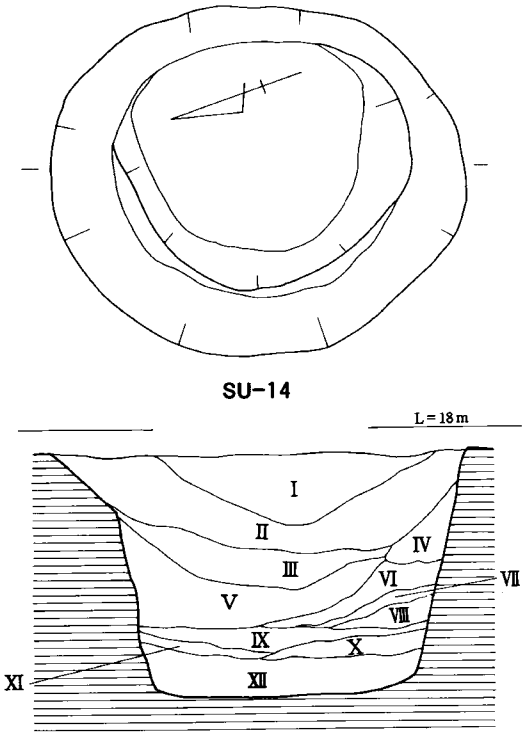
Fig. 28　SU—19・23・39・46平面・断面図（縮尺1/40）



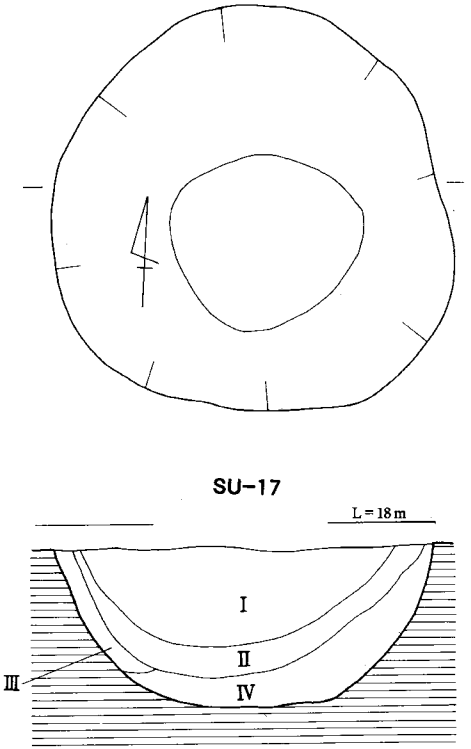
第Ⅰ層　茶褐色土
第Ⅱ層　砂
第Ⅲ層　黒斑混じりの暗褐色土
第Ⅳ層　小石を含む褐色土
第Ⅴ層　小石を含む茶褐色土
第Ⅵ層　黒斑混じりの暗黒褐色土
第Ⅶ層　炭化物・小石混じりの青灰色シルト
第Ⅷ層　黄褐色粘質土
第Ⅸ層　茶褐色粘質土
第Ⅹ層　褐色粘質土でドングリを含む
第Ⅺ層　黒褐色砂

第Ⅰ層　弥生中期溝（SD−11）茶褐色
第Ⅱ層　弥生中期溝（SD−11）褐色土
第Ⅲ層　炭化物・土器を包蔵する褐色土
第Ⅳ層　褐色粘質土
第Ⅴ層　炭化物を含む暗黒褐色粘質土
第Ⅵ層　灰白色粘質土
第Ⅶ層　褐色シルト
第Ⅷ層　暗褐色粘質土
第Ⅸ層　褐色シルト
第Ⅹ層　青灰色砂

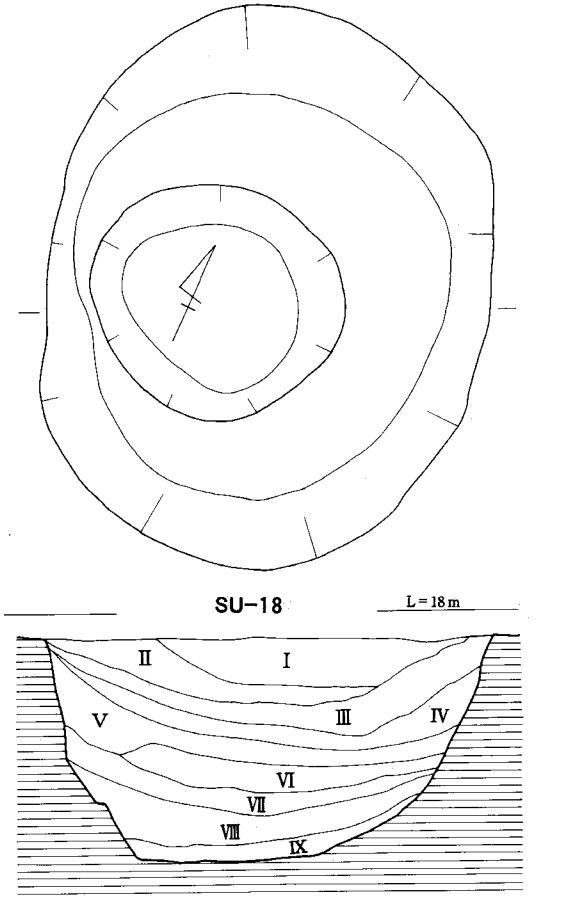
Fig. 29　SU−15・16平面・断面図（縮尺1/40）



第Ⅰ層　小石混じりの褐色土
第Ⅱ層　黒斑混じりの茶褐色土
第Ⅲ層　褐色粘質土
第Ⅳ層　茶褐色粘質土
第Ⅴ層　炭化物を含む暗褐色土
第Ⅵ層　黄褐色粘質土
第Ⅶ層　灰褐色粘質土
第Ⅷ層　黄褐色粘質土
第Ⅸ層　小石混じりの茶褐色シルト
第Ⅹ層　砂
第Ⅺ層　砂と青灰色粘質土
第Ⅻ層　細砂



第Ⅰ層　小石・黒斑混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　明褐色土
第Ⅲ層　砂礫とシルトの互層
第Ⅳ層　暗黒褐色土と砂礫混入



第Ⅰ層　小石混じりの褐色土
第Ⅱ層　黒斑を含む暗黒褐色土
第Ⅲ層　褐色土
第Ⅳ層　暗褐色土
第Ⅴ層　黒斑を含む暗褐色粘質土
第Ⅵ層　黄褐色粘質土
第Ⅶ層　黒褐色粘質土でドングリを含む
第Ⅷ層　砂を多少含む褐色粘質土
第Ⅸ層　灰褐色シルト

Fig. 30　SU−14・17・18平面・断面図（縮尺1/40）

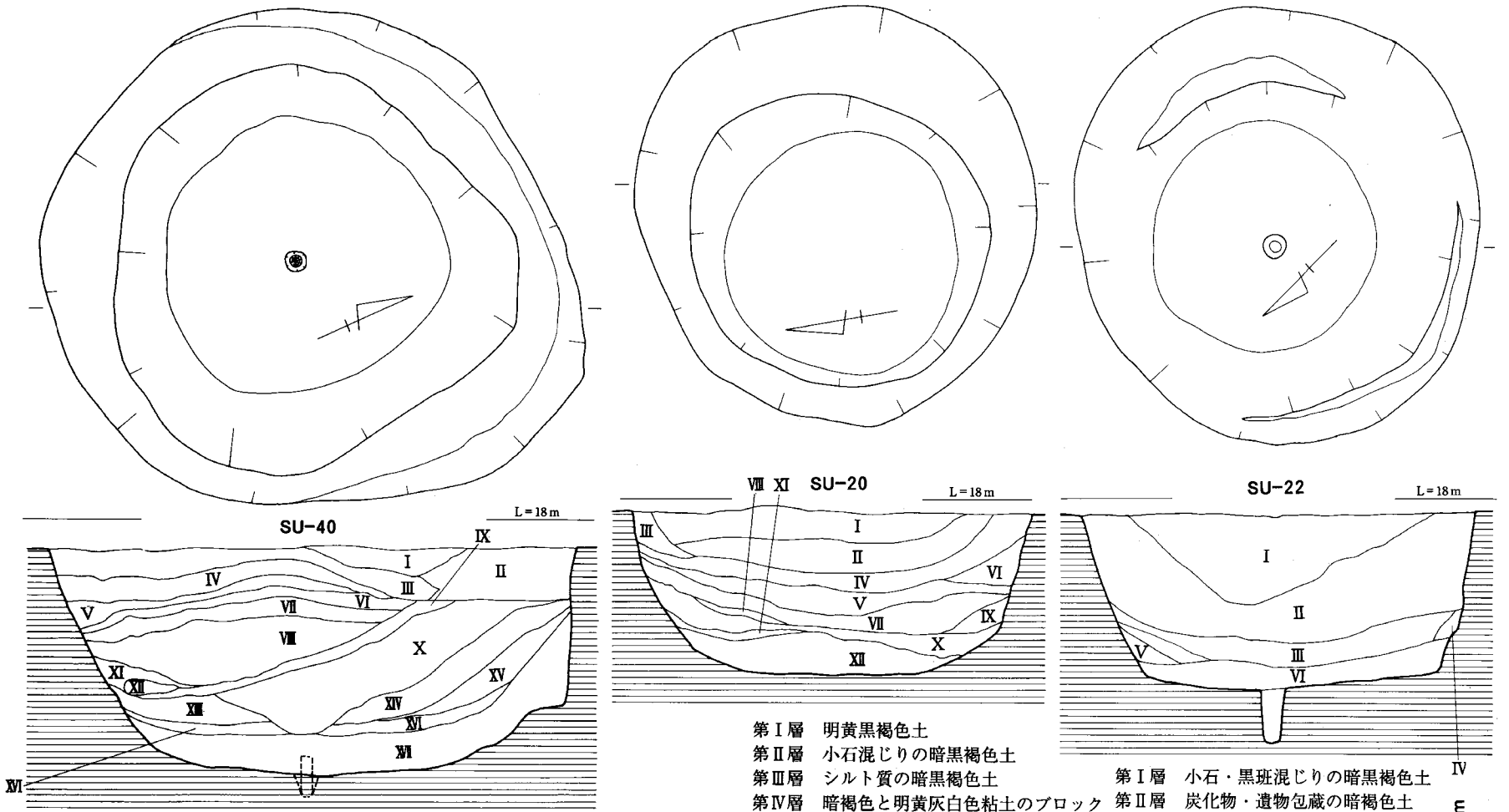
ある。上面形状はやや不整形な円形を呈するが、底面は円形で平坦を呈する。中央部に柱穴が検出された。出土遺物は炭化物・縄文時代中期の土器が出土している。土器は底面近くの出土であることからこの貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。規模は長軸233cm×短軸230cm×深さ112cmを測る。また柱穴は25cm×25cm×深さ15cmを測る。土層は非常に複雑で、底面になるほど細かい。砂の部分には土層名を記さず図面に表示した。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅳ層が砂を多く含む褐色砂質土、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物を含む暗茶褐色粘質土、第Ⅶ層が炭化物を含む茶褐色砂質土、第Ⅷ層が白色粘土と褐色粘質土の互層、第Ⅸ層が褐色砂質土、第Ⅹ層が黄褐色粘土で、最下層及び第Ⅷ層からⅩ層にかけて砂の堆積が認められる。土砂の堆積は南側からが多く流入している。

ＳＵ－19・23・39・46（Fig. 28　PL. 5～7）

19　19は弥生時代中期のＳＤ－11によって切られる。北東側に16、西側に20の貯蔵穴がある位置関係にある。上面形状は不整形の円形を呈し、底面は隅丸方形を呈する。底面は平坦で、柱穴等はない。断面形状は台形を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸143cm×短軸125cm×深さ99cmを測る。**23**　23は台地の中央部のやや南側に位置し、22によって約1/3程度を切られている。形状は隅丸長方形を呈し、底面は平坦面を有し、柱穴等は検出できなかった。規模は、長軸132cm＋α×短軸110cm×深さ43cmを測る。**39**　39は台地中央部の西側に位置し、46を切る形で検出された。上面形状はやや不整形な隅丸長方形を呈し、底面形状は楕円形を呈し、底面は平坦である。柱穴は検出できなかった。出土遺物は土器片が出土したが、この土器がＳＵ－05出土の土器と接合した。この土器は縄文時代中期の阿高式土器であり、貯蔵穴の時期もこの土器の時期と考えられる。規模は、長軸224cm×短軸206cm×深さ105cmを測る。**46**　46は弥生時代中期のＳＤ－14によって切られ、また39によっても切られる。台地中央部の貯蔵穴が集中する西側に位置する。上面形状は不整形な円形を呈し、底面形状も同じ不整形な円形を呈する。底面は平坦で柱穴はない。断面形状は台形を呈する。規模は長軸270cm×短軸246cm×深さ128cmを測る。

ＳＵ－15・16（Fig. 29　PL. 5・8～10）

15　15は台地中央部の東側に位置し、弥生時代中期の環濠であるＳＤ－11によって切られている。上面形状は円形を呈し、底面形状も円形を呈するが、柱穴は検出できなかった。底面近くで平坦面をもつ。出土遺物は炭化物と底面近くから縄文時代後期初頭の土器（口縁部）が出土した。貯蔵穴の時期もこの土器の時期と考えられる。規模は長軸280cm×短軸275cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が茶褐色土、第Ⅱ層が砂、第Ⅲ層が黒班混じりの暗褐色土、第Ⅳ層が小石を含む褐色土、第Ⅴ層が小石を含む茶褐色土、第Ⅵ層が黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅶ層が炭化物・小石混じりの青灰色シルト、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が茶褐色粘質土、第Ⅹ層が褐色粘質土でドングリを含む、第Ⅺ層が黒褐色砂である。**16**　16は今回検出された貯蔵穴の中で平面的（約11m²）にも体積的（約17m³）にも最大である。15の南側、台地中央部の東側に位置し、弥生時代中期の環濠であるＳＤ－11によって約1/2を切られている。上面形状はやや不整形な円形を呈し、底面形状も円形を呈する。底面近くで平坦面を持ち、中央部に柱穴を持つ。断面形状は東側が垂直に立ち上がり、西側はやや傾斜をもって立ち上がる。断面土層を残した部分が中央部ではなかったため断面図は二ヵ所を切った。出土遺物は炭化物と土器が出土した。この土器から時期は縄文時代後期初頭の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸374cm×短軸374cm×深さ155cmを測る。これは今回検出された貯蔵穴の中で最大の規模である。柱穴の大きさは、13cm×13cm×深さ16cmを測る。土層は第Ⅰ層が弥生中期溝（ＳＤ－11）茶褐色土、第Ⅱ層が弥生中期溝（ＳＤ－11）褐色土、第Ⅱ層が炭化物・土器を包蔵する褐

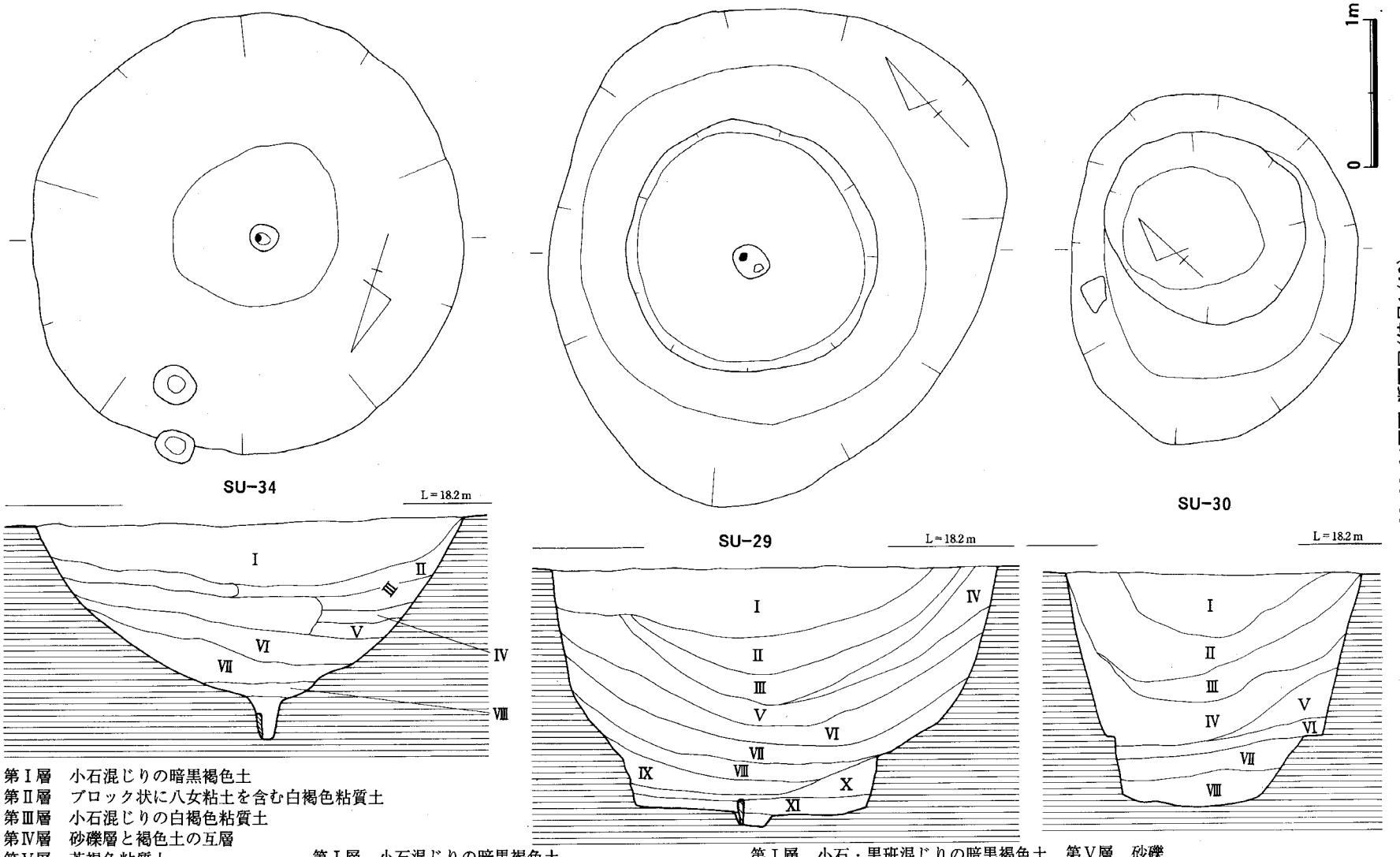


第Ⅰ層　小石混じりの暗褐色土
第Ⅱ層　暗褐色土
第Ⅲ層　黄褐色土
第Ⅳ層　砂を多く含む暗褐色砂質土
第Ⅴ層　砂
第Ⅵ層　暗褐色土
第Ⅶ層　暗黒褐色土
第Ⅷ層　暗黒灰色土
第Ⅸ層　荒砂を含む砂
第Ⅹ層　乳白色粘土のブロックを含む暗褐色土
第Ⅺ層　暗褐色土
第Ⅻ層　黄褐色粘質土
第XIII層　暗褐色粘質土
第XIV層　褐色粘質土
第XV層　褐色シルト
第XVI層　ドングリ等を多く含む青灰色粘質土
第XVII層　ドングリ等を多く含む砂

第Ⅰ層　明黄黒褐色土
第Ⅱ層　小石混じりの暗黒褐色土
第Ⅲ層　シルト質の暗黒褐色土
第Ⅳ層　暗褐色と明黄灰白色粘土のブロック
第Ⅴ層　明黄灰白色粘質土
第Ⅵ層　砂礫層
第Ⅶ層　暗黒褐色粘質土
第Ⅷ層　明褐色シルト
第Ⅸ層　砂礫
第Ⅹ層　黒褐色粘質土
第Ⅺ層　暗黒褐色粘質土
第Ⅻ層　砂礫

第Ⅰ層　小石・黒班混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　炭化物・遺物包蔵の暗褐色土
第Ⅲ層　明褐色粘質土
第Ⅳ層　褐色を呈する砂
第Ⅴ層　褐色土
第Ⅵ層　褐色粘質土

Fig. 31　SU−20・22・40平面・断面図(縮尺1/40)



第Ⅰ層　小石混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　ブロック状に八女粘土を含む白褐色粘質土
第Ⅲ層　小石混じりの白褐色粘質土
第Ⅳ層　砂礫層と褐色土の互層
第Ⅴ層　茶褐色粘質土
第Ⅵ層　砂礫
第Ⅶ層　明茶褐色粘質土
第Ⅷ層　ドングリ等を含む黒灰色粘質土

第Ⅰ層　小石混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　小石を含む明褐色土
第Ⅲ層　炭化物を含む褐色土
第Ⅳ層　明褐色シルト
第Ⅴ層　黄褐色粘質土
第Ⅵ層　暗褐色粘質土
第Ⅶ層　褐色粘質土
第Ⅷ層　粘質の強い暗褐色粘土
第Ⅸ層　一部粘土を狭む砂
第Ⅹ層　ドングリ等を包蔵する青灰白シルト
第Ⅺ層　ドングリ等を包蔵する青灰色粘質土

第Ⅰ層　小石・黒斑混じりの暗黒褐色土
第Ⅱ層　小石を含む褐色土
第Ⅲ層　砂を含む褐色粘質土
第Ⅳ層　炭化物・土器・ドングリを包蔵する暗褐色土
第Ⅴ層　砂礫
第Ⅵ層　粘質の強い暗灰褐色土
第Ⅶ層　砂を多く含む暗褐色土
第Ⅷ層　ドングリ等を含む粘質の強い暗灰褐色土

Fig. 32　SU—29・30・34平面・断面図（縮尺1/40）

色土、第Ⅳ層が褐色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む暗黒褐色粘質土、第Ⅵ層が灰白色粘質土、第Ⅶ層が褐色シルト、第Ⅷ層が暗褐色粘質土、第Ⅸ層が褐色シルト、第Ⅹ層が青灰色砂である。

ＳＵ－14・17・18（Fig. 30　PL. 5・7・8・10）

14　14は台地中央部の東側に位置し、北側に13、東側に15、西側に41の貯蔵穴に挟まれた位置にある。上面・底面形状は円形を呈し、上部の一部に段を有するが、断面形は台形状を呈し、立ち上がりはほぼ垂直である。出土遺物は炭化物だけで土器は出土しなかった。規模は長軸220cm×短軸185cm×深さ137cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黒班混じりの茶褐色土、第Ⅲ層が褐色粘質土、第Ⅳ層が茶褐色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む暗褐色土、第Ⅵ層が黄褐色粘質土、第Ⅶ層が灰褐色粘質土、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が小石混じりの茶褐色シルト、第Ⅹ層が砂、第Ⅺ層が砂と青灰色粘質土、第Ⅻ層が細砂である。**17**　17は南側に20、北西側に18、東側に16の貯蔵穴に挟まれた位置にある。上面・底面形状は円形を呈し、断面形は椀形で、立ち上がりは丸い。遺物は石器が出土した。規模は長軸215cm×短軸215cm×深さ85cmを測る。土層は単純で第Ⅰ層が小石・黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が明褐色土、第Ⅲ層が砂礫とシルトの互層、第Ⅳ層が暗黒褐色土と砂礫混である。**18**　18は台地の中央部に位置し、南西側に40、北側に38、北東側に41、南東側に17がある。上面・底面形状は円形を呈し、西側に段を有するが、東側は緩やかに立ち上がる。断面形はやや椀形を呈し、種子が出土した。規模は長軸295cm×短軸240cm×深さ118cmを測る。土層は下層にいくほど細かいが、緩やかに堆積していることから完全に埋没するまでには時間がかかったものと思われる。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黒班を含む暗黒褐色土、第Ⅲ層が褐色土、第Ⅳ層が暗褐色土、第Ⅴ層が黒班を含む暗褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色粘質土、第Ⅶ層が黒褐色粘質土でドングリを含む、第Ⅷ層が砂を含む褐色粘質土、第Ⅸ層が灰褐色シルトである。

ＳＵ－20・22・40（Fig. 31　PL. 5～7・9・11）

20　20は台地中央部よりやや南に位置し、弥生時代中期の環濠であるＳＤ－11に切られる。東側に19、西側に22、北側に40がある。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は椀形を呈する。南側はほぼ垂直に立ち上がるが、北側は緩やかである。出土遺物は石器・土器が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸264cm×短軸257cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が明黄黒褐色土、第Ⅱ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅲ層がシルト質の暗黒褐色土、第Ⅳ層が暗褐色と明黄灰白色粘土のブロック、第Ⅴ層が明黄灰白色粘質土、第Ⅵ層が上層砂礫、第Ⅶ層が暗黒褐色粘質土、第Ⅷ層が明褐色シルト、第Ⅸ層が砂礫、第Ⅹ層が黒褐色粘質土、第Ⅺ層が暗黒褐色粘質土、第Ⅻ層が砂礫である。**22**　22は台地中央部南側に位置し、北側に40、東側に20、南側に29があり23を切る形で検出した。上面・底面形状とも円形を呈し、断面形状は台形を呈する。底面は平坦面で、ほぼ垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配する。東西二ヶ所に底面からやや上方に平坦面を有する。出土遺物は土器が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸276cm×短軸252cm×深さ144cmを測る。土層は非常に急速に埋まった状況が観察される。特に第Ⅰ・Ⅱ層が他の貯蔵穴(例えば20・40)と埋まり方が異なる。第Ⅰ層が小石・黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が炭化物・遺物包蔵の暗褐色土、第Ⅲ層が明褐色粘質土、第Ⅳ層が褐色を呈する砂、第Ⅴ層が褐色土、第Ⅵ層が褐色粘質土である。柱穴の規模は16cm×16cmの丸い形状を呈し、深さ34cmと深い。**40**　40は台地中央部に位置し、北側に39、東側に18、南側に22・23に囲まれた位置から検出した。上面・底面形状とも円形を呈し、断面形状はやや台形を呈する。底面はやや丸味を持つ平坦面で、南側はやや傾斜を持ちながら立ちがり、北側は底面から緩やかに立ち上がり、一部に平坦面を有する。壁面は垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配し、

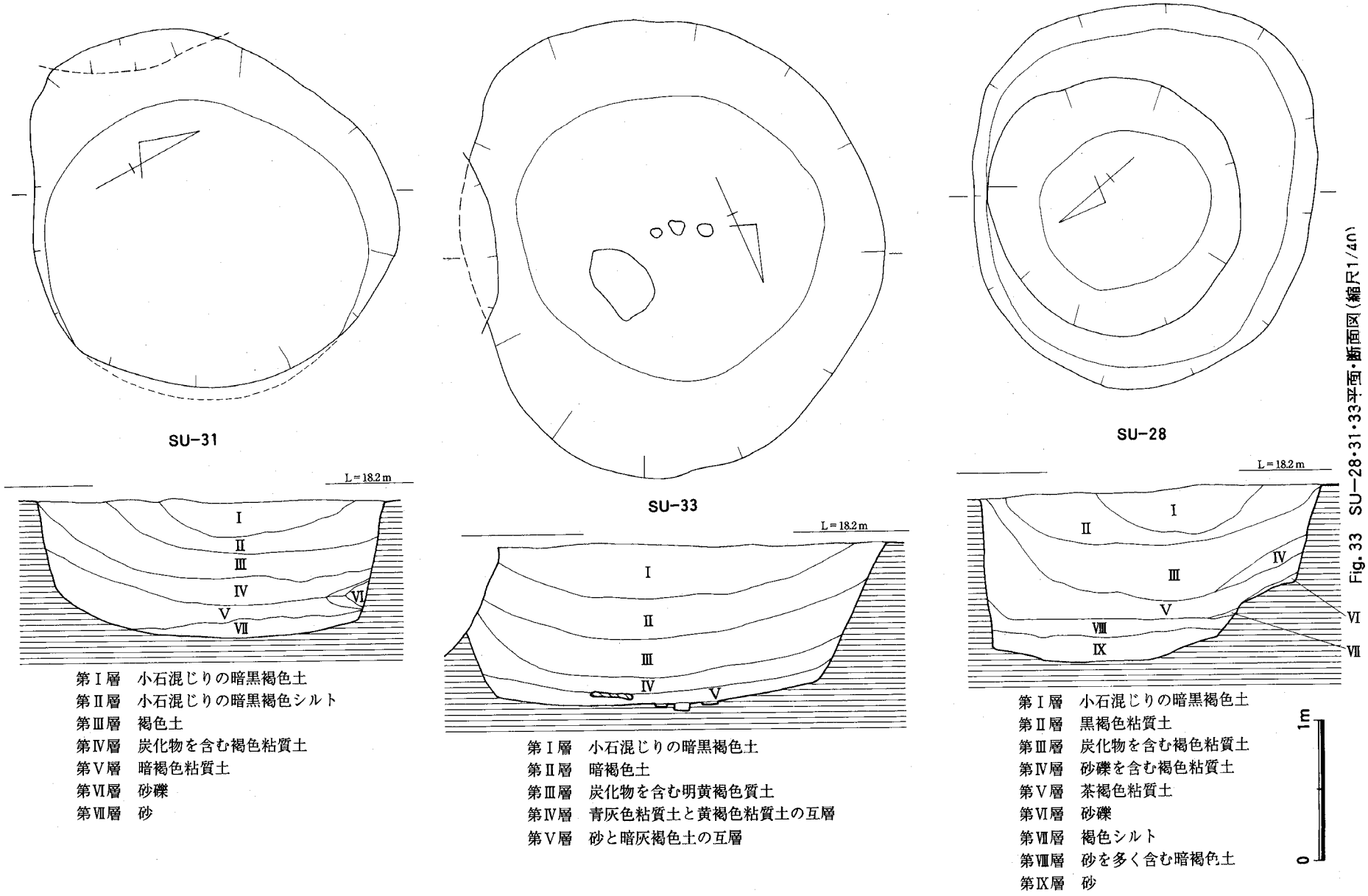


Fig. 33　SU−28・31・33平面・断面図(縮尺1/40)

柱痕が遺存していた。出土遺物は土器・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は今回検出された貯蔵穴の中で、平面的には３番目に大きく、体積では２番目に大きい。長軸357cm×短軸320cm×深さ160cmを測る。柱穴の大きさは長軸18cm×短軸13cm×深さ15cmで、柱の大きさは26cmの丸、長さ８cmで端部は平坦な仕上げである。土層は複雑で、第Ⅰ層が小石混じりの暗褐色土、第Ⅱ層が暗褐色土、第Ⅲ層が黄褐色土、第Ⅳ層が砂を多く含む暗褐色砂質土、第Ⅴ層が砂、第Ⅵ層が暗褐色土、第Ⅶ層が暗黒褐色土、第Ⅷ層が暗黒灰色土、第Ⅸ層が荒砂を含む砂、第Ⅹ層が乳白色粘土のブロックを含む暗褐色土、第Ⅺ層が暗褐色土、第Ⅻ層が黄褐色粘質土、第XIII層が暗褐色粘質土、第XIV層が褐色粘質土、第XV層が褐色シルト、第XVI層がドングリ等を多く含む青灰色粘質土、第XVII層がドングリ等を多く含む砂である。

ＳＵ－29・30・34（Fig. 32 PL. 5～11）

29　29は台地南側に位置し、北側に22、東側に26、南側に30、西側に34に囲まれた位置から検出した。上面形状は不整円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は上面が椀形、底面は台形を呈する。底面は平坦面で、東側は底面からすぐに垂直に立ち上がりやや平坦面を有しながら緩やかに立ち上がり、西側は底面から垂直に近い角度で立ち上がる。壁面はやや垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配し、柱痕が遺存していた。出土遺物は土器底部・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は今回検出された貯蔵穴の中で、平面的には５番目に大きく、体積では３番目に大きい。長軸345cm×短軸300cm×深さ172cmを測る。柱穴の大きさは長軸25cm×短軸23cm×深さ８cmで、柱の大きさは５cmの丸、長さ16cmで端部は平坦な仕上げである。土層は細かくいろんな土が入り込み埋まった時間が長時間であったことが窺える。第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が小石を含む明褐色土、第Ⅲ層が炭化物を含む褐色土、第Ⅳ層明褐色シルト、第Ⅴ層が黄褐色粘質土、第Ⅵ層が暗褐色粘質土、第Ⅶ層が褐色粘質土、第Ⅷ層が粘質の強い暗褐色粘土、第Ⅸ層が一部粘土を挟む砂、第Ⅹ層がドングリ等を包蔵する青灰白シルト、第ⅩⅠ層がドングリ等を包蔵する青灰色粘質土である。**30**　30は南側に位置し、北側に29、東側に28、南側に31・33に囲まれた位置から検出した。上面形状は不整円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。底面はやや丸味を持った平坦面で、両側に段を有し、西側は垂直に立ち上がり、東側は底面から緩やかな傾斜で段の部分に達し、平坦部分から垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸238cm×短軸197cm×深さ157cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石・黒斑混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が小石を含む褐色土、第Ⅲ層が砂を含む褐色粘質土、第Ⅳ層が炭化物・土器・ドングリを多量に包蔵する暗褐色土、第Ⅴ層が砂礫、第Ⅵ層が粘質の強い暗灰褐色土、第Ⅶ層が砂を多く含む暗褐色土、第Ⅷ層がドングリ等を含む粘質の強い暗灰褐色土である。**34**　34は台地南側に位置し、北側に23、東側に29、南側に33に囲まれた位置から検出した。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は椀状を呈する。底面中央部に柱穴がある。両面とも緩やかな傾斜を持つ。出土遺物は土器・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸300cm×短軸292cm×深さ145cmを測る。柱穴の大きさは、長軸20cm×短軸18cm×深さ27cmを測り、柱痕が僅かに確認できた。土層は第Ⅰ層が分厚く堆積しているが、これは台地南側でよく見られる状況で、ＳＵ－29・30等にも見られる。第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層がブロック状に八女粘土を含む白褐色粘質土、第Ⅲ層が小石混じりの白褐色粘質土、第Ⅳ層が砂礫層と褐色土の互層、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が砂礫、第Ⅶ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅷ層がドングリ等を含む黒灰色粘質土である。

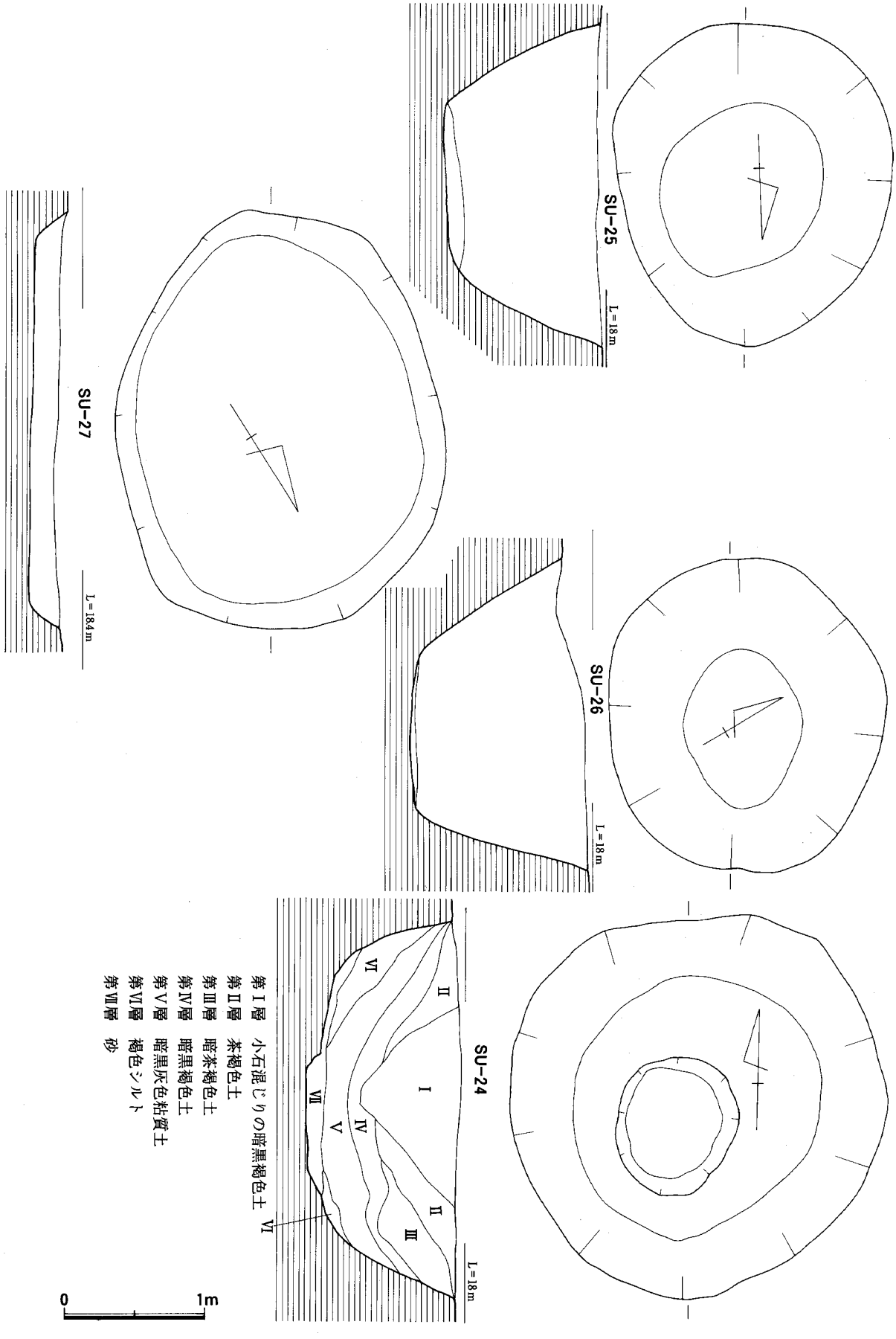


Fig. 34 SU—24～27平面・断面図(縮尺1/40)

ＳＵ－28・31・33（Fig. 33　PL. 5・7・9・10）

28　28は台地南側に位置し、北側に26、東側に27、西側に31・33、南側にはなく27・28・31・33が南限と考えられる位置から検出した。上面･底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。北北東側を除いて中間部に段を有する。底面はやや丸味を持った平坦面で、両側に段を有し、北北東側は垂直に立ち上がり、他は底面から緩やかな傾斜で段の部分に達し、平坦部分から垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸280cm×短軸247cm×深さ127cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が黒褐色粘質土、第Ⅲ層が炭化物を含む褐色粘質土、第Ⅳ層が砂礫を含む褐色粘質土、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が砂礫、第Ⅶ層が褐色シルト、第Ⅷ層が砂を多く含む暗褐色土、第Ⅸ層が砂である。**31**　31は33を切り、弥生時代中期の環濠に切られる形をとる。東側に28、西側に33、北側に30がある。上面形状は不整形の円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸264cm×短軸264cm×深さ96cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が小石混じりの暗黒褐色シルト、第Ⅲ層が褐色土、第Ⅳ層が炭化物を含む褐色粘質土、第Ⅴ層が暗褐色粘質土、第Ⅵ層が砂礫、第Ⅶ層が砂である。**33**　33は31と共に台地の最も南側に位置する部分から検出された。31との前後関係は31から切られることから33の方が古い。上面･底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈するが東側を31によって切られている。柱穴は小さく浅いものが三ヶ所一列に並んで検出された。出土遺物は土層断面にみられるごとく第Ⅴ層直上から土器・炭化物・加工材等が出土した。土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸333cm×短軸306cm×深さ120cmを測る。柱穴の大きさは10cm×10cm×深さ6cmと10cm×10cm×深さ6cm、10cm×10cm×深さ6cm。土層は単純で平均的に堆積している。第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が暗褐色土、第Ⅲ層が炭化物を含む明黄褐色質土、第Ⅳ層が青灰色粘質土と黄褐色粘質土の互層、第Ⅴ層が砂と暗灰褐色土の互層である。

ＳＵ－24～27（Fig. 34　PL. 5・7・10）

24　24は台地中央部東側から25と共に検出された。24と25は切り合い関係はないが非常に接近している。上面･底面形状は円形を呈し、断面形状は椀形を呈する。底面中央部に柱穴状の浅い掘込みがみられる。両側は緩やかに立ち上がるが、北側はやや垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴は中央部の窪みを柱穴としてとらえておきたい。規模は長軸100cm×短軸90cm×深さ10cmを測る。出土遺物はない。貯蔵穴の規模は長軸273cm×短軸271cm×深さ110cmを測る。土層は第Ⅰ層が中央部で椀状に堆積している。第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が茶褐色土、第Ⅲ層が暗茶褐色土、第Ⅳ層が暗黒褐色土、第Ⅴ層が暗黒灰色粘質土、第Ⅵ層が褐色シルト、第Ⅶ層が砂である。**25**　25は24に接近して検出された。上面･底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。両側とも緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等は出土していない。規模は長軸230cm×短軸200cm×深さ107cmを測る。土層はほぼ24と同じ層位を示す。

26　26は台地南側の29の東側、28の北側に位置し、弥生時代中期の環濠であるＳＤ－11によって切られている。上面･底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。西側は緩やかに立ち上がるが、東側はほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。底面は平坦で、柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等は出土していない。規模は長軸226cm×短軸200cm×深さ137cmを測る。土層はほぼ29と同じ層位を示す。**27**　27は28と近接している。ただ非常に浅く貯蔵穴とするには問題がある。浅いものとしてこの他にＳＵ－１～５・７があるが、これらは１m以上も削平された部分からの検出である。

これにたいして27は、近接して検出された28の深さが127cmもあり同レベルでの27が深さ25cmしかないことから貯蔵穴としての認定はできないが、調査時に番号を与えていたので、一応規模だけを記す。長軸304cm×短軸230cm×深さ25cmを測る。

出土遺物

縄文時代貯蔵穴からの出土遺物は、土器・石器・種子・材等であるが、その量は少量であった。そのため貯蔵穴の時期を決定する材料が乏しく切り合い関係、出土土器から判断した。

遺物が出土した貯蔵穴はＳＵ－02・05・08～11・13・15・16・20・22・28～36・38～41・43～46の二十八ヶ所から土器、ＳＵ－10・17・22・38・40から石器、柱痕及び建築材はＳＵ－9・30・33・35・40・42・44の七ヶ所から検出した。また種子は06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44の十三ヶ所から出土した。

（1）土　器（Fig. 35～37　PL. 23～25）

1（56001）　ＳＵ－05から出土した底部で、底面に草を編んだ(筵状圧痕か？)圧痕を有する底部である。一部分の圧痕で鯨底とも考えたが、粘土で圧痕を採ると草痕で有ることが判明した。平底で立ち上がりは丸みを持ち、緩やかに立ち上がり、その部分に指押圧痕を有する。胎土に赤色粒と3～5㎜大の石英・長石を多量に含み、色調は外面が一部赤褐色を呈する茶褐色、内面は褐色を呈する。縄文中期の大型鉢形土器の底部で、厚みがあり底径13.8cmを測る。**2（56002）**　ＳＵ－08から出土した鉢形土器の底部である。端部はシャープな造りで指押圧痕が認められ上げ底を呈する。胎土は2～3㎜程度の砂粒を含んでいる。色調は外面が赤褐色、内面が黒色を呈し、底径10.6cmを測る。**3（56010）**　ＳＵ－16から出土した鉢形土器の底部である。平底を呈し、底部の端部はシャープさに欠けている。端部からやや外反しながら立ち上がるものと思われる。胎土は2～5㎜程度の石英・長石粒を多く含み、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈し、底径9cmを測る。**4（56003）**　ＳＵ－11から出土した縄文時代中期の大型鉢形土器の底部片で、やや上げ底を呈する。端部の造りはシャープで、周縁部に指押圧痕が残る。底部端部から大きく外反しながら立ち上がる。調整は内外面とも僅かではあるが貝殻条痕が認められ、その後ナデ・指オサエを施している。胎土は1㎜前後の砂粒を多く含むが、精製された粘土を使用している。色調は外面が淡褐色、内面が黒褐色を呈し、底径13.5cmを測る。**5（56004）**　ＳＵ－11上部から出土した磨消縄文の浅鉢形土器の胴部と考えられる。二本の沈線を平行に引き、その間の縄目文様を残しもので、上部に沈線によりＵ字形の文様を三列配置する。形状は胴部で一度内に入るが、口縁部に向けて更に外反する形状を呈する。平行沈線部で復元径22cmを測る。胎土は精製された粘土を使用しており、1㎜程度の石英・長石等を多く含んでいる。色調は外面が淡褐色、内面が淡黒褐色を呈する。**6（56005）**　これもＳＵ－11から出土した鉢形土器の底部片である。細片のため詳細には明らかにしえないが、平底で、底部の端部を指押圧により整形している。底径12cmで、胎土は2～3㎜程度の砂粒を含んでいる。色調は外面が淡褐色、内面が淡黒褐色を呈する。**7（56006）**　ＳＵ－13から出土した鉢形土器の底部片である。やや上げ底を呈し、端部はシャープな造りである。一度内に入り、すぐに外反して胴部へつづく。底部端部外面に押圧痕を有し、胎土は2㎜前後の砂粒を多く含んでいる。色調は内外面とも赤褐色を呈するが、内面の一部に黒褐色が認められる。内面には篦による押さえ痕が残っている。**8（56009）**　ＳＵ－16から出土した鉢形土器の底部（浅鉢）片である。端部には指押圧痕が全面に認められ、内部にも指オサエが認められ、底径13cmを測る平底である。胎土は2～5㎜程度の長石粒を含み石英粒は少ない。色調は外面が濃い茶褐色、内面が褐色を呈する。

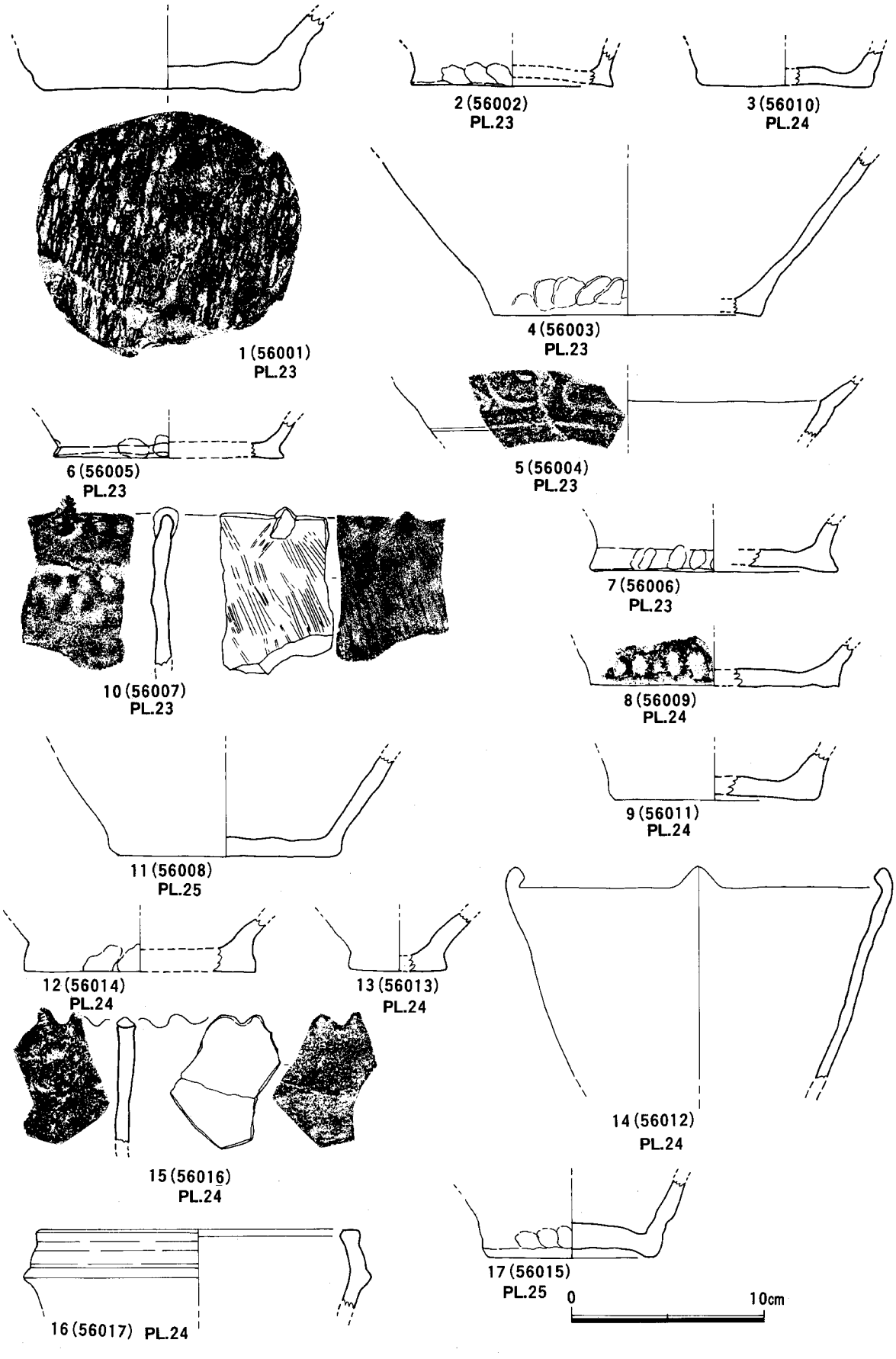


Fig. 35　V区出土遺物実測図—1（縮尺1/3）

9（56011） これもＳＵ－16から出土した鉢形土器の底部片で、端部は丸味をもつ。やや上げ底を呈し、内外面ともナデ仕上げを行っている。胎土は２～3㎜以下の砂粒・金雲母を含んでいる。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈する。底面は黒色に変色している。底径10.7㎝を測る。

10（56007） ＳＵ－15から出土した鉢形土器の口縁部である。口縁端部の内外面に山形状に粘土を貼り付け、山形口縁に仕上げている。調整は、外面が貝殻条痕を縦に施紋し、山形部分には斜目方向にナデを行っている。内面は指ナデ・オサエを口縁部下まで行っている。口縁端部は横ナデを施し、山形部分では横方向に流れる様なナデ方をしている。胎土は１～２㎜程度の砂粒を含む精製された粘土を使用している。色調は外面が暗赤褐色、内面が明るい赤褐色を呈する。時期は施文方法から縄文時代後期初頭に位置付けられる。**11（56008）** ＳＵ－15から出土した大型鉢形土器の底部片である。端部に部分的ではあるが、指押圧痕が認められ、平底を呈する。内面は基本的にはナデ仕上げであるが、一部に横方向の条痕や箆によるオサエ等が認められる。また、底部内面には指で強くナデの痕跡が認められる。胎土は２～５㎜程度の長石粒を多く含み石英粒は少ない。色調は外面が赤褐色と黒褐色、内面が黒褐色を呈し、底径12.3㎝を測る。

12（56014） ＳＵ－28から出土した鉢形土器の底部で、底径12.2㎝を測る。底部の端部は指押圧痕が多く残り、内外面ともナデ仕上げである。胎土は１～2㎜程度の長石粒を多く含み石英粒はない。色調は内外面とも褐色を呈するが、内面がやや黒ずんでいる。**13（56013）** これもＳＵ－28から出土したもので、小型の鉢形土器の底部片である。底径は5㎝と小さい。外面は貝殻条痕の後ナデ仕上げ、内面は表面剥落のため定かではないが、ナデ仕上げと思われる。底部はやや丸味を持ち、端部はやや中に入りその後大きく外反している。胎土は１～2㎜程度の長石粒を多く含み石英粒は少ない。また金雲母も僅かではあるが含む。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡暗黒褐色を呈する。

14（56012） ＳＵ－16から出土した山形口縁を呈する深鉢形土器で、胴部下位から底部は欠損している。四方向に山形を配し、山形部分が内側に入る形状を呈する。内部に爪か箆及び棒状工具によるオサエが施されている。外面は縦の条痕の後ナデ仕上げを施しており、内面はナデを施す。胎土は１～２㎜程度の長石粒を多く含み石英粒・金雲母も僅かに含んでいる。色調は外面が暗赤褐色を呈し、内面が淡褐色を呈するが、下面（下地）は黒色を呈することから淡褐色の粘土は化粧粘土と考えられる。

15（56016） ＳＵ－29から出土した鉢形土器の口縁部片である。口縁端部に棒状工具及び指による押圧がやや斜めから加えられ、波状口縁を形づくっている。この形態は阿高式土器の口縁部に数多く認められるものであるが、この15は滑石を全く含まないタイプである。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は1㎜大の砂粒を含む精製された粘土を使用している。色調は内外面とも暗褐色を呈する。**16（56017）** ＳＵ－32から出土した鉢形土器の口縁部である。胴部上位に突帯状の三角帯を巡らせ、その上部に二条の沈線を配する。口縁端部は平坦で、内側にやや引っ張る形状を呈する。口径17㎝を測り、調整は内外面とも表面剥落のため定かではない。胎土は１～2㎜程度の長石・石英粒を含み、また赤色粒を多く含む。色調は外面が暗赤褐色、内面が赤褐色を呈し、今回出土の土器の胎土とはまったく異なる土器である。**17（56015）** ＳＵ－29から出土した鉢形土器の底部である。底部の端部は丸く、周縁に指押圧痕が巡る。また底面の内・外側には、指ナデを強く施す。上げ底で底径8.5㎝を測る。胎土は２～5㎜程度の石英・長石粒を多く含み、一部金雲母も少量混じっている。色調は外面が赤褐色と暗褐色、内面が暗褐色を呈する。**18（56019）** ＳＵ－36から出土した鉢形土器の底部である。底面が丸みをもつためやや不安定である。底部の端部はやや丸みを持ち立ち上がるが、すぐに大きく外反しながら胴部に続くと思われる。調整は、表面剥落のため定かではないが、内面は指オサエによって整形している。胎土は２～5㎜程度の石英・長石粒を多く含む。色調は内外面とも褐

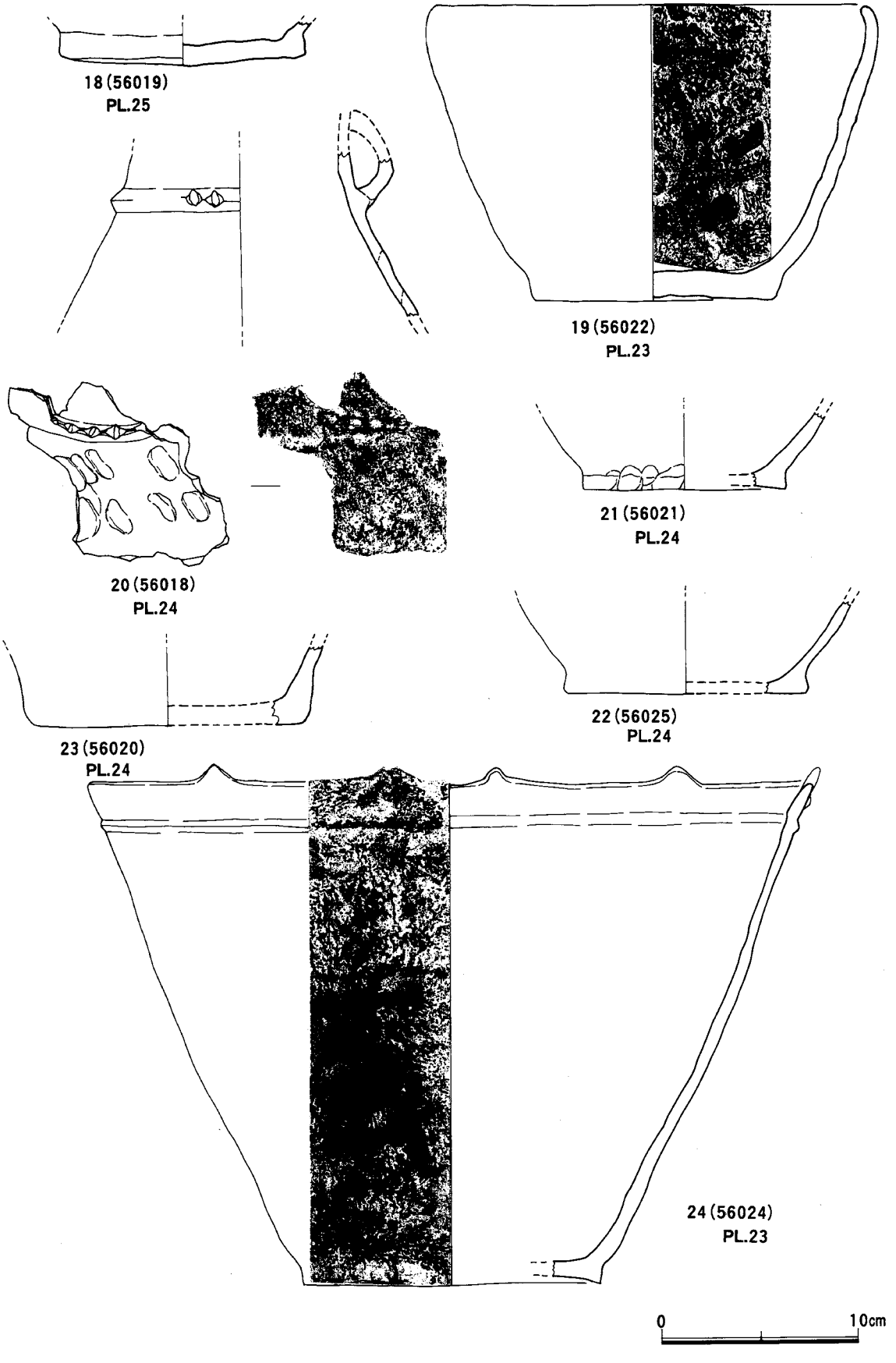


Fig. 36　V 区出土遺物実測図—2（縮尺1/3）

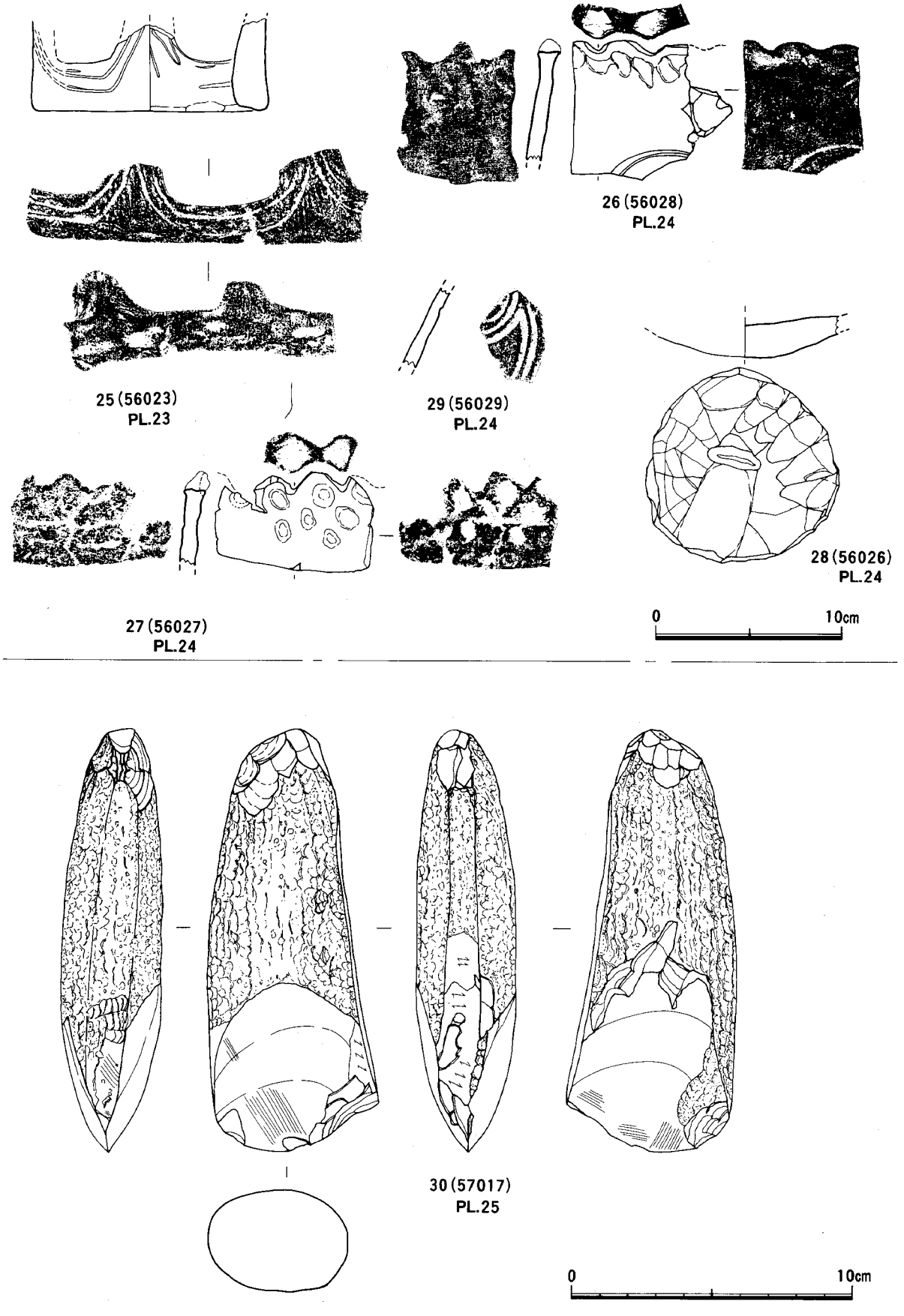


Fig. 37　V 区出土遺物実測図—3（縮尺1/2，1/3）

色を呈するが、内面の一部に黒褐色の部分がある。底径12.6cmを測る。**19（56022）** ＳＵ－43から出土した鉢形土器で、口径21cm、器高15.2cm、底径12.3cmを測る。底部はやや上げ底で、端部は指押圧痕が周縁部に多く残る。底部からやや外反しながらそのまま立ち上がり、口縁部では内に入り、口縁端部を丸く納めている。調整は、表面剥落のため定かではないが、内面は指オサエ及びナデ仕上げを行っている。胎土は２～5mm程度の砂粒を含み、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈する。中期の時期に比定できる。**20（56018）** ＳＵ－35から出土した把手付壷形土器の胴部片である。頸部に一条の突帯を巡らせ、その部分に棒状工具により刻目を施す。把手はその突帯から幅約2.3＋αcmで、上部に取り付けられている。突帯下部に指によるオサエが認められる。全体的にナデ仕上げを行っている。胎土は２～5mm程度の石英・長石粒を多く含む。色調は外面、内面とも黒褐色である。

21（56021） ＳＵ－43から出土した浅鉢形土器の底部で、底径10.5cmと小さくやや上げ底で、端部はシャープな造りである。周辺部に指押圧痕が多く残り，立ち上がりは大きく外反していくものと思われる。内外面ともナデ仕上げである。胎土は１～3mm程度の砂粒を多く含む。色調は外面が一部赤褐色で他は褐色を呈し、内面が茶褐色を呈する。**22（56025）** ＳＵ－45から出土した鉢形土器の底部で、平底を呈し、底径12.3cmを測る。底部の端部はやや丸みを持ち、一度内に入りその跡大きく外反する。器面は薄く仕上げている。調整は、内外面とも指オサエ及びナデ仕上げである。胎土は２～3mm程度の砂粒を僅かに含み、色調は外面が赤褐色、内面が一部赤褐色で他は茶褐色を呈する。

23（56020） ＳＵ－38から出土した阿高式土器の底部片である。胎土に多くの滑石を含むため、光沢のある色調を呈する。底部の端部は丸く仕上げられている。内外面ともナデ仕上げを行っている。胎土は滑石の他にはほとんど含まれていない。色調は光沢のある赤褐色を内外面とも呈する。底径14.7cmを測る。

24（56024） ＳＵ－44から出土した深鉢形土器である。口径37.5cm、器高26.6cm、底径15cmを測る。底部は上げ底で、端部の造りはシャープである。周辺部に指押圧痕が多く残る。口縁部には六つの山形を配し、その山形も平坦な口縁部に三角形を張り付けた程度のものである。口縁下には、三角形を呈する突帯を一条巡らせている。内外面に縦及び横方向の条痕が認められ、条痕のあとナデ仕上げを施している。胎土は１～2mm程度の砂粒を含む精製された粘土を使用し、器面を薄く仕上げている。色調は外面が黒褐色、内面の上部が黒班混じりの茶褐色を呈する。内部の一部に煤？の付着が認められる。この山形口縁土器は形状から縄文時代後期の磨消縄文土器の初期段階のものと考えられる。ただ内外面に貝殻条痕を施文する方法が残っていること、底部に指押圧痕が残ることから後期初頭に位置づけられる。**25（56023）** ＳＵ－９・44から出土した透かし入りの台座（器台状）状土器である。外面に二条の沈線を透かし部分に沿って描かれており、内面にも同じように二条の沈線を巡らすが、これは途中で切れている。一時は天地逆で、装飾のある土器とも考えたが、形状から台座状土器とした。調整は内外面とも指オサエ及びナデ仕上げを行っている。胎土は2mm前後の砂粒を多く含み金雲母も混入している。色調は外面が明黄茶褐色と明茶褐色を呈し、内面が暗茶褐色と一部黒班がある。底径14cmを測る。**26（56028）** ＳＵ－46から出土した阿高式土器の口縁部片である。口唇部に棒状工具及び指により凹凸をつくり波状口縁を造りだしている。口縁下には指によるオサエが認められる。また、胴部に沈線が弧状に描かれている。胎土は滑石を含むが、その他にも１mm前後の砂粒を含む。色調は滑石の量が少ないため外面が黒褐色、内面が褐色を呈する。**27（56027）** これもＳＵ－46から出土した阿高式土器の口縁部であるが、26とは別個体である。口唇部に棒状工具か指により凹部を造り、形状を波状口縁に仕上げている。口縁下にこれも指か棒状工具で列点文を三列配している。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は１～２mm前後の砂粒と滑石を多く含んでいるた

め光沢がある。色調は外面が赤褐色、内面が褐色で、表面が剥落しているため内部の地肌が認められるがこれは黒色を呈する。

28（56026） これもＳＵ－46から出土したもので、底部を再利用したメンコの未製品と考えられる底面に削り痕が認められ、周辺部にも加工が加わっている。胎土は滑石の粉末が多量に含んでいる。色調は内外面とも光沢のある赤褐色を呈する **29（56029）** これはＳＵ－46の上部から出土したものである。胴部片であるが、沈線により文様を構成している。この種の文様形態は本遺跡及び周辺遺跡には出土例がない。胎土は１～3㎜前後の砂粒を含むが、精製された粘土を使用。色調は内外面とも茶褐色。

（２）石　器（Fig. 37・38　PL．25）

石器はＳＵ－10・17・22・38・40から出土した。**30（57017）磨製石斧**　ＳＵ－10から出土した局部磨製石斧である。刃部のみに研磨が施され、他の部分は敲打面が残るが、これで完成品と考えられる。側面にも部分的に研磨が施されている。刃部が破損しているところから使用されていた可能性が高い。刃部を復元すると撥形の形状を呈し、頁岩を石材としている。重量は439.5ｇ、全長15㎝×幅5.8㎝×厚さ3.6㎝を測る。**31（57021）磨石**　ＳＵ－38から出土した玄武岩製の磨石である。周辺部には敲打痕が残るが、正面中央部には研磨痕がある。石斧の破損品を磨石に転用したものと考えられる。重量は2.4ｇ、全長3.2㎝×幅1.5㎝×厚さ1.1㎝を測る。**32（57019）凹石**　ＳＵ－１７から出土した花崗岩製の凹石である。表面は三個の凹面を有するが、裏面は一個の凹面である。凹面は表裏対象ではなく表面がやや右にずれている。左側辺部・上下側辺部に使用痕が認められる。重量は447.5ｇ、全長9.7㎝×幅8.3㎝×厚さ4.0㎝を測る。**33（57020）砥石**　ＳＵ－40から出土した粘板岩製の上下二面を砥石面として使用した砥石の破片である。**34（57018）剥片**　ＳＵ－22から出土した黒耀石製の剥片である。風化はやや進んでいる方でアメ色を呈する。

（３）柱　材（Fig. 38 PL. 25）

柱痕及び建築材はSU－09・33・35・40の四ヶ所から検出した。30・42・44からは材が出土している。

35（58013）ＳＵ－33から出土した柱材で約1/4は欠損している。全面に面取りを行っている。樹脂は不明。幅4.2㎝×厚さ4㎝×長さ7.4㎝を測る。**36（58014）**ＳＵ－35から出土した柱材である。芯持ち材の周辺部を加工して台形状に成形し、端部を片面から削り尖った部位を造る。出土状態は横位であった。樹脂は不明。幅5.8㎝×厚さ4㎝×長さ31㎝を測る。**37（58010）**ＳＵ－29から出土した柱材で、クヌギ材を約1/6・1/8に割ったものか、先端部だけ削り取ったものかは不明であるが、中心部の柱穴に建った柱材の一部である。幅6.4㎝×厚さ2.9㎝×長さ19.4㎝を測る。**38（58012）**ＳＵ－40の中央部の柱穴から出土した。端部を僅かに削り、先端部を造りだし、他は未加工である。樹脂は不明。径が8㎝×長さ19㎝を測る。**39（58011）**ＳＵ－30から出土したが柱材は検出されず、最下層から出土した。芯持ち材を加工し、先端部を尖らせている。樹脂は不明。幅5㎝×厚さ3.6㎝×長さ8㎝を測る。

この他に木材が出土した貯蔵穴は30から１片、35から２片、42から３片、44から９片である。

（４）種　子（PL. 26～28）

種子はＳＵ－06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44の十三ヶ所から出土した。種子同定をおこなっていないため定かではないが、その殆どがアラガシ・シラカシ？である。特に30からは多量に出土した。06からカシが141個体、08からは種々の種子が出土した。カシが216個体、ヘチマ？片２個、モモの種６個、椿の実８個・種子１個、エゴノミ182個、不明17個、09はカシが27個、11からカシ78個、エゴノミ93個、15からカシが16個、18から7個、29から39個、30から2,042個、34から182個、35から32個、40から385個、42から８個、44から997個のカシ類の種子が出土した。合計4,479個が出土した。

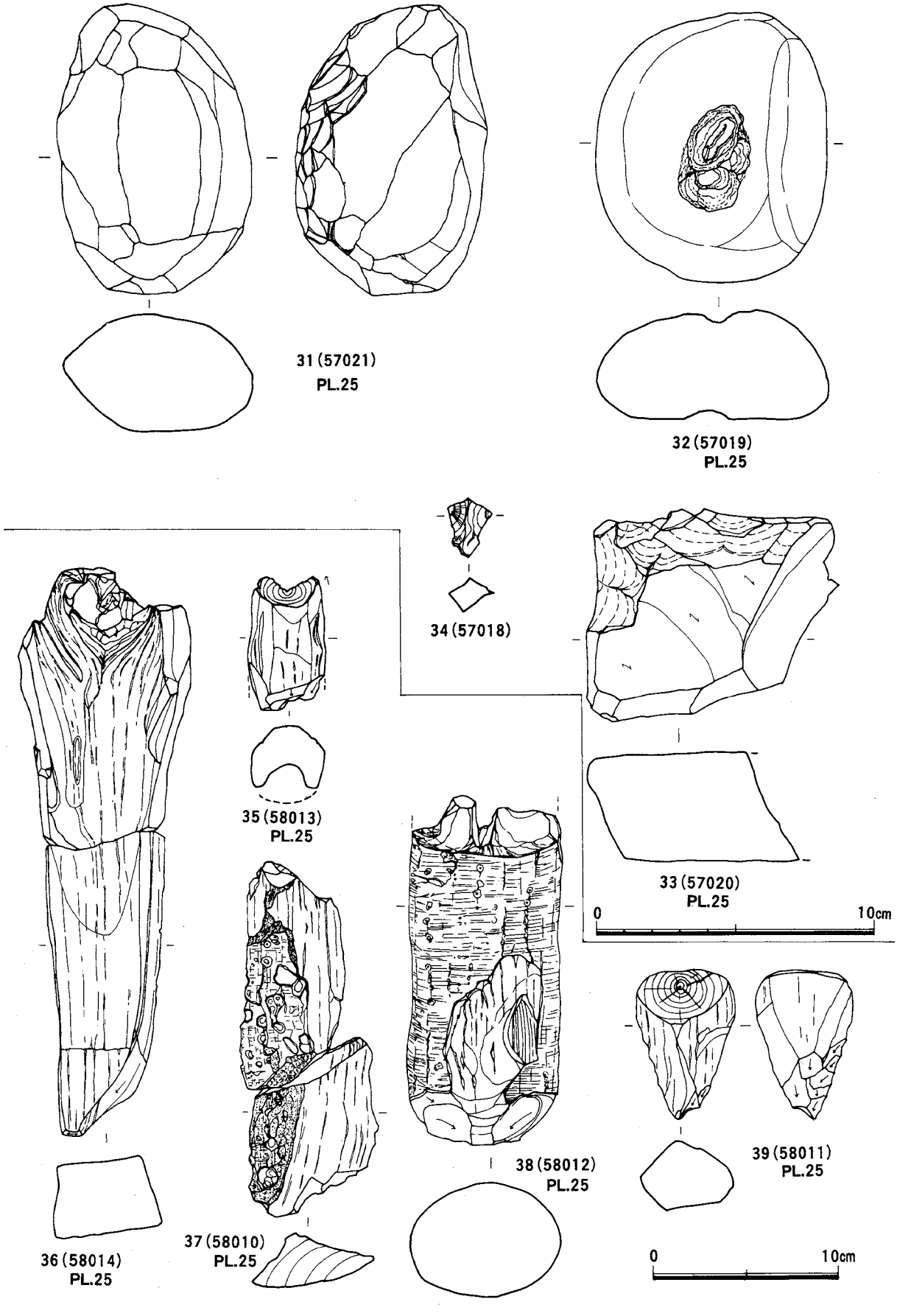


Fig. 38　V 区出土遺物実測図—4（縮尺1/2,1/3）

Tab. 2　吉武遺跡２次Ｖ区検出貯蔵穴一覧

（単位：cm）

番　号	規模　長×幅×深	柱穴の有無	柱の有無	出土遺物の有無	備　考	Fig.	PL.
SU−01	154×140×50	無			削平されている	21	
02	125×80+×80	無		土器底部		21	
03	150×135+×24	無			04に切られ、削平	21	
04	170×165×19	無			削平されている	21	
05	185×170×15	無		土器底部	削平が著しい	21	
06	226×200×146	有26×20×12			ドングリ・炭化物	22	6
07	175×170×8	無			削平が著しい	21	
08	253×248×80	無		弥生土器混入	炭化物・種子	22	6・8
09	300×296×122	無	無	土器SU−44と接合	ドングリ・柱材	22	6・8・9
10	265×226×85	無		土器・石器		25	9
11	320×293×125	有13×13×9		土器口縁	炭化物・種子	25	6・10
12	260×255×123	無				26	9
13	245×208×145	有30×35×15		土器底部		25	6・10
14	220×185×137	無			炭化物	30	8・10
15	280×275×105	無		土器口縁	炭化物・種子	29	8・10
16	374×374×155	有13×13×16		土器・炭化物	弥生SD−11に切断	29	8・9
17	215×215×85	無		石器		30	8
18	295×240×118	無			種子	30	7・9
19	143×125×99	無			SD−11に切られる	28	7
20	264×257×105	無		土器・石器	SD−11に切られる	31	6・7・9
21	250×220×24	無			削平が著しい	24	
22	276×252×144	有16×16×34		土器・石器	23を切る	31	6・9
23	132+α×110×43	無			22に切られる	28	6
24	273×271×110	有100×90×10				34	6・10
25	230×200×107	無				34	7
26	226×200×137	無				34	5
27	304×230×25	無				34	5
28	280×247×127	無		土器底部	炭化物	33	9
29	345×300×172	有25×23×8	有5×16	土器底部	ドングリ	32	6・8〜10
30	238×197×157	有	有	土器深鉢	炭化物・木材・種子	32	6・7・9
31	264×264×96	無		土器	炭化物・33を切る	33	7・10
32	210×200×108	無		土器口縁	炭化物	26	6・9
33	333×306×120	有10×10×6		土器	炭化物・柱材	33	5
34	300×292×145	有20×18×27		土器	ドングリ	32	7・10
35	278×227×132	無		土器鉢	炭化材・柱材・種子	26	5
36	280×250×125	有18×18×16		土器底部	12・37に切られる	24	5
37	170×150×95	無			炭化物、36を切る	27	9
38	250×230×105	無		土器底部・石器		27	7・9
39	224×206×105	無		土器SU−05と接合	46を切る	28	5
40	357×320×160	有18×13×15	26の丸×8	土器・石器	ドングリ・柱材	31	5
41	233×230×112	有25×25×15		土器	炭化物	27	5
42	286×250×117	無			木材・種子	24	5
43	393×335×118	有13×13×24		土器底部		23	5
44	335×327×98	無	無	土器SU−09と接合	炭化物・種子	23	10
45	255×230×101	有10×10×15		土器		21	5
46	270×246×128	無	無	土器	SD−14に切られる	28	5

2．第二次調査Ⅴ区　－奈良時代以降の調査－

ＳＸ（不整形土壙）と埋甕

不整形土壙（ＳＸ－01）　（Fig. 39 ）

不整形土壙ＳＸ－01は調査区の東側段落ち部に位置し、ほぼ半分は調査区外であったためその全容は不明である。詳細は不明であるが、形状は不整形な楕円を呈し、緩やかな傾斜をもち中央部で一段下がり、再度上がる。さらに緩やかに下がり、後は平坦面となる。土層はⅠ層　黄褐色土ブロックが入る暗褐色土で上部全体を厚く覆う　Ⅱ層　ブロックで黄褐色土が入る暗褐色砂質土Ⅲ層　中央部に見られる層で黒褐色シルト　Ⅳ層　これも中央部に見られる層で黒灰色シルト　Ⅴ層　黒褐色砂質土　Ⅵ層　Ⅱ層下に見られる層で黄褐色土　Ⅶ層　暗褐色土でこれもⅡ層下に見られる層である。Ⅷ層　Ⅴ層下に見られるブロック状に入る層で黒色土　Ⅸ層　Ⅳ層下に見られる層で砂が堆積する　Ⅹ層　Ⅸ層砂の下に凹み状に堆積した黒色土でⅧ層と同じ土質である。

出土遺物は埋甕の破片が第Ⅹ層から出土していることから埋甕と同時期の平安時代以降に属するものと思われる。

埋甕（ＳＸ－02）（Fig. 39）

調査区東側に１基だけまったく切り合い関係が無く検出された。上部約2/3は削平され、約25cmしか遺存していない。おそらく80cm以上ある埋甕と考えられる。底部を打ち欠き、打ち欠いた部分（底部を除く）を底面中央部に４個配置する。掘方の大きさは60cmの円形を呈し、埋甕の上部径は45cm、底面径は32cm、高さ22cmである。当初井戸とも考えたが、涌水地点がかなり下であり水を貯める施設としても底部が打ち欠かれていることから井戸ではなく、埋甕の可能性が高い。しかしながら古代に埋甕は一般的ではないことから判断に苦しんだが、一応形状から埋甕としておく。

Fig. 39に埋甕（823459002）を図示した。瓦質土器で内外面とも荒い横・斜めの刷毛目を施すが、全体的に表面が剥落している。

第三節　第二次調査Ⅵ区　－奈良時代以降の調査－

溝　（Fig. 40 ）

Ⅵ区はⅤ区の続きでⅤ区の弥生時代の溝ＳＤ－10・12～14と柱穴群が検出されたが、ＳＤ－10・12を切る形でN-1°-Wの方向を持つＳＤ－20が検出された。南北の長さ33m、幅は南側で3.3m、北側で2.1m、深さ0.5～0.6m、底面は幅1.5～2.6mを測り台形状を呈し、ほぼ水平であるがやや南側が深く、形状からも水は北から南に流れる様相を示していた。調査区の南側・北側は調査区外であったため確認できなかったが、恐らく区割溝と考えられる。また現在の用水路からほぼ２m西にずれ平行に確認されていることから条里制の境溝の可能性が考えられる。早良区の条里は、佐賀大学日野先生によると単一条里区からなり、その南北基区軸線の方向は国土地理院座標軸北から7°20′西に偏しているとのことで、国土地理院磁針方位は西偏約6°20′であり、これを加算すると今回検出された溝は条里制の区割境溝に載ることになる。しかしながら、市道田・飯盛線の調査では検出されていないし、南北線・東西線がⅦ～Ⅸ区でも検出されていない。おそらく現在の溝に載るものと考えられる。

これが田村遺跡（1985年田村遺跡３・田村遺跡５　福岡市教育委員会）のような里境溝になるのか、坪割溝になるか（幅5m、長さ150m、深さ2.5mの台形状を呈する里境と西に108mの地点に坪境溝２m、長さ100m、深さ1.5mの台形状を呈する坪境溝が検出されている）は不明であるが、地図上で復元していくと里境ではなく、坪境と考えられ、遺跡の状況からも周辺部の削平はせいぜい１m程度と考えられることから復元すると幅３～3.5m、深さ1.5m程度で田村遺跡の区割溝と同規模であ

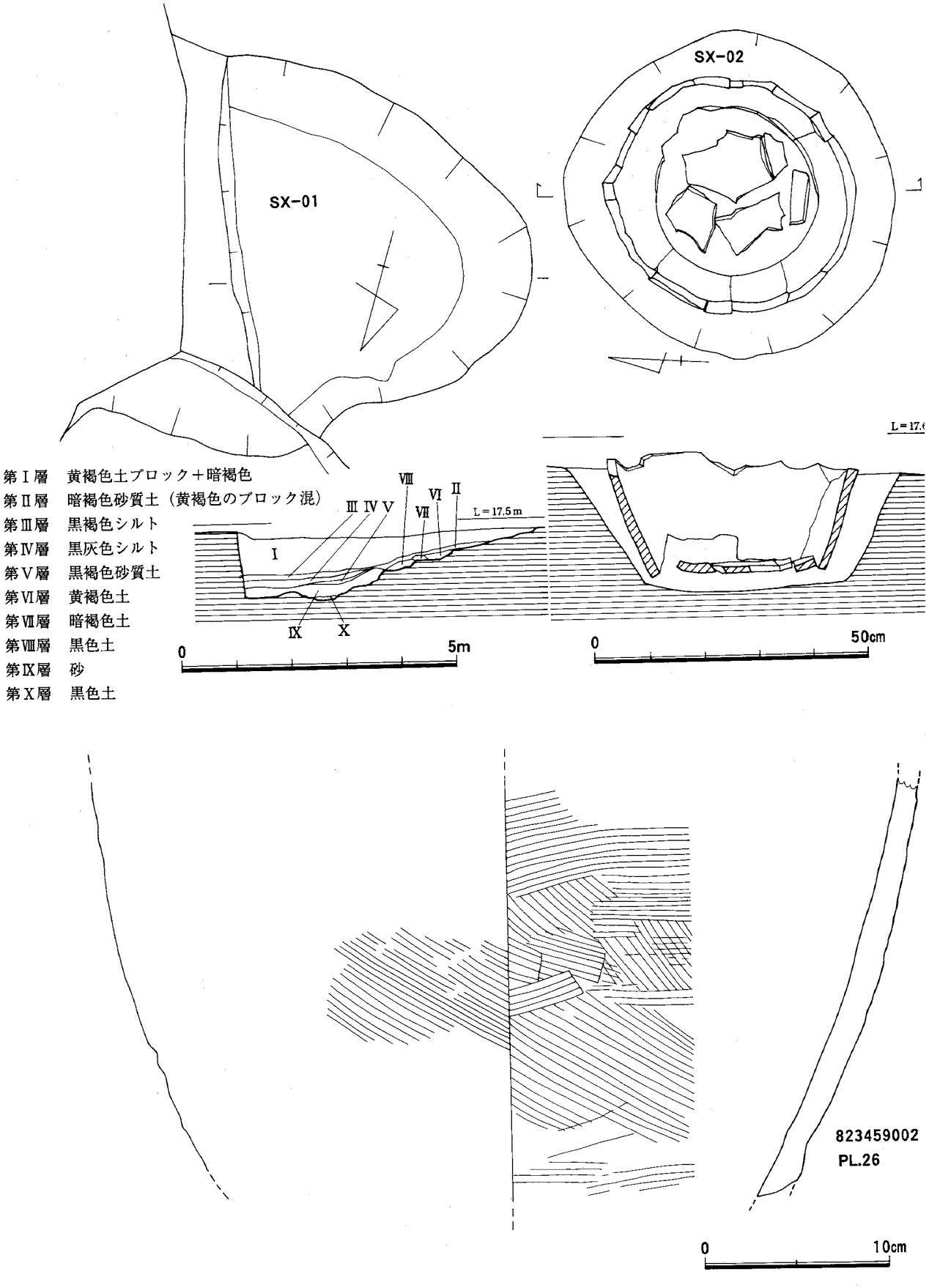


Fig. 39　第2次調査Ⅴ区土壙平面・断面図（縮尺1/3,1/10,1/100）

り、里境溝ではなく、坪境溝の可能性が高い。

この他、時期的には様々であるが、早良地区には免遺跡(1985年　福岡市教育委員会)、橋本榎田遺跡(1985年　福岡市教育委員会)、入部遺跡(1985年入部遺跡3・入部遺跡5　福岡市教育委員会)から条里制に伴う区割溝が検出されている。

今回検出されたＳＤ－20からは図示できる出土遺物はない。時期を確定できないが、細片から奈良～平安時代にかけての時期と考えられる。

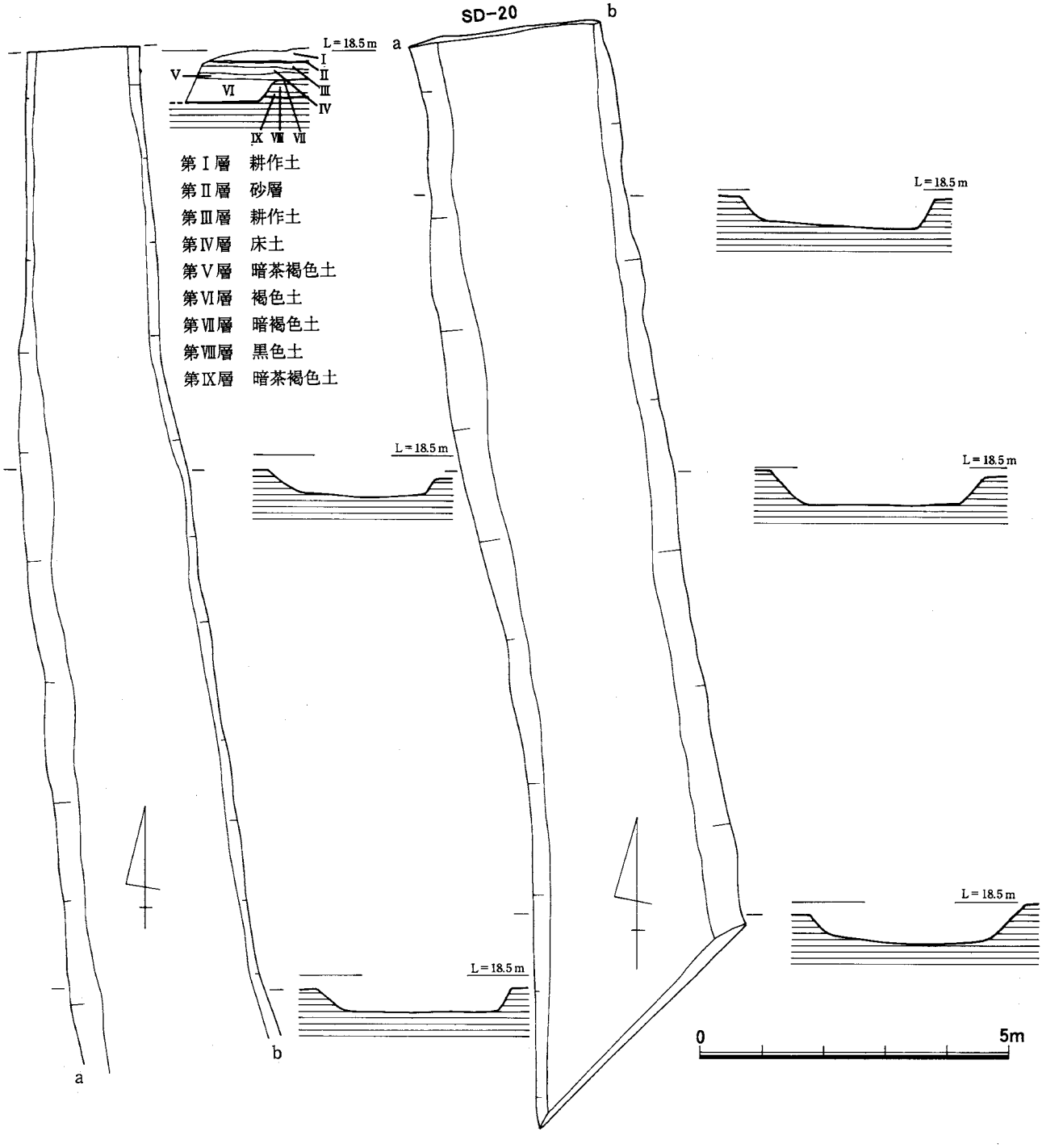


Fig. 40　第2次調査Ⅵ区溝平面・断面図(縮尺1/100)

第四節　第二次調査Ⅶ区　－奈良時代以降の調査－

Ⅶ区からは弥生時代の遺構（甕・溝・掘立柱建物）が検出されたが、この他平安時代の溝、水田の配・排水施設、畦畔状遺構、ＳＸ等が検出された。図版のPL. 29の種子は弥生時代SD－06（15）から出土。

溝　（Fig. 41・42　PL. 12・13）

溝状遺構は３条検出された。ＳＤ－02は調査区の西側に位置し、南北に流れN-26°-Wの方向をとる。確認された長さは43m、幅3.5m、深さは南側で1.2m・北側で1.2mである。底面標高から水の流れは北から南に流れることが判明した。この溝に流れ込む３条の排水・止水溝が検出された。第１排水・止水溝にはＳＤ－02に13本の杭が打ち込まれていた。出土遺物から平安時代の溝と考えれる。ただ条里制の溝とは異なり、条里制の区画溝はこの溝から西に現在の排水溝が南北に走っていることから、おそらくこの溝が条里制の溝と合致するものと思われる。この溝から波及した溝がこのSD－02であろう。

ＳＤ－０４は調査区の南西に位置し、南から西に孤を描きながら調査区外に延びている。現在長は9m、幅4.4m、深さ0.6mを測るが、時期は出土遺物がないため不明である。

ＳＤ－03は調査区の西側から検出された。細い溝でN-20°-Eの方向をとる。確認された長さは８m、幅0.6m、深さは1.1mである。この溝も出土遺物がないため時期を確定できない。

排水・止水溝　（Fig. 42・43　PL. 12）

ＳＤ－02から３条の排水・止水溝が検出された。北側から第１溝、第２溝、第３溝とした。第１溝はＳＤ－02に孤を描きながら８本の杭が打ち込まれ水の調整施設を造っている。またここにはＳＤ－02の対岸に南北に２条の杭列を造り計３条の杭列を施す。これによって本流のＳＤ－02の水を調整したものと思われる。第２溝は第１溝より1.2m南に位置する。東西溝でＳＤ－02に流れ込む形状を呈し、長さ6.5m、幅1.5m、深さ0.25mを測る。第３溝は第２より15m南に位置する。東西溝でＳＤ－02に流れ込み長さ5.5m、幅1.5m、深さ0.4mを測る。この他にも２と３溝の間に３条の溝状遺構らしきものがある。第３溝の対岸にも溝を検出した。

ＳＸ（不整形土壙）（Fig. 43　PL. 12）

不整形土壙は第３溝西側に集中して検出された。この他にＳＤ－04南側にＳＸ－103がある。

ＳＺ－100　ＳＺ－101・2・3の南側に位置し、円形を呈し、径1.5m、深さ0.3mを測る。

ＳＺ－101　ＳＺ－102を切る形で検出された。不整形な円形を呈し、長さ2.2m、幅1.8m、深さ0.2mを測る。**ＳＺ－102**　ＳＺ－101から切られる形で検出された。楕円形を呈し、長さ2.75m、幅1m、深さ0.22mを測る。**ＳＺ－103**　ＳＺ－101の西側で101に接するように検出された。楕円形を呈し、長さ1.8m、幅1.15m、深さ0.22mを測る。**ＳＺ－104**　ＳＤ－04の南側で検出された。円形を呈し、径0.9m、深さ0.42mを測る。**ＳＸ－100**　第３溝の延長上に位置する細長い形状を呈する。溝の深い部分だけが残ったと思われる。長さ3.1m、幅0.8m、深さ0.35mを測る。**ＳＸ－101**　これも二又になる形状を呈する。長さ3.7m、幅0.7m、深さ0.14mを測る。**ＳＸ－102**　これも同様で、長さ2.8m、幅1m、深さ0.18mを測る。**ＳＸ－103**　ＳＤ－04の南側から検出されたが、半分は調査区外で詳細は不明。すべて遺物は出土しなかった。

出土遺物　（Fig. 42　PL. 29）

出土遺物のうち図示できたものは木製品だけである。他の溝出土の土器は細片か胴部のみで図示できるものはない。**1**　木製の人形（人方）と思われる。はじめは荷札木簡とも思ったが、表面が荒れ文字の痕跡が見当たらないため形状から人形とした。**2**　木製の漆塗り椀である。底部付近しか遺存しない。内外面とも黒漆であるが、内面底部に赤漆で文様を記している。**3**　第１溝に打ち込まれていた杭である。材を３分１に半裁し杭としている。１・２とも第１溝とＳＤ－02との境で出土した。

Fig. 41　第2次調査Ⅶ区検出遺構実測図（縮尺1/300）

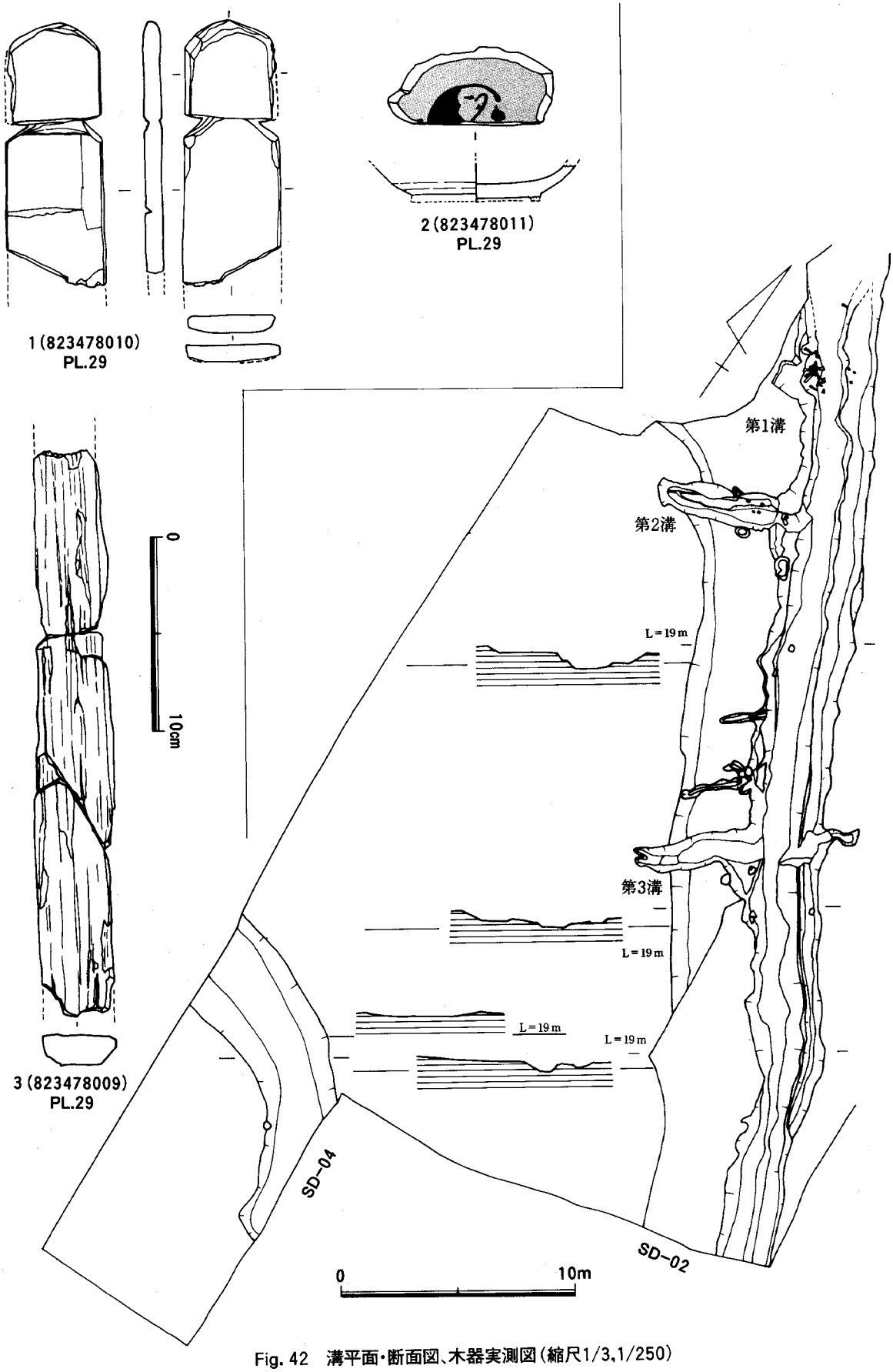


Fig. 42　溝平面・断面図、木器実測図(縮尺1/3,1/250)

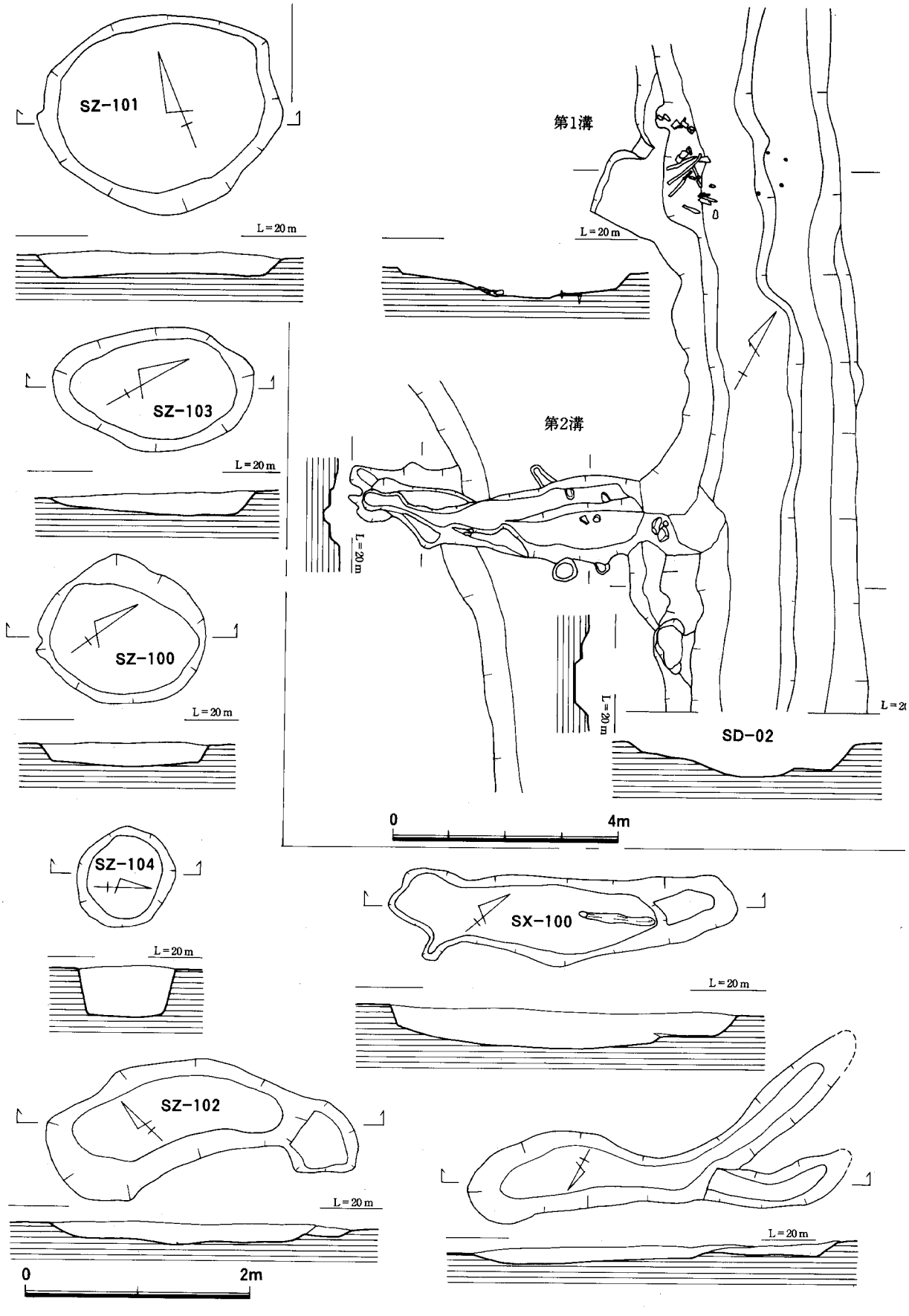


Fig. 43　溝・畦畔状遺構実測図（縮尺1/50,1/100）

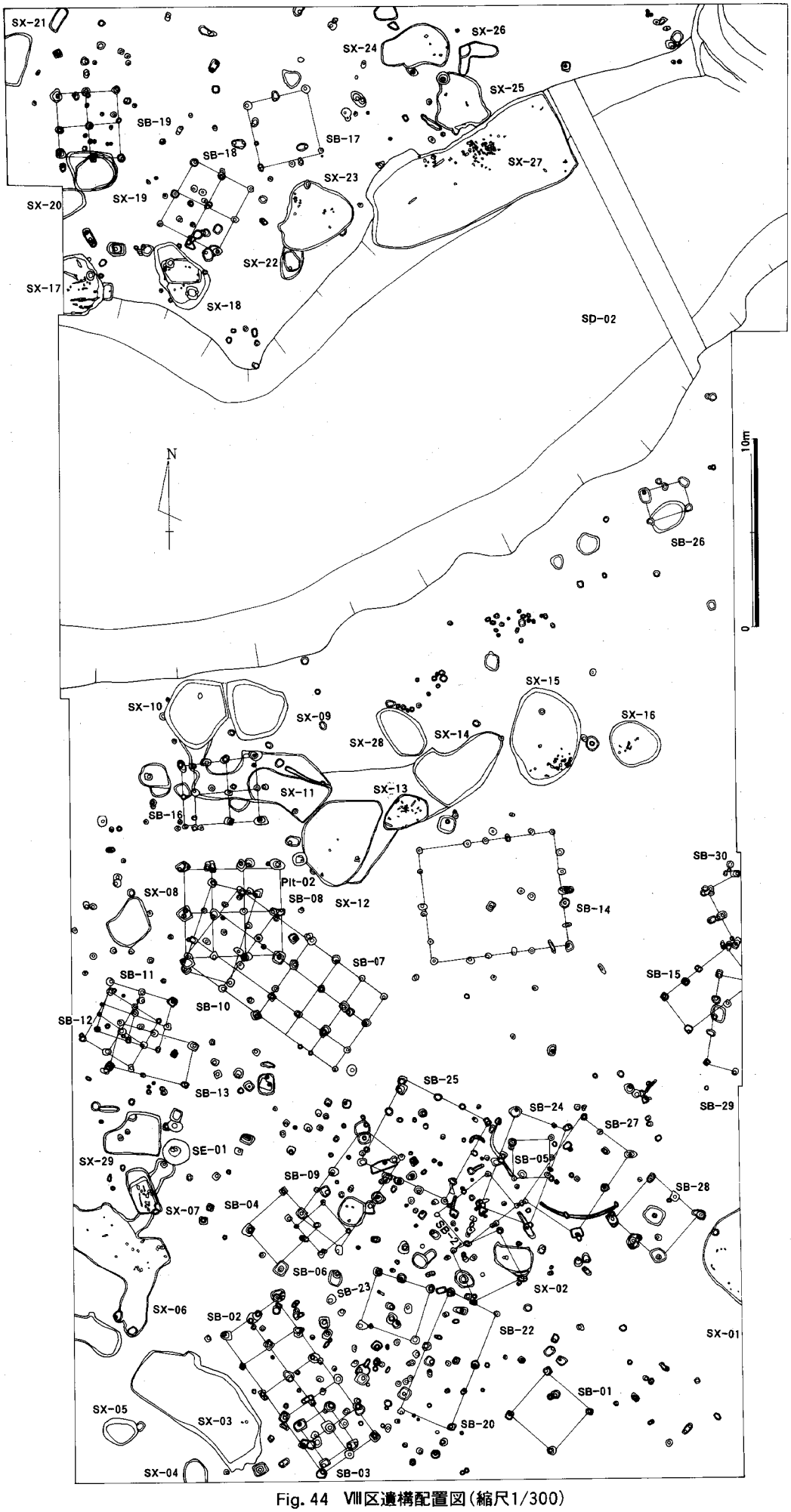


Fig. 44 Ⅷ区遺構配置図(縮尺1/300)

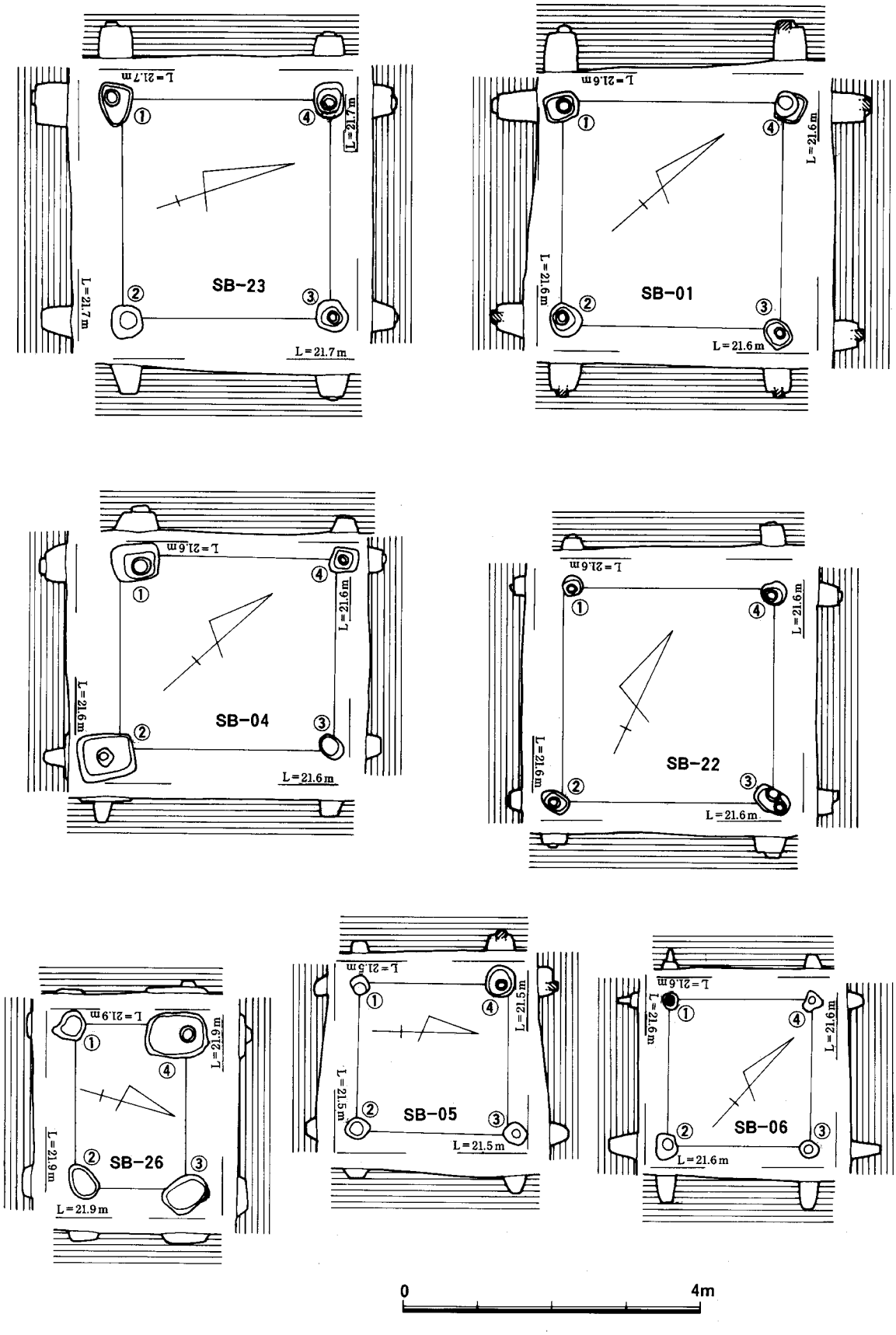


Fig. 45 Ⅷ区掘立柱建物実測図—1（縮尺1/80）

第五節　第二次調査Ⅷ区　－古墳時代の遺構－

検出遺構

Ⅷ区はⅨ区の南側・市道田・飯盛線の南側に位置した約2,800㎡を調査した。北側に弥生時代の大溝であるＳＤ－02が幅20mで北東から南西に流れるが、古墳時代には幅１m程度の溝となって流れている。このＳＤ－02を境としてⅧ区には弥生時代の遺構は検出されなかった。Ⅷ区で検出された遺構は掘立柱建物30棟、井戸状遺構１基、不整形土壙29基、溝状遺構２条である。

掘立柱建物（Fig. 45～51　Tab. 6～8　PL. 13～16）

Ⅷ区より検出された掘立柱建物は30棟であるが、このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱痕内から出土したものを基準としているため、時期が多少下がる可能性がある。建物の内、１間×１間も図示したが、削平が著しいため住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はＳＢ－01からを掘立柱建物の番号としている。

１間×１間の掘立柱建物（Fig. 45　Tab. 6～8　PL. 13・14・16）

１間×１間の掘立柱建物は７棟検出された。**ＳＢ－01**　調査区南端から検出され、切り合い関係はない。桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 4に表示しているが、柱穴の形状は長方形・方形であり、掘方自体は深く柱痕が３ヶ所から検出された。柱穴通番号②は径が15cm、長さ10cm③は径が12cm、長さ10cm④は径が18cm、長さ15cmである。主軸は北東－南西、長軸方向はN-48°30′-Wである。規模は2.95m×3.05mで、床面積9.0㎡を測る。**ＳＢ－04**　調査区南側から検出され、ＳＢ－06・09と切り合い関係がある。柱穴の形状は③を除いて他は方形であり、二段掘りで深い。主軸は北東－南西、長軸方向はN-42°-Eである。規模は2.9m×2.6mで、床面積7.54㎡を測る。

ＳＢ－05　調査区南側中央から検出され、ＳＢ－24・27との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、主軸は東－西、長軸方向はN-90°-Wである。規模は2.0m×2.0mで、床面積4㎡を測る。

ＳＢ－06　調査区南側中央から検出され、ＳＢ－04・09との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・不整形であり、柱穴通番号④から径が15cm、長さ10cmの柱痕が検出されている。主軸は南東－北西、長軸方向はN-41°-Wである。規模は1.9m×2.0mで、床面積3.8㎡を測る。**ＳＢ－22**　調査区南側中央から検出され、ＳＢ－20・21と接し、ＳＸ－02との間に切り合い関係がある。柱穴の形状はほぼ円形であり、二段掘されている。主軸は北西－南東、長軸方向はN-25°-Wである。規模は2.85m×2.9mで、床面積8.26㎡を測る。**ＳＢ－23**　調査区南側から検出され、ＳＢ－20と接する。柱穴の形状は方形であり、殆どが二段掘りをおこなっているが、②だけが一段掘りである。主軸は南東－北西、長軸方向はN-75°-Wである。規模は2.8m×3.0mで、床面積8.4㎡を測る。

ＳＢ－26　調査区北側東端から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は長方形であり、主軸は北東－南西、長軸方向はN-74°-Eである。規模は2.25m×1.5mで、床面積3.38㎡を測る。

１間×２間の掘立柱建物（Fig. 46・47　Tab. 6～8　PL. 13～16）

１間×２間の掘立柱建物は９棟検出された。**ＳＢ－24**　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－05・21・27と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・長方形であるが、削平が著しい。桁行の③と⑥がやや中に入る形状を呈するが、この種の類例は田村遺跡群（1985年　福岡市教育委員会刊　田村遺跡群３）にある。主軸は北東－南西、長軸方向はN-22°-Eである。規模は2.8m×5.5mで、床面積15.4㎡を測る。**ＳＢ－13**　調査区西側中央部から検出され、ＳＢ－11・12と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、桁行の②と⑤がやや中に入る形状を呈する。主軸は北西－南東、長軸方向

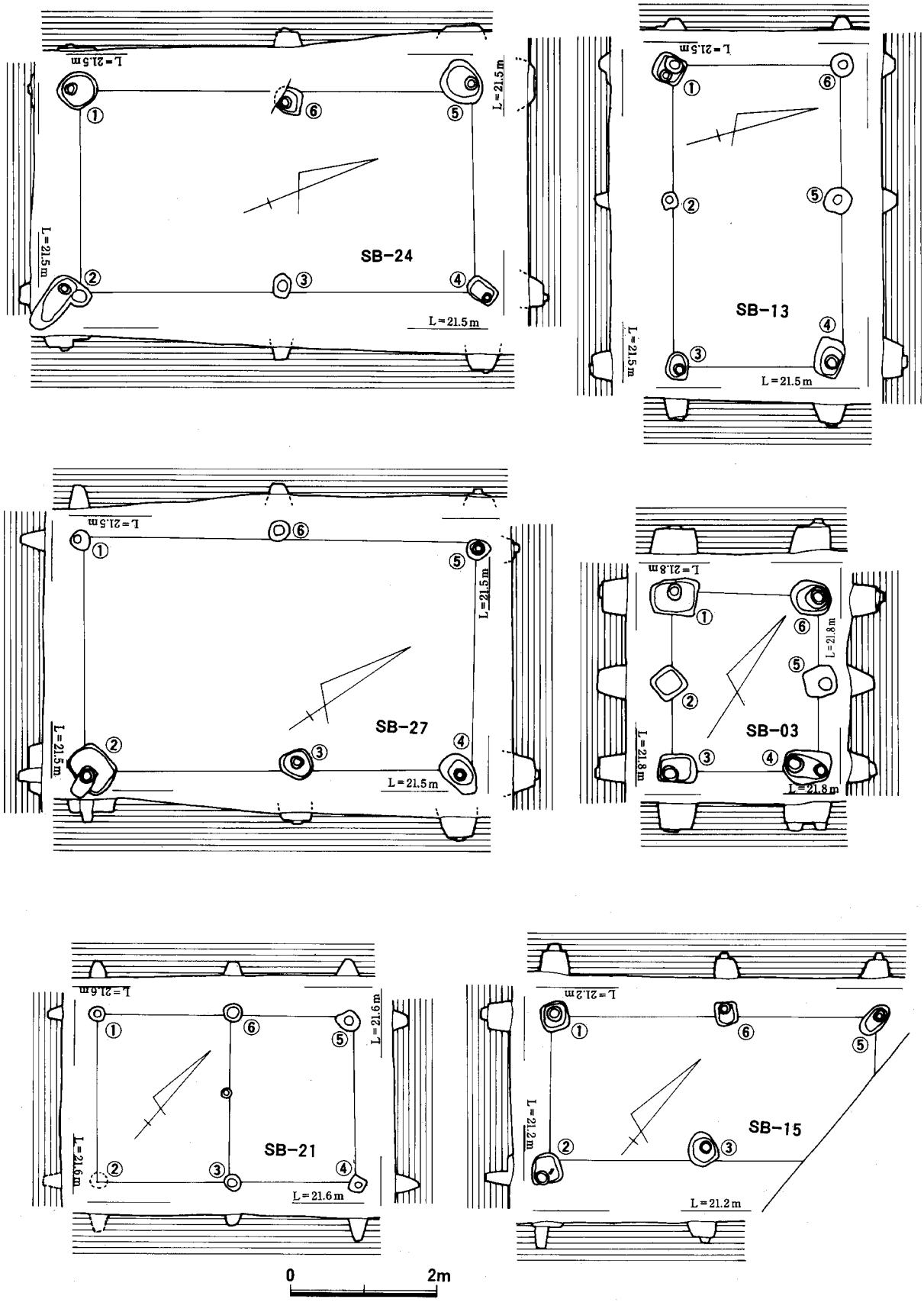


Fig. 46 Ⅷ区掘立柱建物実測図―2(縮尺1/80)

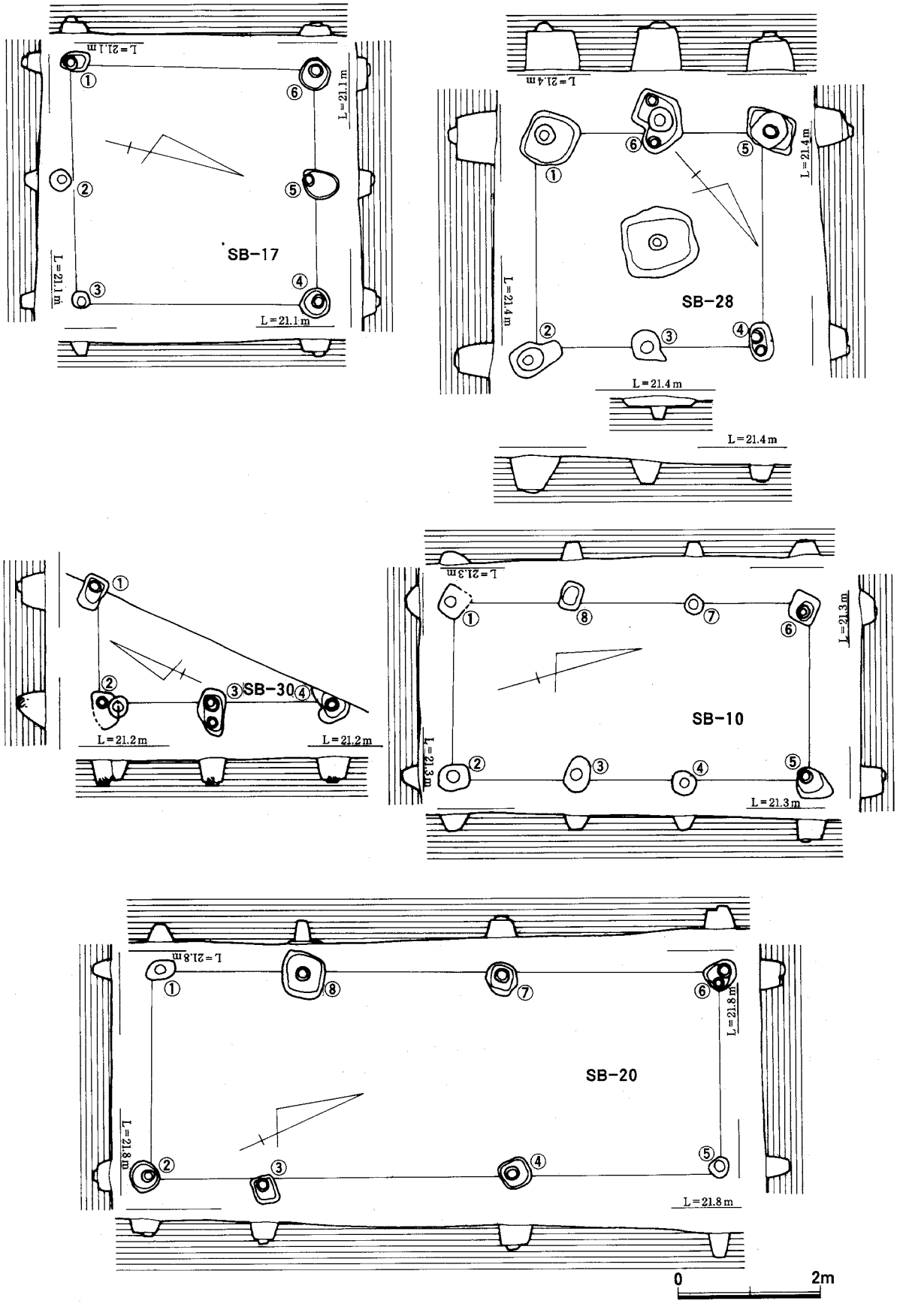


Fig. 47 Ⅷ区掘立柱建物実測図ー3(縮尺1/80)

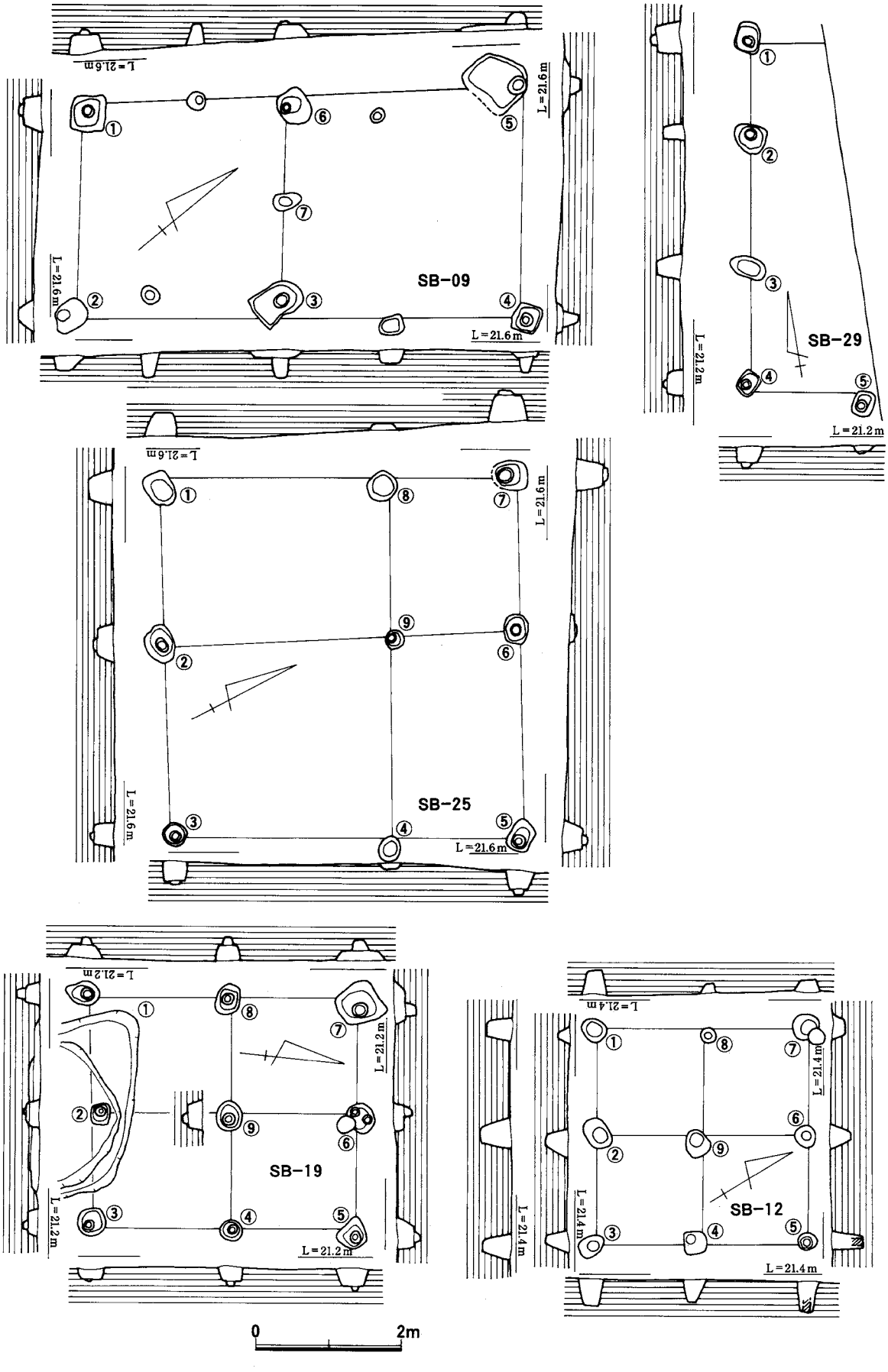


Fig. 48 Ⅷ区掘立柱建物実測図—4（縮尺1/80）

はN-74°30′-Wである。規模は2.4m×4.2mで、床面積10.08㎡を測る。**ＳＢ－27**　調査区南側東端から検出され、ＳＢ－05・24との間に切り合い関係があり21と接する。柱穴の形状は１つを除いて円形であり、桁行の③と⑥がやや中に入る形状を呈する。主軸は北東－南西、長軸方向はN-34°-Eである。規模は3.2m×5.4mで、床面積17.28㎡を測る。**ＳＢ－03**　調査区南側端から検出され、ＳＢ－02との間に切り合い関係があり、方向も02と同じ方向性をもつ。柱穴の形状は東隅の柱穴を除いて他は方形であり、大きさも他の掘立柱建物の柱穴と異なりかなり大きい。脇柱を②に持ち、掘方が深く、中心部は一段掘りであるが、四隅は二段掘りを行っている。主軸は南東－北西、長軸方向はN-32°30′-Wである。規模は2m×2.5mで、床面積5㎡を測る。**ＳＢ－21**　調査区南側から検出され、ＳＢ－22・25と接し、ＳＢ－24との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、柱穴自体小さいがかなり深く掘られている。四隅の一部②が確認されなかった。柱痕跡から柱は径15㎝前後と考えられる。中央部に床柱と考えられる柱穴がある。主軸は北東－南西、長軸方向はN-49°30′-Eである。規模は2.3m×3.5mで、床面積8.05㎡を測る。**ＳＢ－15**　調査区東端中央から検出され、ＳＢ－30と接し、29と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、すべて二段掘りされており、深さも深い。柱痕跡から柱の径は15㎝と考えられる。南東隅が調査区外である。主軸は南西－北東、長軸方向はN-50°30′-Eである。規模は2m×4.5mで、床面積9㎡を測る。**ＳＢ－17**　調査区北側ＳＤ－02の北に位置し、市道田・飯盛線で報告した掘立柱建物群（1987年　吉武遺跡群Ⅱ　福岡市教育委員会）及びⅨ区の掘立柱建物群との関係が考えられる一群である。切り合い関係はない。柱穴の形状は円形である。西側桁行部分に小柱穴があるが、これも床柱と考えられる。２間×２間の可能性も否定できない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-74°30′-Eである。規模は3.4m×3.4mで、床面積10.89㎡を測る。**ＳＢ－28**　調査区南東隅から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、脇柱（床柱）が④と⑥にある。掘方がしっかりしておりその殆どが二段掘りを行っている。中央部に床柱と考えられる柱穴があるが、主柱ほど深くない。柱痕跡から径15㎝前後の柱と思われる。主軸は南東－北西、長軸方向はN-49°-Wである。規模は3.0m×3.12mで、床面積9.6㎡を測る。**ＳＢ－30**　調査区東端中央から検出され、ＳＢ－15と接し、切り合い関係はないが、約半分が調査区外であったためその全容は不明。柱穴の形状は方形であり、西側主柱穴②～④には柱痕が残っており、10～15㎝の材を使用している。主軸は南東－北西、長軸方向はN-24°30′-Wである。規模は1.6m×3.15mで、床面積2.64㎡と推測される。

１間×３間の掘立柱建物（Fig. 47・48　Tab. 7・8　PL. 13・14）

１間×３間の掘立柱建物は３棟検出された。**ＳＢ－10**　調査区中央部から検出され、ＳＢ－７・８との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は北東－南西、長軸方向はN-16°-Eである。規模は2.5m×5mで、床面積12.5㎡を測る。**ＳＢ－20**　調査区南側端から検出され、ＳＢ－23と接する。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は南西－北東、長軸方向はN-24°30′-Eである。規模は2.9m×8.0mで、床面積23.2㎡を測る。**ＳＢ－29**　調査区東側端から検出され、ＳＢ－15と切り合い関係がある。約半分が調査区外であるが、柱穴の形状は方形であり、主軸は北－南、長軸方向はN-9°-Eである。規模は1.6m×4.8mで、床面積7.68㎡と推測される。

１間×４間の掘立柱建物（Fig. 48　Tab. 7　PL. 14）

１間×４間の掘立柱建物は１棟検出された。**ＳＢ－09**　調査区南側中央から検出され、ＳＢ－04・06・25との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は方形であり、掘方は深く柱痕跡から径が10～15㎝の柱であったと考えられる。主軸は北東－南西、長軸方向はN-39°-Eである。規模は3.2m×6mで、床面積18.3㎡を測る。梁行の柱穴が一直線上にならばないが、この種の類例は田村遺跡

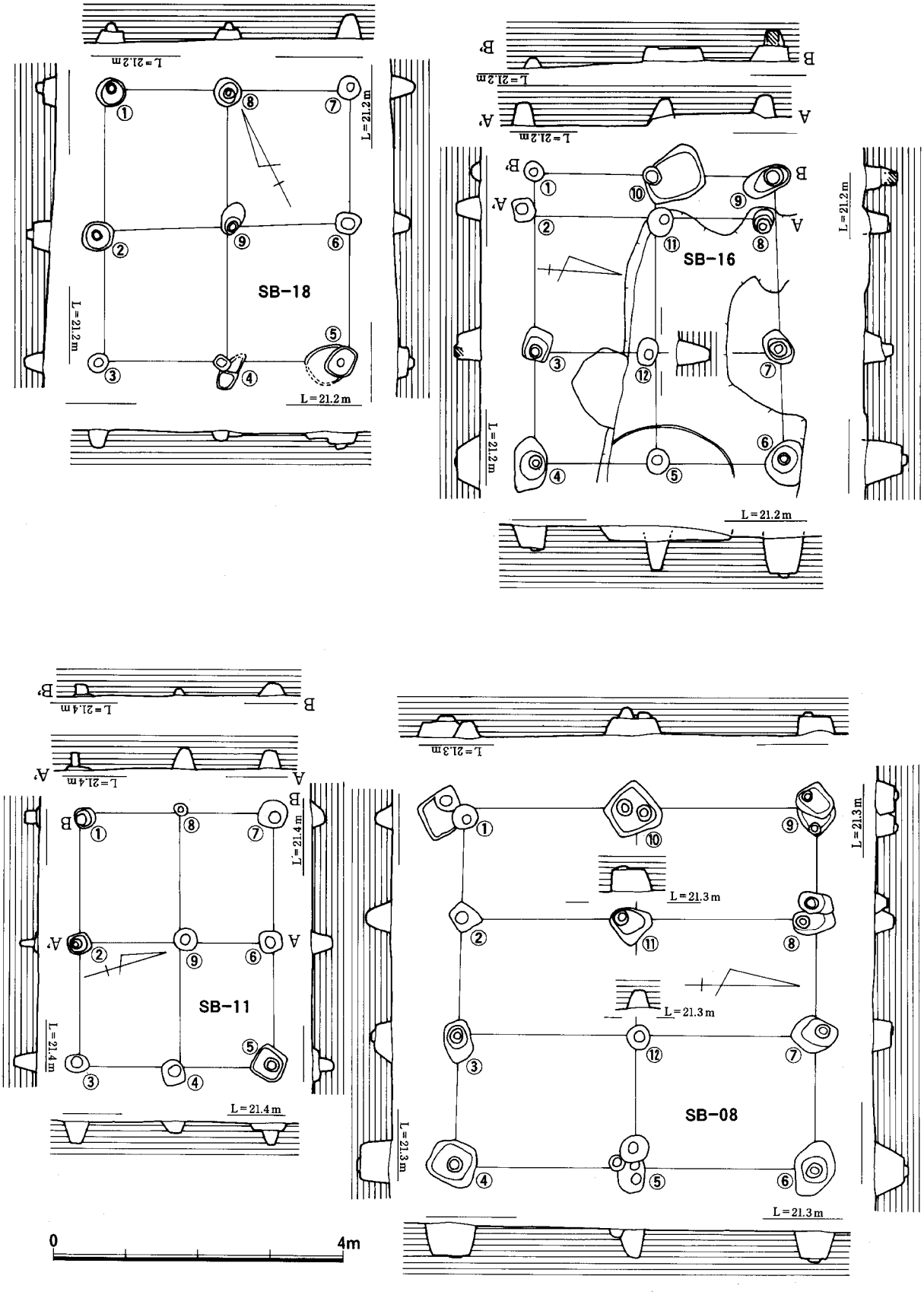


Fig. 49 Ⅷ区掘立柱建物実測図—5（縮尺1/80）

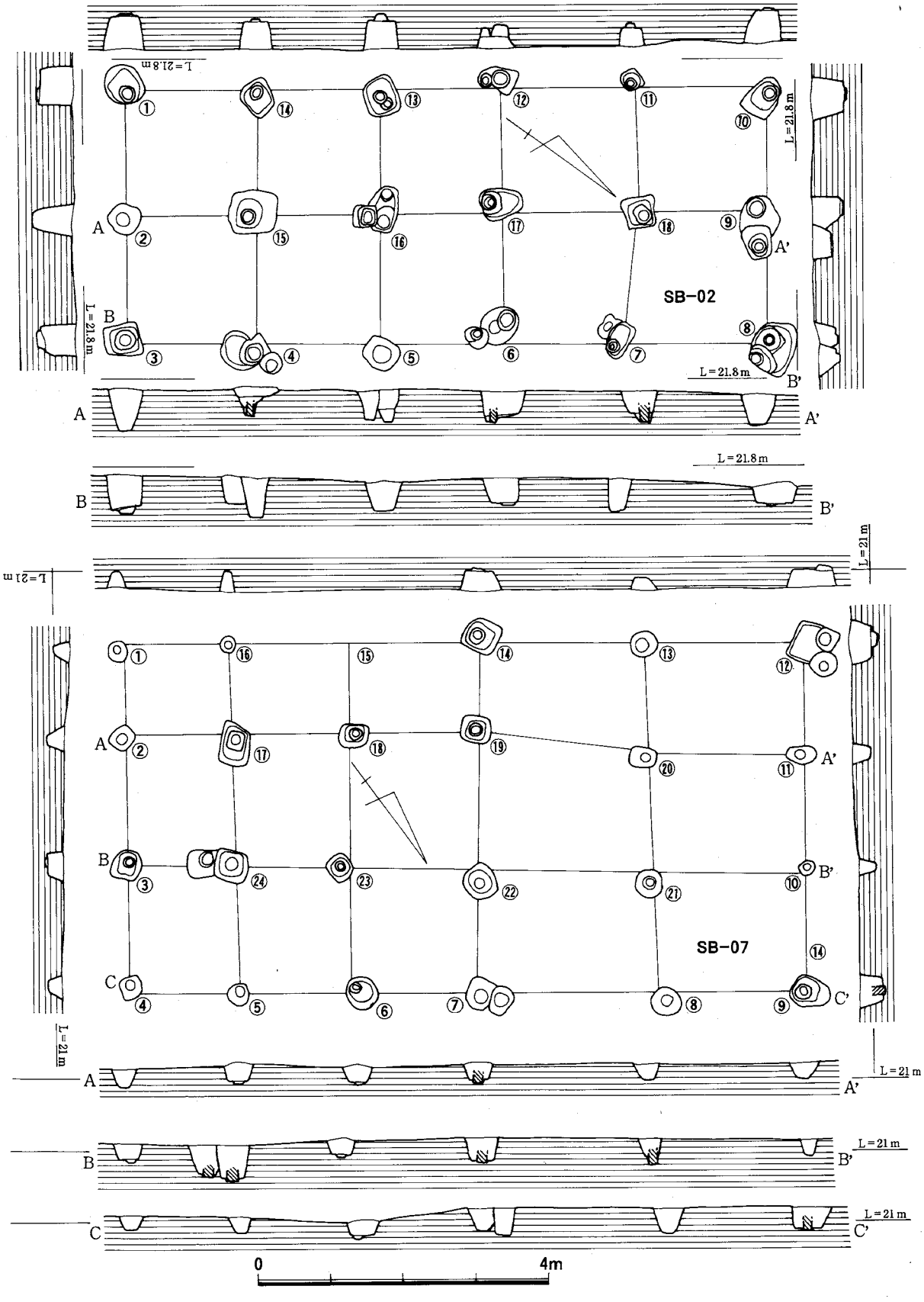


Fig. 50 Ⅷ区掘立柱建物実測図—6（縮尺1/80）

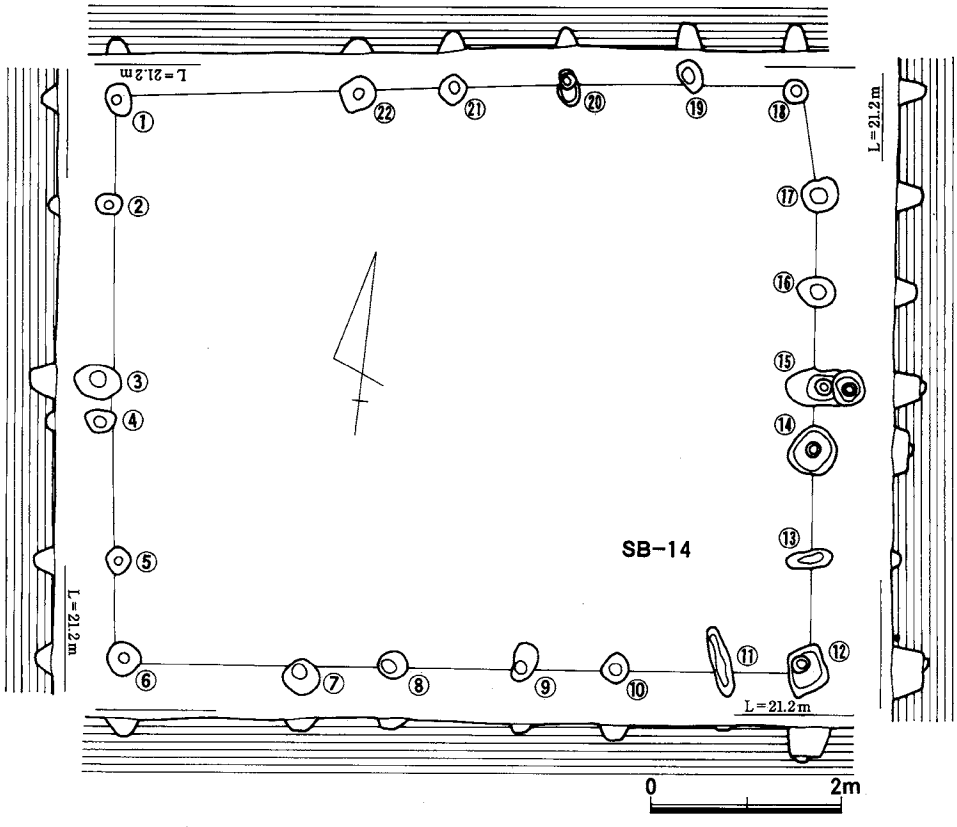


Fig. 51 Ⅷ区掘立柱建物実測図―7（縮尺1/80）

群にもみられ、また主柱穴はかなり大きいため問題はないと思われる。

2間×2間の掘立柱建物（Fig. 48・49　Tab. 7・8　PL. 14～16）

2間×2間の掘立柱建物は5棟検出された。　**ＳＢ－25**　調査区中央部から検出され、ＳＢ－21・24と接し、ＳＢ－09との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、中心部②・⑥・⑨がややずれた間隔を呈し、また、④～⑤、⑦～⑧の間隔が狭く1.8mしかない。2間×2間であるが柱間が異なり、主柱穴は深いが、中央部の柱穴は浅い。主軸は南東－北西、長軸方向はN-64°-Wである。規模は4.8m×5.06mで、床面積24.28m²を測る。**ＳＢ－19**　調査区北側のＳＤ－02の北に位置し、市道田・飯盛線の調査で検出された遺構及びⅨ区の掘立柱建物群との関係が考えられる一群である。ＳＸ－19との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形で、すべての柱穴が二段掘りされている。四隅が深く中心部が浅い形状を示す。主軸は北－南、長軸方向はN-6°-Wである。規模は3.2m×3.7mで、床面積11.84m²を測る。**ＳＢ－12**　調査区西側隅から検出された総柱掘立柱建物である。ＳＢ－11・13と切り合い関係がある。柱穴の形状は1つを除いて円形であり、主柱は深く柱が残っているものもある。すべて一段掘りであるが、⑤に柱痕が残っており径が12cm、長さ15cmである。また、3ヶ所に脇柱がある。主軸は南東－北西、長軸方向はN-58°30′-Wである。規模は3.0m×3.0mで、床面積9m²を測る。**ＳＢ－18**　調査区北側ＳＤ－02より北に位置し、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形であり、主軸は南西－北東、長軸方向はN-27°-Eである。規模は3.4m×3.8mで、床面積12.92m²である。**ＳＢ－11**　調査区西側端から検出され、ＳＢ－12・13と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は北西－南東、長軸方向

はN-73°-Wである。規模は2.7m×3.5mで、床面積9.45m²を測る。

2間×3間の掘立柱建物（Fig. 49　Tab. 6・7　PL. 13・15）

2間×3間の掘立柱建物は2棟検出された。**SB－16**　調査区北側SD－02の南側から検出され、建替えを行っているが同じSB－16とした。SX－11との間に切り合い関係がある。2間×2間の可能性が高いが西側に柱間の狭い柱穴群が並ぶことで一応2間×3間とした。しかしながら基本的には2間×2間と考えられることから倉庫としては考えにくい建物である。柱穴の形状は方形が主で、柱痕が残っていたものは③・⑨・⑩の3ヶ所で、径が12～15cm、長さが15～18cm前後ある。柱間隔が、①と②、⑧と⑨、⑩と⑪は60cmしかない。主軸は東－西、長軸方向はN-86°-Eである。規模は3.4m×4mで、床面積13.6m²を測る。切りあい関係からSD－11が古くSB－16が新しい。また出土遺物から古墳時代中期の時期と考えられる。**SB－08**　調査区中央西側から検出され、SB－07・10との間で切りあい関係がある。柱穴の形状は方形・不整形であり、主軸は西－東、長軸方向はN-89°-Wである。規模は5m×5mで、床面積25m²を測る。この柱穴には脇柱が多く6柱穴検出され、ほとんど二段掘りを行っている。

2間×5間の掘立柱建物（Fig. 50　Tab. 6　PL. 13・14）

2間×5間の掘立柱建物は1棟検出された。**SB－02**　調査区南側端から検出され、SB－03との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は方形が主で、8ヶ所の柱穴が脇柱を持つ。柱痕が現存しているのは⑮・⑰・⑱の3ヶ所で、⑱は残りがよく径15cm、長さ20cmを測る。そのほとんどの柱穴が二段掘りを行っており、深さも深い。主軸は北西－南東、長軸方向はN-36°-Wである。規模は3.5m×9mで、床面積31.5m²を測る。桁行の柱穴が一直線上にならばないが、主柱穴はかなり大きいため問題はないと思われる。検出された建物で3番目に大きな建物である。

3間×5間の掘立柱建物（Fig. 50　Tab. 6　PL. 13～15）

3間×5間の掘立柱建物は1棟検出された。**SB－07**　調査区中央部から検出され、SB－08・10との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱を持つ柱穴は3ヶ所で、柱痕が6ヶ所（⑨・⑲・㉑・㉒・㉔は脇柱とも）あり、そのほとんどが径15cm、長さ10～15cm程度残っていた。中心部⑲と⑳との間の方向がずれている。ただ⑮の柱穴がないことが気になる。北西－南東、長軸方向はN-54°-Wである。規模は4.8m×9.4mで、床面積45.12m²を測る。柱穴は深く掘り下げている。検出された建物は1番大きな建物である。

4間×6間の掘立柱建物（Fig. 51　Tab. 7　PL. 13～16）

4間×6間の掘立柱建物は1棟検出された。**SB－14**　調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形が主で、脇柱を持つ柱穴は2ヶ所である。柱間がまちまちであるが、柱穴が列ぶこと、この周辺にはこの柱穴群しかないことから一番先に判明した掘立柱建物である。主軸は東－西、長軸方向はN-84°30′-Eである。規模は6m×7.3mで、床面積43.8m²を測る。検出された建物で2番目に大きな建物である。柱穴自体は大小あるが、柱痕跡から10cm前後の柱であったことが窺える。

ここで建物の方向性・時期を考えてみる。

方向が一致するものとして　SB－14とSB－16・SB－19がN-85°-E前後で合致する。
SB－07とSB－27・SB－28がN-55°-W前後で合致する。
SB－02とSB－03・SB－15がN-35°-W前後で合致する。
SB－25とSB－18・SB－20がN-25°-W前後で合致する。
SB－29とSB－13・SB－19・SB－23がN-75°-W前後で

合致する。

以上のように５つの方向を持つグループに分けたが、もう一つ大型建物を中心とした配置を考える必要がある。調査区は限られており多少無理が生じるが、ＳＢ－02を中心としたグループ、ＳＢ－07を中心としたグループ、ＳＢ－14を中心としたグループに分けられ、ほぼ布留併行期から小型丸底壷までの３時期と考えられる。

次に時期的に考察をすると、柱穴掘方から出土する土器は土師器・須恵器で、不整形土壙（ＳＸ）から出土する土器と時期差はない。土師器では布留併行期のものが主で、新しい時期としてＳＸ－16・18から出土する小型丸底壷であり、須恵器では、Ⅱ式からⅢ式が主である。また、掘立柱建物と不整形土壙との切り合い関係のあるＳＢ－16とＳＸ－11、ＳＸ－19とＳＢ－19、ＳＸ－02とＳＢ－22を見るとＳＢ－16とＳＸ－11はＳＢ－16がＳＸ－11を切る形状を呈し、ＳＸ－11は第Ⅱ式の須恵器が出土している。これからしてＳＢ－16はこれより新しいことが判明した。またＳＢ－19とＳＸ－19との関係も、ＳＸ－19が古くＳＢ－19が新しい。ＳＸ－19からの出土遺物は新しい段階の布留式土器であることからＳＢ－19はこれよりも新しいことが窺える。ＳＢ－22とＳＸ－02との切り合いも、ＳＸ－02から第Ⅱ式の須恵器が出土していることからＳＢ－22がこれよりも新しいと考えられる。ただⅧ区ではＳＸ－16・18の小型丸底壷が最も新しく、柱穴から出土する土器も布留式が主である。

これからして掘立柱建物は新布留式土器の時期か、それより僅かに新しい時期を設定しても良いと考えられる。

参考文献

吉武塚原古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集	福岡市教育委員会刊	1980年
田村遺跡群Ⅲ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集	福岡市教育委員会刊	1987年
田村遺跡群Ⅳ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集	福岡市教育委員会刊	1987年
田村遺跡群Ⅴ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集	福岡市教育委員会刊	1988年
田村遺跡群Ⅵ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集	福岡市教育委員会刊	1989年
田村遺跡群Ⅶ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集	福岡市教育委員会刊	1990年
吉武遺跡群Ⅰ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集	福岡市教育委員会刊	1986年
吉武遺跡群Ⅳ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集	福岡市教育委員会刊	1989年
吉武遺跡群Ⅶ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集	福岡市教育委員会刊	1995年
吉武遺跡群Ⅷ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集	福岡市教育委員会刊	1996年
吉武遺跡群Ⅸ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集	福岡市教育委員会刊	1997年
吉武遺跡群Ⅹ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集	福岡市教育委員会刊	1998年
吉武遺跡群Ⅺ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集	福岡市教育委員会刊	1999年
吉武遺跡群Ⅻ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集	福岡市教育委員会刊	1986年
四箇遺跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集	福岡市教育委員会刊	1987年
入部Ⅴ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集	福岡市教育委員会刊	1995年
入部Ⅵ	福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集	福岡市教育委員会刊	1996年
橋本榎田遺跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集	福岡市教育委員会刊	1997年

ＳＸ（不整形土壙）・井戸状遺構

ＳＸ（不整形土壙）（Fig. 52～54　Tab. 14　PL. 13～18）

不整形土壙は30基検出したが、図示したものは29基である。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 14に表示しているので、参照していただきたい。

（Fig. 52,55～61　Tab. 14　PL. 13～18）

ＳＸ－01　調査区の南東隅から検出され、半分が調査区外である。ほぼ円形を呈し、掘り方は浅い。中央部に楕円形の形状を呈する粘土の貼り床が施されている。出土遺物は89002～89005,89046（Fig. 60）が出土している。須恵器ばかりの出土で、形式的にも古いタイプである。

ＳＸ－02　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－22と切り合い関係を持つ。やや変則な方形を呈し、ＳＢ－22南東隅の柱穴③との切り合いがあり、ＳＢ－22が切る。出土遺物は須恵器で89006（Fig. 60）が出土している。形式的にも古いタイプである。これにより、ＳＢ－22は須恵器のⅡ式より新しい時期と考えられる。**ＳＸ－04**　調査区の南西隅、ＳＸ－03の南側から検出され、半分は調査区外である。ほぼ楕円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－05**　調査区の南西隅から検出され、ＳＸ－03の西側に位置する。楕円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－07**　調査区の南西隅から検出され、SX－06の北、ＳＥ－01の南西に位置する。長方形を呈し、切り合いがあり、深さは深い。出土遺物は土師器・須恵器で89051,89054～89056（Fig. 55）が出土している。またＳＸ－06から出土した89050と接合する。

ＳＸ－08　調査区の南西から検出され、ＳＢ－11～13の北側に位置し、ＳＢ－08の西側から検出された。変則的な楕円形を呈し、深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－13**　調査区中央部から検出され、ＳＸ－１２を切る。形状は楕円形を呈する。出土遺物は89012～89014他（Fig. 60～62）の須恵器と土師器が出土している。これらの遺物はＳＸ－11・12・15との接合資料で、すべて同時期と考えられる。また、ＳＸ－10からＳＸ－15までの一連の土壙は溝か部分的な掘り込みによるものと考えられる。

ＳＸ－19　ＳＤ－02の北西側から検出され、ＳＢ－19と切り合い関係がある。形状は隅丸方形を呈する。出土遺物は89091～89094（Fig. 58）の土師器が出土している。ＳＢ－19の南側中央の柱穴②がＳＸ－19を切る。時期的には差はないものと考えられるがＳＸ－１９よりＳＢ－19の方が新しいことが窺える。**ＳＸ－17**　ＳＤ－02の北側に位置し、南西隅のＳＤ－02を切る形で検出され、約1/3は調査区外である。楕円形を呈し、深さは深い。出土遺物は土師器89074～89077（Fig. 57）と89029（Fig. 61）の須恵器が出土している。**ＳＸ－23**　ＳＤ－02の北側に位置し、ＳＸ－22と切り合い関係がある。変則的な楕円形を呈し、深さは深い。ＳＸ－23がＳＸ－22を切る形で検出された。出土遺物は土師器の89122～89124（Fig. 58）と89030,89031,89041（Fig. 61）の須恵器が出土している。**ＳＸ－20**　ＳＤ－02の北側、ＳＸ－19と接して検出された。約半分は調査区外で、楕円形を呈し、深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－22**　ＳＤ－02の北側、ＳＸ－23から切られる状態で検出された。楕円形で中に方形の掘方がある。これは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、この柱穴を使用する建物はなかった。深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、ＳＸ－23より古いことは確実である。他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－18**　ＳＤ－02の北側に位置し、ＳＢ－18の南側から検出され、変則的な楕円形を呈する。この中でも方形な土壙と柱穴によって中央部を破壊されている。出土遺物は土師器が多量に出土しており、89078～89088,89090,89128,

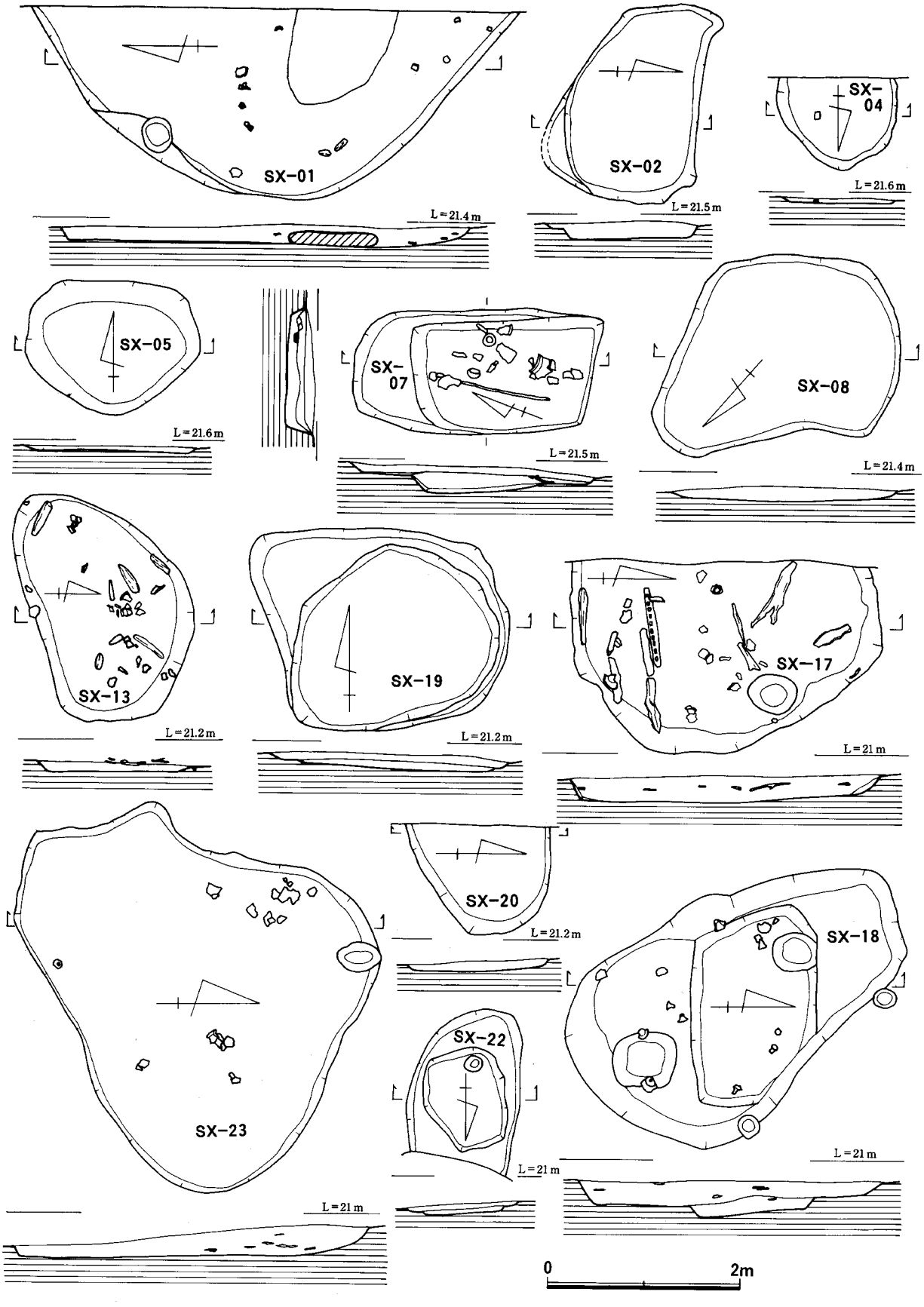


Fig. 52 Ⅷ区不整形土壙実測図—1（縮尺1/60）

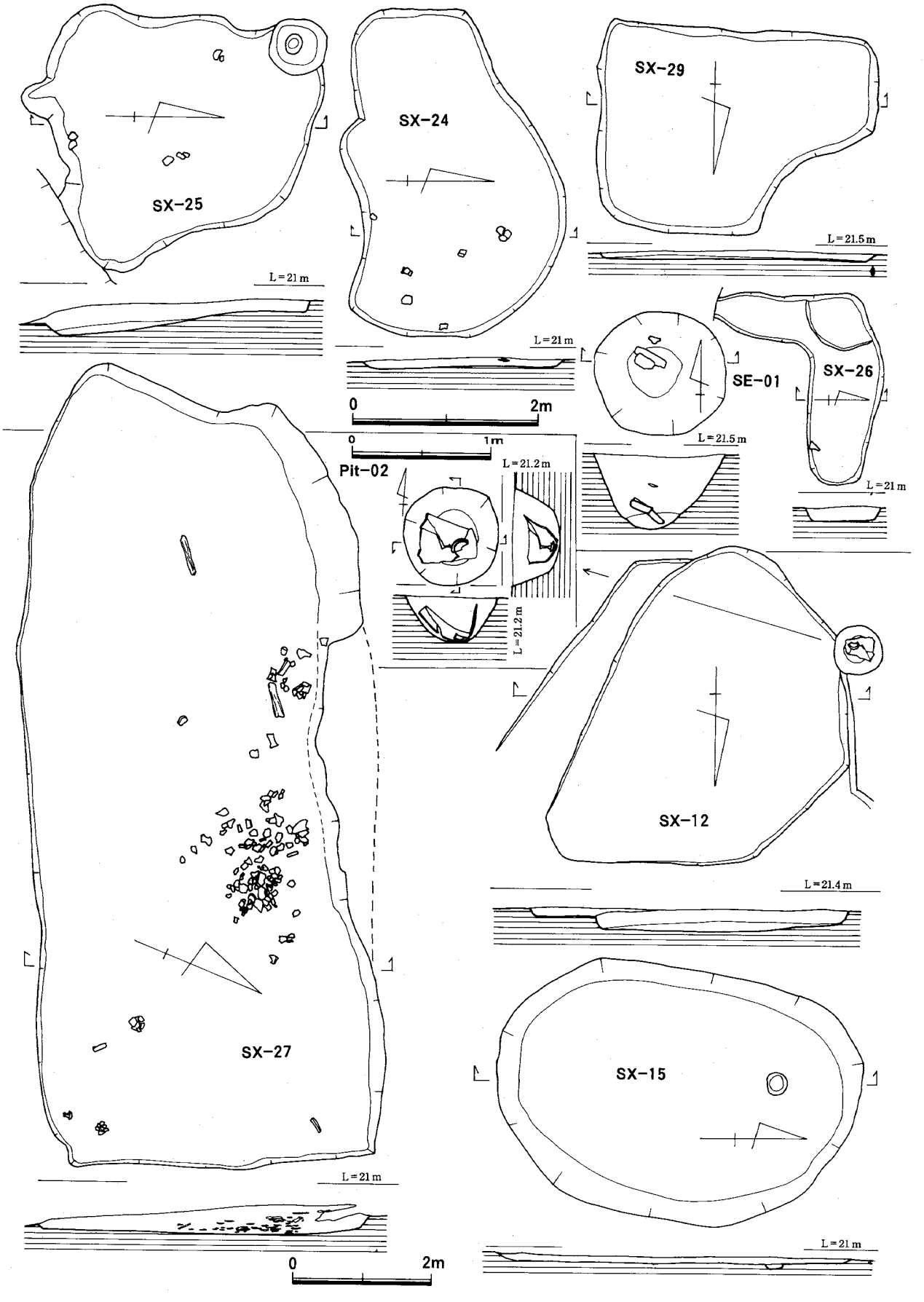


Fig. 53 Ⅷ区不整形土壙実測図ー2(縮尺1/40,1/60,1/80)

89129（Fig. 57）の14点を図示した。また、PL. 32の種子類も出土した。

（Fig. 53，55～62　Tab. 14　PL. 13・14・18）

ＳＸ－25　ＳＤ－02の北側に位置し、ＳＸ－27との切り合い関係がある。変則的な方形を呈し、深さはやや深い。ＳＸ－27がＳＸ－25を切る形で検出された。遺物は土師器で89119～89121（Fig. 58）と89042（Fig. 61）の須恵器が出土している。**ＳＸ－24**　ＳＤ－02の北側、ＳＸ－25の北側から検出された。変則的な楕円形を呈し、深さは浅い。遺物は土師器で89114～89118（Fig. 58）が出土している。**ＳＸ－12**　ＳＤ－02の南側、ＳＸ－13から切られる状態で検出された。またＳＸ－11を切る形で検出された。ＳＸ－13で記載したようにＳＸ－10からＳＸ－15までの一連の土壙は溝か部分的な掘り込みによるものと考えられ同時期と考えられる。深さはやや深く、西側のＰｉｔ２によって切られている。遺物は土師器で89057～89058（Fig. 56）と89011（Fig. 60）の須恵器が出土している。**Ｐｉｔ－２**　ＳＸ－12の西側から検出され、円形を呈する。床面に須恵器の胴部を配置しており、その上に須恵器の坏身を埋納状態で配置されていた。出土遺物は須恵器で80501，80504（Fig. 61・62）の２点である。**ＳＥ－01**　ＳＸ－07の北側に位置する。円形を呈し、深さは深いが、現況では湧水しているがこの深さで湧水したかどうかは定かでない。遺物は土師器で85001～85003（Fig. 55）が出土している。**ＳＸ－15**　ＳＤ－02の南側、ＳＸ－14・16と近接して検出された。楕円形を呈し、深さは浅い。遺物は多量に出土している。89062～89069（Fig. 56）の土師器と89021～89028，89037，89048，890135（Fig. 61）の須恵器を図示した。**ＳＸ－27**　ＳＤ－02の北側に位置し、ＳＸ－25に切られる。ＳＤ－02が完全に埋没した段階で造られている。隅丸方形を呈し、深さは浅い。出土遺物は土師器が89095～89109，89131（Fig. 58・59）と89032～89036，89044，89130（Fig. 61・62）の須恵器を図示した。89032はＳＸ－25の遺物と接合する。

（Fig. 53，55～60　Tab. 14　PL. 15～17）

ＳＸ－11　ＳＤ－02の南側に位置し、ＳＢ－16・ＳＸ－10・12との切り合い関係がある。形状は変則的な長方形を呈する。遺物は、須恵器89010（Fig. 60）が出土した。深さは浅い。

ＳＸ－９・10　ＳＤ－02のすぐ南側、ＳＸ－11との切り合い関係がある。ＳＸ－９がＳＸ－10を切り、ＳＸ－10がＳＸ－11を切る。ＳＸ－９が方形、ＳＸ－10が楕円形を呈し、両方とも浅い。遺物はＳＸ－９から種子、ＳＸ－10から種子と土師器89127（Fig. 56）が出土した。

ＳＸ－16　ＳＤ－02の南側、ＳＸ－15の東側に位置する。形状は楕円形で、深さは浅い。遺物は土師器89070～89073（Fig. 56・57）が出土した。**ＳＸ－14**　ＳＤ－02の南側、ＳＸ－13とＳＸ－15に挟まれＳＸ－28に接して検出された。変則的な楕円形を呈し、深さは浅い。南側に柱穴が新しく掘り込まれているが、掘立柱建物の柱穴にはならなかった。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－28**　ＳＤ－02の南側、ＳＸ－14と接して検出された。形状は楕円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**ＳＸ－03**　調査区の南側西隅から検出され切り合い関係はない。形状は変則的な隅丸長方形を呈する。出土遺物は土師器が89110～89112（Fig. 55）と89007～89049（Fig. 60）の須恵器を図示した。**ＳＸ－06**　ＳＤ－02の南側端の西隅から検出され一部は調査区外である。北にＳＸ－07があるが、土壙によってつながる形状を呈する。形状は「逆Ｌ字状」を呈し、深さは浅い。出土遺物は土師器が89052，89053（Fig. 55）と89008（Fig. 60）の須恵器を図示した。

出土遺物

Ⅷ区からは井戸・不整形土壙・掘立柱建物の柱穴から遺物が出土したが、掘立柱建物からの柱穴は

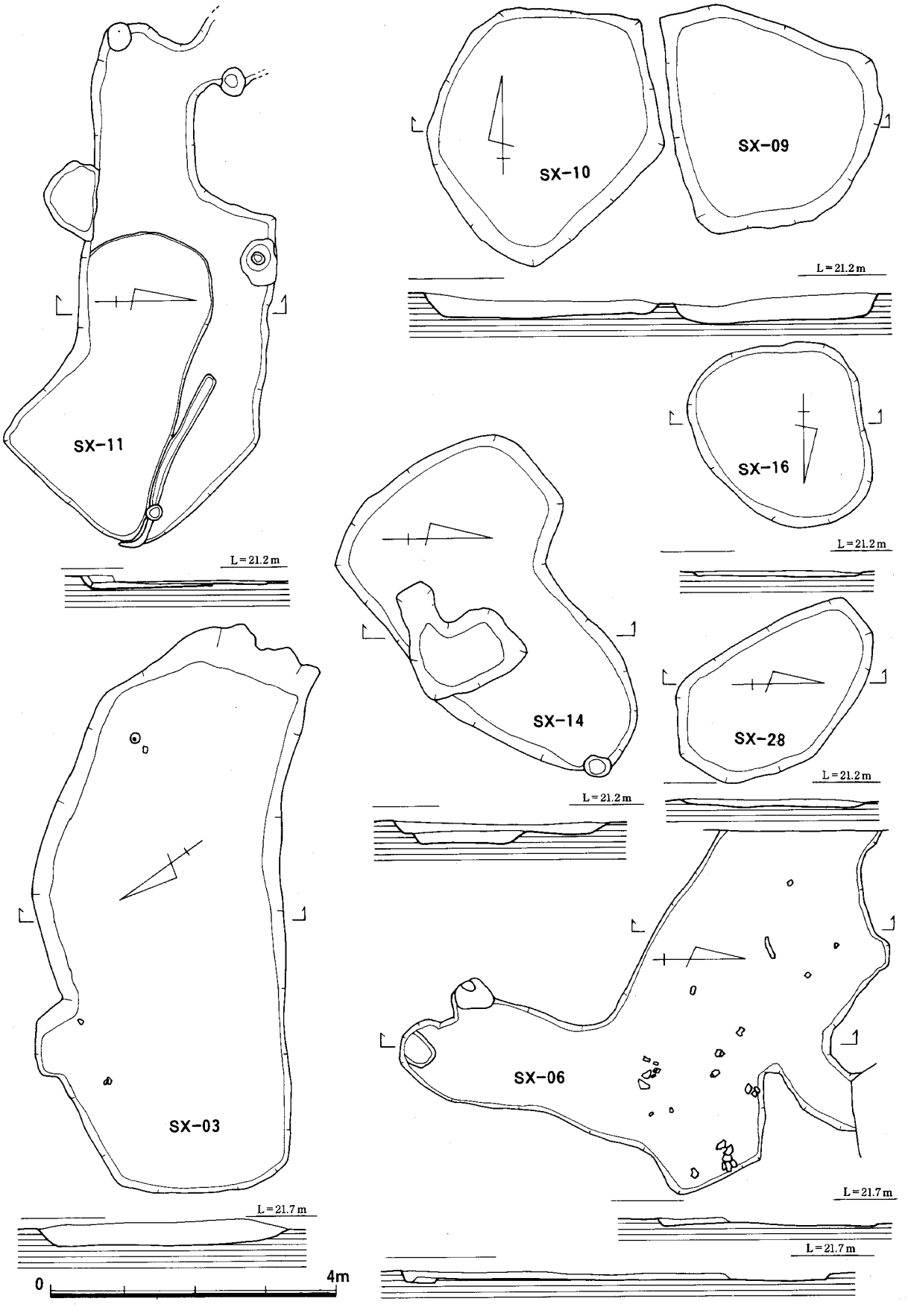


Fig. 54 Ⅷ区不整形土壙実測図—3（縮尺1/80）

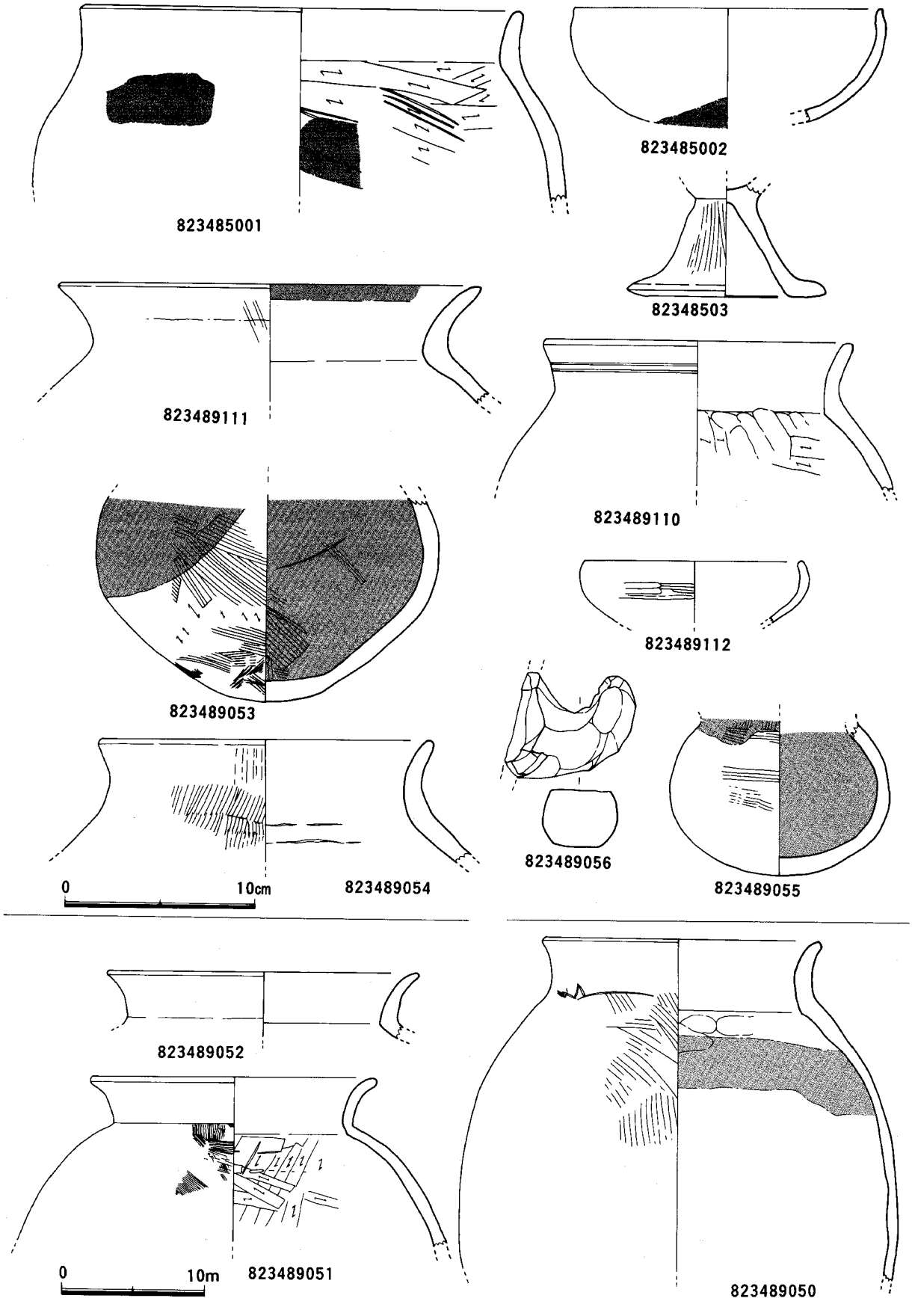


Fig. 55 Ⅷ区出土遺物実測図ー1（縮尺1/3,1/4）

細片で実測に耐えるものはなかったが、その殆どが古式土師器・須恵器で不整形土壙から出土する遺物とは時期的に差はない。柱の抜き後からも同様の遺物が出土している。これらの遺構の遺物は時期的に大差なく古墳時代前期から中期前半にかけての時期と考えられる。記載は挿図・遺構ごとに土師器・須恵器の順に行う。

ＳＥ－01 出土の土器（Fig. 55）

Fig. 55に図示した3点（85001～85003）が出土した。**85001**　土師器の中型甕で頸部が締まらず口縁がほぼ垂直に立ち上がるタイプで、外面はナデ調整、内面は口縁部がナデ･胴部が篦削りを行っている。口径23.4cm。胎土は1㎜前後の砂粒を含み、色調は内外面とも暗褐色・黒斑がある。**85002**　土師器の椀で底部が欠損している。内外面ともナデ調整を行っている。口径16cm。胎土は2～3㎜大の石英粒を含み、色調は内外面とも明赤茶褐色、外面に黒斑がある。**85003**　土師器の高坏の脚部である。外面は縦刷毛目、内面は横からの篦削りである。脚径10.4cm。色調は内外面とも明肌色を呈する。

ＳＸ－03 出土の土器（Fig. 55・60）

Fig. 55の3点（89110～89112）とFig. 60の2点（89007・89049）が出土した。**85110・111**　2点とも土師器の中型甕で口縁が「く」字状を呈する。頸部は89111の方が良く締まる。外面は刷毛目の後ナデ調整、内面は口縁部がナデ・胴部が篦削りである。110の口径16.2cm、111が22.2cm。色調は両方とも内外面とも明褐色を呈する。**89112**　土師器の椀で底部が欠損している。内外面とも篦磨き調整を行っている。口径11.6cm。色調は内外面とも暗黒褐色を呈する。89007　須恵器の坏蓋である。受部が高く2.1cmを測り、天井部は左回りの篦削りで、受部は回転ナデで仕上げている。口径13cm、器高4.2cm。色調は外面が灰色、内面が白灰色を呈する。**89049**　須恵器の甕の口縁部である。頸部が締まり口縁が大きく外反する。外面は口縁部付近は回転ナデ仕上げ、胴部は平行叩き、内面は胴部から同心円文の叩きを施している。口径16.2cm。色調は内外面とも淡灰色を呈する。

ＳＸ－06 出土の土器（Fig. 55・60）

Fig.55の3点（89050・89052・89053）とFig. 60の1点（89008）が出土した。**89050**　これはＳＸ－06とＳＸ－07との遺物が接合したものである。土師器の中型甕で口縁がほぼ直立し、口唇部が僅かに外反する。胴部は撫肩で、底部を欠損する。外面は荒い刷毛目調整、内外面の口縁部はナデ内面胴部は指押さえと篦削りを行っている。口径19.2cm、残存高23.5cm。色調は内・外面とも暗褐色を呈し、内面の一部に黒斑がある。

89052　土師器の甕の口縁部で、表面が摩滅して調整は不明。口径21.8cm。色調は内外面とも黄褐色＋淡赤褐色を呈する。**89053**　土師器の胴部から底部にかけて遺存していた。底部は丸底で、内外面とも刷毛目を施し、最大径18.2cmを測る。色調は外面が暗褐色と黒斑、内面が黒褐色を呈する。

89008　須恵器の坏身で底部を欠損している。受部がやや内向しながら真直ぐに立ち上がり高さ1.8cmを測る。外面は左回転の篦削りと回転ナデ、内面は回転ナデを施す。口径11.6cm、胎土は0.5㎜～1㎜大の砂粒を多く含む。色調は内外面とも明白灰色を呈し、外面の一部に黒斑がある。焼成は良好。

ＳＸ－07 出土の土器（Fig. 55・60　PL. 30）

Fig. 55の4点（89051・89054～89056）とFig. 60の1点（89009）が出土した。**89051**　ＳＸ－06と07から出土したものが接合した資料である。土師器の中型の甕で胴部下は欠損している。口縁部は外反しながら口唇部で更に大きく跳ねる。外面はかなり摩滅しているが、一部に刷毛目が残っている。内面の口縁はナデ、胴部は篦削りを行っている。口径20.2cmで、色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈する。**89054**　土師器の中型甕で、口縁部のみである。外面は刷毛目、内面はナデ＋篦削りを施す。口径17.6cmを測る。胎土・色調は89051に類似する。**89055**　土師器の小型丸底壷で口縁が欠損し

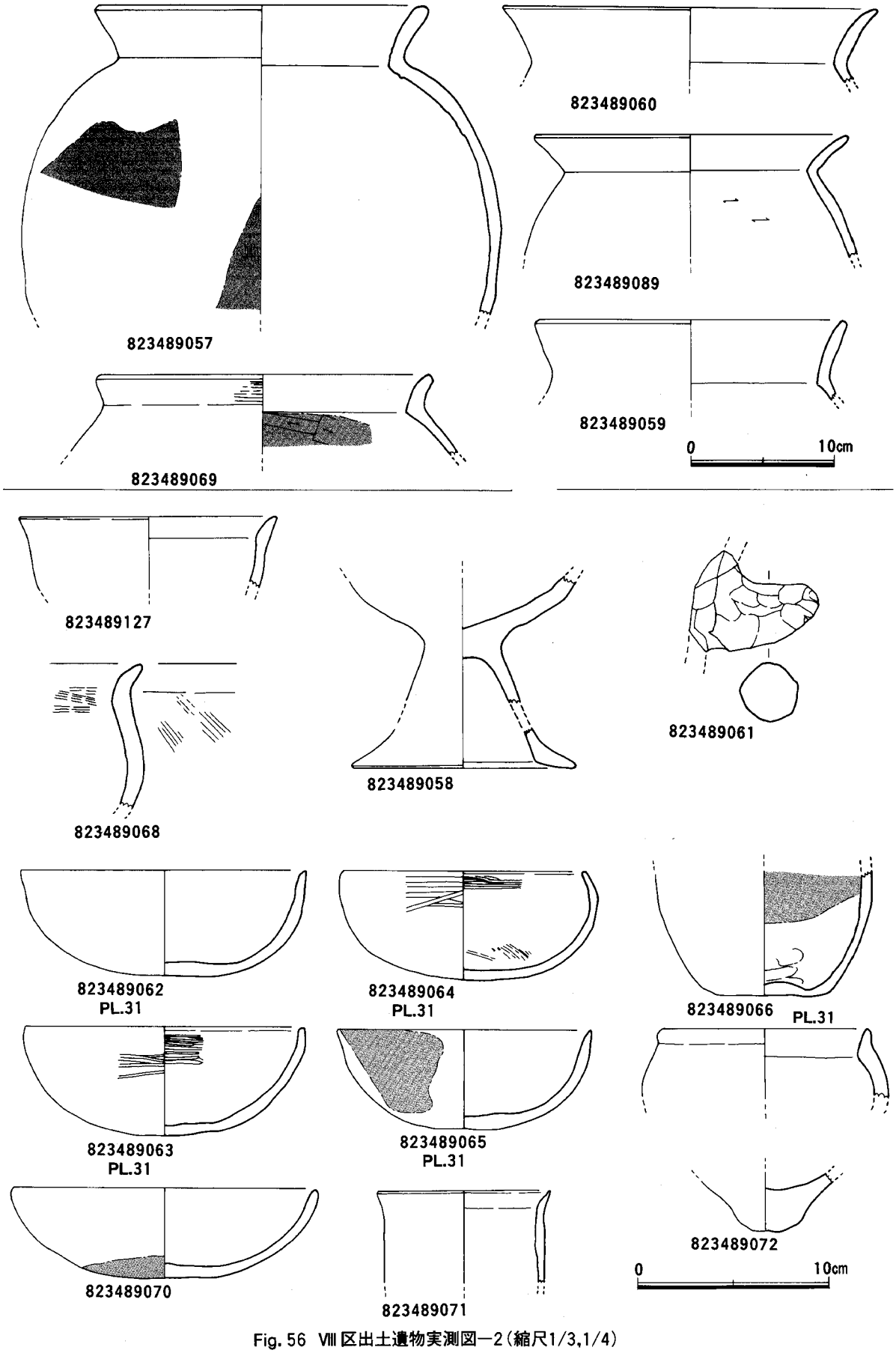


Fig. 56 Ⅷ区出土遺物実測図―2(縮尺1/3,1/4)

ている。内面はナデで煤が付着している。外面は刷毛目で一部に煤が付着している。**89056**　甑の把手である。**89009**　須恵器の坏蓋である。天井部は右回りの篦削りを行っており、受部は回転ナデで仕上げている。口径14.3cm、器高4.8cmを測る。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は内外面とも青灰色を呈する。

ＳＸ－10出土の土器（Fig. 56）　ＳＸ－10からは**89127**を1点だけ図示した。土師器の鉢形土器で胴部下はない。胴部から立ち上がり口唇部で更に外反する。外面はナデ、内面はナデ＋篦削りを行っている。口径は13.4cmを測る。胎土は細砂・赤色粒を含み、色調はない外面とも明茶褐色を呈する。

ＳＸ－12出土の土器（Fig. 56・60）

Fig. 56に図示した2点（89057・89058）とFig. 60に図示した1点（89011）が出土した。

89057　土師器の中型甕で底部を欠損する。口径は21.8cmで、外面は摩滅が著しいが一部に刷毛目が認められる。内面は横ナデ＋篦削りを行っている。**89058**　土師器の高坏で口縁部が欠損している。調整は摩滅により不明である。脚径11.6cm。**89011**　ＳＸ－12とＳＸ－13から出土した資料が接合したもので、須恵器の高坏である。脚部は欠損しているが、坏部が残る。受部は高く、1.8cm程ある。口縁部付近は左周りの回転ナデを施し、底面にはカキ目を施す。口径10.5cm、坏部高4.2cmを測る。脚部の一部が現存するが、方形の透かしがある。色調は内外面とも明青灰色を呈する。

ＳＸ－13出土の土器（Fig. 56・60・61・62　PL. 30）

Fig. 56の4点（89059～89061・89089）とFig. 60～62の16点（89012他）が出土した。

89059・60　2点とも土師器の中型甕の口縁部で胴部下を欠損する。口径は59が22cm、60が26cmである。両方とも外面はナデ仕上げ、内面は横ナデ＋篦削りを行っている。**89089**　土師器の甑の把手である。**89012**　須恵器の高坏である。脚部は欠損しているが、坏部が残る。口縁部下に三条沈線を廻らし二本目と三本目の間に波状文を施す。他は回転ナデを施し、全体的に深い緑色の自然釉がかかる。口径15.2cm、坏部高7cmを測る。**89013・14・43・134**　4点とも高坏の脚部で、長方形・三角形・円形の透かしが入るタイプで、14は陶質土器である。13の脚径は13cm、14は8cm、134は11.6cm、43は9.4cmである。調整は回転ナデで、胎土は精製された粘土を使用している。**89047**　高坏の坏部と思われる。胴部に三条の沈線を巡らし、口縁部は外に跳ね上げている。口径は10.8cmで胎土・焼成・文様等から陶質土器と考えられる。**89015・16**　2点は坏身である。15はＳＸ－13・15から出土した資料が接合したものである。15の口径は10.5cm、16は11.2cm、器高は15が4.9cm、16が5.5cm、受部は15が1.65cm、16が1.95cmある。両方とも精製された粘土を使用し、篦切り部分が高く、左回りの回転によって削り、ナデを行っている。**89010・17～20・38・39・45**　8点は坏蓋である。全体的に受部が高く、口縁端部はシャープな仕上げである。篦削りは右回転が17・19・20・38・45で他は左回転である。口径・器高は10が13.6・3.9cm、17が12.4・3.9cm、18が12.5・4cm、19が12.8・4.9cm、20が12.6・5.1cm、38が13.4・4.4cm、39が12.2・4.4cmである。45はつまみ付の坏身で、つまみ中央部は窪むタイプである。全体的に精製された粘土を使用しており、自然釉がかかる38以外は灰色を呈する。89040　須恵器の小型壷である。胴部に二条の沈線を巡らしその間と口縁部に波状文を配する。内側底面は指押えを行う。外面と、内面口縁部はナデ仕上げを行っている。口径8.1cm、器高8cm、胴部最大径10.6cmである。89133　須恵器の特殊器台で坏部が欠損している。恐らく椀状になるタイプと思われる。脚部から内湾しながら立ち上がるが、二条の沈線により凹凸をつけ、三角突帯となす。それをほぼ等分に配置し三段、四区画を造る。その間に三角形の透かしを1区画4個配置する。また透かし以外は櫛描波状文にて装飾する。中央部に「コ」字状の突帯を巡らす。これより垂直に立ち上げていくが、この部分にも二条の線により凹凸をつけ、三角突帯となす。それをほぼ等分に配置し三段、三区画を造る。脚部の透かし部分と交差する部位に長方形の透かしを配列する。透かし以外は櫛描波

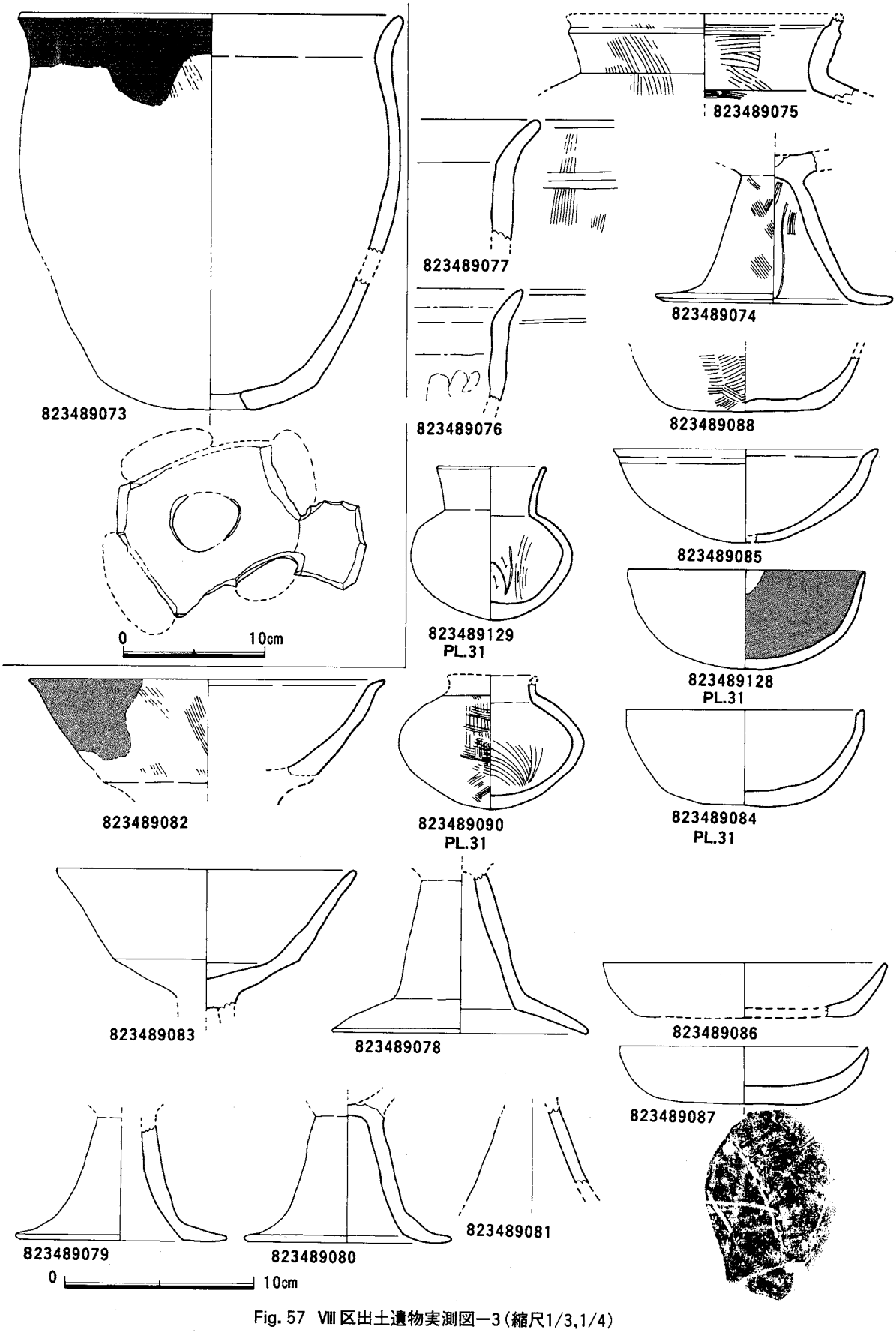


Fig. 57 Ⅷ区出土遺物実測図—3（縮尺1/3,1/4）

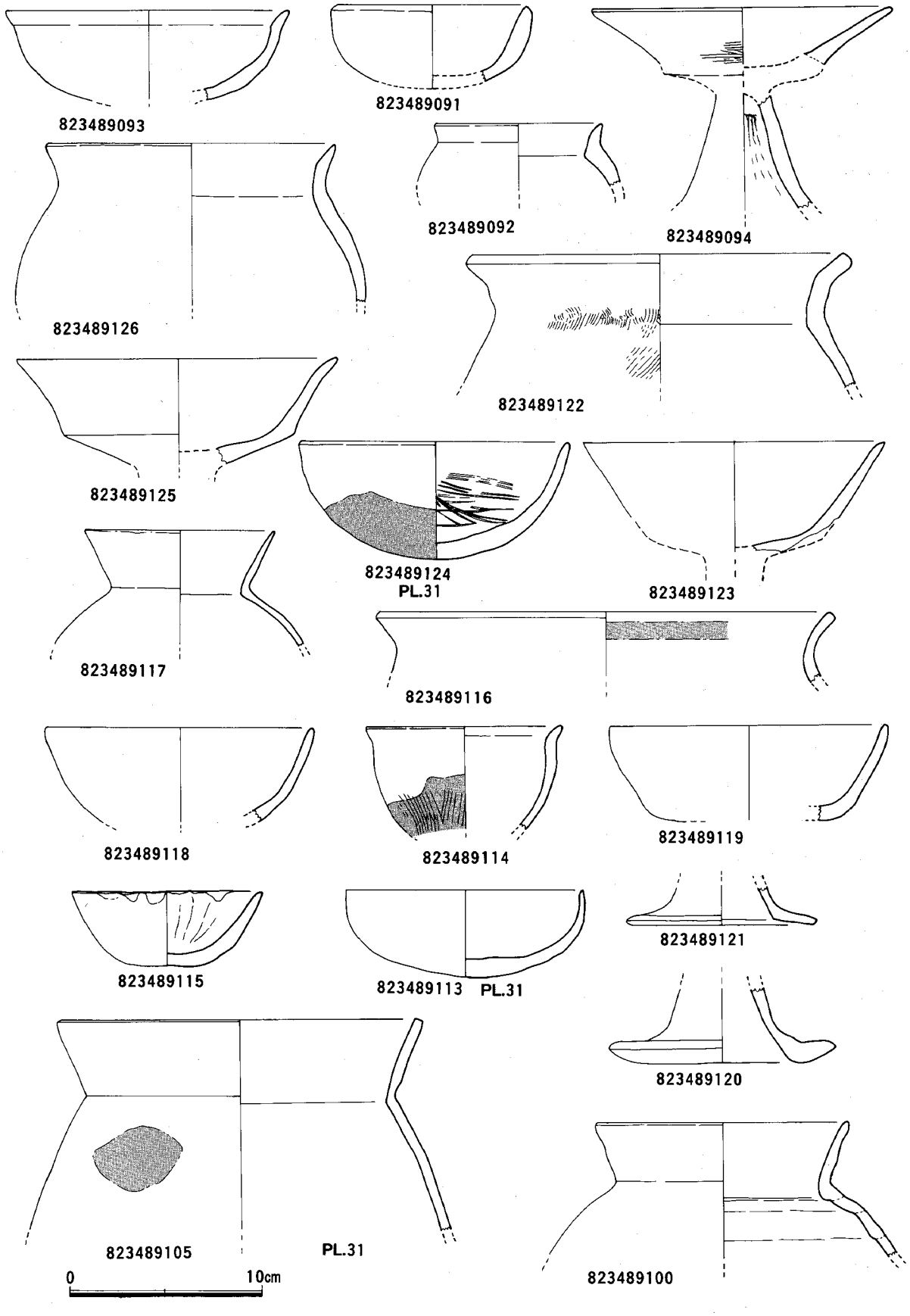


Fig. 58 Ⅷ区出土遺物実測図—4（縮尺1/3）

状文にて装飾している。内面は横ナデできれいに仕上げている。脚径23.8cm、残存高34.7cm、中央突帯部径12.4cm、透かし三角形は底辺2.5cm、高さ3～3.5cm、長方形の長さ3.7～4×0.7cmを測る。

ＳＸ－15出土の土器（Fig. 56・61　PL. 30）

Fig. 56の8点（89062～069）とFig. 61の11点（89021～028・037・048・135）が出土した。

89068・69　2点とも土師器の甕で、068は胴部から内湾しながら直線的に立ち上がり口縁部で外反する。069は胴部から大きく内湾し、頸部で外に開く「く」字状になるタイプである。068は内外面とも刷毛目、内面胴部は篦削り、069は内面は篦削り、外面が刷毛目、胴部を磨きで仕上げている。口径は069が23.8cm。**89062～065**　4点とも土師器の椀である。口縁が内に入るタイプ063・064と外に広がるタイプ062・065とに区別される。これらのタイプは調整でも同一手法をもつ。063タイプは内外面との篦磨きを施すのに対して062タイプはナデ仕上げである。062の口径・器高は15・5.5cm、063は14.6・5.7cm、064は12.6・5.8cm、065は13.2・5.2cmを測る。**89066・067**　この2点は土師器の壷形土器である。066は口縁部を欠損。平底を呈し、外面に火を受けた痕跡がある。内面は指押えと篦削りを行い外面はナデ仕上げを行っている。底径6cmを測る。067は底部を欠損し、口縁はほぼ直立するタイプで、外面ナデ、内面篦削りを施す。口径10.6cmを測る。**89022～025・037**　5点は須恵器の坏身である。受部が高く、口唇部もシャープな造りである。調整は右回りの回転による篦削りとナデである。口径・器高は022が11.6・4.5cm、023が10.8・4.8cm、024が11.4・5cm、037が11.3・5.4cmを測る。胎土は精製された粘土を使用しており、色調も青灰色・灰色を呈する。037に自然釉がかかる。**89026～028・135**　4点は須恵器の坏蓋である。135を除いて受部が高く、口縁端・稜等がシャープな造りである。135はつまみ付の坏蓋である。つまみ上部が平坦で僅かに内に窪む形状を呈する。調整は右回りの回転による篦削りとナデである。口径・器高（推定）は026が12・4.2cm、027が12.6・3.5cm、024が14.4・3.9cmを測る。胎土は精製された粘土を使用しており、色調も青灰色を呈する。026に自然釉がかかる。026と037はセットと考えられる。**89021・048**　2点とも須恵器の高坏である。021は坏部、048は脚部である。021は胴部下に一条の沈線を巡らし口縁部と胴部下に波状文を配する。口径は10.3cmで、口唇部は窪む。調整は右回りの回転ナデである。048は脚部で坏部は欠損している。脚径13cmを測る。

ＳＸ－16出土の土器（Fig. 56・57）

Fig. 56の4点（89070～073）が出土した。**89070**　土師器の椀である。口径16cm、器高4.7cmを測り、調整は全体的にナデ仕上げである。**89071**　土師器の鉢形土器である。胴部以下が欠損する。表面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面はナデと篦削りを施す。胴部から垂直に立ち上がり口縁部が外反する。口径は9cmで内外面とも暗赤褐色を呈する。**89072**　土師器の手ずくね土器の底部である。

89073　土師器の甑である。胴部で接合できなかったが、同一個体であることから復元した。底部には5個の楕円形の穴を開け、端部は指押さえを行っている。胴部から緩やかに外反しながら胴部上位で内向し、頸部で緩やかに外反し口縁端部を丸く納めている。外面は刷毛目を施し、内面は口縁がナデ、胴部が篦削り。外面口縁部に黒班がある。内外面とも明褐色を呈し、口径26.6cm、復元器高28cm。

ＳＸ－17出土の土器（Fig. 57・61）

Fig. 57の4点（89074～077）とFig. 61の1点（89029）が出土した。**89074**　土師器の高坏で坏部が欠損している。外面は摩滅が著しいが一部に刷毛目が残る。内面はナデ・刷毛目を施す。脚径12.8cmを測る。**89075**　土師器の特殊な甕である。口縁部だけであるが大きく胴の張るタイプである。口唇部が欠損しているが、一条の沈線を巡らすと思われる。須恵器の甕にあるタイプである。内外面とも刷毛目を施し外面はその後ナデ調整を行っている。色調は淡白肌色を呈する。推定口径14.4cm。**89076・077**　土師器の甕の破片である。形態的に類似するもので、076は内外面ともナデ仕上げ、

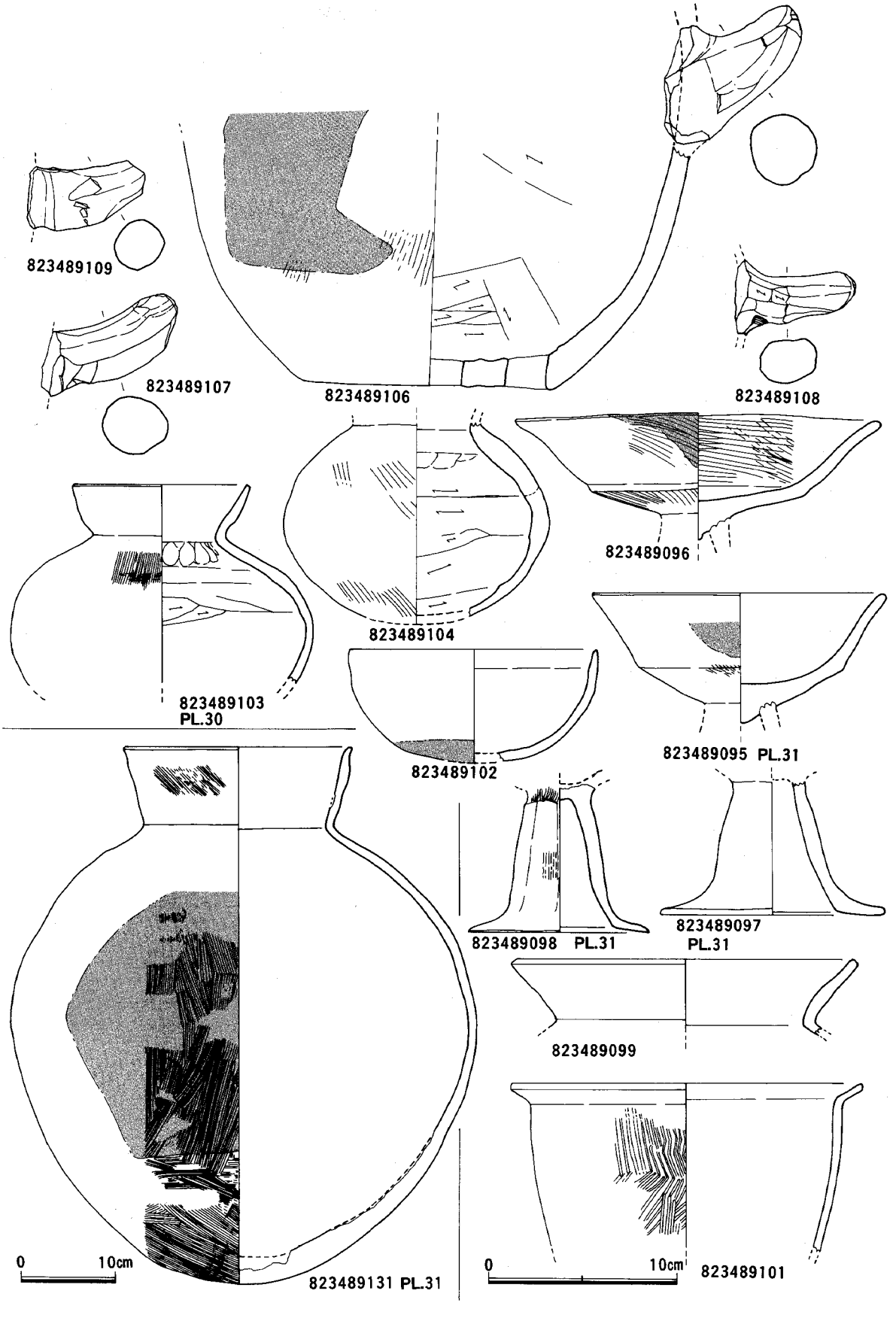


Fig. 59 Ⅷ区出土遺物実測図—5（縮尺1/3,1/6）

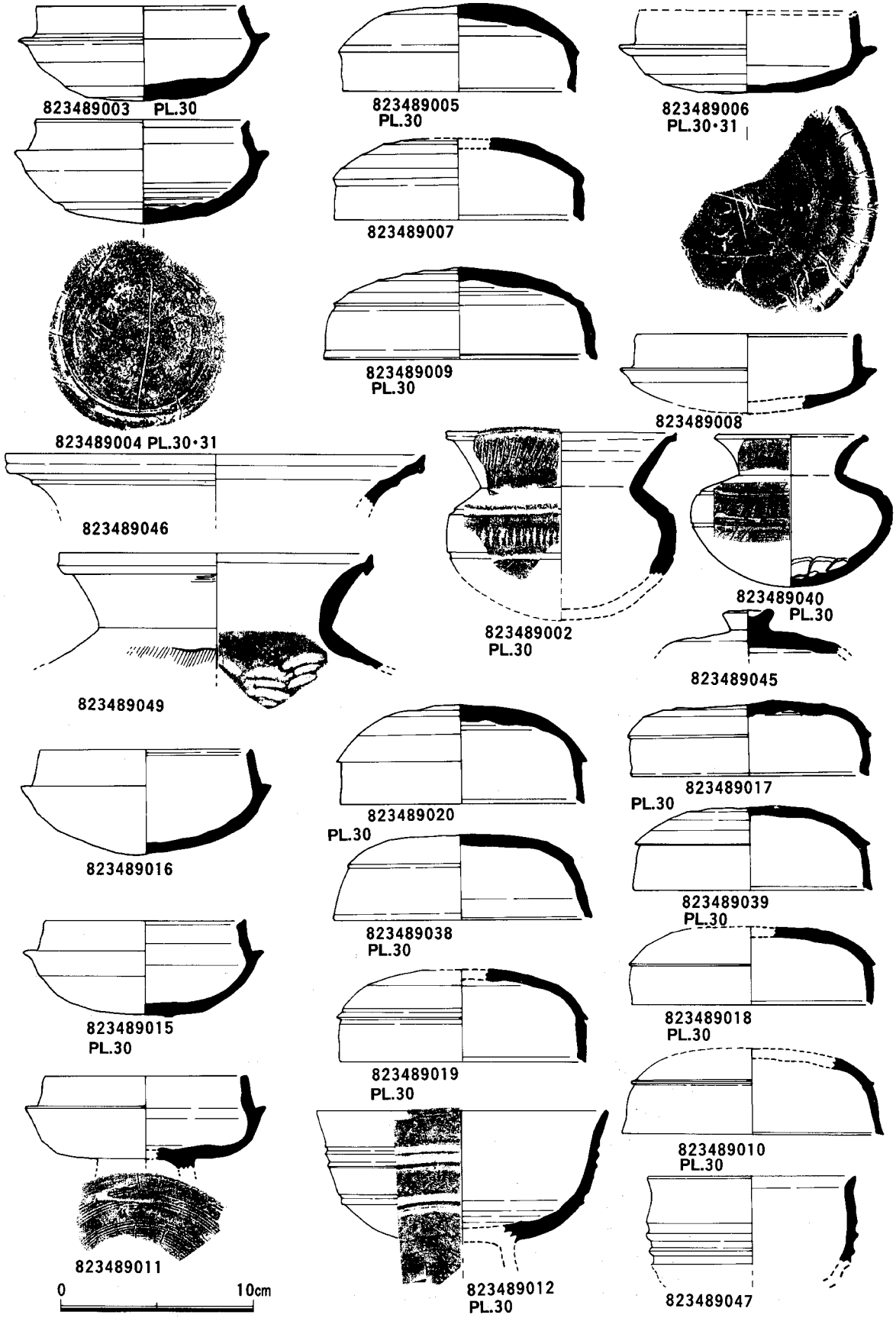


Fig. 60 Ⅷ区出土遺物実測図—6(縮尺1/3)

077は外面が刷毛目・ナデ、内面はナデと篦削りを施す。**89029**　須恵器が1点だけ出土した。坏蓋で左回転の篦削り、ナデを施している。復元口径は13.4cm、復元器高は4.35cmである。

ＳＸ－18出土の土器（Fig. 57　PL. 31）

89078～088・090・128・129（Fig. 57）の14点が出土した。**89078～89083**　高坏の・坏部と脚部である。078～081は脚部のみで、脚の形態がそれぞれ違う。078は脚が途中から大きく開くタイプ、079は下についてから開くタイプでそれぞれの端部はシャープである。これに対して080は脚が下についてから開くタイプではあるがシャープさがない。脚径は078が13.4cm、079が11cm、080が11cmである。082・083は坏部であるが、082の口縁端部が外反するに対して083は直線的に開く。調整は082は外面刷毛目、内面ナデ仕上げ、083は内外面ともナデ仕上げである。口径は082が19cm、083が16cmを測る。**084～088・128**は椀形土器である。086・087は皿状を呈するが、一応椀とした。口縁部が外反するもの（085・128）と内湾するもの（084）とに分けられる。調整は基本的にはナデであるが、088は外面が刷毛目を施している。底部は088・084が平底、085・128が丸底である。口径・器高は084が12.6・5.3cm、085が14.5cm、128が12.6・5.3cmを測る。086は口径15cm、087が13・3.2cmで底部に×の篦記号がある。

ＳＸ－19出土の土器（Fig. 58）

89091～094（Fig. 58）の4点が出土した。須恵器の出土はない。**89091・89093**　椀形土器で、093の口縁端部が外反するに対して091は直線的に開き丸みをもつ。調整は内外面ともナデを施す。口径・器高は091が10・4cm、093が14・8cmを測る。**89092**　土師器の壷形土器の口縁部である。頸部が厚く外反しながら外へ延びるが端部は鋭く納める。調整はナデ仕上げ、口径は8・8cmを測る。

89094　高坏の坏部と脚部であるが、坏部は底面が、脚部は裾部がない。しかし同一固体であることから図上で復元した。調整は坏部が篦削りの後ナデ、脚部はナデと篦削りを施す。口径16cm。

ＳＸ－21出土の土器（Fig. 58）

89125・126（Fig. 58）の土師器2点が出土した。須恵器の出土はない。**89125**　高坏の坏部である。ナデ調整と思われるが、器面磨耗のため定かでない。口径16.8cmを測る。**89126**　甕形土器の口縁部である。胴部の半分から下は欠損している。外側の器面調整は磨耗しているため不明。内面はナデと篦削りを行っている。内面に煤が付着し黒色に変化している。口径は15.2cmを測る。

ＳＸ－23出土の土器（Fig. 58・61　PL. 30）

89122～124・89091～094（Fig. 58）の土師器3点と89030・031・041（Fig. 61）の須恵器3点が出土した。**89122**　甕形土器の口縁部である。頸部はあまり締まらず外反しながら口唇部でさらに外へ延び端部を丸く納める。外側の器面調整はナデと細かい刷毛目、内面はナデと篦削りを行っている。口径20.4cm。**89123**　高坏の坏部である。内外面の器面調整は磨耗しているため不明。口径16cm。

89124　椀形土器である。器面調整は外面がナデと篦削り、内面はナデと篦状工具にによる磨き及びナデを施す。口径は14.2cm、器高6.2cmを測る。**89030**　須恵器の坏身である。受部は高く2cmを測り、内面回転ナデ、外面左回りのロクロ回転による篦削りとナデを行っている。底部はないが、復元器高は5cm、口径11.4cmを測る。**89031**　つまみを持つ坏蓋である。つまみは中央が凹むが中心で僅かに上がるタイプで、受部は高い。外面は左回りのロクロ回転によるナデ・篦削り、内面は回転ナデと押えを行っている。口径12.8cm、器高5.1cmを測る。**89041**　小型の高坏の坏部と思われる。形状がＳＸ－15から出土した89021に類似する。沈線を一条巡らすが、その下に櫛描波状文を施文する。口径12cm。

ＳＸ－24出土の土器（Fig. 58　PL. 31）

89113～118（Fig. 58）の土師器6点が出土した。須恵器の出土はない。**89113・115・118**　3点とも椀形土器である。113はＳＸ－24と25との資料が接合したものである。器面調整は磨耗の

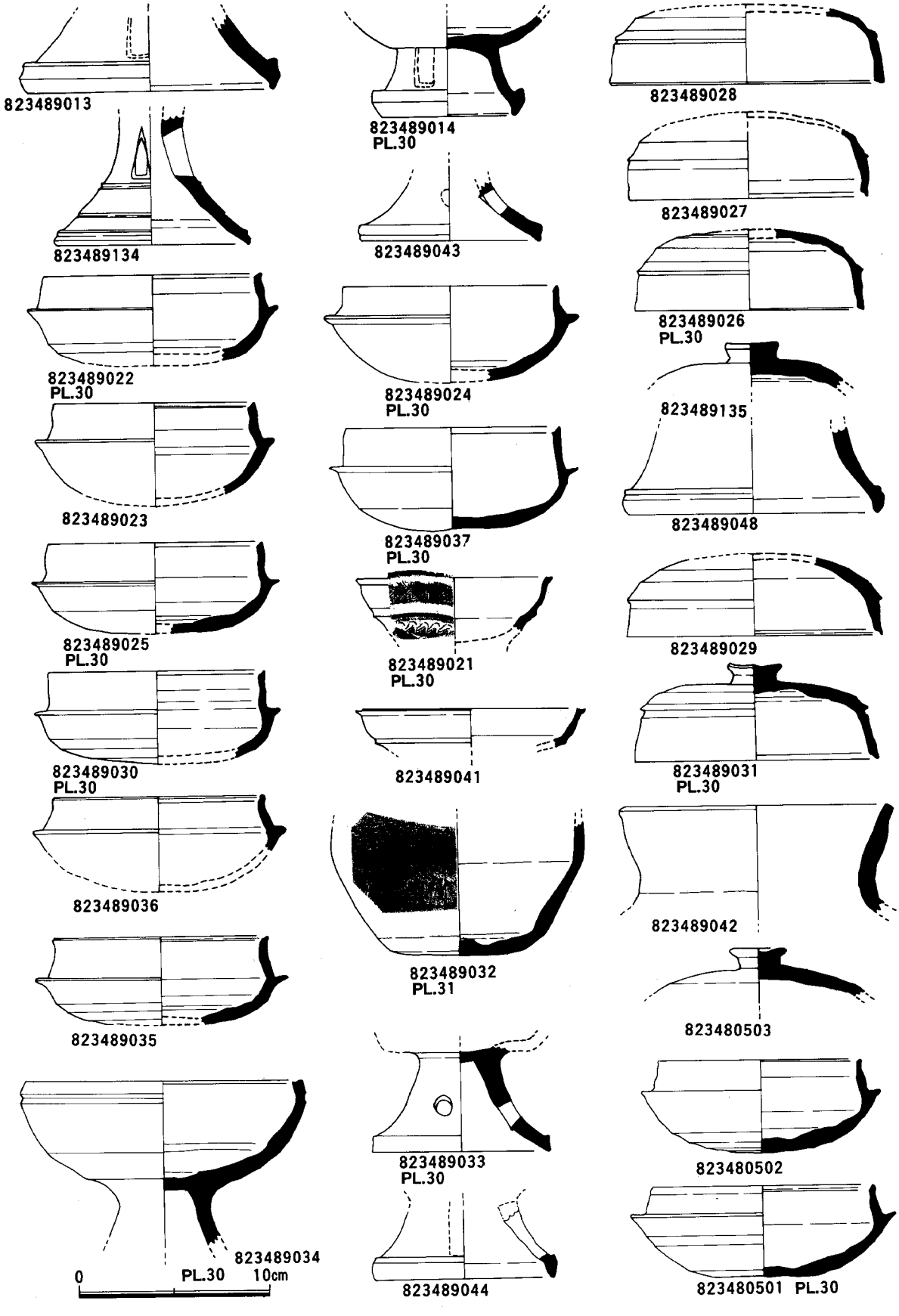


Fig. 61 Ⅷ区出土遺物実測図—7（縮尺1/3）

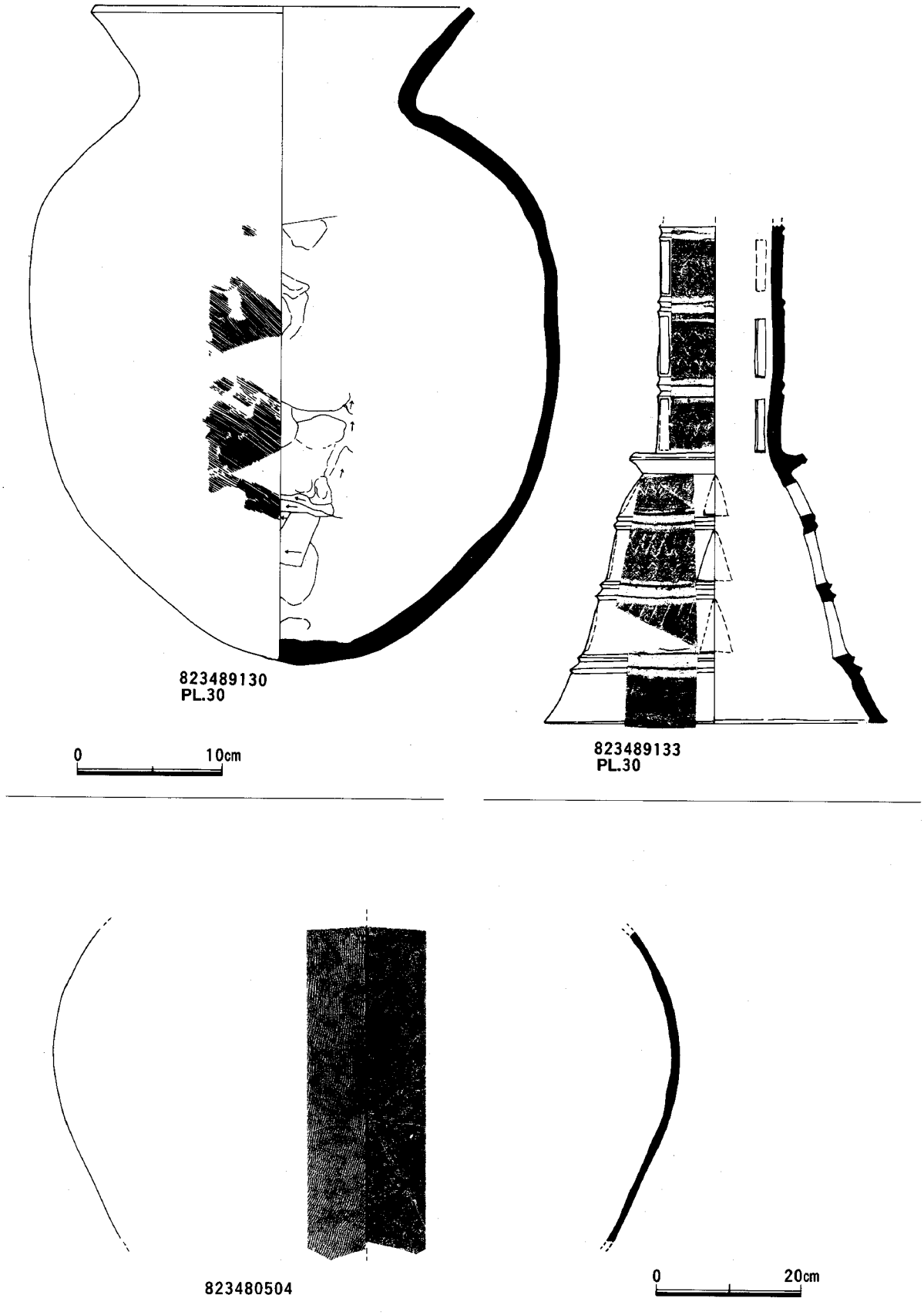


Fig. 62 Ⅷ区出土遺物実測図ー8（縮尺1/4,1/8）

ため不明。口径12.6cm、器高4.6cm。115は口縁に指押えの痕跡が残りその上からナデを施す。口径10cm、器高4cm。118は底部が欠損したもので、口径14cmを測る。**89114**　鉢形土器で、底部が欠損している。胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、端部を鋭くまとめる。外面は刷毛目とナデ、内面はナデ調整を施す。口径10.4cm。116は甕形土器の口縁部である。口径23.8cm。117は壷形土器の口縁部である。「く」字口縁を呈し、外面ナデ、内面ナデと篦削りを施す。口径10cm。

ＳＸ－25出土の土器（Fig. 58・61　PL. 31）

89119～121（Fig. 58）の土師器3点と89032・042（Fig. 61）の須恵器2点が出土した。**89119**　土師器の椀形土器である。調整は器面摩滅のため不明。口径14.8cm。**89120・121**　高坏の脚部である。脚径は120が12cm、121が10cm。**89032**　須恵器の壷形土器の底部である。口縁部が欠損している。器面調整は外面が回転ナデと櫛描波状文を配し、内面は回転ナデである。底径7cm。胴部下に粘土帯を貼り付けた痕跡がある。**89042**　壷形土器の口縁部である。口径14.4cmを測る。

ＳＸ－27出土の土器（Fig. 58・59・61・62　PL. 30・31）

89095～109・131（Fig.58・59）16点の土師器と89033～036・044・130（Fig.61・62）6点の須恵器を図示した。

土師器　甕形土器　**99・100・105・131**の4点を図示した。**99・100・105**は口縁が「く」字口縁となるタイプである。外面はナデ調整、内面がナデ・篦削りを行っている。口径は99が18.4cm、100が13.4cm、105が19.4cmである。131は全体的に器壁が薄い。1cm前後であるが、焼成は良い。口縁部がやや外に傾くがほぼ垂直に近い。外面は細かな刷毛目調整を行っている。内面は剥落しているため不明であるが、口縁部はナデ仕上げである。口径24.4cm、器高57.3cm、最大径4.9cmを測る。**鉢形土器**　**101**の1点を図示した。底部は欠損しているが、頸部が締まらず口縁は大きく外へつまみ出されている。外面の器面調整は縦と斜めの叩きである。内面は丁寧なナデ仕上げを行う。口径25cm。**高坏**　坏部2点と脚部2点を図示した。**095**の外面は横ナデと刷毛目、内部は磨耗しており不明。口径15.6cm。**096**は内外面とも刷毛目調整を施し、口径19.6cmを測る。**097・098**は脚部で、097の脚部径12cm、098が9.6cmである。

壷形土器　**103・104**を図示した。**103**は底部を欠損、**104**は口縁部を欠損する。両方とも外面は刷毛目、内面はナデと篦削りを施す。103の口径は9・6cmを測る。**椀形土器**　**102**の1点を図示した。底部を欠損するが、全容は知り得る。内外面ともナデ調整で、口径13.2cm、器高6cmを測る。

甑　**89106～109**　107～109は甑の把手である。**106**　口縁部と左把手部分を欠く。底部に楕円形を呈する穴を有する。外面は刷毛目で、一部に黒斑がある。内面は篦削りを施す。底径13cmである。

須恵器　坏身　**035・036**の2点を図示した。035は底部を欠損するが、受部が高く2.1cmで、シャープな造りである。口径11.4cmで、右回転のロクロで篦削り・ナデ調整を行っている。036はほぼ口縁部のみで、035ほど受部は高くない。口径11.2cmである。**高坏**　**033・034・044**　033・044は脚部である。033には外から穿った3個の穿孔(1×1cm)がある。両方とも内外面とも回転ナデを施す。034は脚部が欠損する陶質土器である。口縁外面に一条の沈線を巡らし、口縁端は内湾する形状を呈する。口径14.6cm。

甕形土器　**130**　瓦質に近い陶質土器である。Ⅸ区のＳＤ－07出土の資料と接合した。底部は丸底で、形は張る。頸部は締まり口縁は大きく外反する。外面は細かな刷毛目、内面は指ナデ・篦削りと回転ナデである。口径26.3cm、頸部径18.9cm、最大径36cm、器高45.9cmで焼成は甘く、淡青灰色。

Pit－02出土の土器（Fig. 61・62　PL. 30）

ＳＸ－12を切る形で検出されたPit－2からは、80504の大型甕形土器の胴部を打ち欠き外面を下にして検出されたが、その直上から80501の坏身も出土した。口径11.4cm、器高4.8cmで、左回りの回転でナデ・篦削りを施す。**80504**　外面縦方向の叩き、内面同心円文の後ナデ、最大径86.4cmで自然釉あり。

第六節　第二次調査Ⅸ区　－古墳時代の遺構－

検出遺構

Ⅸ区からは竪穴住居址・溝・掘立柱建物・不整形土壙・井戸状遺構等が検出された。Ⅸ区は7,100㎡を調査し、全体で一番広域を行っている。南側には市道田・飯盛線(吉武遺跡群Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　127集　1986年　福岡市教育委員会刊)の遺構があり、さらに南側にはⅧ区が拡がる。Ⅸ区はＳＤ－01(旧河川：おそらく旧日向川及びその支流と思われる)とＳＤ－02(ＳＤ－01と同様に旧河川)に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複している。特に古墳時代初期の遺構はⅨ区全域に広がっている。

住居址(Fig. 63・65　Tab. 3　PL. 19・20)

Ⅸ区から１軒だけ検出された。全体の削平が著しいためかろうじて残ったものと思われる。このため１間×１間の掘立柱建物は竪穴住居址の可能性が高い。

ＳＣ－80　調査区西側中央部から検出された。中央部を後世の溝により切られているが、このほかには方形及び円形の柱穴が認められるが他の切り合い関係は無い。形状は長方形を呈し、四隅にベット状遺構を配する。ベット状遺構の形状は長方形を呈し、その面積は①が2.6㎡・②が3.6㎡・③が3.15㎡・④が3.15㎡である。主軸は北東－南西、長軸方向はN-45°-Eである。規模は6.2m×7.7mで、床面積47.74㎡を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.14mしかない。主柱穴は３穴で、円形３(他は新しい方形の柱穴で破壊されている)で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

掘立柱建物(Fig. 63～64・66～76　Tab. 9～13　PL. 19・20)

Ⅸ区より検出された掘立柱建物は64棟であるが、図示したのは61棟である。このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱根内から出土したものを基準としているため、時期が多少下がる可能性がある。建物の内、１間×１間も図示したが、削平が著しいため住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はＳＢ－50からを古墳時代の掘立柱建物の番号としている。挿図に沿って説明する。

１間×１間の掘立柱建物(Fig. 66・67　Tab. 9～13　PL. 19・20)

ＳＢ－63～67,70,73～75,79,80,91,95,96(Fig. 66・67　Tab. 9　PL. 19・20)

１間×１間は14棟検出した。**Fig. 66　ＳＢ－63**　調査区中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－64・62との間に切り合い関係がある。桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 9～13に表示しているが、形状は円形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北－南、長軸方向はN-4°30′-Wである。規模は2.5m×3.1mで、床面積7.75㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。**ＳＢ－64**　調査区中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－63・65・66との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は北－南、長軸方向はN-6°-Eである。規模は2.61m×3.0mで、床面積7.83㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。**ＳＢ－65**　調査区中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－64・66・67との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。③を除いて二段掘りをしている。主軸は北－南、長軸方向はN-3°30′-Eである。規模は2.38m×3.1mで、床面積7.38㎡を測る。ＳＢ－66　調査区中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－64・65との間に切り合い関係がありＳＢ－63と接する。柱穴の形状は円形である。主軸は北東－南西、長軸方向はN-43°-Eである。規模は2.90m×3.1mで、床面積8.99㎡を測る。**ＳＢ－67**　調査区中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－65・68との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であ

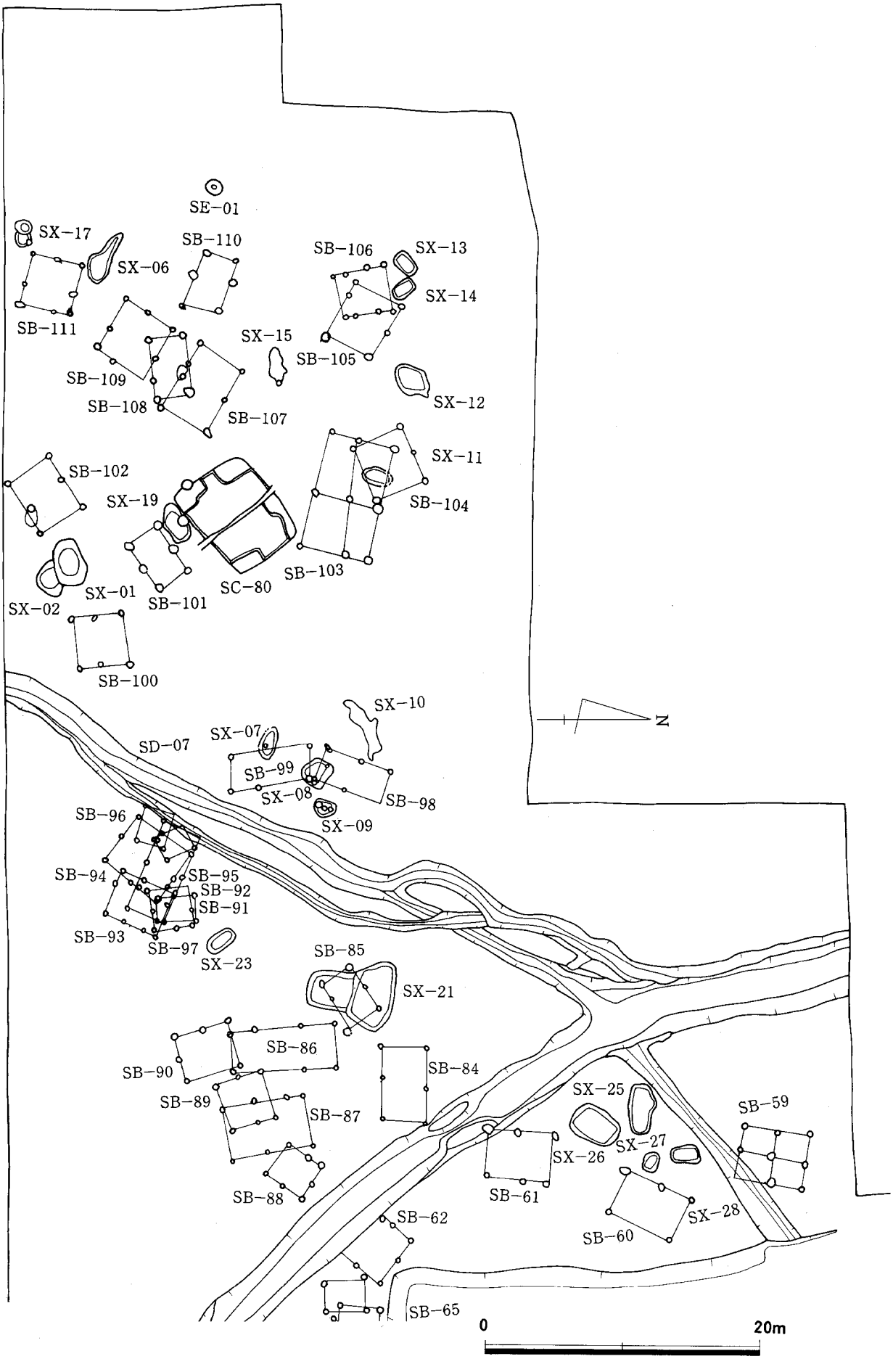


Fig. 63　Ⅸ区遺構検出状態−1（縮尺1/400）

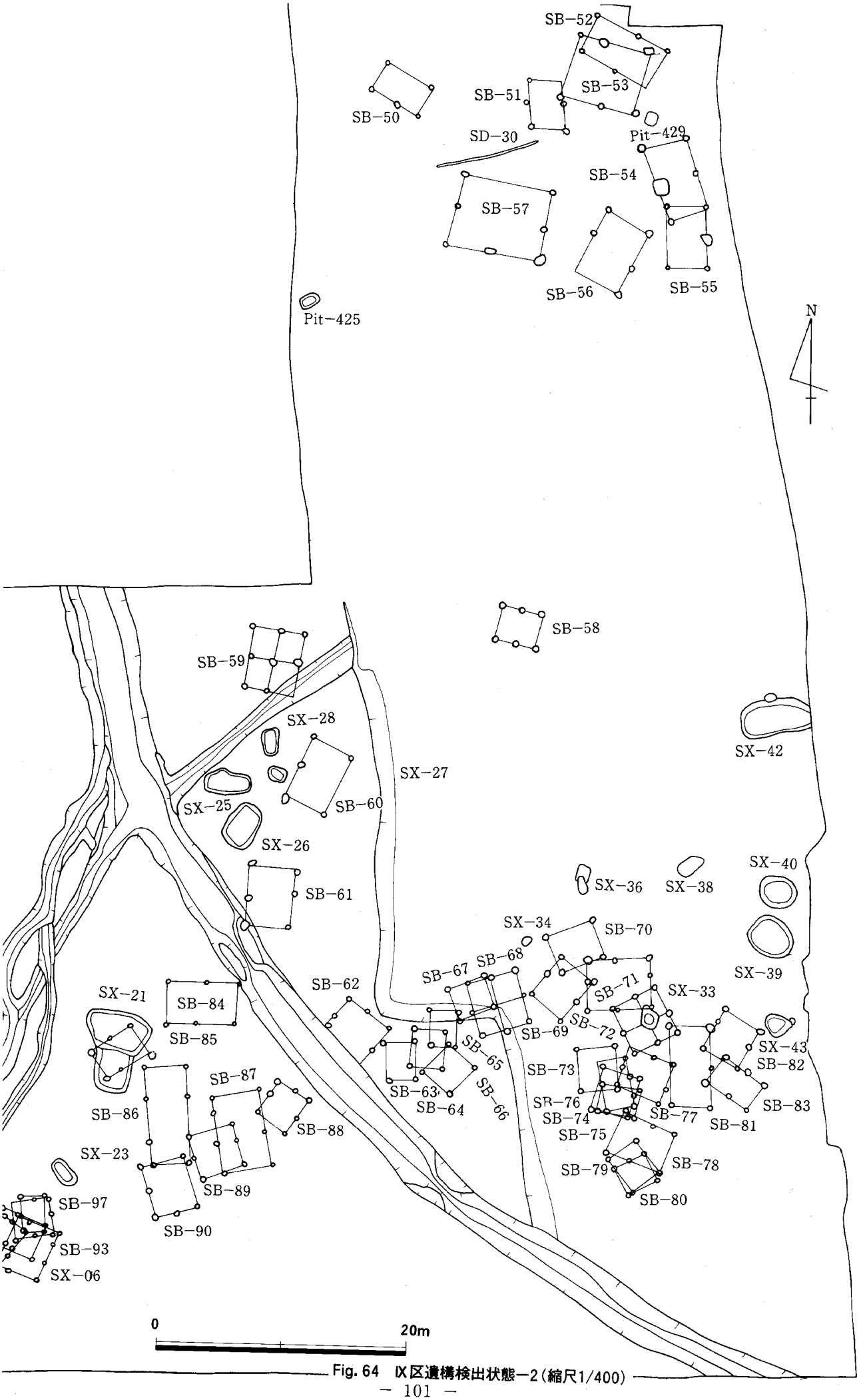


Fig. 64　Ⅸ区遺構検出状態−2（縮尺1/400）

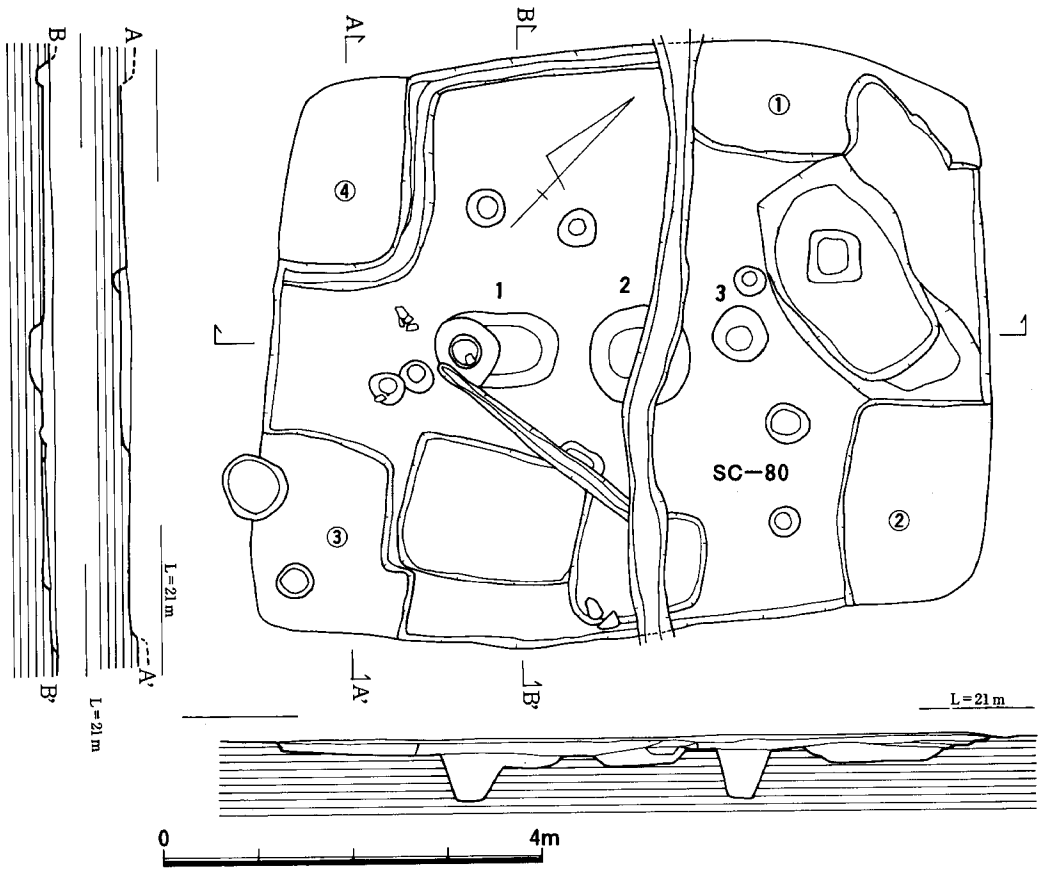


Fig. 65　Ⅸ区検出竪穴住居祉実測図（縮尺1/80）

る。主軸は北東－南西、長軸方向はN-61°-Eである。規模は2.7m×3.1mで、床面積8.37m²を測る。

ＳＢ－70　調査区南東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB－69･71との間に切り合い関係がある。隣接してＳＸ－34がある。柱穴の形状は円形である。主軸は東－西、長軸方向はN-69°-Eである。規模は3.16m×4.04mで、床面積12.77m²を測る。**ＳＢ－73**　調査区南東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB－74･76との間に切り合い関係があり、ＳＢ－77と接する。柱穴の形状は円形である。主軸は北－南、長軸方向はN-4°-Wである。規模は3.0m×3.42mで、床面積10.26m²を測る。

ＳＢ－74　調査区南東部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－73・76・78との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は北－南、長軸方向はN-13°30′-Eである。規模は3.06m×3.56mで、床面積10.89m²を測る。

Ｆｉｇ.67　ＳＢ－75　調査区南側東部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－73・74・76・77との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は東－西、長軸方向はN-79°-Wである。規模は2.34m×3.02mで、床面積7.07m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－79　調査区南側東部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－60･78･80との間に切り合い関係があり、柱穴の形状は円形である。主軸は北西－南東、長軸方向はN-36°30′-Wである。規模は2.7m×3.24mで、床面積8.75m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

ＳＢ－80　調査区南側東部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－78・79との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、主軸は北東－南西、長軸方向はN-63°30′-Eである。

規模は2.5m×2.9mで、床面積7.25㎡を測る。**ＳＢ－91**　調査区南側東中央部市道田・飯盛線の隣接部分から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－93・97・94・95との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、主軸は北－南、長軸方向はN-2°-Wである。規模は1.9m×3.0mで、床面積5.7㎡を測る。柱痕内より土師器片が出土している。**ＳＢ－95**　調査区南側中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－92・94・96のとの間に切り合い関係があり、ＳＤ－07の支流により切られている。このため柱穴④は検出されなかった。柱穴の形状は円形である。主軸は北西－南東、長軸方向はN-27°-Wである。規模は1.9m×2.24mで、床面積4.3㎡を測る。

ＳＢ－96　調査区南側中央部から検出された１間×１間の掘立柱建物である。ＳＢ－92・94・95のとの間に切り合い関係があり、ＳＤ－07の支流により切られている。柱穴の形状は円形である。主軸は北西－南東、長軸方向はN-74°30′-Wである。規模は2.04m×2.92mで、床面積5.96㎡を測る。

１間×２間の掘立柱建物（Fig. 67～72　Tab. 9～12　PL. 19・20）

１間×２間の掘立柱建物はⅨ区で一番多く30棟検出された。

ＳＢ－50　調査区北側隅から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形であるが、削平が著しい。長軸の⑥が現存しないが、削平が著しいため削平された可能性が高い。主軸は北西－南東、長軸方向はN-59°-Wである。規模は2.68m×4.04mで、床面積10.83㎡を測る。**ＳＢ－51**　調査区北側中央部から検出され、ＳＢ－53との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、東主柱④が削平され検出されていない。主軸は北－南、長軸方向はN-3°-Eである。規模は2.94m×3.96mで、床面積11.64㎡を測る。柱穴③と⑥は二段掘り、他は一段掘りである。**ＳＢ－52**　調査区北側東隅から検出され、ＳＢ－53との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、南東主柱⑥が削平され検出されていない。脇柱があるのは①と②である。主軸は北西－南東、長軸方向はN-63°-Wである。規模は3.3m×6.44mで、床面積21.25㎡を測る。柱穴①と②は二段掘り、他は一段掘りである。

Fig. 68　ＳＢ－53　調査区北側東隅から検出され、ＳＢ－51・53との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは①だけである。主軸は北西－南東、長軸方向はN-76°-Wである。規模は5.3m×6.04mで、床面積32.01㎡を測る。柱穴②と③は二段掘り、他は一段掘りである。柱穴③と⑥、特に③は柱穴②との距離は3.78mあるのに対して柱穴④との距離は1.92mしかない。これはＳＢ－50にも見られたことで、ここの特長かもしれない。**ＳＢ－54**　調査区北東側東隅から検出され、ＳＢ－55との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは②と④にある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-20°30′-Wである。規模は3.5m×6.42mで、床面積22.47㎡を測る。柱穴③は大きなPitで方形の1.12m×1.24mある。二段掘りは①、②、③で、他は一段掘りである。**ＳＢ－55**　調査区北東側東隅から検出され、ＳＢ－54との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-1°30′-Wである。規模は3.4m×4.94mで、床面積16.8㎡を測る。柱穴⑤は方形の大きなPitで0.8m×1.1mある。柱②は削平のためか現存しない。**ＳＢ－58**　調査区の東側中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-74°30′-Wである。規模は2.7m×3.28mで、床面積8.86㎡を測る。二段掘りは③と⑤・⑥で、他は一段掘りである。

ＳＢ－60　調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴は円形・楕円形で、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-24°-Eである。規模は3.5m×5.42mで、床面積18.97㎡を測る。柱穴⑥は削平のためか現存しない。二段掘りは⑤だけで、他は一段掘りである。**ＳＢ－76**　調査区南側東隅から検出され、ＳＢ－73～75・77・78との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-11°-Wである。規模は2.3m×3.92mで、

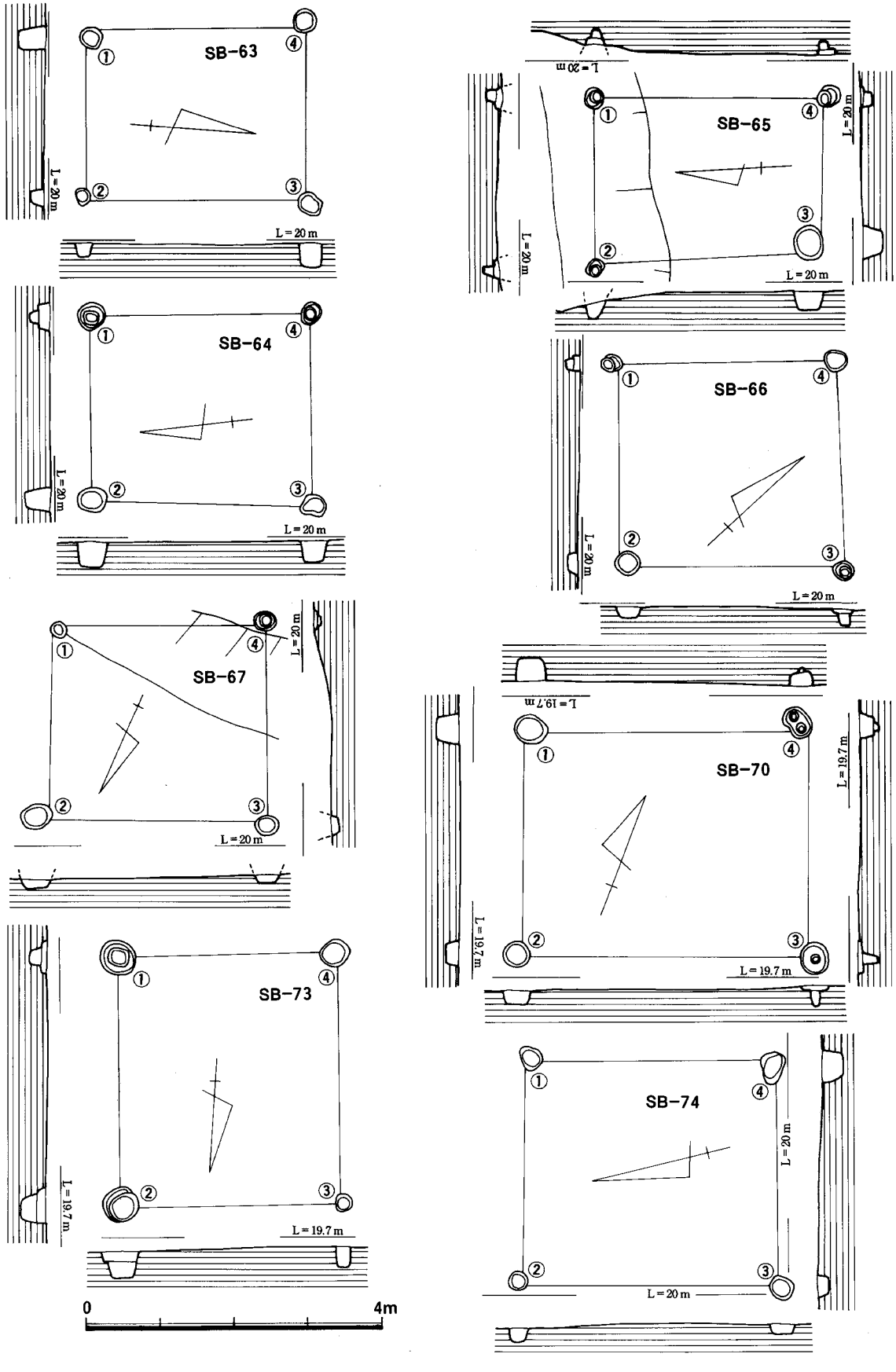


Fig. 66　Ⅸ区掘立柱建物実測図―1（縮尺1/80）

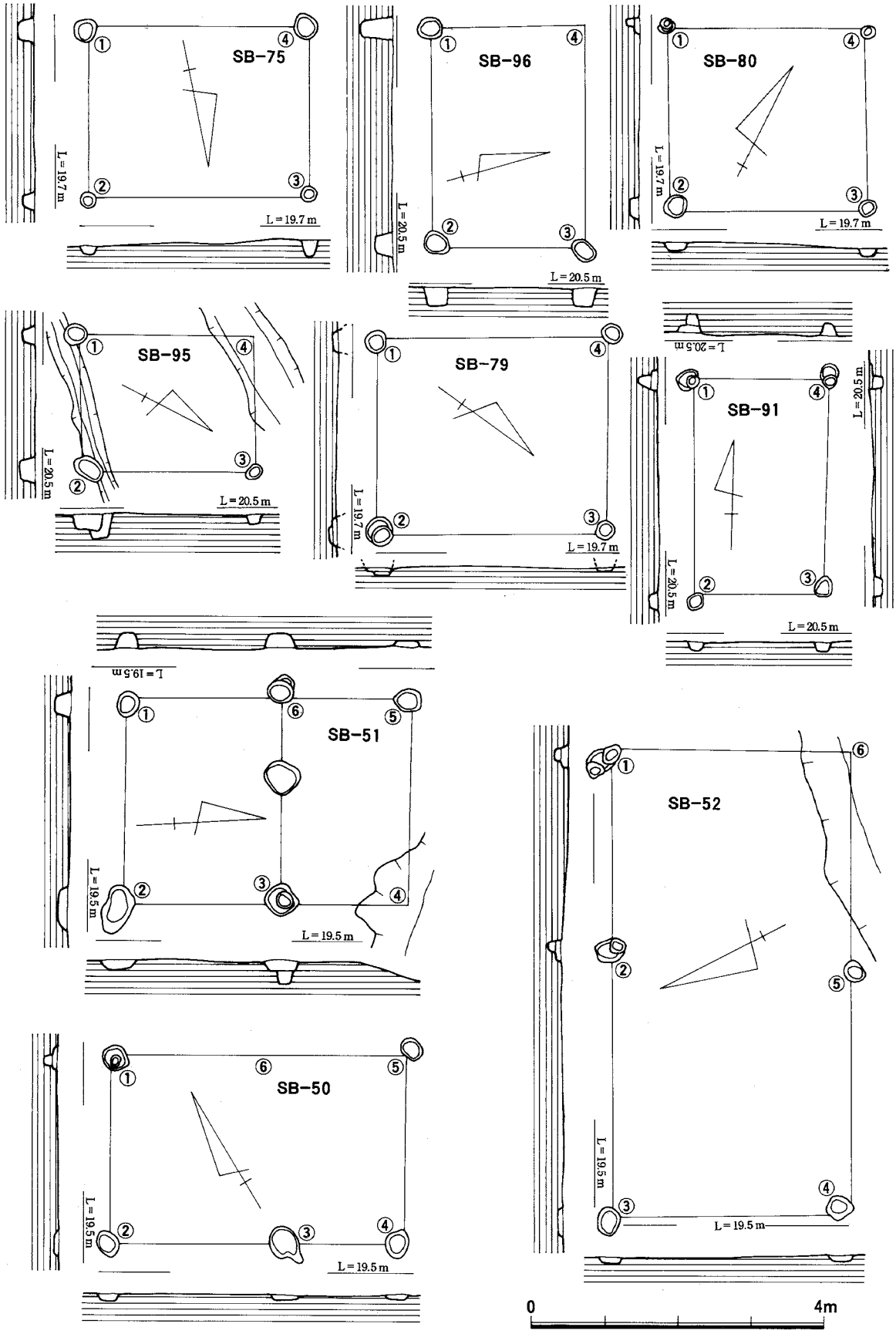


Fig. 67　Ⅸ区掘立柱建物実測図―2（縮尺1/80）

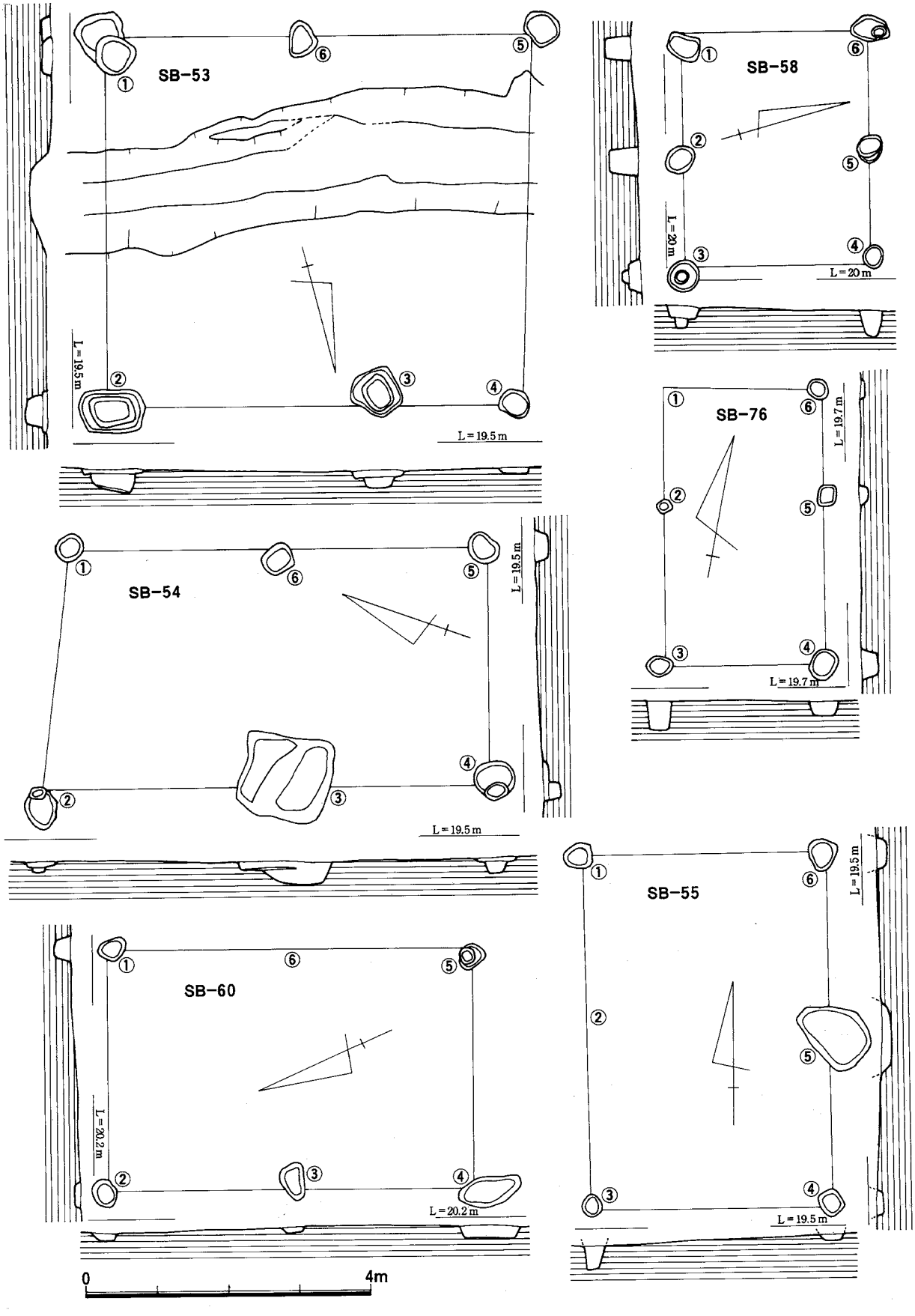


Fig. 68　Ⅸ区堀立柱建物実測図ー3（縮尺1/80）

床面積9.02㎡を測る。柱穴①は削平のためか現存しない。柱痕内より土師器片が出土している。

Fig.69　ＳＢ－56　調査区北側東隅から検出され、切り合い関係はない。隣接してＳＢ－54・55・57がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは①だけである。主軸は北東－南西、長軸方向はN-28°-Ｅである。規模は3.78m×5.7mで、床面積22.80㎡を測る。柱穴①は二段掘り、他は一段掘りである。柱穴①と②、②と③、④と⑤、⑤と⑥の柱穴との間隔が異なる。これはＳＢ－50にも見られたことで、ここの特長かもしれない。⑥の柱穴は削平により確認できない。

ＳＢ－61　調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。隣接してＳＢ－60・ＳＸ－26がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは④と⑥である。主軸は北－南、長軸方向はN-4°-Ｅである。規模は3.6m×5.02mで、床面積18.07㎡を測る。柱穴④と⑥は二段掘りで、他は一段掘りである。①と②の間隔と②と③の間隔が異なり、②が外にずれている。これは田村遺跡群でも検出されている。**ＳＢ－69**　調査区南東側から検出され、ＳＢ－70・71との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-40°-Ｅである。規模は3.3m×3.86mで、床面積13.79㎡を測る。柱穴③が二段掘りで、他は一段掘りである。**ＳＢ－78**　調査区南側東隅から検出され、ＳＢ－79・80・74・75との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、脇柱は⑥にある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-57°-Wである。規模は3.6m×4.56mで、床面積16.42㎡を測る。二段掘りは④で、他は一段掘りである。柱間が①と②、④と⑤がほぼ同じで、②と③、⑤と⑥が同じ間隔をもつ。**ＳＢ－81**　調査区南側東端から検出され、ＳＢ－82・83・77・72との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱は⑤と⑥にある。主軸は北－南、長軸方向はN-1°-Ｅである。規模は3.1m×6.36mで、床面積19.72㎡を測る。この建物の柱間は均等である。二段掘りは⑤と⑥だけで、他は一段掘りである。**ＳＢ－83**　調査区南側東隅から検出され、ＳＢ－81・82との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱は②と④と⑥にある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-54°30′-Wである。規模は2.5m×4.04mで、床面積10.67㎡を測る。この建物の柱間もほぼ均等である。二段掘りは②と④と⑥で、他は一段掘りである。

Fig.70　ＳＢ－84　調査区中央部南側から検出され、切り合い関係はない。隣接してＳＸ－21・ＳＢ－85がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-89°30′-Ｗである。規模は3.5m×5.85mで、床面積20.48㎡を測る。柱穴④と⑤と⑥は二段掘り、他は一段掘りである。これも柱間がずれる。これは他の掘立柱建物でも見られたことで、ここの特長かもしれない。

ＳＢ－85　調査区中央部南側から検出され、ＳＸ－21との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-58°-Ｅである。規模は2.55m×4.1mで、床面積10.46㎡を測る。二段掘りは③と④で、他は一段掘りである。柱穴④と⑤、⑤と⑥の間隔が等間隔ではない。**ＳＢ－89**　調査区中央部南側から検出され、ＳＢ－86・87と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-71°30′-Ｅである。規模は3.7m×3.6mで、床面積13.32㎡を測る。柱穴②から③、③から④は約1·8m前後であるのに対して、柱穴⑤から⑥、⑥から①の間隔は2.2mと1.62mである。**ＳＢ－98**　調査区西側中央部ＳＤ－07付近から検出され、ＳＸ－08との切り合い関係があり、ＳＢ－99・ＳＸ－09・10とに接近している。柱穴の形状は楕円形・円形であり、脇柱は②にある。主軸は北東－南西、長軸方向はN-20°30′-Ｅである。規模は2.74m×5.2mで、床面積14.25㎡を測る。二段掘りは①で、他は一段掘りである。柱穴③がやや中に入る。柱間にも統一性がない。**ＳＢ－100**　調査区西南中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-81°30′-Ｅである。規模は3.96m×3.84mで、床面積15.21㎡を測る。二段掘りは②だけで、他は一段掘りである。

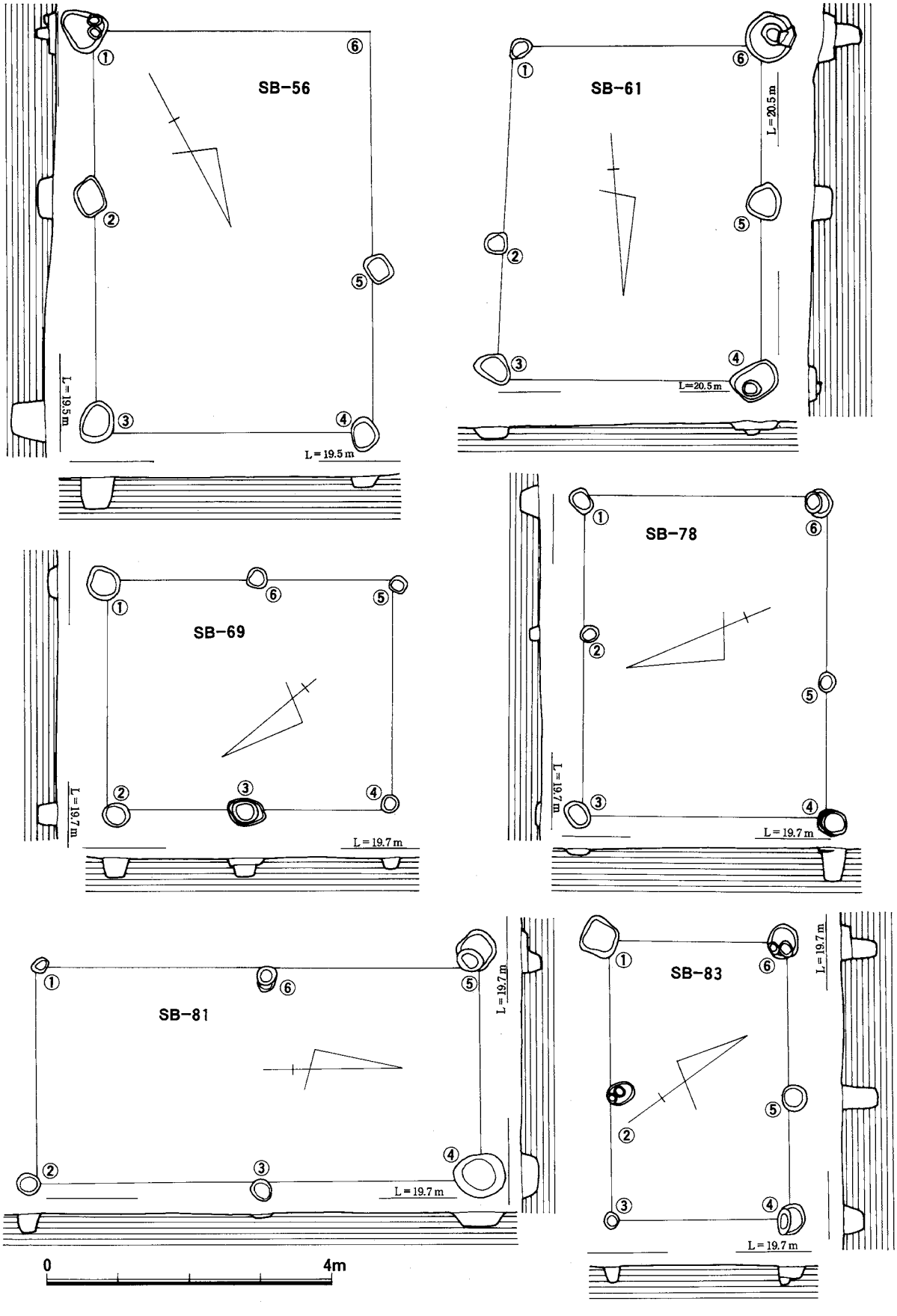


Fig. 69　Ⅸ区掘立柱建物実測図—4（縮尺1/80）

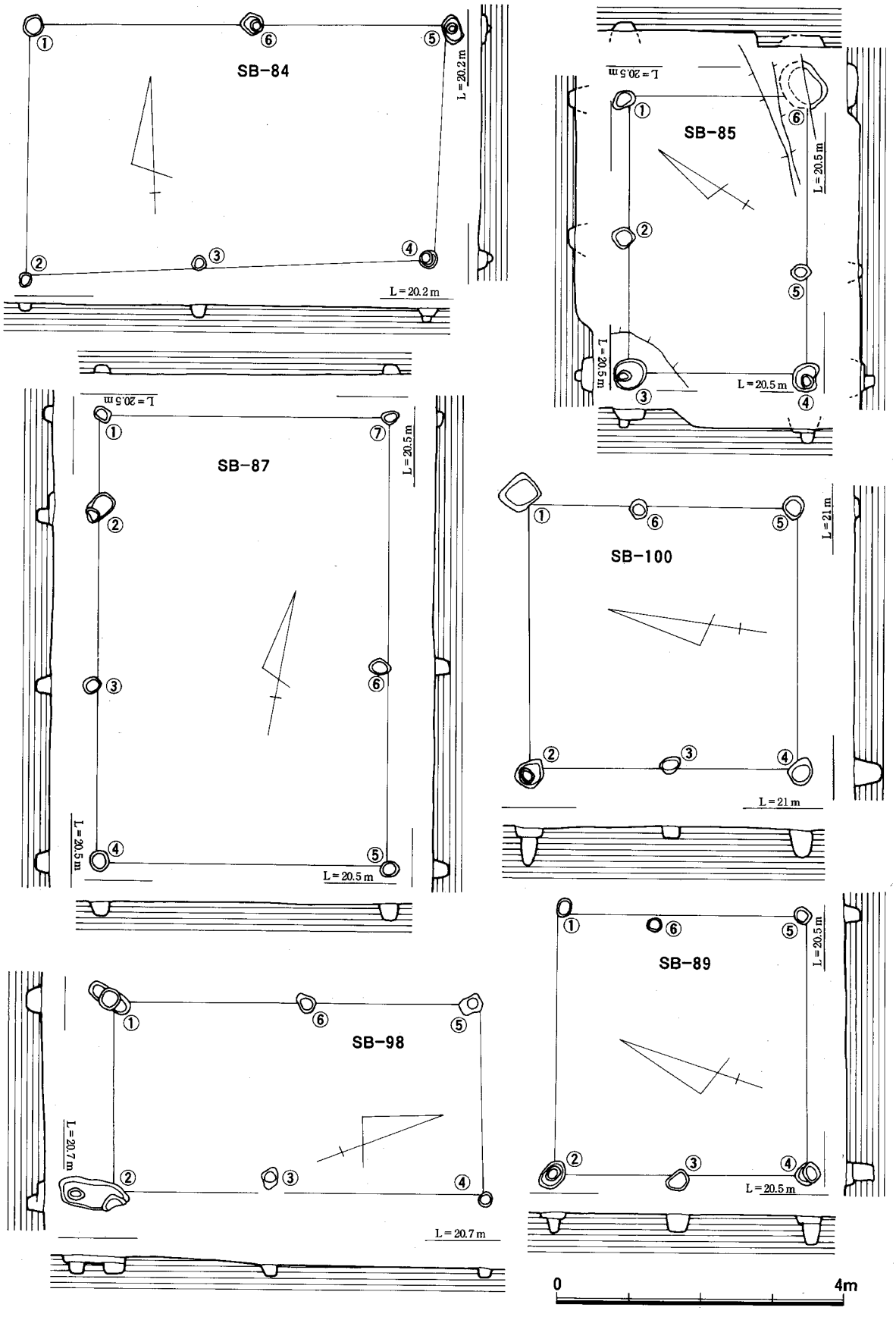


Fig. 70　Ⅸ区掘立柱建物実測図—5（縮尺1/80）

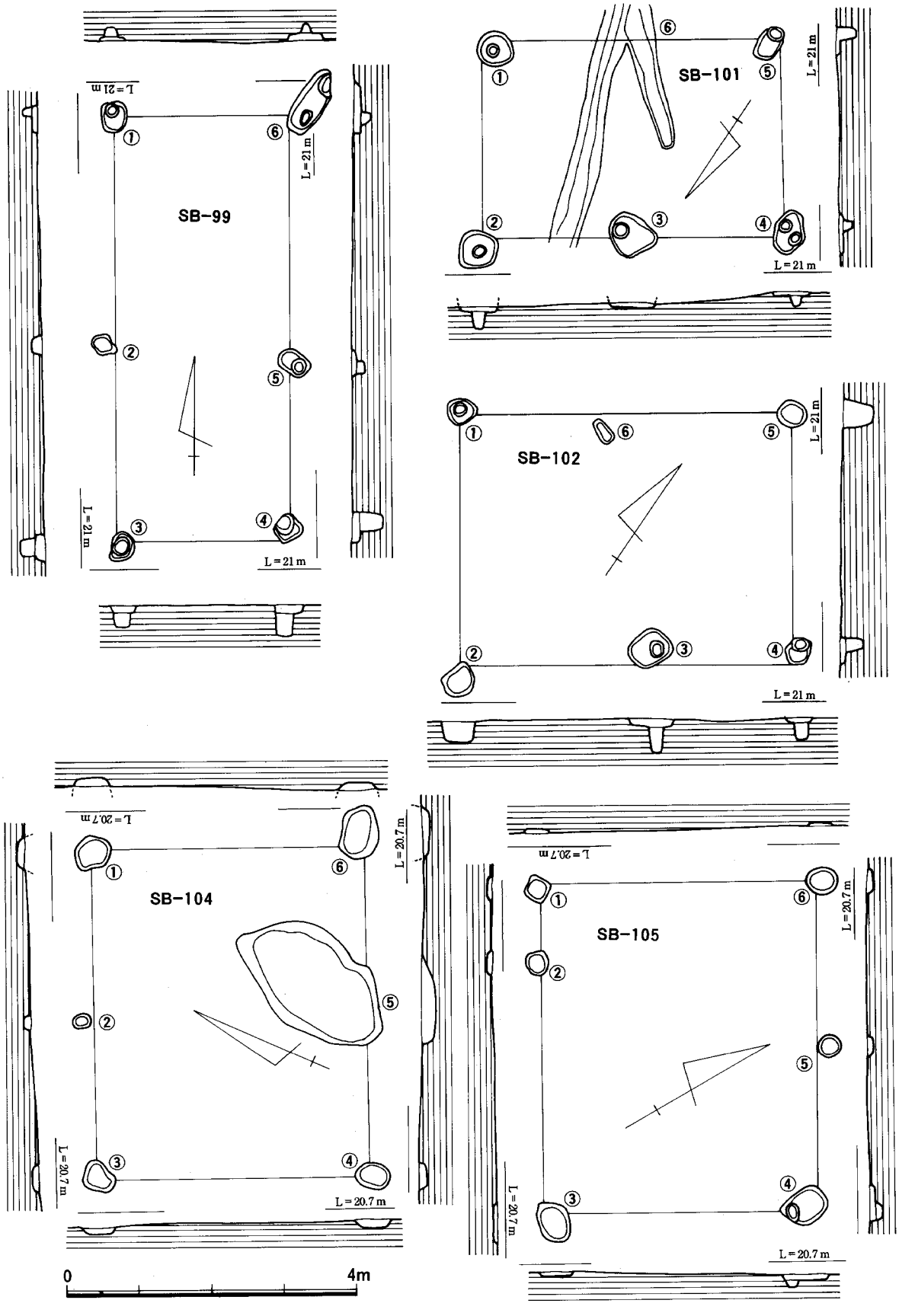


Fig. 71　Ⅸ区掘立柱建物実測図—6（縮尺1/80）

Fig.71　ＳＢ－99　調査区西側中央部から検出され、ＳＸ－07·08との間に切り合い関係がある。隣接してＳＤ－07・ＳＢ－98・ＳＸ－09がある。柱穴の形状は方形・円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-1°30′-Wである。規模は2.7m×5.58mで、床面積16.47m²を測る。二段掘りは①と③と④～⑥で、②だけが一段掘りである。この建物の柱間は等間隔である。

ＳＢ－101　調査区西側中央部から検出され、切り合い関係はないが、隣接してＳＣ－80・ＳＸ－19がある。柱穴は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-55°30′-Eである。規模は2.8m×4.36mで、床面積12.21m²を測る。この柱穴はすべて二段掘りを行っている。

ＳＢ－102　調査区西側南隅から検出され、南に市道田・飯盛線の調査地点がある。切り合い関係はない。柱穴は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-55°30′-Eである。規模は3.8m×4.72mで、床面積17.94m²を測る。二段掘りは①と③と④で、他は一段掘りである。柱穴③と⑥が中に入り、柱間の間隔も異なる。**ＳＢ－104**　調査区西側北から検出され、ＳＣ－80の北側に位置する。ＳＸ－11・ＳＢ－103と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-65°30′-Eである。規模は3.8m×4.8mで、床面積18.24m²を測る。すべて一段掘りである。**ＳＢ－105**　調査区西側北隅から検出され、ＳＢ－106との間に切り合い関係がある。隣接してＳＸ－13・14がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は北西－南東、長軸方向はN-60°-Wである。規模は3.94m×4.64mで、床面積18.28m²を測る。柱間が①と②が1m、②から③が3.64mと間隔が広い。二段掘りは④で、他は一段掘りである。

Fig.72　ＳＢ－107　調査区西側から検出され、ＳＢ－108との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③がある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-58°-Wである。規模は3.88m×5.68mで、床面積22.04m²を測る。二段掘りは②で、他は一段掘りである。

ＳＢ－108　調査区西側から検出され、ＳＢ－107・ＳＢ－109との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は楕円形・円形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-81°30′-Eである。規模は2.68m×4.56mで、床面積12.22m²を測る。二段掘りは①と③と④で、他は一段掘りである。これも①から②の間隔が3.06mに対し、②から③が1.5mと狭い。**ＳＢ－110**　調査区西側から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北西－南東、長軸方向はN-70°30′-Wである。規模は2.6m×4.26mで、床面積11.08m²を測る。二段掘りは②と③と⑤で、他は一段掘りである。

1間×3間の掘立柱建物（Fig. 70・72　Tab. 9～12　PL. 19）

1間×3間の掘立柱建物は3棟検出された。

Fig.70　ＳＢ－87　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－88・89と切り合い関係がある。隣接して同じ方向のＳＢ－90がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-10°30′-Wである。規模は4.0m×6.26mで、床面積25.12m²を測る。柱穴①と③の間に柱穴②があるが、その間隔は1mである。しかし、対応する梁行の柱穴⑥と⑦の間には柱穴がない。柱間は3.46mであることなどから調査時に精査したが、削平されているのか、もともとないのかの判断はつかなかった。柱穴②があることから一応1間×3間の範疇にいれた。

Fig.72　ＳＢ－86　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－89・90と切り合い関係がある。隣接して同じ方向をもつＳＢ－87があり、北側にＳＸ－21がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-5°-Wである。規模は3.3m×7.78mで、床面積25.67m²を測る。二段掘りは①～④と⑥と⑧で、他は一段掘りである。　**ＳＢ－106**　調査区西側北隅から検出され、ＳＢ－105と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北－

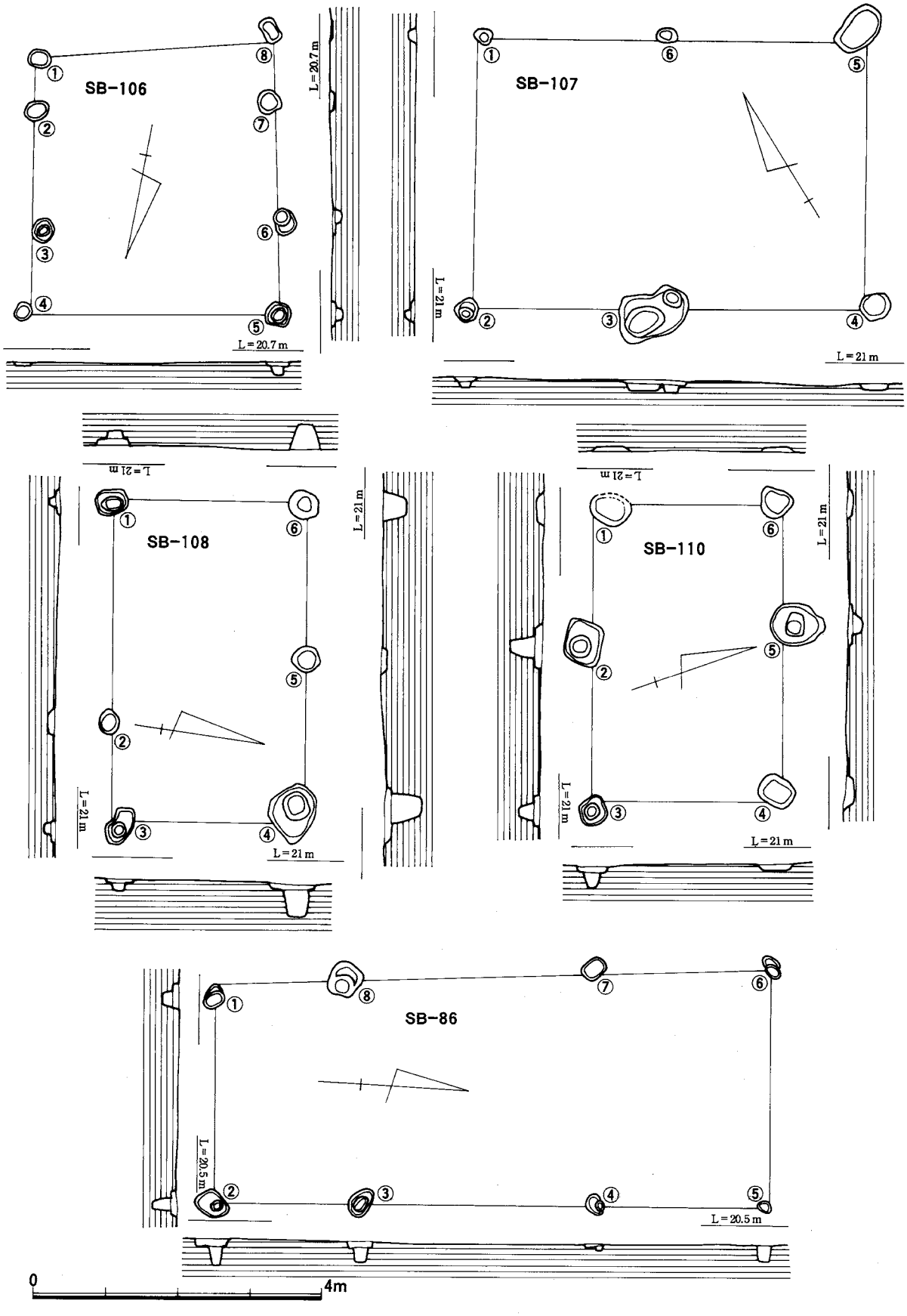


Fig. 72　Ⅸ区掘立柱建物実測図―7（縮尺1/80）

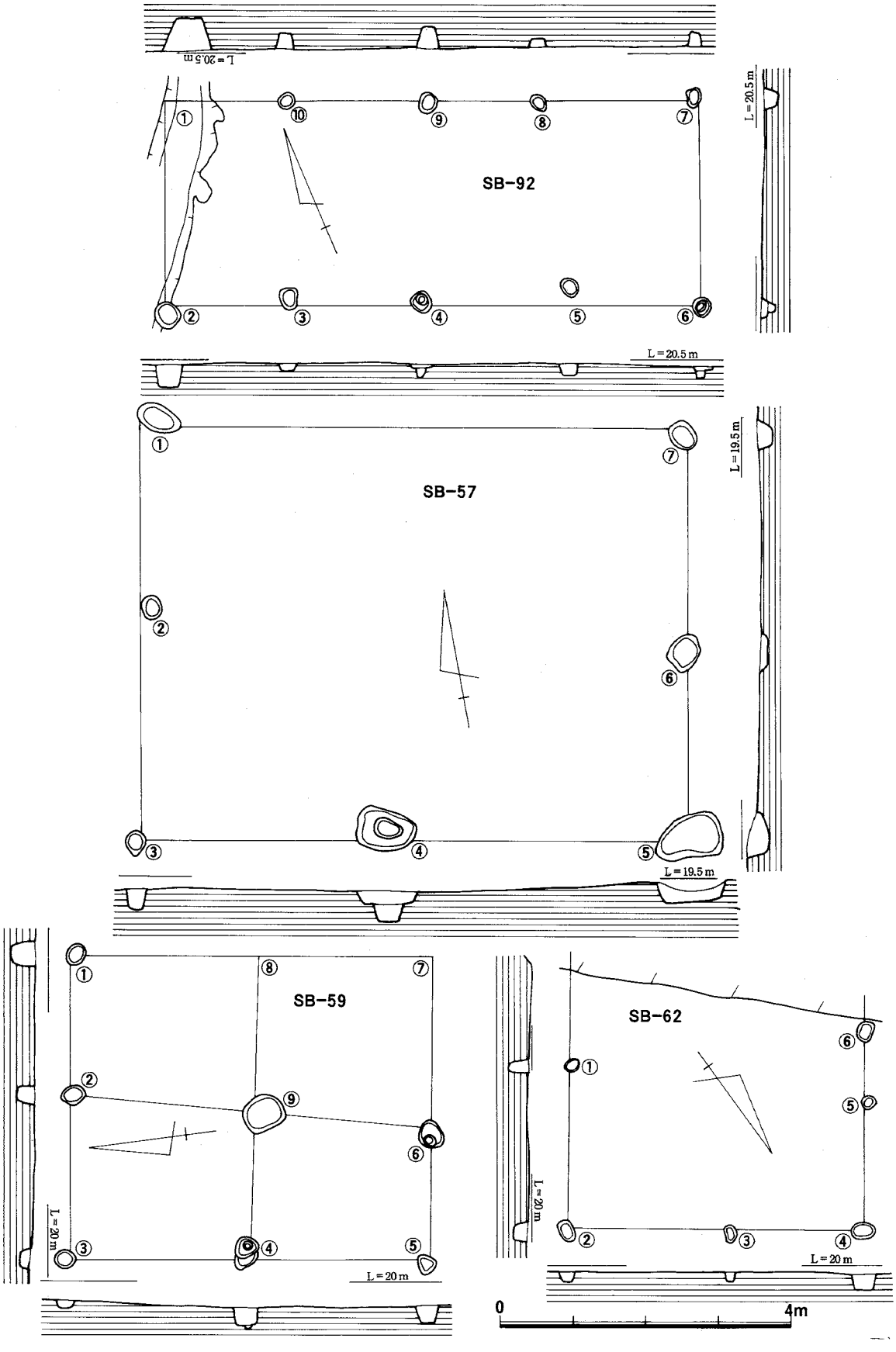


Fig. 73　Ⅸ区掘立柱建物実測図ー8（縮尺1/80）

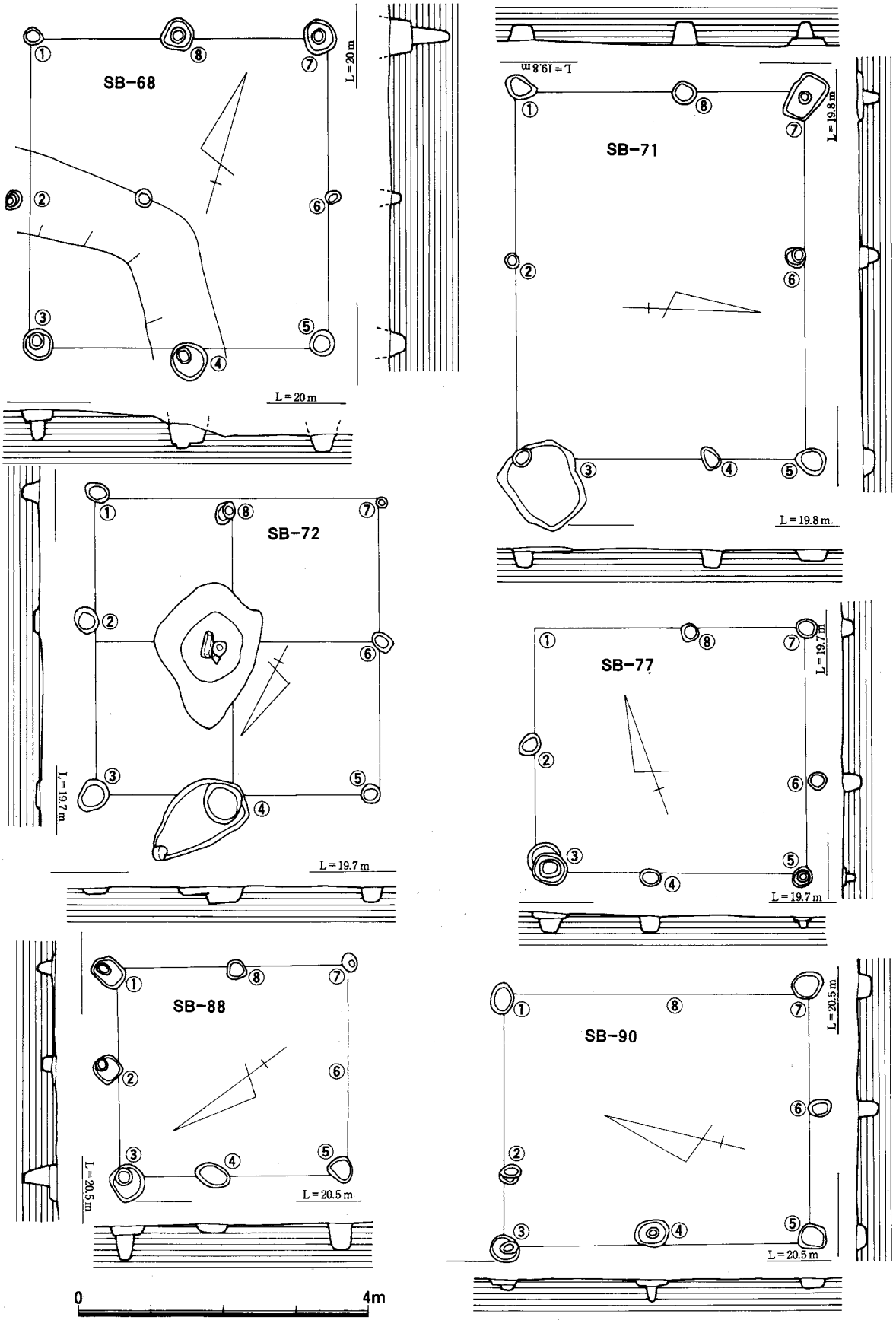


Fig. 74　Ⅸ区掘立柱建物実測図—9（縮尺1/80）

南、長軸方向はN-12°-Wである。規模は3.66m×3.98mで、床面積14.572㎡を測る。柱間は柱穴①～②が0.74m、②～③が1.66m、③～④が1.18mである。これに対して⑤～⑥が1m、⑥～⑦が1.6m、⑦～⑧が1mと間隔が非常に狭い。

1間×4間の掘立柱建物（Fig. 73　Tab. 9～12）

1間×4間の掘立柱建物は1棟検出された。

Fig. 73　SB－92　調査区南側中央部から検出され、SB－91・93～97及びSD－07の支流と切り合い関係がある。SD－07の支流がSB－92から切られる。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北西－南東、長軸方向はN-67°-Wである。規模は3.0m×7.3mで、床面積21.90㎡を測る。柱穴④・⑥が二段掘りで、他は一段掘りである。

2間×2間の掘立柱建物（Fig. 73～76　Tab. 9～12　PL. 19・20）

2間×2間の掘立柱建物は20棟検出された。

Fig. 73　SB－57　調査区北側中央部から検出され、切り合い関係はないが、隣接する遺構はSB－56がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-80°-Eである。規模は5.88m×7.62mで、床面積44.81㎡を測る。柱穴が1個足りないが、この部分は削平が著しくその痕跡はなかった。二段掘りは④だけで、他は一段掘りである。**SB－59**　調査区中央部北側から検出され、弥生時代の溝をきるが、調査時にその痕跡まで掘削してしまった。他の切り合い関係はない。総柱建物で、柱穴の形状は円形であり、脇柱は④にある。主軸は北－南、長軸方向はN-8°-Eである。規模は4.22m×5.0mで、床面積21.10㎡を測る。**SB－62**　調査区中央部から検出され、SD－05によって切られている。隣接する遺構は、SB－63である。柱穴の形状は円形で、脇柱はない。主軸は北西－南東、長軸方向はN-53°30′-Wである。規模は4.06m×3.6m＋αで、床面積11.21㎡＋αを測る。

Fig. 74　SB－68　調査区南側東隅から検出され、SB－67と切り合い関係がある。総柱建物で、柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-15°-Wである。規模は3.96m×4.2mで、床面積17.11㎡を測る。中央部の柱穴が著しくずれるが、問題はないと思われる。二段掘りは柱穴②・③・④・⑦・⑧である。他は一段掘りである。**SB－71**　調査区南側東隅から検出され、SX－33・SB－69・70・72との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。柱間の間隔③と④が2.64m④と⑤が1.4mと異なるが、問題はないと思われる。主軸は東－西、長軸方向はN-88°-Eである。規模は4.04m×5.12mで、床面積20.68㎡を測る。二段掘りしているのは③・⑥・⑦で、他は一段掘りである。**SB－72**　調査区南側東隅から検出され、SX－33・SB－71・77・81との切り合い関係がある。総柱建物と思われるが、中央部の柱穴がSX－33によって破壊されているため定かでない。柱穴の形状は円形であり、脇柱は②にある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-27°30′-Wである。規模は3.84m×4.2mで、床面積16.63㎡を測る。二段掘りは④と⑧で、他は一段掘りである。**SB－77**　調査区南側東隅の一番切り合いのある場所から検出され、SB－72～76・81と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③にある。主軸は北西－南東、長軸方向はN-70°-Wである。規模は3.46m×3.5mで、床面積12.11㎡を測る。柱穴①が削平されて現存しないが、建物として考えても良いであろう。中央部の柱穴は桁行・梁行とも均等ではなくずれているが、Ⅷ区・Ⅸ区の建物のほとんどがこのタイプであることから、この遺跡の特長と考えられる。**SB－88**　調査区中央部南側から検出され、SB－87との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-35°-Eである。規模は2.9m×3.46mと小型で、床面積10.03㎡を測る。二段掘りは①～③で他は一段掘りである。柱穴⑥が削平されて確認できなかった。

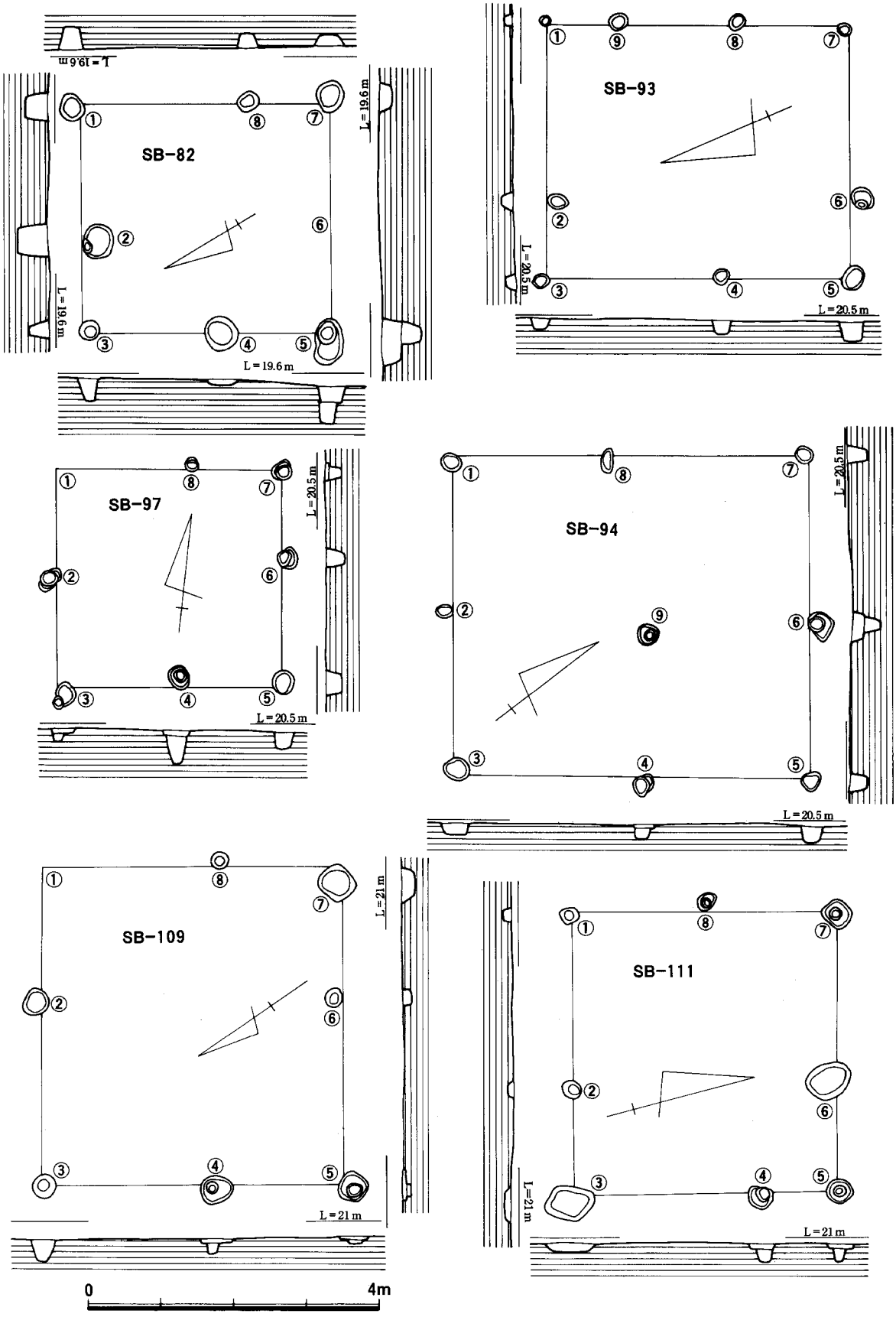


Fig. 75　IX区掘立柱建物実測図—10（縮尺1/80）

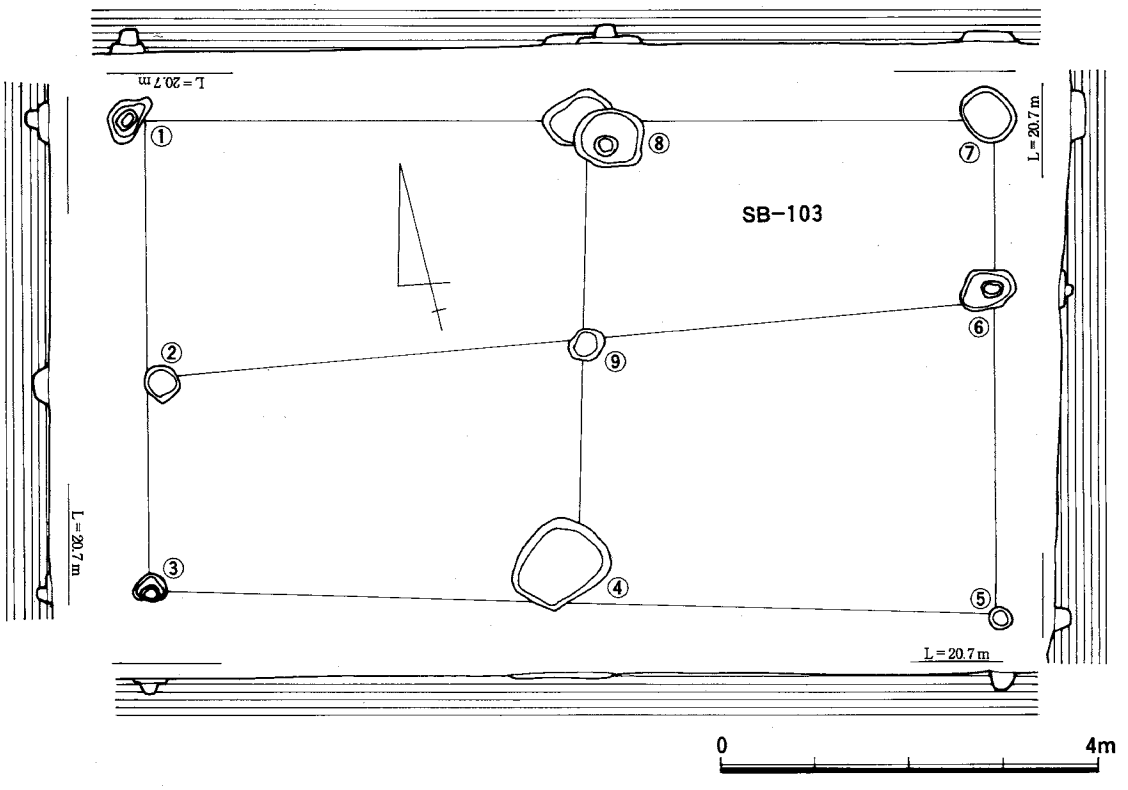


Fig. 76　Ⅸ区掘立柱建物実測図－11（縮尺1/80）

ＳＢ－90　調査区中央部南隅から検出され、ＳＢ－86と切り合い関係がある。柱穴は円形・方形で、脇柱はない。主軸は北－南、長軸方向はN-14°-Wである。規模は3.54m×4.2mで、床面積14.87㎡を測る。柱穴①と②との間隔は2.4mに対し、②と③は1.06mと狭い。また桁行の中間部の柱穴⑧が削平が著しいために検出できなかった。二段掘りは②～④で、他は一段掘りである。

Fig.75　ＳＢ－82　調査区南側東隅から検出され、ＳＢ－81・83と切り合い関係があり、隣接してＳＸ－43がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-31°-Eである。規模は3.3m×3.56mで、床面積11.75㎡を測る。柱穴⑥が精査しても検出できなかった。四隅の柱穴は深いが、中間の柱穴は浅いものもある。柱間の間隔がずれる⑧や、内に入る柱穴②もある。柱穴内覆土から土師器の細片が出土している。二段掘りは⑤のみで、他は一段掘りである。

ＳＢ－93　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－91・92・94・97と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-24°-Eである。規模は3.6m×4.3mで、床面積15.48㎡を測る。中間の柱の間隔がずれている点と柱穴⑦と①の間に２個の柱穴が配置されていることが気にかかるが、柱がずれている点は間隔が2.4m前後であり、両面とも同じ間隔であることから問題はないと思われる。また柱穴⑦と①の間に２個の柱穴が配置されている点は間隔が1.7m・1.5m・1mであり、柱間の違いで生じたものと思われる。二段掘りは⑥のみで、他は一段掘りである。**ＳＢ－97**　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－91～94との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③にある。主軸は北－南、長軸方向はN-7°-Wである。規模は3.12m×3.22mと小さく、床面積10.05㎡を測る。主柱穴である①が綿密に精査しても検出できなかった。配列からして２間×２間の建物としたが、１間×１間の可能性も否定できない。二段掘りは②～④と⑥～⑧で、⑤だけが、一段掘りであった。④と⑥の柱穴覆土から細片の土師器甕胴部が出土している。**ＳＢ－94**　調査区南側中央から検出され、ＳＢ－91～97と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、総柱の建物である。脇柱はない。主軸は北東－南西、長軸方向はN-

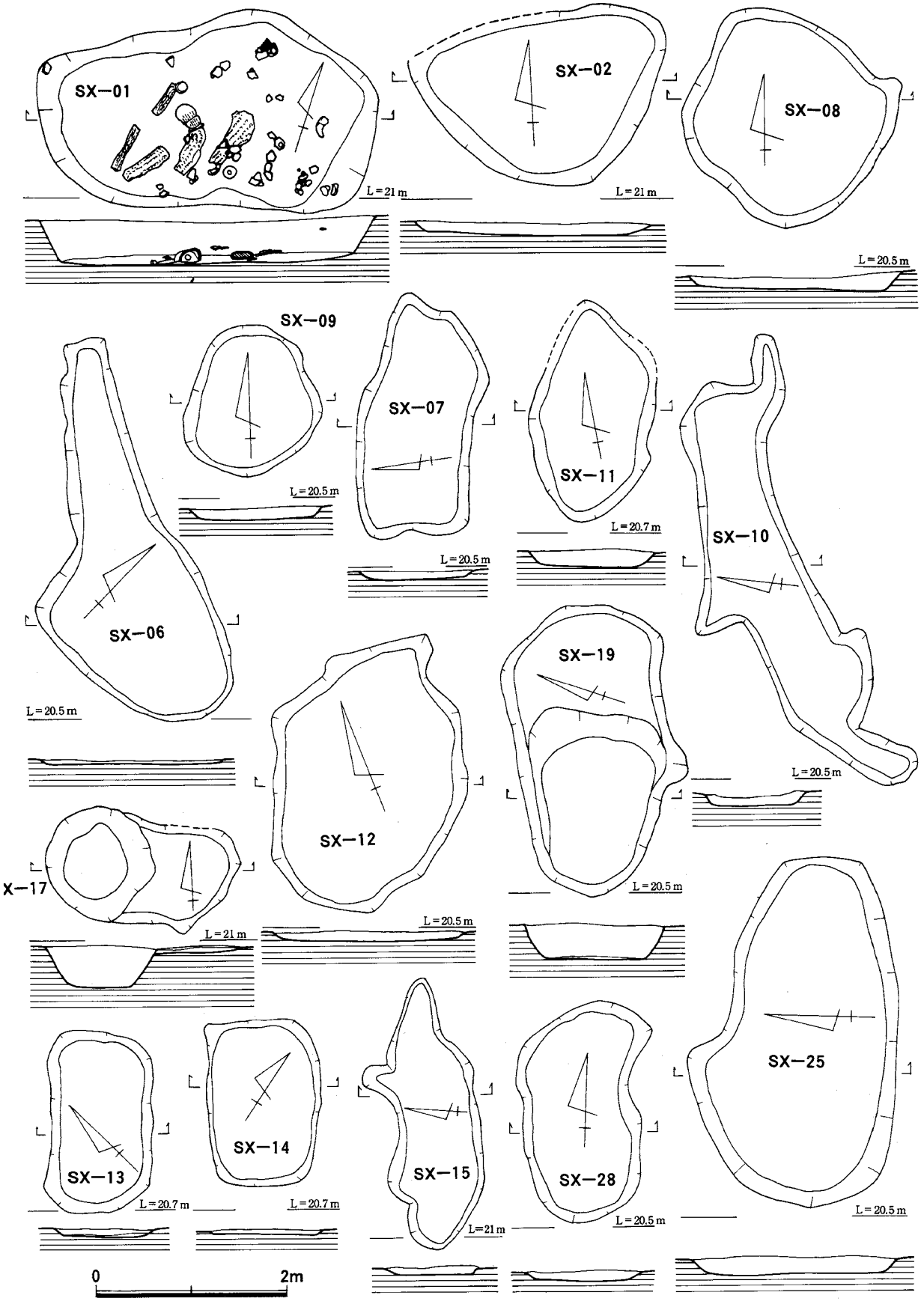


Fig. 77　Ⅸ区不整形土壙実測図−1（縮尺1/60）

37°-Eである。規模は4.52m×4.86mで、床面積21.972㎡を測る。柱間は殆ど等間隔であるが、⑧だけがずれる。①と⑧の間隔が2.14mに対し⑦から⑧の間隔は2.7mと広い。二段掘りは④と⑥と⑨で、他は一段掘りである。④・⑥・⑨の覆土から細片の土師器が出土している。**ＳＢ－109**　調査区西側南隅（市道田・飯盛線の調査区の北側に位置する）から検出され、ＳＢ－108と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北西－南東、長軸方向はN-54°30′-Eである。規模は4.28m×4.38mで、床面積18.75㎡を測る。主柱穴である①が綿密に精査しても検出できなかった。配列からして２間×２間の建物としたが、１間×１間の可能性も否定できない。二段掘りは④と⑤で、他は一段掘りであった。④と⑥の柱穴覆土から細片の土師器胴部が出土している。

ＳＢ－111　調査区西側南隅(市道田・飯盛線の調査区の北側に位置する)から検出され、切り合い関係はないが、ＳＸ－16・17と隣接する。柱穴は円形・方形で、脇柱はない。主軸は東－西、長軸方向はN-75°30′-Wである。規模は3.7m×4.0mで、床面積14.8㎡を測る。柱間の間隔がずれるのは③から⑤の間の④で、③から④の間隔は2.68mであるのに対して④から⑤は１mである。二段掘りは④・⑤と⑦・⑧で、他は一段掘りである。⑤と⑦の柱穴覆土から細片の土師器胴部が出土している。

Ｆｉｇ．76　ＳＢ－103　調査区西側中央部から検出され、ＳＸ－11・ＳＢ－104と切り合い関係があり、ＳＣ－80と隣接する。柱穴の形状は円形・方形で、脇柱は⑧がある。主軸は東－西、長軸方向はN-77°30′-Wである。規模は5.3m×9.08mで、床面積48.12㎡を測る。柱間の間隔がずれるのは⑤から⑦の間の⑥で、⑤から⑥の間隔は3.48mであるのに対して⑥から⑦は1.82mである。二段掘りは①・⑥・⑧で、他は一段掘りであった。

以上がⅨ区の掘立柱建物であるが、ＳＤ－07・05によって台地が３分割される。建物の配置をみると４つの区割りが考えられる。

１、ＳＣ－80を中心としたＳＤ－07から西側の掘立柱建物群
２、ＳＤ－07・05によって区分される掘立柱建物群
３、ＳＤ－05より東側の掘立柱建物群
４、調査区北側の掘立柱建物群

建物群の方向性をみると

ＳＣ－８０と方向を同じくするものは　ＳＢ－79・85・101・102
ＳＤ－０７と平行に建てられたものは　ＳＢ－50・52・56・60・78・93・105・107・109
ＳＢ－９３と方向を同じくするものは　ＳＢ－77・78・92・98・110
ＳＢ－８６と方向を同じくするものは　ＳＢ－55・71・73・84・87・91・97・100・106
ＳＢ－５３と方向を同じくするものは　ＳＢ－58・98・110
ＳＢ－５７と方向を同じくするものは　ＳＢ－59・103

とに区分できるが、市道田・飯盛線の調査及びⅧ区の建物群の配置を考察する必要性があるが、まとめの章で考えてみたい。

ＳＸ（不整形土壙）・井戸状遺構

井戸状遺構　（ＳＥ－０１）

Fig. 79に図示した。調査区の西隅から検出され、切り合い関係はない。形状は円形を呈し、径2.25m、深さ1.55mを測る。底面から僅か30cmの所から湧水する。出土した土器はFig. 81（95001～95007)に図示した。甕形土器・高坏・埦等が出土しているが、１点甕形土器で平底を呈する土器がある。出土遺物から古墳時代の井戸状遺構である。

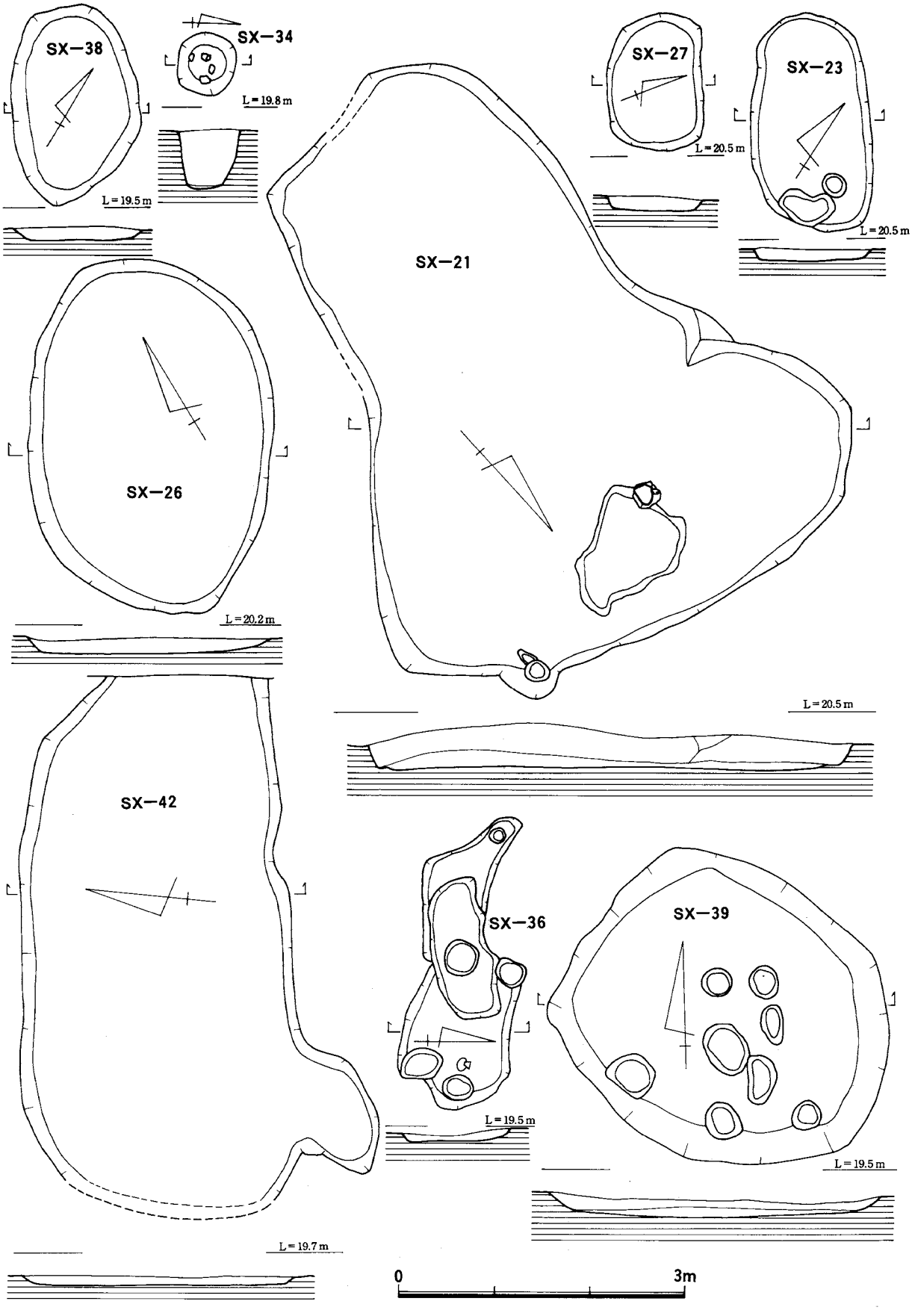


Fig. 78　Ⅸ区不整形土壙実測図−2（縮尺1/60）

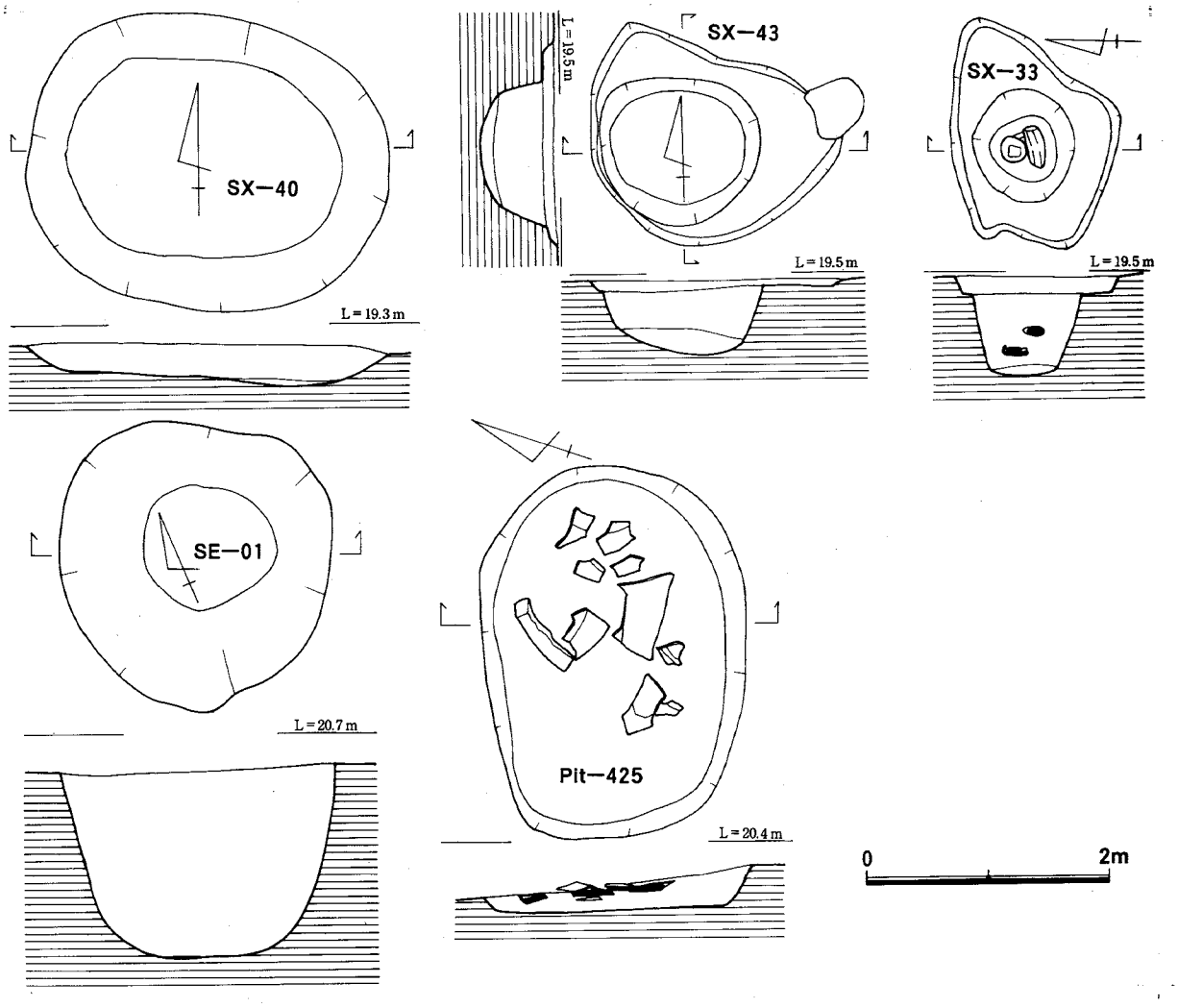


Fig. 79　Ⅸ区不整形土壙実測図−3（縮尺1/60）

ＳＸ（不整形土壙）（Fig. 77～79　Tab. 14　PL. 19・20）

不整形土壙は43基検出したが、図示したものは28基である。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 14に表示しているので、参照していただきたい。遺物が出土している土壙だけ記述する。

ＳＸ－01　調査区の西側南隅から検出され、ＳＸ－02との切りあい関係がある。ＳＸ－01がＳＸ－02をきる形をとる。形状は楕円形を呈し、深さは0.5mと浅い。出土遺物は土師器・炭化物等が出土したが、Fig. 95（99073）の土器を図示した。韓式土器と呼ばれる土師質の壺形土器で、形式的にも古いタイプである。**ＳＸ－21・22**　調査区南側中央部から検出され、ＳＢ－85との切り合い関係を持つ。やや変則な方形を呈し、方形の土壙が２つあり、SB－85の西北隅①と②、③・④と⑤によって切られている。

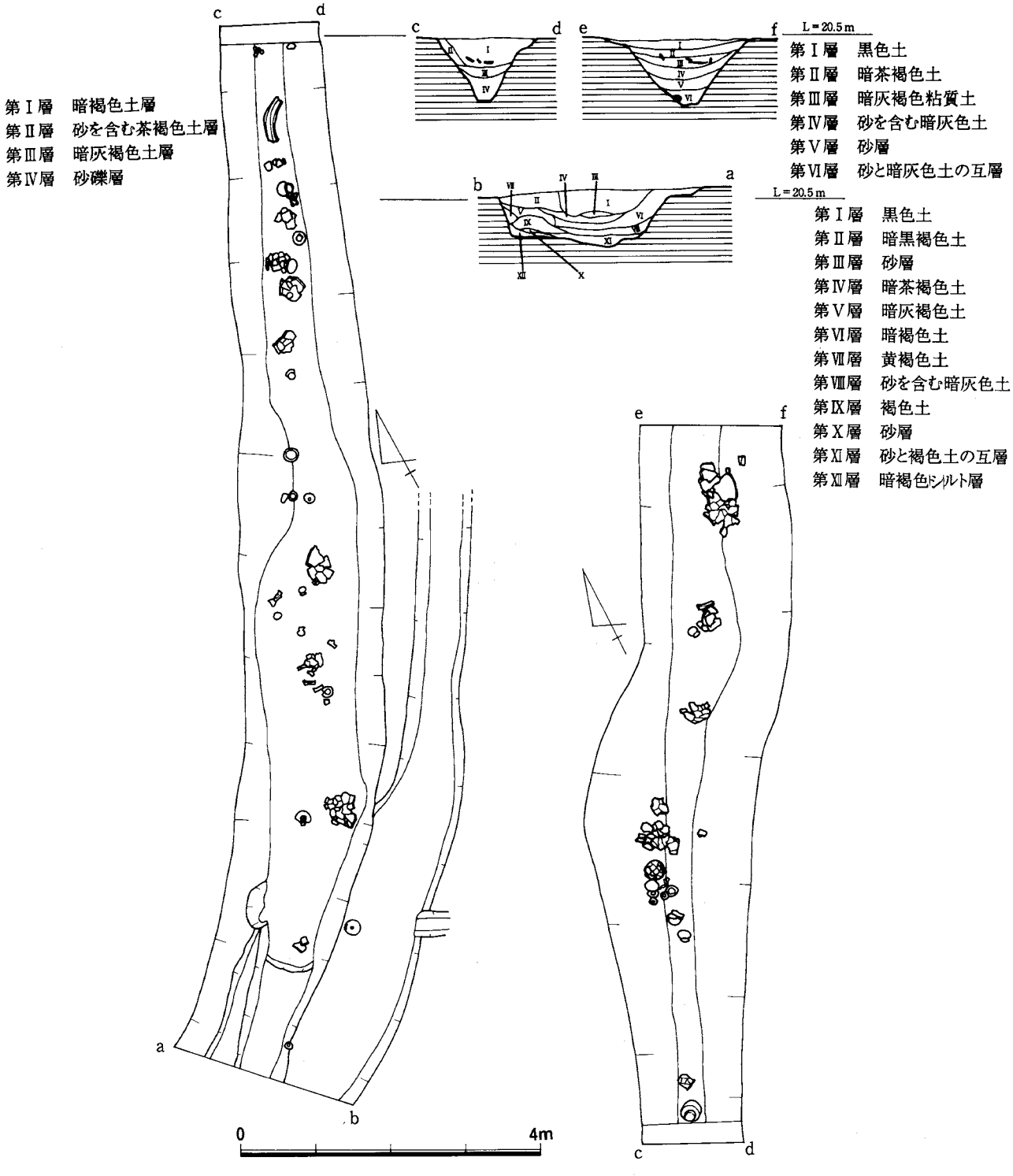


Fig. 80　Ⅸ区検出SD－07平面・断面図（縮尺1/80）

出土遺物は須恵器でFig. 96（92167）が出土している。これはＳＤ－07から出土した資料と接合するもので、格子の叩きと三本の沈線を巡らす壷形土器である。形式的にも古いタイプである。これにより、ＳＢ－85はこの須恵器の時期より新しい時期と考えられる。深さは0.3mで浅いほうである。

ＳＸ－33　調査区東側中央部から検出され、恐らくPitと考えられるが、ＳＢ－72の２間×２間の総柱建物の中央部に位置する。検出状態から柱穴の可能性もあるが、ＳＢ－72の他の柱穴と異なるため土壙として捉えた。しかし中央部の円形が、柱穴で、まわりの部分だけが土壙かもしれない。中央底面に柱材と思われる木片が検出されている。切りあい関係はＳＢ－71・81とがある。

Fig. 77に図示した不整形土壙は殆どが著しく削平を受け出土遺物も土師器の細片ばかりで図示できるものはなかったが、古墳時代の土壙であることは間違いない。

Pit（Fig. 79　Tab. 14）

調査区の北側西端で検出されたPit－425を図示した。楕円形を呈し、深さは0.3m程度で、表面から大型甕形土器の須恵質の韓式土器が出土した。この土器は90502（Fig. 97）でPit－429から出土した資料と接合する。Pit－429は調査区北側東端に位置し、SB－53の東側に位置する。

溝状遺構（Fig. 80）

Ⅸ区には弥生時代を含めて34条の溝が確認されている。この内、古墳時代に属する溝状遺構は23条検出された。この内、出土遺物が多く、台地を二分するＳＤ－07・30・34について記載する。

ＳＤ－07　ＳＤ－07は南限をＳＤ－02に流れ込む状態で検出される。ＳＤ－02は弥生時代前期に旧河川を利用して一部人工的に手を加えたものとして報告（吉武遺跡群Ⅸ　1997　福岡市教育委員会刊）したが、古墳時代にも僅かながら使用された形跡がある。ＳＤ－05からＳＤ－08までは基本的には弥生時代の溝として造られたものであるが、継続時間は古墳時代まで使用されている。これは遺物の出土状態からその事実が窺える。このたび古墳時代の溝として、ＳＤ－05から07を登録する。ＳＤ－07はＳＤ－05から波及した溝である。ＳＤ－05は北西から南東に流れ、これは、旧河川ＳＤ－01から旧河川ＳＤ－02へ水を引くための導水溝である。このＳＤ－05から波及した溝はＳＤ－06と07である。07には支流と考えられる溝を持つ。また、ＳＤ－05からＳＤ－07へ水を送る導水溝が２条ある。これは両方ともＳＤ－05の堰状遺構から派生する溝である。この他にＳＤ－07から派生する溝がＳＤ－02に流れ込む状態で検出された。

ＳＤ－07からは土師器・陶質土器・須恵器等が多量に出土（Fig. 83～97）している。出土状態は上部からの検出で、下層には弥生時代の土器群が検出され（吉武遺跡群Ⅸ　1997　福岡市教育委員会刊P137・138 ＳＤ－05・06出土土器を掲載）ており、弥生時代から古墳時代まで使用していたことが窺える。出土遺物をみると多量の甑が出土しており、その形状も種々ある。また、小型丸底壷・壷形土器・甕形土器・高坏・須恵質の韓式土器・須恵器がある。量的には土師器が須恵器を大幅に上まわり韓式土器群が多量に出土していることから、Ⅷ・Ⅸ区の遺構は特殊な工人集団と考えられる。

ＳＤ－30　調査区北側から南西から北東に流れる形状で検出されたが、削平が著しく遺存状態は非常に悪い。深さ10cm程度で、溝としての認定をしがたいものであった。しかし須恵器・土師器が出土しており溝として認定した。

ＳＤ－34　調査区北側に検出された北西から南東に流れる溝で、弥生時代の溝として報告（吉武遺跡群Ⅸ　1997　福岡市教育委員会刊）したが、上部から須恵器が出土していることから、古墳時代まで溝として使用していたことが窺える。

出土遺物

Ⅸ区からは竪穴住居址・井戸・溝状遺構・不整形土壙・掘立柱建物の柱穴等から遺物が出土した

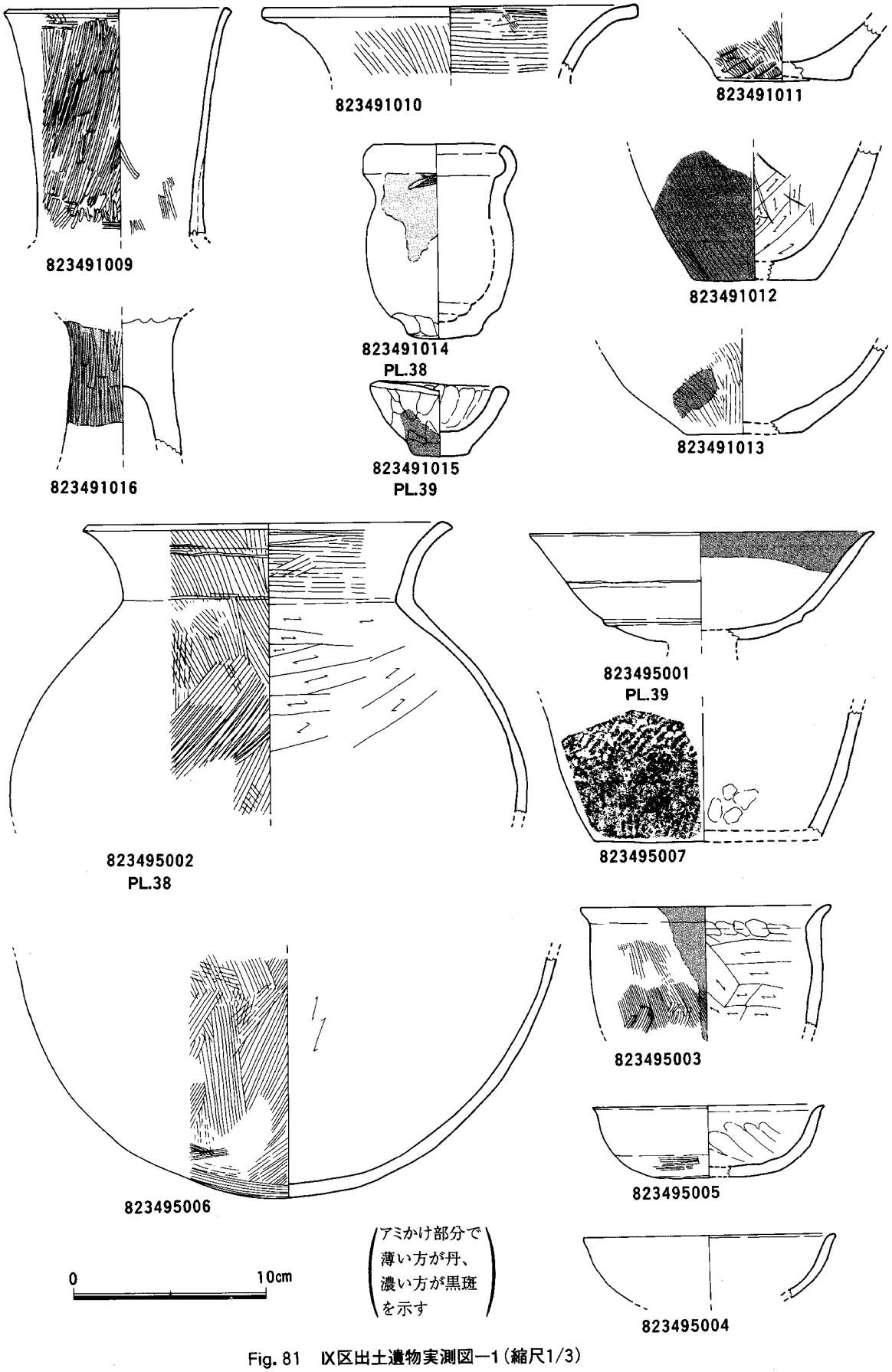


Fig. 81　IX区出土遺物実測図—1（縮尺1/3）

が、掘立柱建物からの柱穴は細片で実測に耐えるものはなかった。しかしその殆どが古式土師器・須恵器で不整形土壙から出土する遺物とは時期的に差はない。柱の抜き後からも同様の遺物が出土している。これらの遺構の遺物は時期的に大差なく古墳時代前期から中期前半にかけての時期と考えられる。記載は挿図・遺構ごとの順に行う。

ＳＣ－80出土の土器（Fig. 81　PL. 39）

ＳＣ－80からは、Fig. 81に図示した８点(**91009～91016**)以外にも数多く出土したが図示したものは弥生時代後期の遺物、古墳時代前期の遺物でこれ以外は図示できなかった。

91009　土師器の長頸壷の口縁部で、口縁下位には粘土を貼り付けている。器壁が非常に薄く上端部が緩やかに外反し端部は稜をつけて納める。外面調整は篦磨きと上部は横ナデ、内面はナデと一部篦磨きを施す。上部口径11.9cm。胎土は1mm前後の砂粒を含み、色調は内外面とも淡明黄褐色を呈する。

91010　甕形土器の口縁部で、朝顔形に開く。外面が縦刷毛目、内面が横刷毛目を施している。口径19.5cm。胎土は２～３mm大の石英・長石粒を含み、色調は内外面とも淡白灰褐色を呈し、焼成は良好である。**91011**　甕形土器の底部片である。やや上げ底を呈し、外面は斜めの刷毛目、内面はナデ調整を行っている。底径6.8cm。胎土は１mm前後の砂粒及び３～5mm大の石英粒・雲母を含む。色調は内面が明茶褐色、外面は明黄褐色である。底部の一部に黒班がある。**91012**　平底を呈する甕形土器の底部片である。底面はやや丸味を持ち、端部も丸味を持つ。外面は斜めの刷毛目を施し、内面は板状工具による削り、及びナデを施す。底径 6.6cm。胎土は 2mm前後の砂粒及び石英粒・雲母を含む。色調は内面が暗褐色、外面は灰黄褐色である。**91013**　壺形土器の底部片で、外面調整は刷毛目、内面はナデ調整を施す。復元底径は6.2cmを測り、胎土は 0.5mm前後の石英・長石を含む。色調は内外面とも暗褐色で外面に黒班を有する。**91014**　小型の手ずくね土器である。底部は粗い指オサエによる整形で、平底を呈する。外面は口縁部のみがナデで、他は篦磨きである。内面は指によるナデを施す。頸部でやや締まるが、口縁部は一度外に張り出し端部で内に入り丸く収める。色調は外面が明茶褐色を呈するが、一部に丹塗りが認められる。内面も明茶褐色を呈する。口径6.8cm、底径3.7cm、器高10cmを測る。

91015　小型の手ずくね土器である。内外面とも指引きによる調整で、色調は内外面とも明黄褐色を呈するが、一部に黒班が認められる。口径7.2cm、底径 3cm、器高3.9cmを測る。

91016　高坏の脚部である。外面の一部に丹塗りが認められる。これらの土器以外に土師器の甕・壺形土器片が出土しており、ＳＣ－80の時期は一番新しい時期、古墳時代前期と考えられる。

ＳＥ－01出土の土器（Fig. 81　PL. 39）

Fig. 81の７点(**95001～95007**)が出土した。**95001**　土師器の高坏の坏部で、脚部は欠損している。内外面はナデ仕上げを施し、外面に一条の沈線を巡らし、底面近くに一条の稜をもつ。口径１7.8cm、色調は内面は暗茶褐色＋黒班、外面が明赤茶褐色＋黒班を呈する。**95002**　土師器の甕形土器で、頸部が締まり、口縁部は大きく外反する。いわゆる「く」字口縁を呈する。外面調整は、縦刷毛目・斜め刷毛目を施す。口縁部に二条の沈線を巡らす。内面は口縁部は横刷毛目、胴部は篦削りを施す。胎土は２～３mm大の石英・長石を多く含む。大粒７mm大の石英粒及び細かな金雲母・赤色粒も含む。口径 19.2cm。色調は内面が明赤茶褐色、外面が暗黒褐色＋黒班を呈する。**95003**　土師器の鉢形土器で底部は欠損する。胴部からやや内湾しながら立ち上がり口縁部近くで、大きく外反し端部を丸く収める。外面は胴部が刷毛目調整、口縁部がナデ調整を施し、内面は口縁部がナデ、頸部が指オサエ、胴部が篦削りを施す。胎土は２～５mm大の砂粒を多く含み、赤色粒・雲母も混入している。口径 13cm。色調は外面が灰褐色、内面が暗黄褐色を呈する。**95004**　土師器の埦形土器であるが底部は欠損する。外面の調整は表面剥落のため調整は不明。内面はナデ仕上げである。口径13cm。色調は内面が淡褐

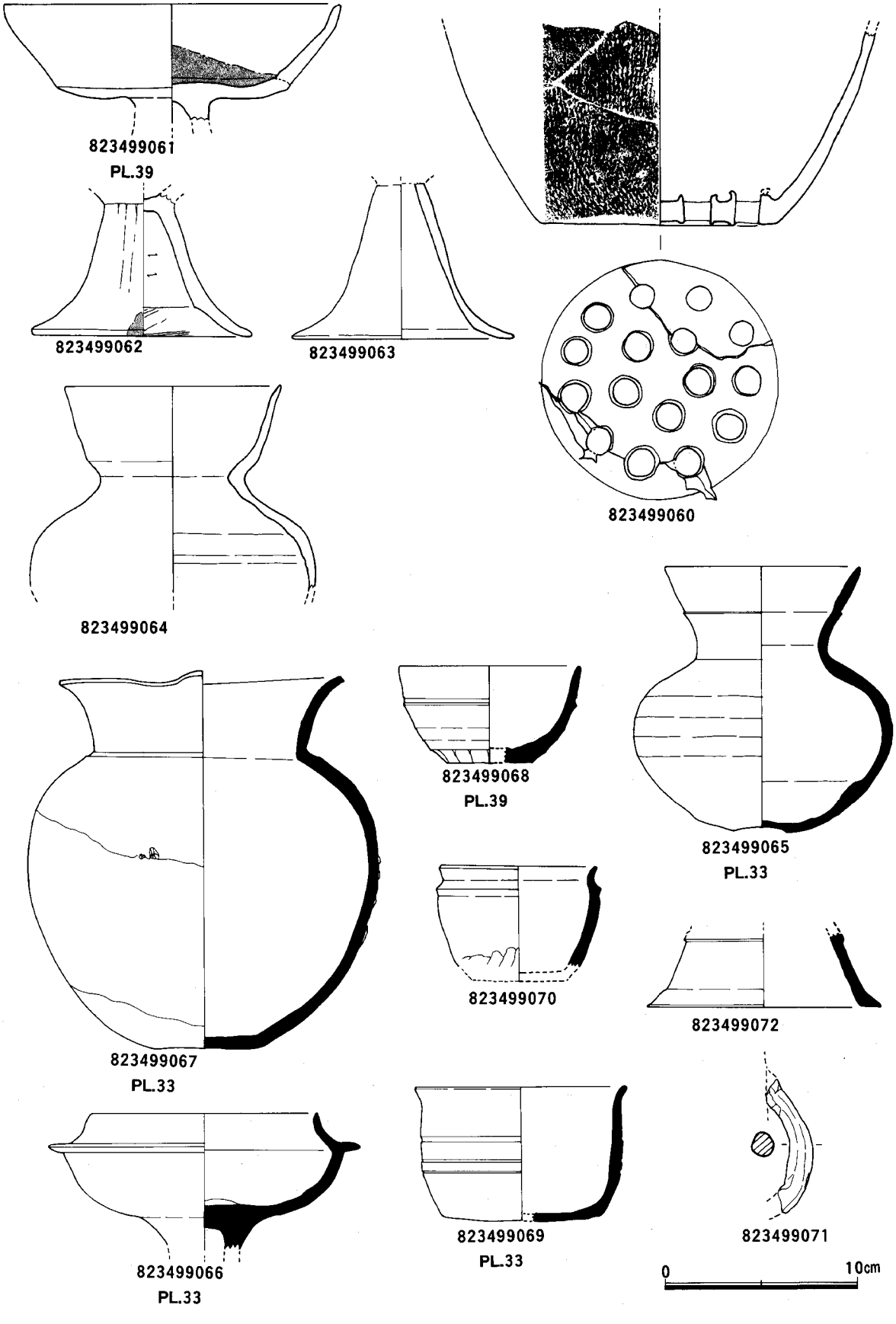


Fig. 82　IX区出土遺物実測図―2（縮尺1/3）

色、外面が淡青褐色を呈する。胎土は細砂・赤色粒・金雲母が混入している。**95005**　土師器の埦形土器であるが底部の一部が欠損する。外面は底部近くが刷毛目、口縁部付近がナデ仕上げを行う。内面は指引きの後、ナデ仕上げを行う。口径が12.15cm、器高が3.75cmを測る。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土は細砂・赤色粒・金雲母が混入している。　**95006**　土師器の甕形土器底部である。丸底の形状を呈し、外面調整は丁寧に刷毛目を施す。内面は縦方向の篦削りを施す。胎土は２～４mm大の石英・長石粒・雲母を含む精製された粘土を使用している。95002と同一個体と思われたが、径が異なることから別個体と判断した。　**95007**　鉢形土器の底部で口縁部の形状は不明。底部も欠損しているが、恐らく平底となると思われる。外面調整は斜めの叩きを施し、内面はナデと指オサエを施している。胎土は１mm大の砂粒・雲母を含む精製された粘土を使用している。色調は外面が暗赤茶褐色と暗褐色を呈し、内面は暗赤茶褐色を呈する。復元底径は11cmと推定される。

ＳＸ－37出土の土器　（Fig. 82　PL. 33）

Fig. 82の７点（**99060～99063・99065・99066・99072**）が出土した。**99060**　甑の底部付近で口縁部は欠損している。平底の底面に径1.5cmの円形孔を16個配し、甑としている。外面調整は全面に縄蓆文の叩きを施し、内面はナデ調整である。胎土は１mm前後の砂粒を多く含み、精製された粘土を使用している。色調は外面が明茶褐色を呈し、内面は暗褐色＋明茶褐色＋淡褐色を呈する。底径12.2cm。**99061**　土師器の高坏の坏部で脚部は欠損する。外面は表面剥落しているため調整は不明。内面はナデ調整で、内部に黒斑がある。口径17.2cm。胎土は0.5mm大の砂粒と４～５mm大の石英・長石粒を混入している。色調は内外面とも暗赤褐色を呈する。**99062・99063**　２点とも土師器の高坏の脚部である。062は外面がナデ調整、内面が横からの篦削りを施す。脚径は11.5cmを測る。063は外面が表面剥落のため調整不明である。内面はナデ調整である。脚径は11.5cmを測る。**99065**　須恵器の直口壷で、頸部が締まり口縁部に向けて外反し、口縁端部を丸く納める。口縁部と頸部の中間に一段の稜を有する。外面の調整は口縁部付近が回転ナデ、胴部は篦削り底部付近は静止ナデである。内面は横ナデを施している。底部は基本的には丸底を呈するが、底部中心に窪みを入れ平坦面を造りだし安定感をだしている。口径10cm、器高13.9cm、底径2.7cm、胴部最大径13.7cmを測る。胎土は細砂粒と黒色粒を多く含む精製された粘土を使用している。口縁部及び胴部の一部に空気が入った小さな膨らみが数箇所みられる。底部付近に不純物が付着し器面がザラザラしている。色調は外面が淡灰色＋暗灰色、内面は明淡灰色を呈する。**99066**　須恵器の高坏の坏部である。脚部は欠損している。受部が中に入るタイプで、受部自体は高い。外面の調整は回転ナデ、水引を施している。内面は指ナデ・押え・回転ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む精製された粘土を使用している。全体的に空気が入った小さな膨らみが数箇所みられる。色調は内外面とも白灰色を呈するが一部に自然釉がかかる。口径11.8cmを測る。

99072　須恵器の高坏の脚部である。脚裾はシャープに作り上げ透かしの下段に稜を有する。透かしは方形を呈すると思われるが、遺存していないので、定かではない。全面に自然釉がかかり不純物も付着している。内外面の調整は回転ナデを施す。胎土は細砂粒及び２mm大の砂粒を少量含む。脚裾径12.2cmを測る。

ＳＸ－36出土の土器　（Fig. 82　PL. 33）

ＳＸ－36からは99064の土器１点を図示した。ＳＸ－37から出土した99065に類似する形態を有する直口壷である。頸部が締まり外反しながら立ち上がるが、頸部直上で外面に稜を持つ。このためやや内湾しながら立ち上がる。外面の調整はナデ、内面は篦削り・ナデを施す。胎土は細砂粒・金雲母を多く含む。色調は内外面とも淡明赤褐色を呈する。口径11.2cmを測る。

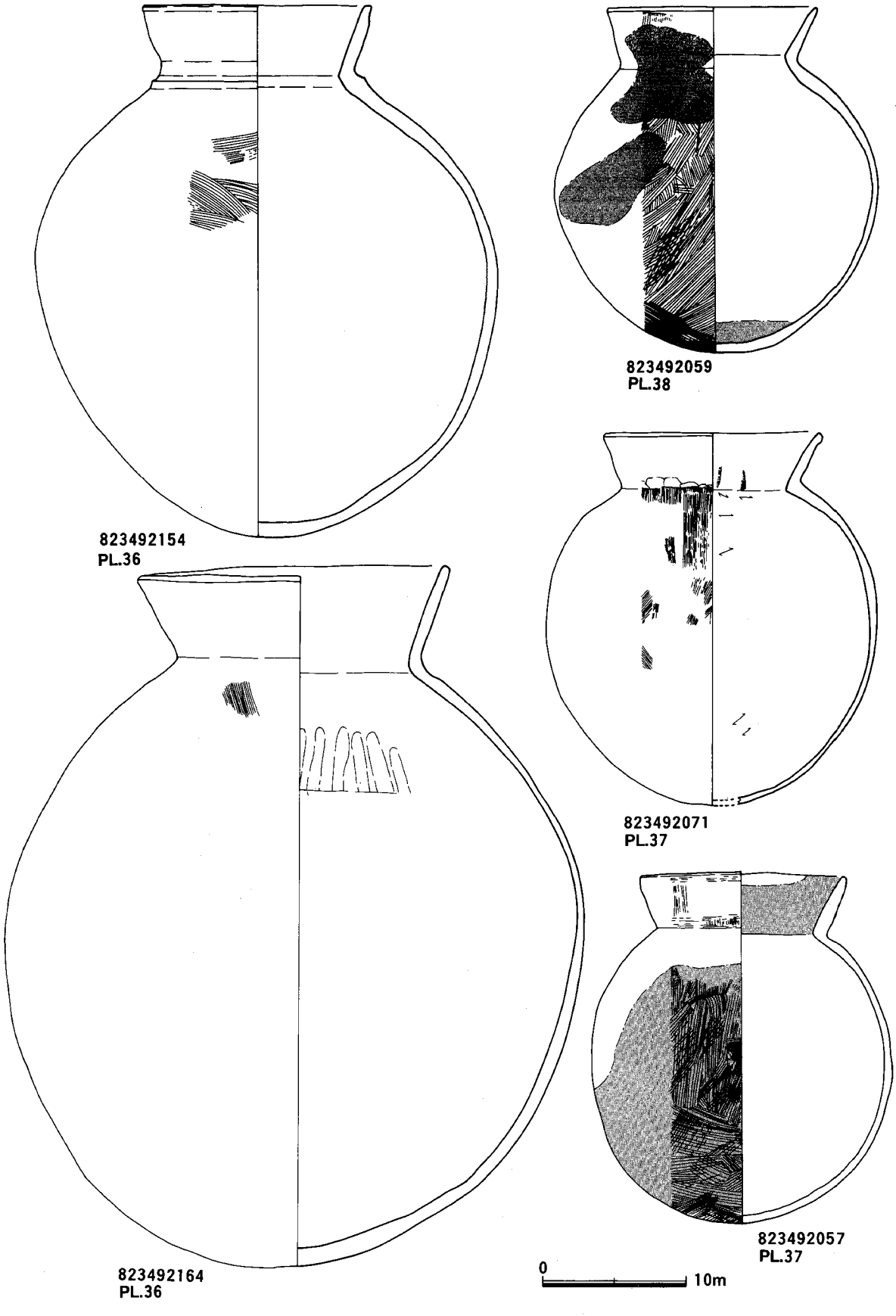


Fig. 83　IX区出土遺物実測図ー3（縮尺1/4）

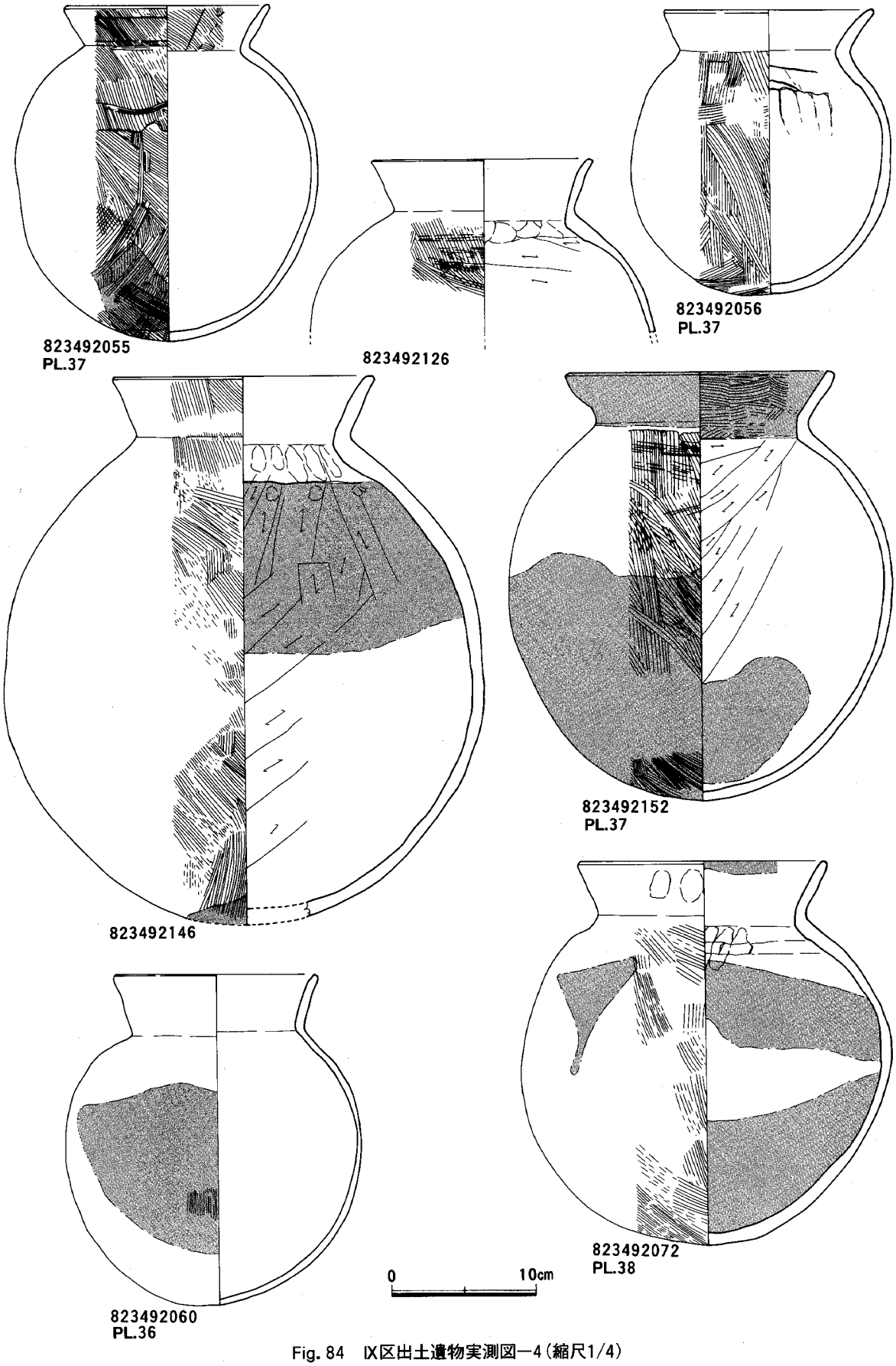


Fig. 84　Ⅸ区出土遺物実測図―4（縮尺1/4）

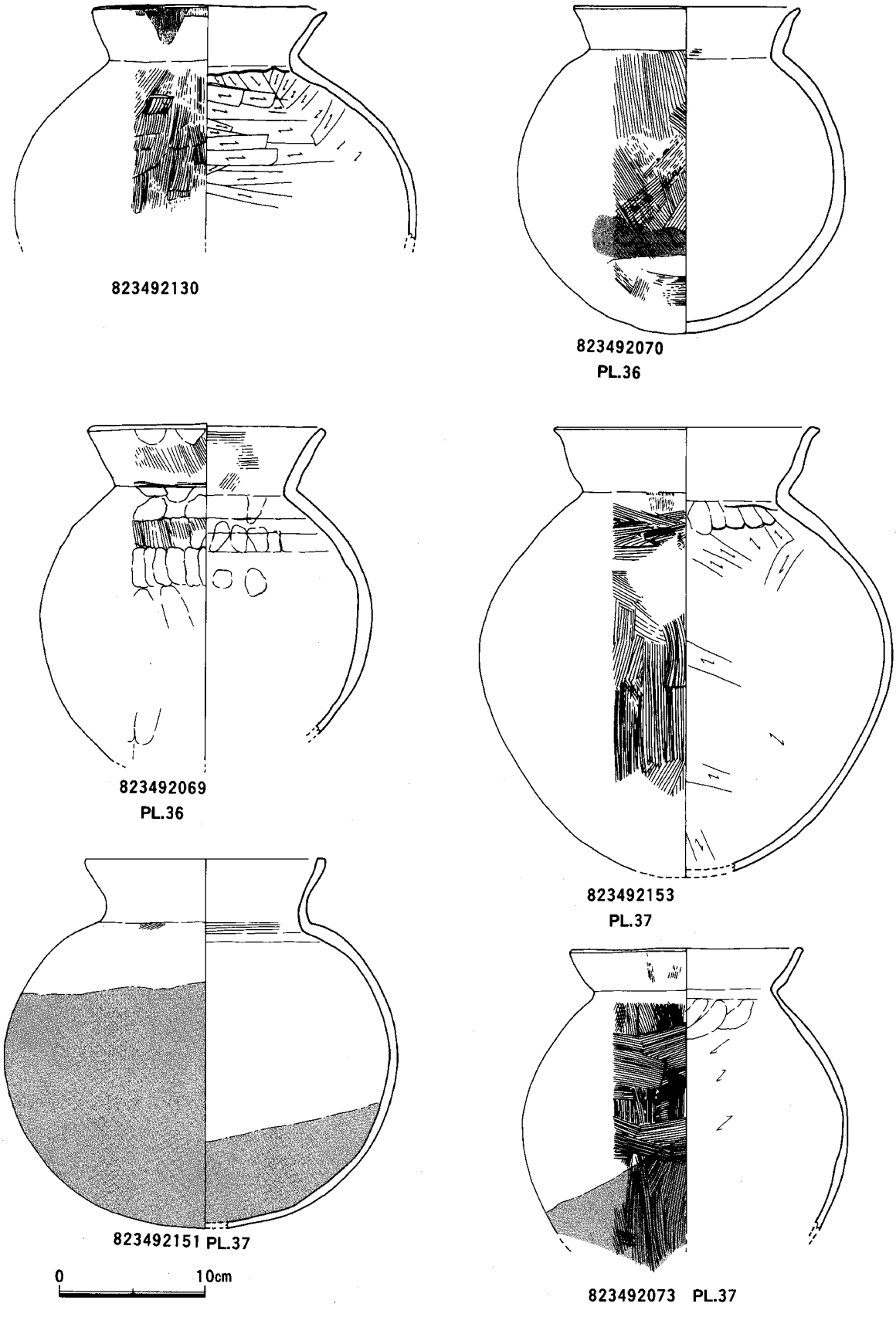


Fig. 85　Ⅸ区出土遺物実測図―5（縮尺1/4）

ＳＸ－13出土の土器（Fig. 82 PL. 33）

99067　須恵器の甕形土器で完形品である。胴部最大径は中位にあり、頸部は締まる。頸部から外反しながら立ち上り、口縁は大きく外へ開く。外面は丁寧なナデ、内面は回転ナデ・指ナデを施している。内面・外面上部まで自然釉がかかり不純物も混ざる。底部は平底で、底部近くでは一部生焼け状態を示す赤褐色を呈する部分がある。胎土は精製された粘土を使用している。口径14.5cm、器高19.5cm、胴部最大径18.2cm、底径5.6cmを測る。

ＳＸ－21出土の土器（Fig. 82 PL. 33）

３点図示した。**99068**　小型の椀形土器で、外面に一条の稜を巡らす。調整は外面が時計回り（右まわり）の回転ナデと篦削りを施す。内面は静止ナデと回転ナデを施している。胎土は細砂を多く含む。色調は外面が暗黒灰色、内面が暗灰色で散発的に自然釉がかかる。口径9.4cm、器高5cmを測る。**99070**　小型の椀形土器で、外面に一条の稜を巡らす。形状は99068と同様であるが、口縁部近くで稜を巡らすため、口縁部は外に開く形状を呈する。調整は外面が時計回り（右まわり）の回転ナデと篦削りを施す。内面は回転ナデを施している。胎土は細砂を含む。色調は内外面とも灰色、内面に不純物が付着している。口径8.2cmを測る。**99071**　須恵器の把手である。99069タイプにつくのか中型の椀形土器につくかは不明であるが、大きさから中型の椀形土器に付くものと思われる。全体的に指ナデで仕上げており、径は1.35cmある。胎土は細砂・白色粒を含み、色調は白淡灰色である。

ＳＸ－40出土の土器（Fig. 82 PL. 33）

99069　小型の椀形土器で、外面胴部に三条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。調整は内外面ともナデを施す。胎土は細砂と１～２㎜大の石英粒を多く含む。色調は内外面とも淡灰色を呈する。口径11cm、器高7cmを測る。

ＳＤ－07出土の土器（Fig. 83～97 PL. 33～39）

ＳＤ－07からは多量の出土遺物が出土した。できる限り図示したが、割愛した土器も多い。Fig. 83～95までの119点（89055他）の土師器とFig. 96・97の18点（92002他）の須恵器を図示した。点数が多いため器種別に土師器・須恵器の順で記述する。また器種の多い甕形土器・小型丸底壷・高坏に関しては紙面の都合上タイプ別に記述した。

甕形土器　（Fig. 83～86 PL. 36～38）

甕形土器は多量に出土したが、図示したものはFig. 83～86の26点である。この内Fig. 86の８点はやや特殊である。これは個別に記述していくが、紙面の都合上甕形土器はタイプ別に記述する。

甕形土器の内大型のものと中型のものに分けられる。大型は30cm以上あるもので、146,154,164の３点で最大は164の49.6cmである。他は中型に属し、20～30cmの範疇にはいる。口縁部の形態で区別すると４つに分類される。**Ａタイプ**　口縁部がやや外反するが、直立するタイプ　154,059,164,060,126の５点。**Ｂタイプ**　口縁部が「く」字状を呈するタイプ　071,057,055,056,146,072,069の７点。**Ｃタイプ**　口縁部が外反して「く」字状を呈するが、口縁端部が内に入るため口縁部中央部が膨らみを持つタイプ　152,151,073,133の４点。**Ｄタイプ**　口縁部が「く」字状を呈するのはＢ・Ｃタイプと同じであるが、口縁部が一度膨らむが、口縁端部が外反するタイプ　130,070,153の３点である。

調整は基本的には器壁は薄く仕上げられているが、頸部は、粘土を貼り付けやや厚く仕上げられ指押えを行っている。外面調整は、凹凸が激しいが細かな刷毛目を施し、内面は口縁部がナデ、胴部は篦削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、１～５㎜大の石英・長石および赤色・雲母粒を含む。色調は内外面とも黄茶褐色＋暗茶褐色を呈する。ただ外面に黒斑のあるものは、059,057,055,14

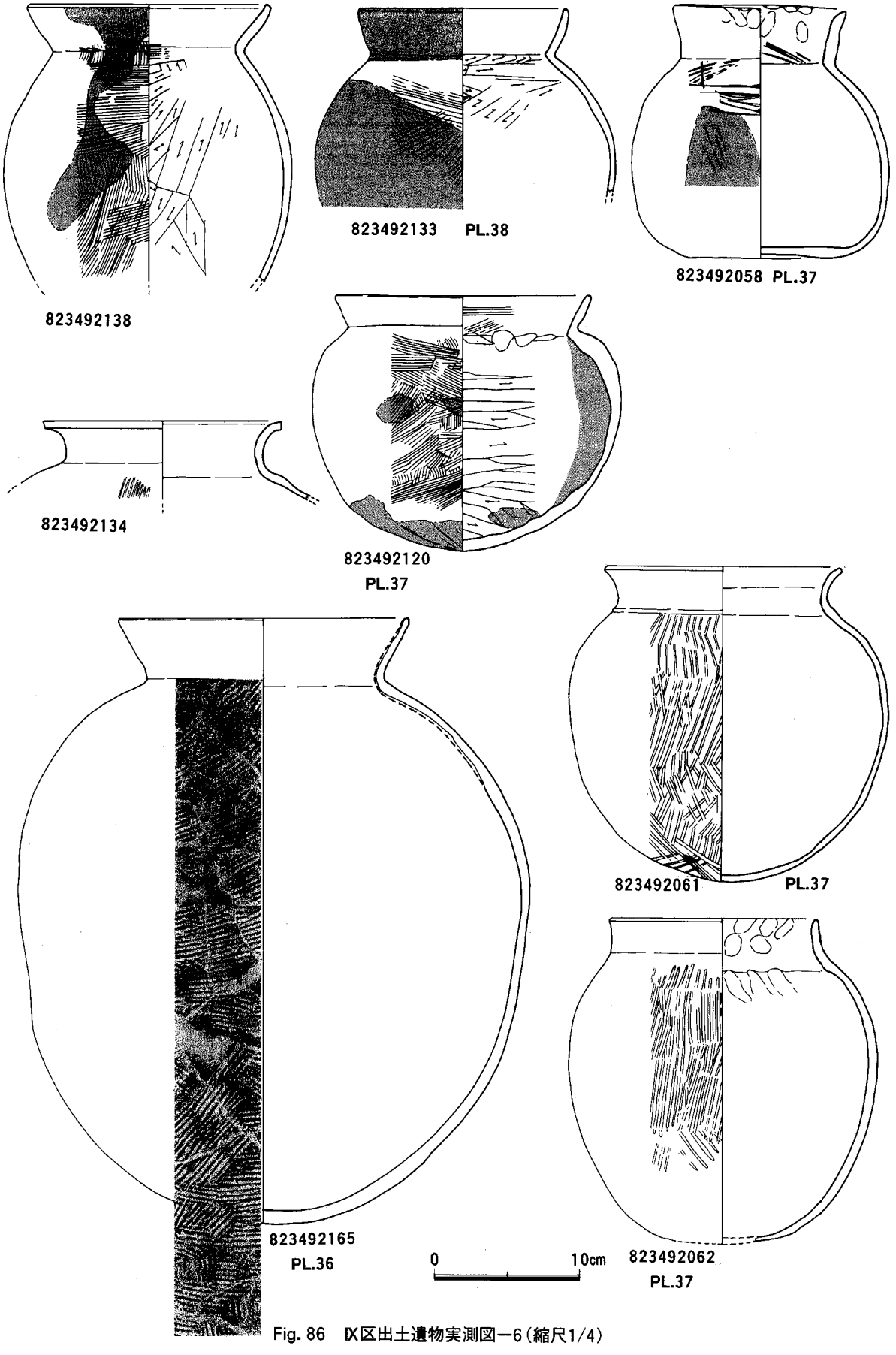


Fig. 86 Ⅸ区出土遺物実測図ー6（縮尺1/4）

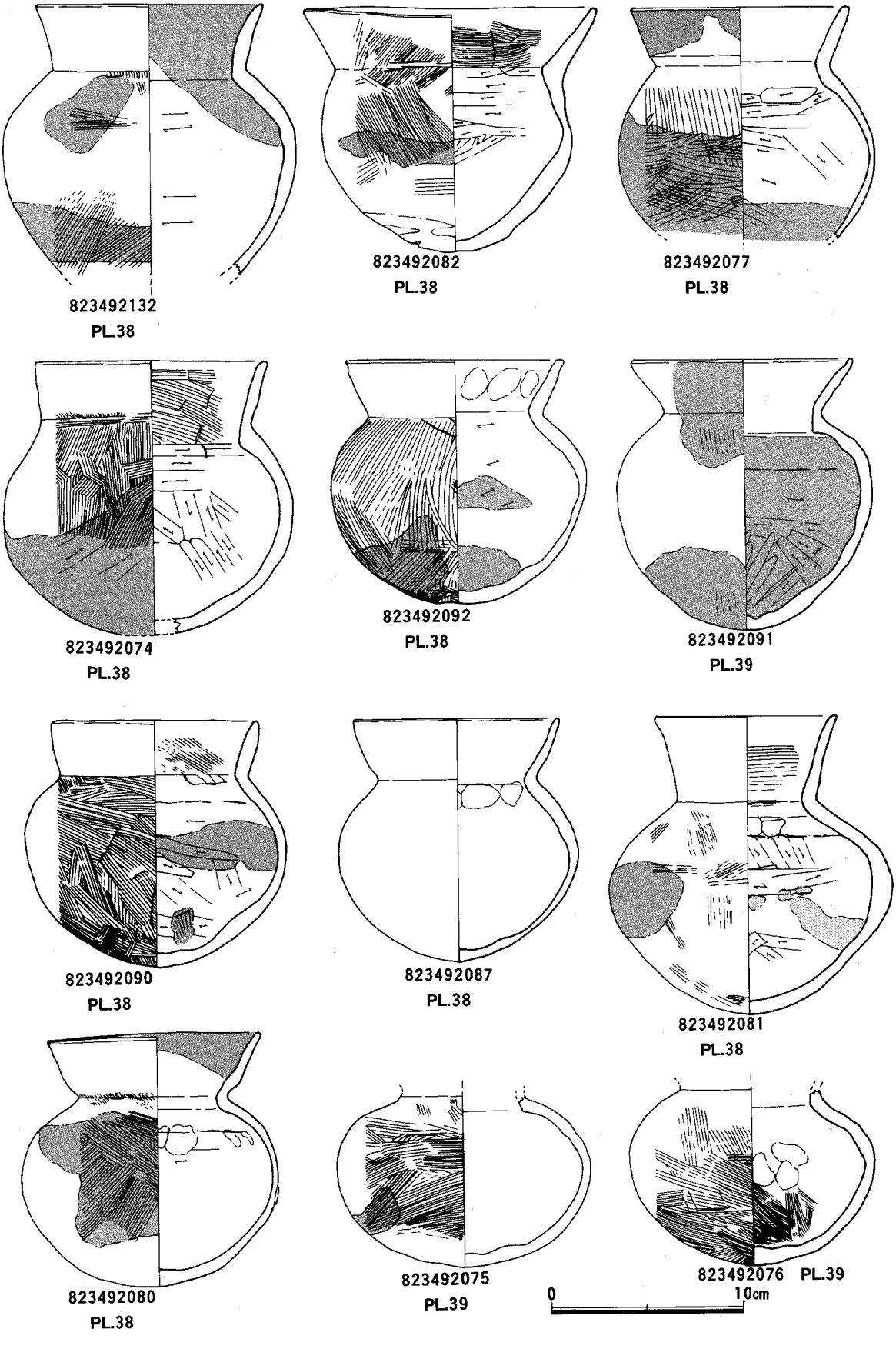


Fig. 87　Ⅸ区出土遺物実測図ー7（縮尺1/3）

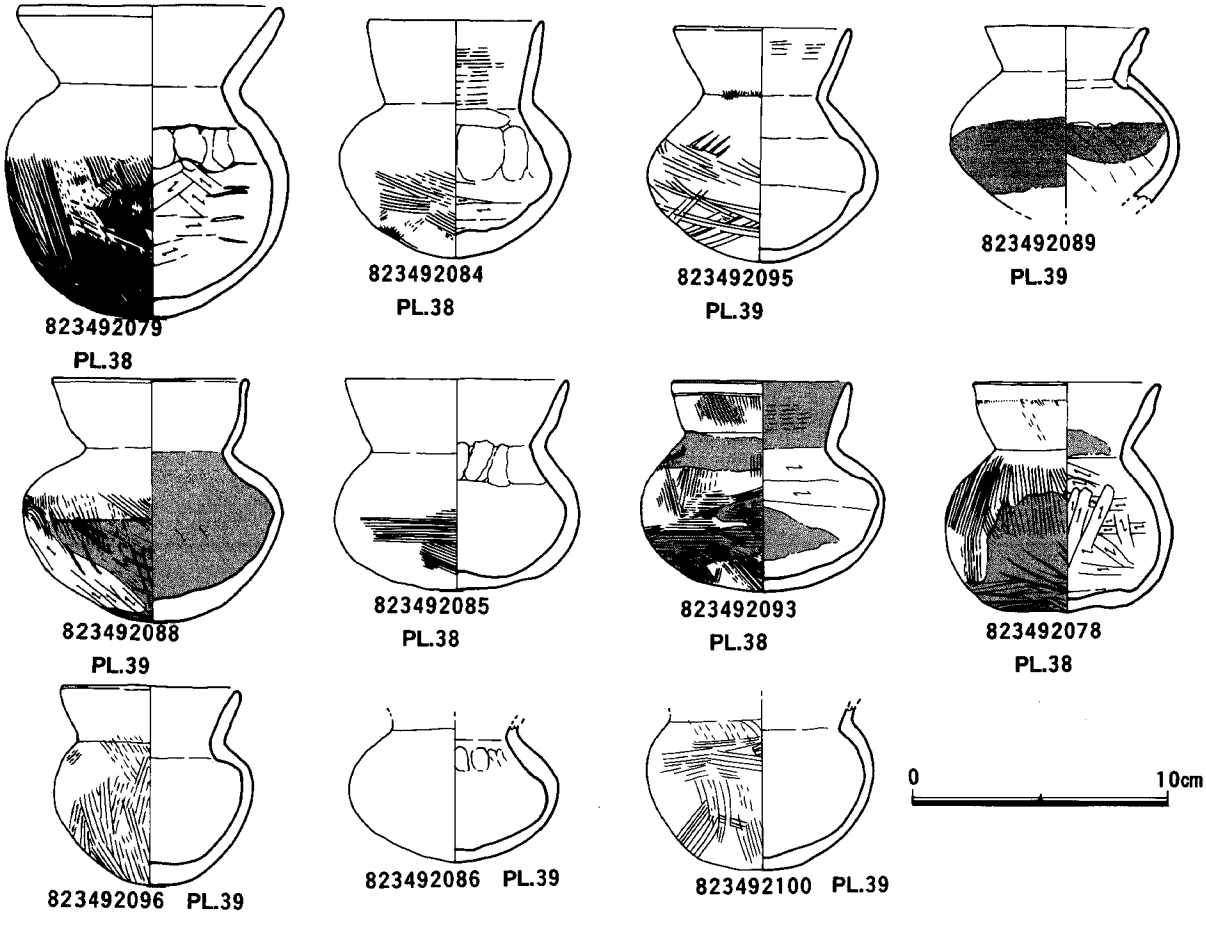


Fig. 88　IX区出土遺物実測図—8（縮尺1/3）

6，152，060，072，130，070，151，073で、内面にあるものは151，057，146，152，072である。内面調整で口縁部に刷毛目を施しているものは069，055，152，071の4点にある。

タイプ別に記載したが形態的に特徴のあるもの（Fig. 86に図示した）を個別的に記載する。

92138　土師器の中型の甕で、底部が欠損する。長胴形を呈し、胴部の膨らみは小さく最大径は胴部中位下にあり、頸部での締まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに立ち上がり口縁部に達する。いわゆる「く」字口縁を呈するが、口縁端部が内に入り嘴状を呈する。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、縦・斜め・横の刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部にナデ、頸部に刷毛目、胴部に篦削りを行っている。胎土は細砂粒・雲母粒を多く含み、3～4cm大の石英・長石を含む。色調は外面が淡赤褐色＋黒斑、内面は明褐色を呈する。口径は17cm、最大径21cmを測る。**92058**　土師器の中型の甕で、完形品である。胴部は膨らまず最大径は胴部中位にあり、頸部での締まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに直立して口縁部に達し、端部が僅かに外反し納めるタイプで甕形土器のタイプ別でいけばDタイプに属する。しかしこの土器は平底で、底面が上げ底を呈する。器壁は全体的にやや厚めに仕上げられている。外面調整は、篦状工具で削られている。内面は口縁部に指押えの後ナデ、頸部に刷毛目、胴部に篦削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、3～4cm大の赤色粒・雲母粒を含む。色調は外面が明赤褐色＋黒斑、内面は明黄赤褐色を呈する。口径は12.1cm、器高17.5cm、最大径18.1cmを測る。**92120**　土師器の中型の甕で、完形品である。肩の張る形状で、丸みの強い土器である。胴部は膨らみ最大径は胴部上位にあり、頸部で

の締まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに立ち上がり口縁部に達する。いわゆる「く」字口縁を呈する。器壁は薄い部分と厚い部分に分けられ頸部付近が一番厚く器面自体に凹凸があり、造りが雑である。外面調整は、斜め・横の刷毛目を荒く施し、内面は口縁部に刷毛目の後ナデ、頸部に指押え痕、胴部に横からの箆削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、1～2㎝大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色＋黒斑、内面は明赤褐色＋暗赤茶褐色を呈する。口径は17.8㎝、器高17.9㎝、最大径21.5㎝を測る。**92134**　土師器の中型の甕で、口縁部のみである。須恵器の甕形土器を思わせる形態を呈する。頸部は締まらず頸部から大きく外反しながら開きさらに口縁端部は外反し納める。口縁端部は稜をもち、器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、叩き、内面は摩滅しているため調整は不明。胎土は細砂粒を多く含み、3～4㎝大の石英・長石・赤色・雲母粒を含む。色調は外面が明淡褐色、内面が淡白桃色である。口径は16.8㎝を測る。

92165　土師器の大型の甕で、完形品である。胴部は膨らみ長胴形を呈する。最大径は胴部中位上にあり、頸部は締まる。頸部から外反しながらやや開きぎみに口縁部に達し、いわゆる「く」字口縁を呈す。口縁端部は丸く納め、器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、1㎝中約3本の斜め方向の叩きと横方向の叩きにより格子状を呈する部分が多く、頸部から底部まで胴部中央付近は横・縦の方向に施文する。これにより下位（底部）は碁盤の目状に叩きが施されている。内面は表面が剥落のため調整は不明である。胎土は細砂粒を多く含み、2～5㎝大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡肌色＋暗褐色＋一部煤付着＋赤褐色（赤色顔料？）、内面は明黄褐色＋淡明肌色を呈する。口径は20.2㎝、器高42.6㎝、最大径35.5㎝。**92061**　土師器の中型の甕で、完形品である。胴部は膨らみ最大径は胴部上位にある。頸部は締まらず、頸部から大きく外反しながら開き更に開いて口縁部に達する。甕形土器のタイプ別で行くとDタイプである。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、口縁部が横ナデ、胴部全体に縦方向の叩きを施している。内面は口縁部・胴部ともナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含み、1㎝大の石英・長石粒を含む。色調は外面が明肌色＋暗褐色＋黒斑、内面は暗灰褐色を呈する。口径は16.6㎝、器高22㎝、最大径22.4㎝を測る。

92062　土師器の中型の甕で、底部の一部を欠損する。胴部は膨らまず長胴形を呈し、最大径は胴部上位にある。頸部は締まらず、頸部から内湾しながら垂直に立ち上がり端部は丸く納める。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縦の叩きを施し、内面は口縁部に指押えあとナデ、胴部は指押えの後箆ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、1㎝大の赤色・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色＋赤褐色＋一部煤付着、内面は暗赤褐色＋黒斑を呈する。口径は14.7㎝、器高23㎝、最大径21.5㎝を測る。

小型丸底壷（Fig. 87～88　PL. 38・39）

小型丸底壷も多量に出土したが、図示したものはFig. 87・88の23点である。大別して10㎝以上のものと10㎝以下のものとの二種類に分けられる。また、形態的には口縁部が「く」字状を呈する077, 079, 080, 082, 087, 089, 091, 095と口縁部が外反するが直立するもの074, 078, 081, 084, 085, 088, 090, 092, 093, 096, 132である。底部は丸底が074～076, 080, 081, 084, 086, 087, 090～092, 095, 100、やや平底で安定のあるものが小型に多く085, 088, 093, 096で尖り底が082と1点だけである。調整は口縁部の内外面はナデ一部刷毛目を施す074, 081, 082, 084, 090, 093, 095があるが、これもその後ナデを施す。胴部は外面が刷毛目、内面が箆削りを施す。

甑・把手（Fig. 89～91　PL. 34・35）

甑・把手は多量に出土したが、図示したものはFig. 89～91の20点である。**92147**　口縁部の一部を欠損するが、復元完形である。底部は波打つが平底に近い形状を呈する。胴部中位で把手を付け

るが、胴部中央に一条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けてある。把手はやや上がり気味に取り付け、端部が上を向く。頸部は締まらず、口縁部は外反しさらに端部に向けて外反する。口縁端部は「コ」字状を呈し、把手と把手の中間で呑み口状に垂れ下がる。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縦・斜めの叩きを丁寧に施し、内面はナデである。口縁部の一部に丹塗りの痕跡が見られる。把手は丁寧に篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、1～2㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡赤褐色、内面は淡白褐色＋丹塗りを呈する。口径は34.5㎝、器高24.5㎝、胴部の最大径32.8㎝を測る。**92148**　92147と形状は類似する。口縁部の一部を欠損するが、復元完形である。底部は平底に近い形状を呈し、胴部中位で把手を付けるが、胴部中央に二条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けてある。把手は横に伸びる形状を呈する。頸部まで内湾しながら立ち上がり、口縁部は頸部から大きく外反し、さらに端部に向けて外反し、外につまみ出されて平坦面を造り納める。口縁部は把手と把手の中間で呑み口状に垂れ下がる。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縦叩きとナデを交互に施す。口縁部の一部に丹塗りの痕跡が見られる。内面はナデと横位の篦削り、指によるナデを施す。把手は丁寧に篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、4～8㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡肌色、口縁部に丹塗り、内面は明肌色＋汚肌色を呈する。口径は31.9㎝、器高20.6㎝、胴部の最大径30.5㎝を測る。**92162**　両方の把手を欠損する。復元完形である。底部は丸底を呈し、胴部中位上で把手を付けた痕跡があり、胴部中央に一条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けるものと思われる。口縁部は僅かに外反し、端部は丁寧に仕上げている。底部に外側から径15㎜前後の円形の孔を18個穿っている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで縄蓆文の叩き、内面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、5～7㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が淡青灰褐色＋淡明黄褐色＋黒斑、内面は明茶褐色を呈する。口径は28㎝、器高25.7㎝を測る。**92068**　完形の甑である。底部は平底を呈し、中央部が上げ底になるもので、底部に外側から径15㎜前後の円形の孔を16個穿っている。中央に5個、周辺に11個を規則正しく配列している。把手は胴部中位に位置し、横に伸びる形状で貼り付けている。胴部中央に一条の沈線を巡らし、これが把手の中心部に位置している。口縁部は大きく外反し、端部は丁寧に仕上げている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで縄蓆文の叩き、内面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、3～5㎜大の石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも明茶褐色＋暗褐色＋黒斑を呈する。口径は25.7㎝、器高21.4㎝、底径12.5㎝を測る。

Fig. 90　**92149**　復元完形の甑である。底部の一部が欠損している。底部は平底を呈し外側から径24㎜前後の円形の孔を7個穿っている。中央に1個、周辺に6個を規則正しく配列している。把手は胴部中位に位置し、下に下がる形状で貼り付けている。この甑には沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものかは不明である。口縁部は聞きぎみに垂直に伸び、端部は丁寧に仕上げている。外面調整は、口縁部・胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、5㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明黄茶褐色＋黒斑、内面が暗茶褐色＋明茶褐色を呈する。口径は30㎝、器高22.5㎝、底径10.8㎝を測る。

92066　この土器は把手のつかないタイプで、復元完形の甑である。底部は丸底を呈し、底部に外側から径8㎜前後の円形の孔を15個以上穿っている。欠損しているので全容が把握できないが、規則性はないと思われる。頸部が内湾し、その反動で口縁部は大きく外反し、端部は丸く納める。外面調整は、口縁部・胴部中位まで刷毛目、胴部から底部までが篦削りの後ナデと指押えを施す。内面は口縁部がナデと刷毛目、胴部が篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、石英・赤色粒・雲母粒を含

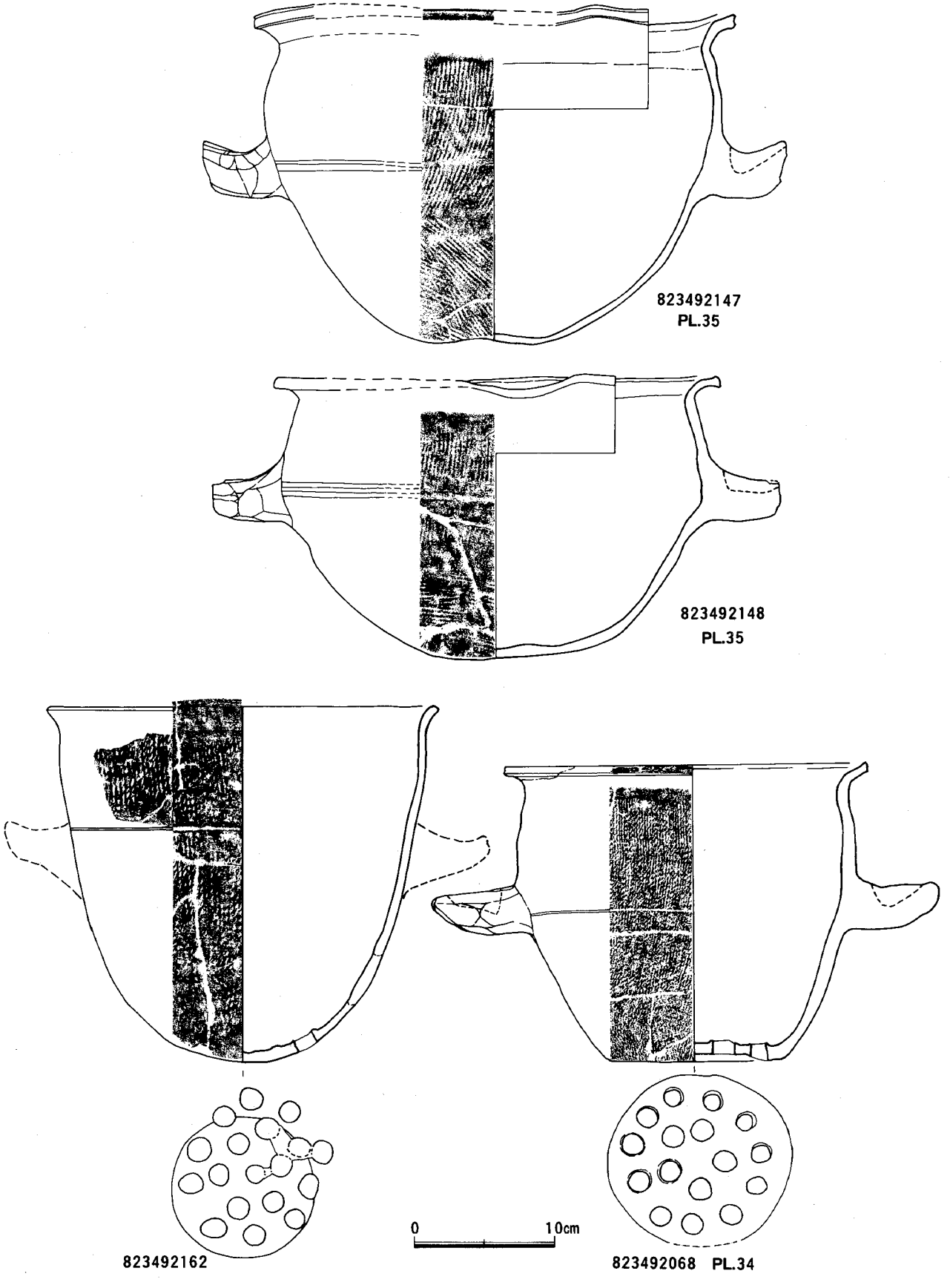


Fig. 89　Ⅸ区出土遺物実測図―9（縮尺1/4）

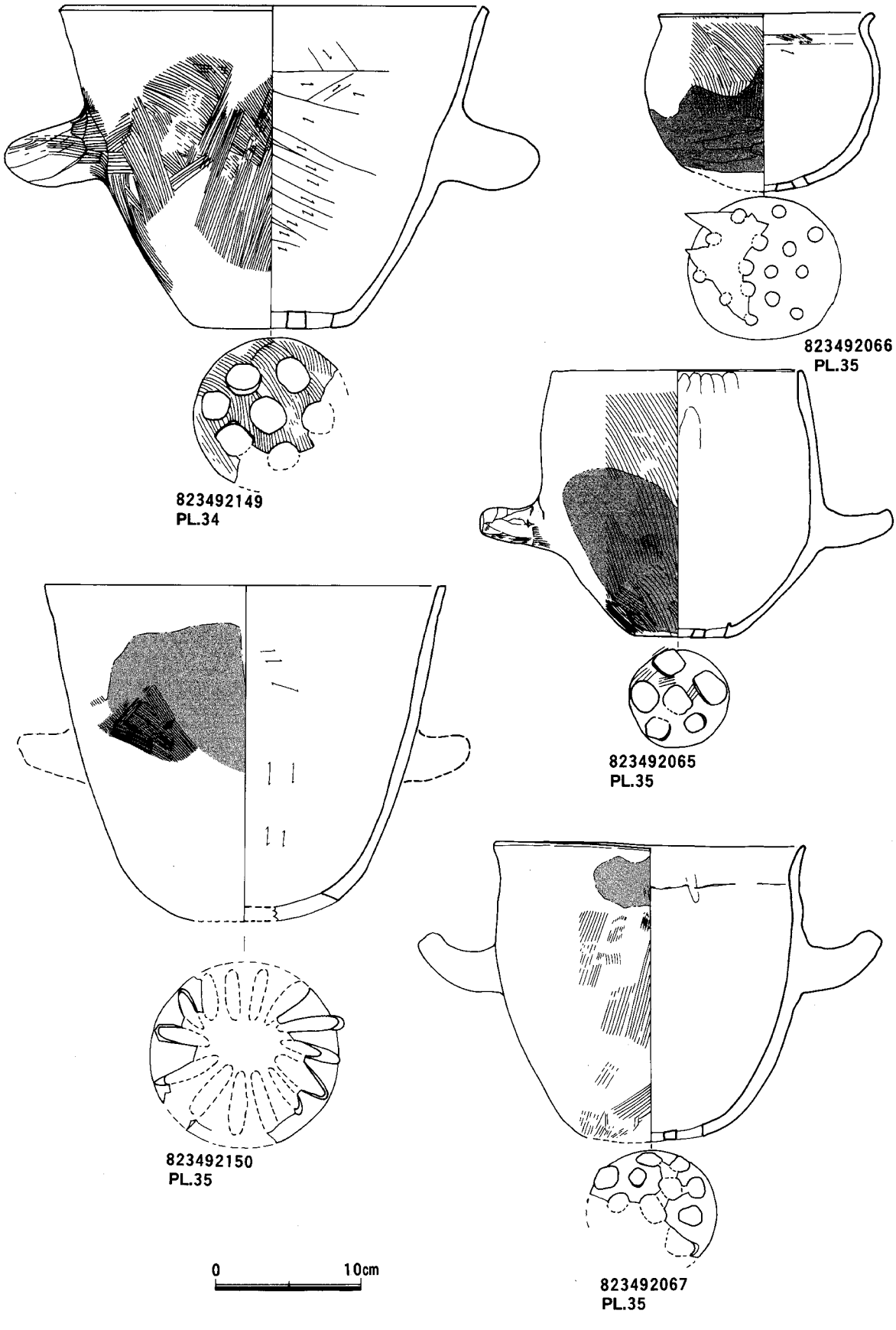


Fig. 90　IX区出土遺物実測図—10（縮尺1/4）

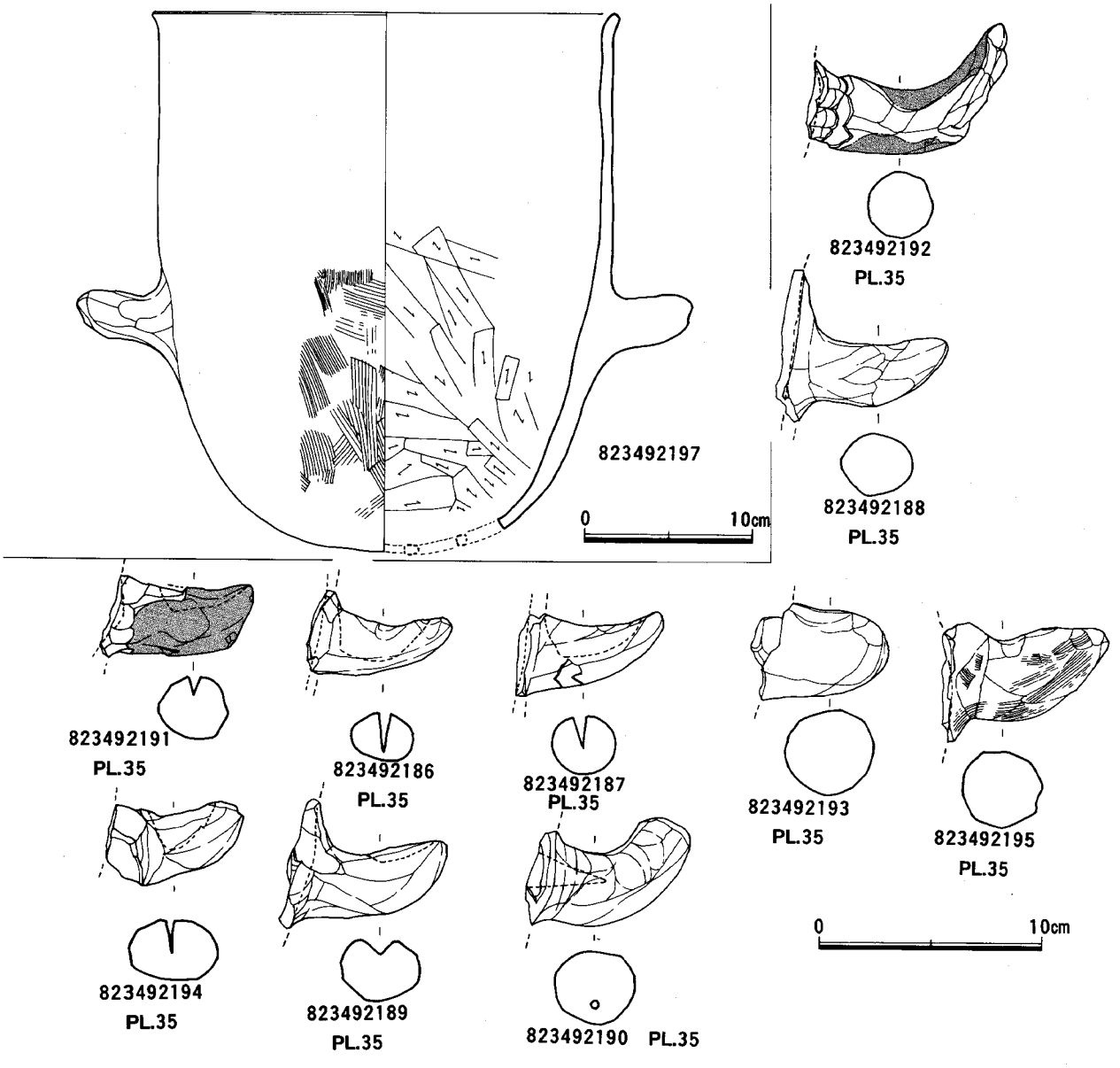


Fig. 91　Ⅸ区出土遺物実測図－11（縮尺1/3,1/4）

む。色調は全体に火を受けて黒ずんでおり、内外面とも濃い暗赤褐色＋黒斑を呈する。口径は14.7cm、器高12.4cm、最大径16.1cmを測る。

92065　復元完形の甑である。底部は平底を呈し、外側から径19mm前後の円形の孔を6個穿っている。中央に1個、周辺に5個を配列している。把手は胴部中位下に位置し、横に延びる形状で貼り付けている。この甑には胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものかは不明である。口縁部は胴部から内湾しながら垂直に立ち上がり、一度内湾を修正するため直立させ口縁部に達する。端部は丸く仕上げている。外面調整は、口縁部が刷毛目の後ナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部が指押えの後ナデ、胴部が篦削りを施す。把手は篦による成形後刷毛目を施す。胎土は細砂粒を多く含み、4～5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗明茶褐色＋黒斑を呈する。口径は17.3cm、器高18.7cm、底径6.9cmを測る。

92150　底部が欠損するが、復元完形の甑である。底部はやや丸みをもつ平底を呈し、外側から楕円形の孔を花弁状に14個穿っている。それぞれの大きさは異なるが、長さ1.9～4.5cm、幅0.8～1.4

cmで、中央部は残す形状を呈する。把手は欠損しているが、取り付けている場所は胴部中位に位置し、恐らく横に延びる形状で貼り付けていたものと思われる。この甑には胴部中央に沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものかは不明である。口縁部は胴部から外反しながら垂直に立ち上がり口縁部に達する。端部は平坦に仕上げている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部がナデ、胴部が縦と斜めの篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2～5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明褐色＋黒斑、内側が明褐色を呈する。口径27.8cm、器高23.5cmを測る。**92067**　左の把手・底部を欠損するが、他はほぼ復元完形の甑である。底部は平底を呈し、径15mm前後の円形の孔を10個穿っている。底部が欠損しているため、定かではないが不規則に配列している。把手は胴部中位上に位置し、上に跳ね上げて納めるタイプである。この甑にも胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ない。口縁部は胴部から内湾しながら垂直に立ち上がり、口縁部付近で緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。外面調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部が刷毛目、内面は口縁部がナデ、胴部が篦ナデを施す。把手は篦による成形を施す。胎土は細砂粒を多く含み、4～5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明褐色＋黒斑、内面が明褐色を呈す。口径は21.6cm、器高21cm、底径9.0cmを測る。

Fig.91　**92197** 復元完形の甑である。底部はやや丸みを持った平底を呈し、外側から円形の孔を6個穿っている。把手は胴部中位下に位置し、横に延びる形状で貼り付けている。この甑にも胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ない。口縁部は把手を貼り付けた部分から垂直に立ち上がり、口縁部端部付近で僅かに外反し、端部を丸く納めている。外面調整は、口縁部が刷毛目の後ナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部がナデ、胴部が篦削りを施す。把手は篦による成形を施す。胎土は細砂粒を多く含み、3～4mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が淡肌色＋黒斑、内面が明淡褐色を呈する。口径は27.8cm、器高31.8cmを測る。

把手（Fig. 91）

把手は10点図示した。甑でも記述したが、3つのタイプに区分できる。

1　把手の端部が上に跳ね上がるもの　92192.92187.92190

2　把手の端部が横に伸びるもの　92188.92191.92186.92195.92194.92189

3　把手が下に下がり端部が丸くなる　92193

成形は篦削りが殆どで、中には刷毛目を施すもの、ナデ仕上げのものもある。

高坏（Fig. 92～94　PL. 39・40）

高坏も多量に出土したが、図示したものはFig. 92～94の31点である。高坏は形態分類して特徴のあるものについて記述する。大型の92104・92116を除いて中型（口縁が15cm前後）のものが大半を占める。　大型2点について記述する。**92104**　口径が23.7cm、器高が15.2cm、脚径が16.3cmを測る大型の高坏で、坏部の下段に段を有する。口縁部は胴部から直線的に外へ開くが、口縁端部で外反し丸く納める。脚部は膨らまずに裾付近で外に開き端部を丸く納める。外部調整は、坏部が刷毛目調整、内面は表面剥落のため調整不明。脚部は外面がナデ、内面ナデと篦削りを行う。

92116　口径23cmを測る大型の高坏であるが、脚部の一部を欠損する。坏部の胴部下位で稜を持つが巡らない。口縁部は胴部から外反しながら外へ開くが、そのまま立ち上がり口縁端部で丸く納める。外部調整は、坏部が内外面とも刷毛目調整、脚部は外面がナデ、内面ナデと篦削りを行う。

中型の高坏は坏部の形状・脚部の形状により5つに区分した。

1　大型にも代表される形態で、坏部に沈線か稜を有し、脚裾部が端部しか接しないタイプ

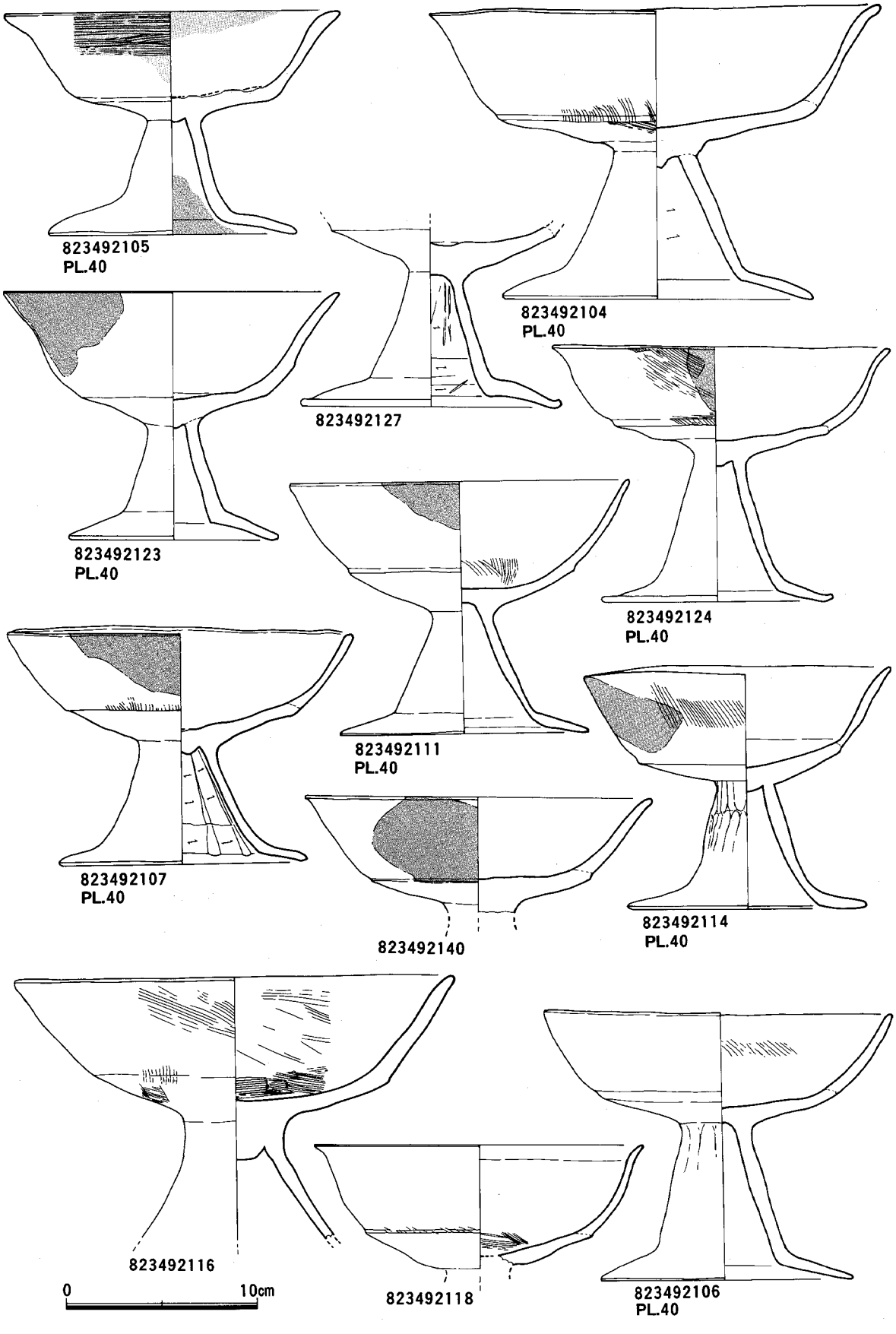


Fig. 92　Ⅸ区出土遺物実測図ー12（縮尺1/3）

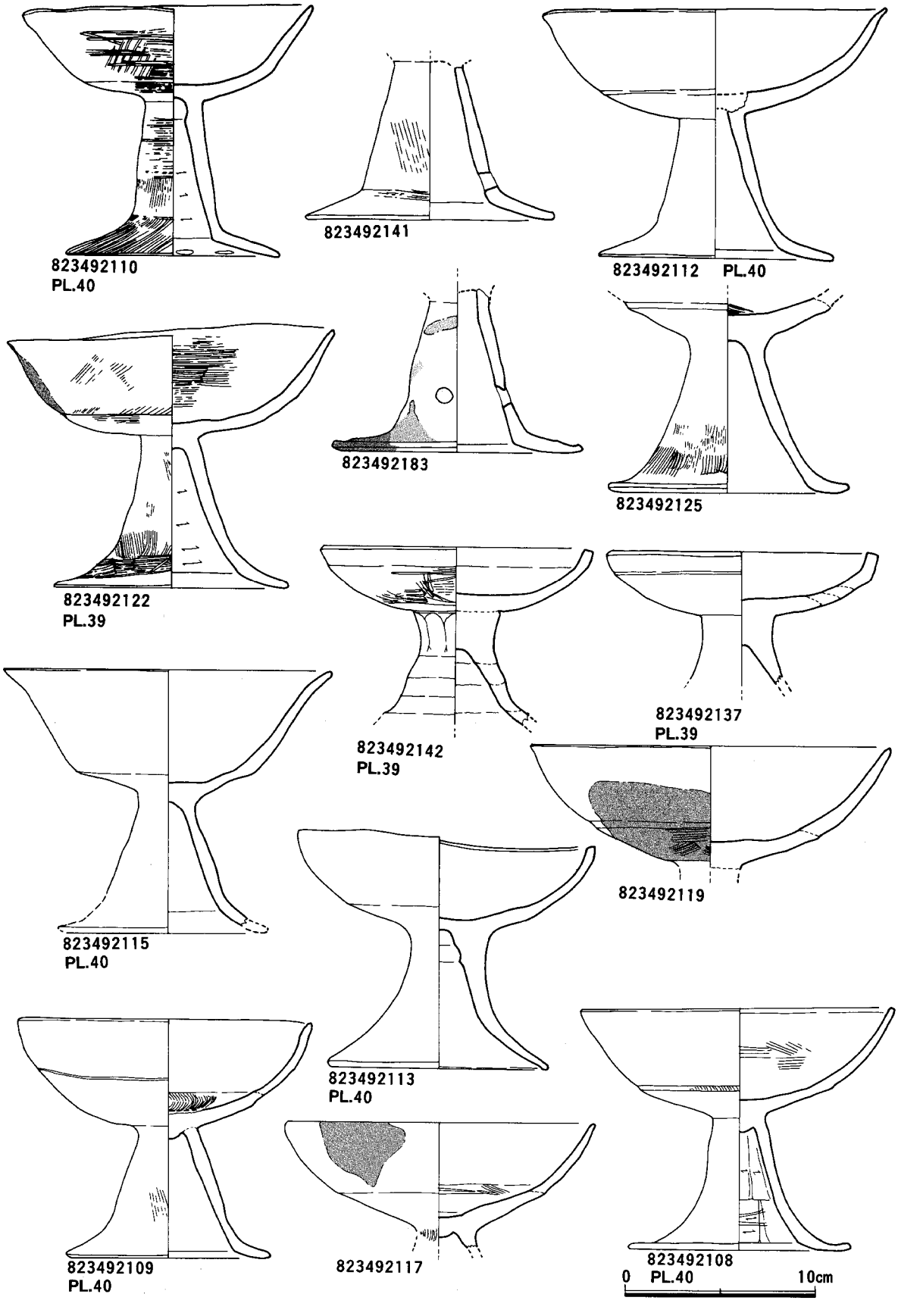


Fig. 93 Ⅸ区出土遺物実測図—13（縮尺1/3）

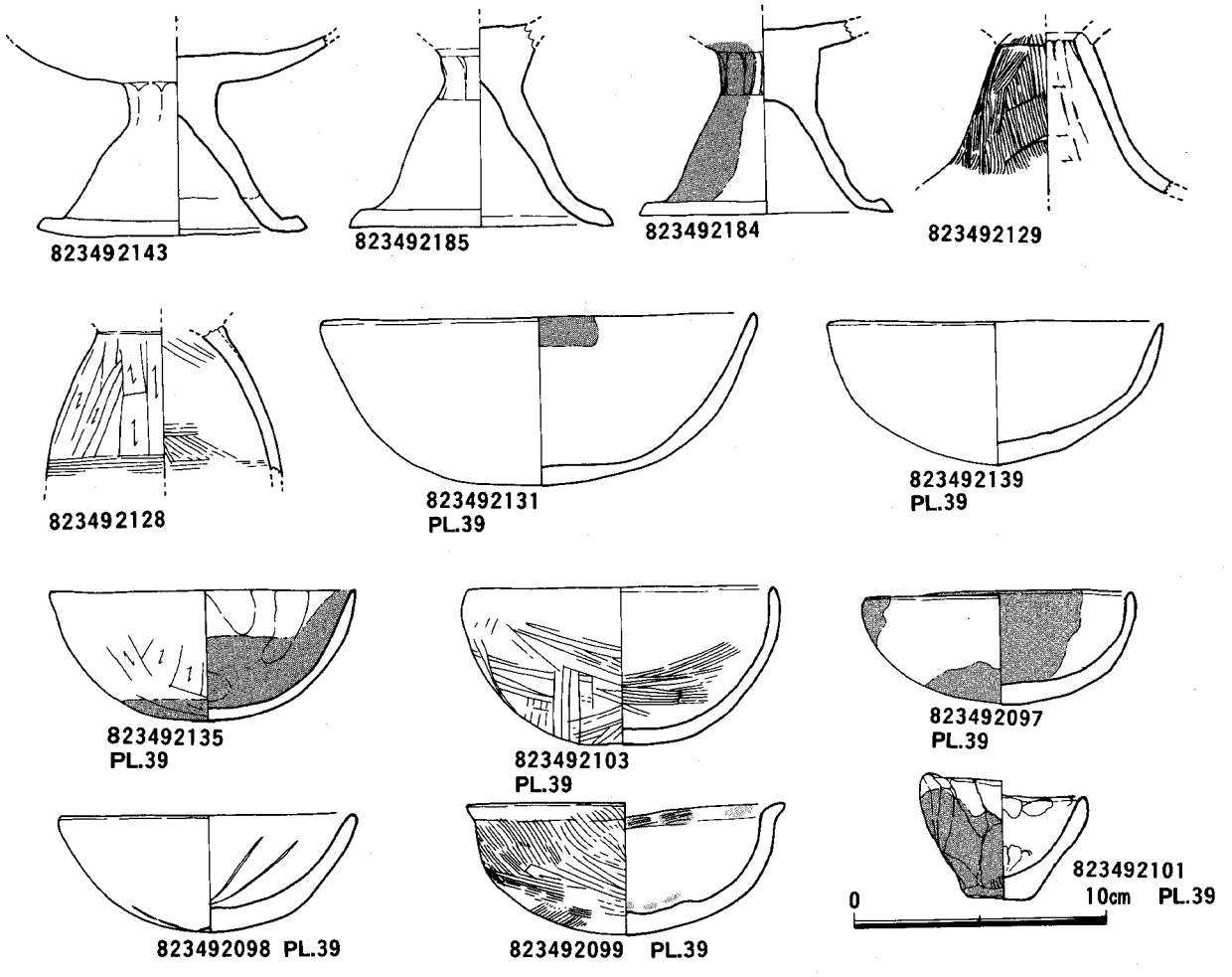


Fig. 94 Ⅸ区出土遺物実測図ー14（縮尺1/3）

92105.92111.92123.92107.92118.92106.92115.92119.92110

2　1と類似するが、脚部端部が折り曲げか端部以外も接するタイプ

92127.92124.92114.92125.92183

3　坏部に沈線・稜等がなく、坏部が椀形を呈するタイプ

92113.92109.92112.92142.92137

4　2の脚部をもち、3の坏部を有するタイプ

92108

5　脚部が膨らみ長さが短い小型の高坏

92143.92185.92184.92129.92128

椀形土器・手づくね土器（Fig. 94 PL. 39）

椀形土器は7点、手づくね土器1点を図示した。**92131** 底部が丸底で、口径17cm、器高6.6cmを測り、外面調整は口縁部付近がナデ、胴部下が荒い篦削りを施す。**92139** 底部が丸底で、口径13.3cm、器高5.7cmを測り、外面調整は表面剥落のため調整不明。内面はナデ仕上げを行っている。

92135 底部が丸底で、口径12cm、器高5.2cmを測り、外面調整は口縁部付近がナデ、胴部下が荒い篦削りを施す。内面は指押えの後ナデ調整。**92103** 底部は丸底か、丸みを持った平底で、口径12cm、

器高6.1cmを測り、外面調整は口縁部付近がナデ、胴部下が刷毛目、内面が篦磨きを施す。92097～92099は小型の椀で、口径10.7cm・11.8cm・12.5cm、器高が4.5cm・4.6cm・5.2cmを測る。椀形土器の胎土は細砂粒を多く含み、1～3mm大の石英・長石・雲母粒を含む。手づくね土器は口径6.5cm、器高5cm。

土師質の特殊遺物（Fig. 95 PL. 33・34・36・38）

Fig.95に図示した遺物は形態的・製作技法・文様形態等が在地の土器とは異なり、韓半島の影響を受けて製作されたか、工人が吉武地区に移住したか、搬入されたものかは定かではないが、吉武遺跡群の中でⅡ次調査だけではなく、Ⅲ～Ⅵ次調査内からも同様の特殊遺物が出土している。

92094 鉢形の形状を呈する土器で、底部は平底であるが、僅かに上げ底を呈する。底部端部は篦削りを施し丁寧に仕上げている。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位で内湾し頸部で大きく外反する。口縁部は外に開き、端部は稜を造り丸く納める。外面調整は口縁部がナデ、頸部から底部にかけて格子の叩きを全面に施す。内面は口縁部がナデ、他は篦削りを施す。口径15.9cm、器高13.3cm、底径9.6cmを測り、格子の大きさは0.5cm×0.3cmである。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・赤色粒・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗褐色＋黒斑を呈する。**92160** これも形態的には92094と同じ鉢形土器である。底部は平底、底部端部は篦削りを施し丁寧に仕上げている。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位で内湾し頸部で大きく外反する。口縁部は外に開き、端部は稜を造り「コ」字状に納める。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部上位から胴部下位にかけて縦方向の叩きを全面に施す。内面は全面ナデを施す。口径12.5cm、器高11cm、底径8cmを測る。胎土は細砂粒を多く含み、1mm大の石英・赤色粒・雲母粒を含む。色調は外面とも明黄褐色＋黒斑、内面が明黄褐色を呈する。**92121** 92121も上記の2点と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、内面中央部は盛り上がり、底部端部はシャープな造りである。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位でやや内湾し、頸部で一度外反する。口縁部は頸部からさらに外に開き端部を納める。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縄席文を全面に施す。内面は全面にナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗赤褐色＋明赤茶褐色＋黒斑、内面が明肌色＋黒褐色を呈する。口径14.8cm、器高14cm、底径8.4cmを測る。

92083 92083も上記の3点と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、底部端部はやや雑な造りである。底部から内湾しながら垂直に立ち上がり頸部で大きく外反し、口縁部に達する。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縦刷毛目のあとナデ仕上げ、底部が篦削り、内面は口縁部がナデ、他は篦削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・長石・雲母・赤色粒を含む。色調は内外面とも暗褐色＋明褐色を呈する。口径14.4cm、器高12.9cm、底径8.5cmを測る。

92064 これも同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、外面中央部がやや上げ底状になる。胴部は内湾しながら外に開きそのまま立ち上がるが胴部中位で内向して頸部に達する。頸部から大きく外反して口縁部に達するいわゆる「く」字状を呈する。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縦の叩きの後ナデ仕上げを施す。内面は全面がナデである。胎土は細砂粒を多く含み、4mm大の石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗褐色＋明肌色＋黒斑を呈する。口径16.9cm、器高18.5cm、底径9.4cmを測る。**92145** 口縁部のみの出土であるが、胴部に縦の叩きを施す甕形土器である。口縁部は「く」字口縁を呈す。口縁部・内面はナデを施す。胎土は細砂粒・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色、内面が黒色を呈する。口径14.4cm。**92163** 浅い鉢形土器で、口縁部が欠損している。底部はやや上げ底を呈し、底部端部はシャープな造りである。底部から大きく外反し、胴部中位で内湾しながら頸部に達する。口縁部は欠損するが、おそらく外に開くタイプであろう。外面調整は、胴部が縦叩きの後二条の沈線を巡らす。内面は全面にナデを施す。胎土は細砂・赤色・雲母粒を含む。色

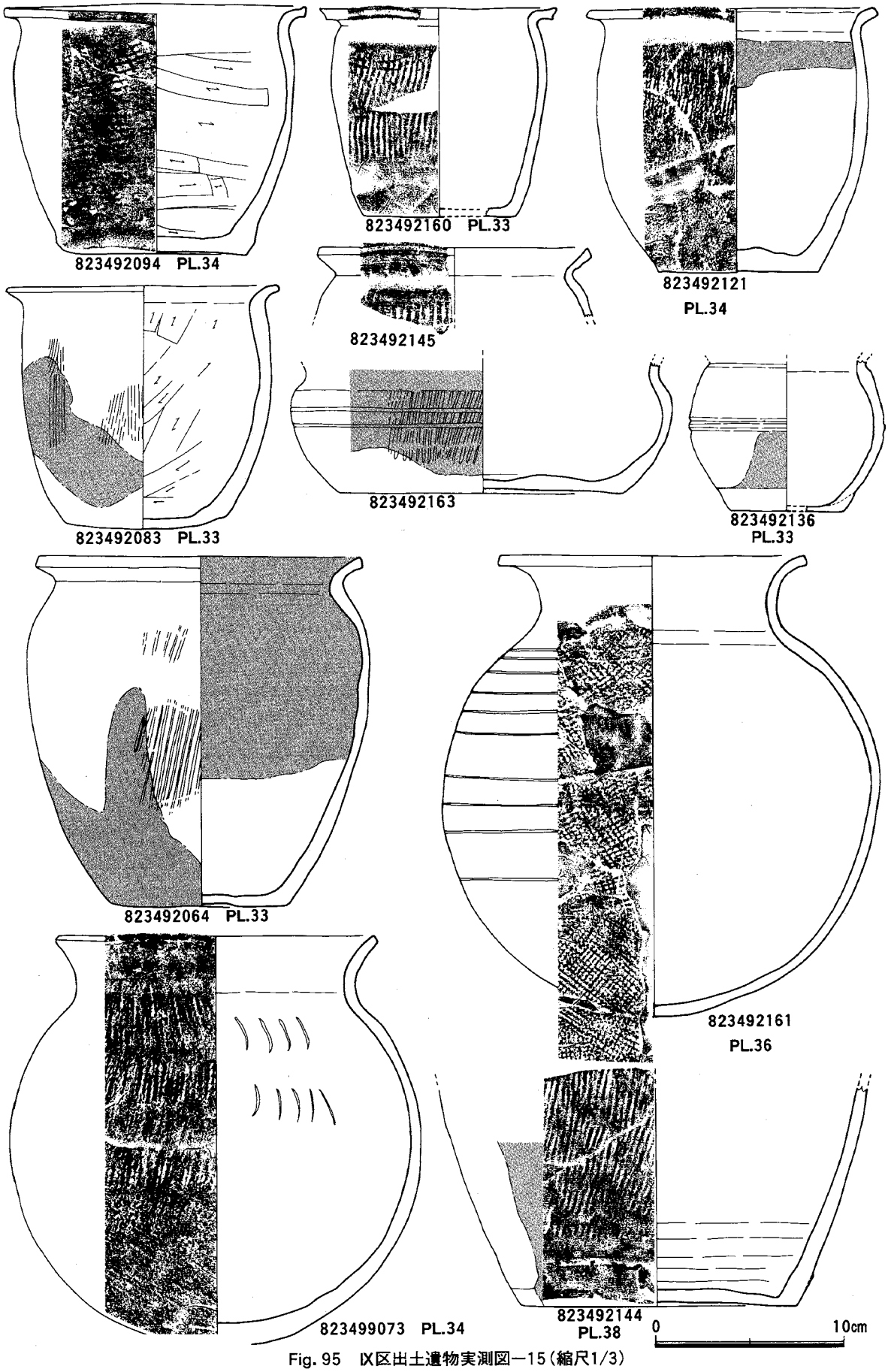


Fig. 95 Ⅸ区出土遺物実測図—15（縮尺1/3）

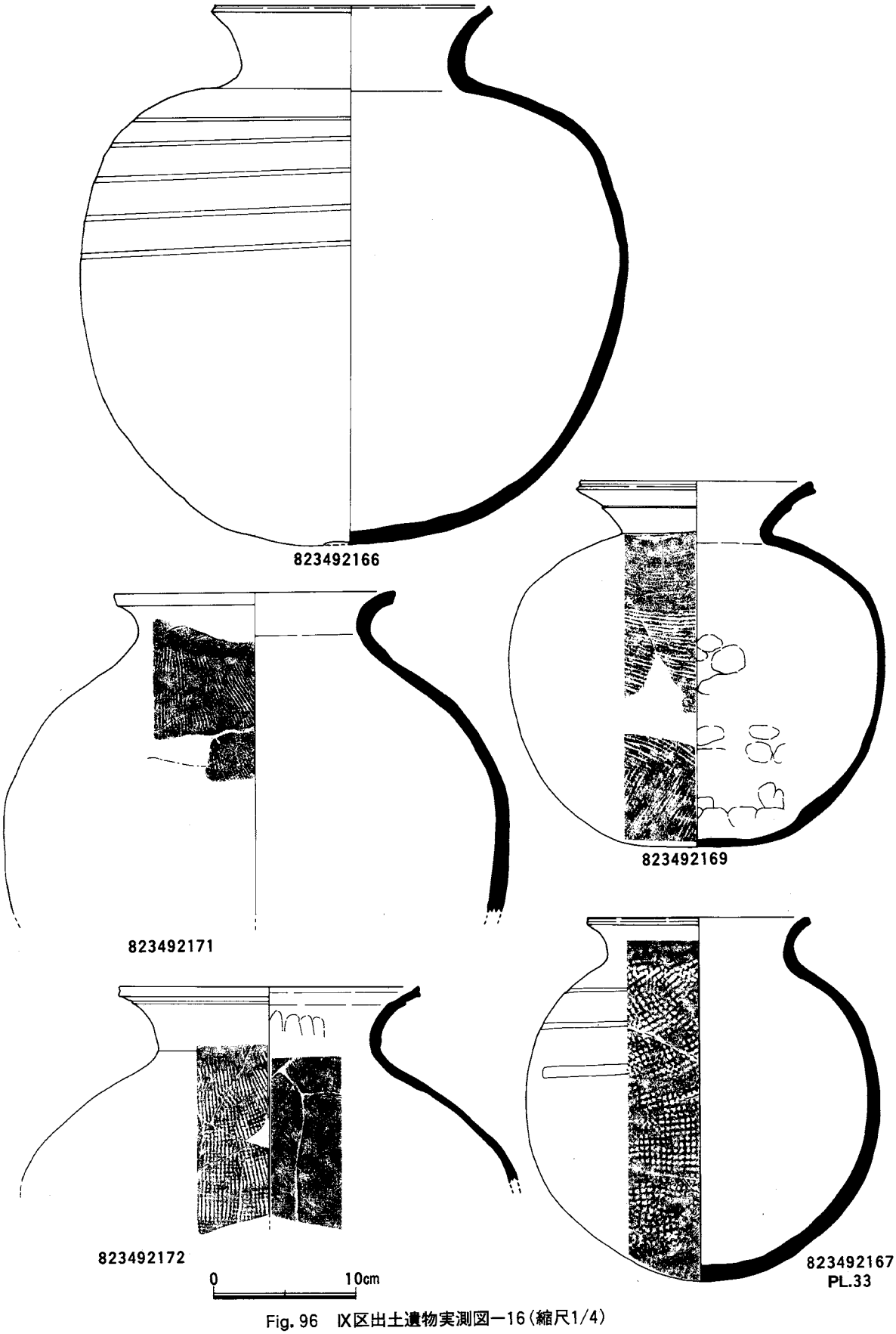


Fig. 96　IX区出土遺物実測図ー16（縮尺1/4）

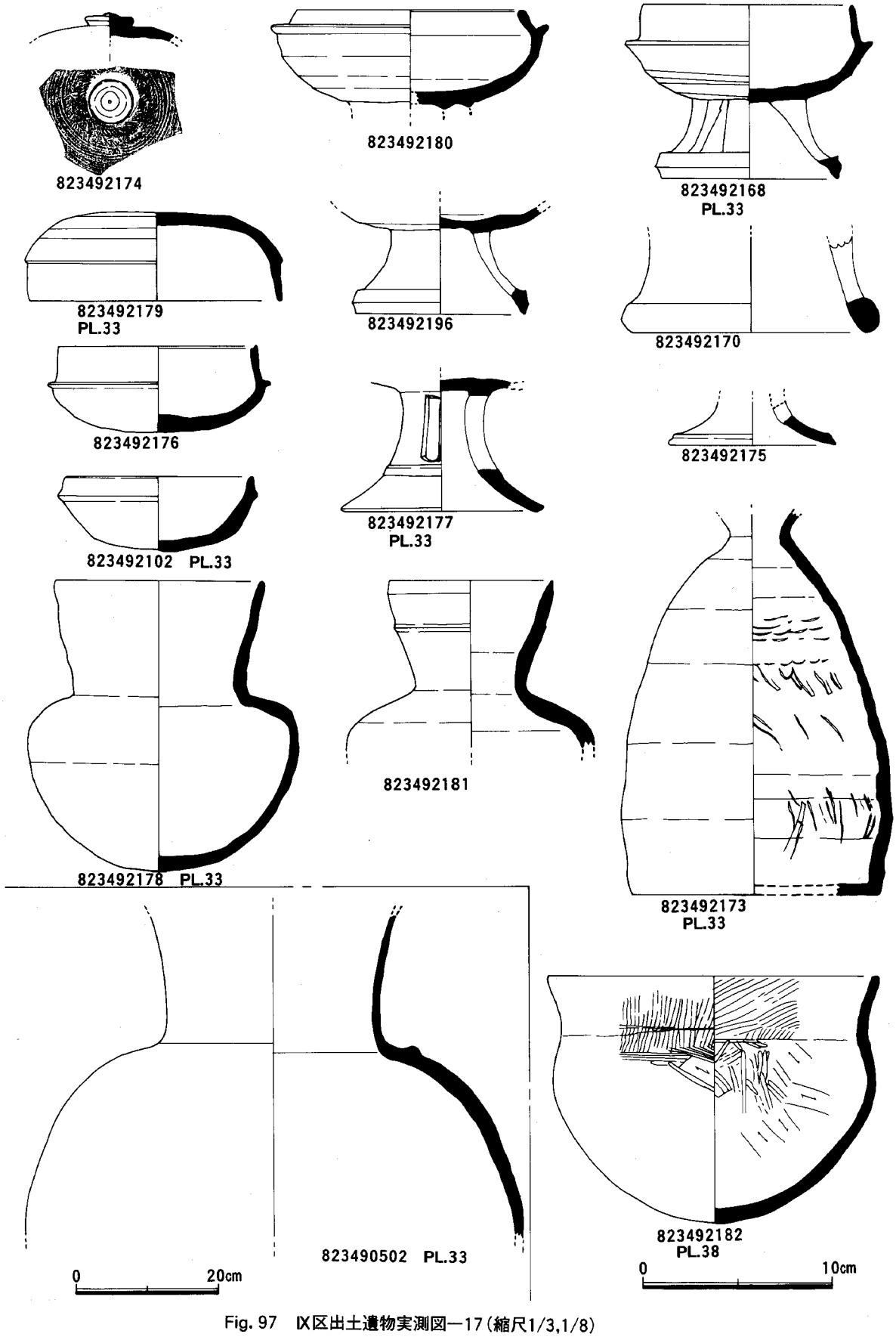


Fig. 97 Ⅸ区出土遺物実測図—17（縮尺1/3,1/8）

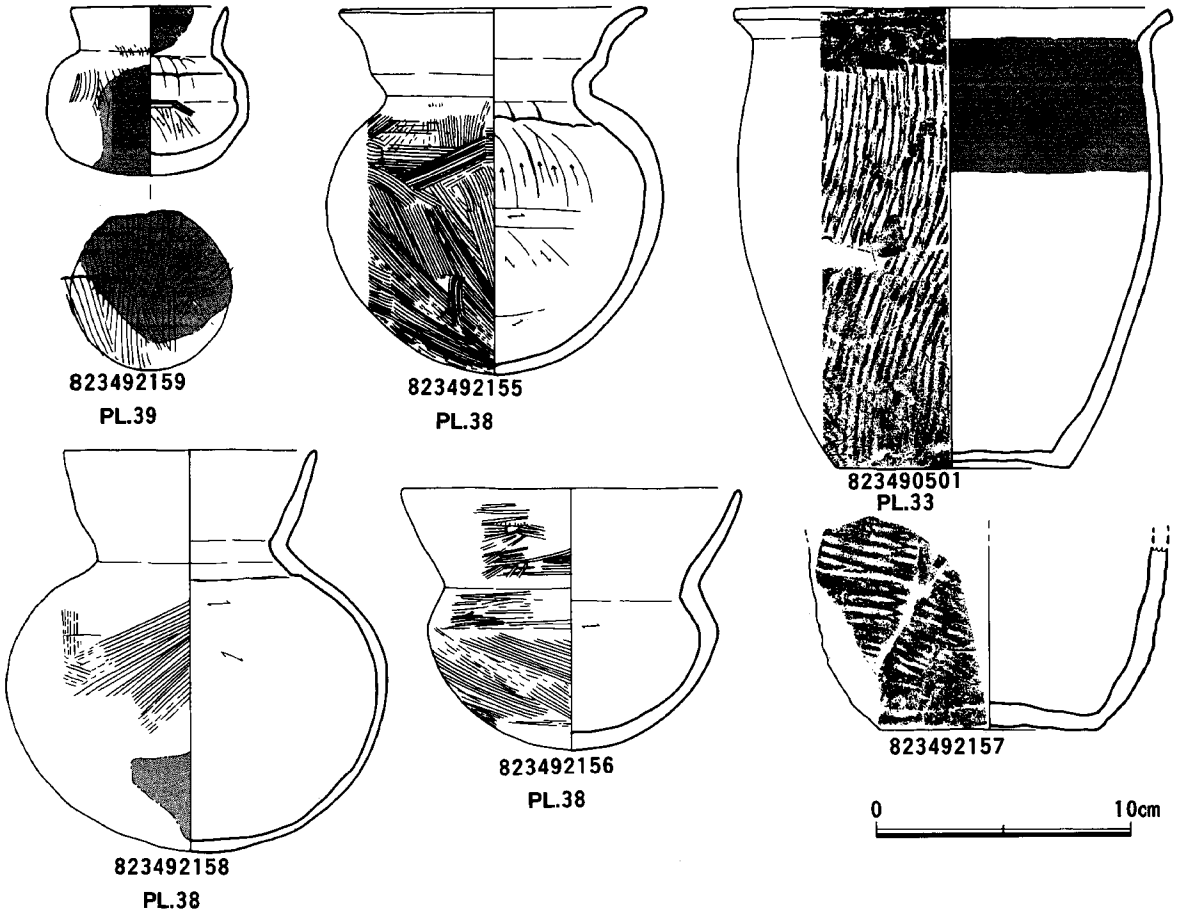


Fig. 98　IX区出土遺物実測図―18（縮尺1/3）

調は外面が淡茶褐色＋黒斑、内面が明黄褐色を呈する。胴部最大径14cm、底径15cmを測る。

92136　口縁部・底部の一部を欠損する鉢形土器である。底部は薄く仕上げ胴部は厚い。胴部中位に二条の沈線を巡らし、「コ」字の突帯状に仕上げている。外面調整は内外面ともナデを施す。胎土は細砂・赤色粒を多く含む。色調は外面が暗黄褐色＋黒斑、内面が明赤黄褐色を呈する。底径6cm。

92144　口縁部・頸部を欠損するが、これも92160と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で外面中央部がやや上げ底状になる。胴部は内湾しながら外に開きそのまま立ち上がる。外面調整は胴部が縦の叩きを施す。内面は全面がナデ、底部近くは粘土帯が観察できる。胎土は細砂粒を多く含み、細かな石英・雲母粒を含む。色調は外面が淡赤褐色＋暗褐色＋黒斑、内面が淡黄褐色＋黒斑を呈する。底径14.5cmを測る。**92161**　中型の甕形土器である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的にほぼ5mmの厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部中位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達し、頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で外に開き端部を丸く納める。外面調整は、格子の叩きを施文後、頸部下に十条の沈線を巡らしている。口縁部から頸部が横ナデ、内面は全面がナデである。胎土は細砂粒を多く含み、4mm大の石英・長石・雲母粒を含む。赤色粒も微量であるが含まれている。色調は外面が明茶褐色＋黒斑、内面が明黄茶褐色＋暗褐色を呈する。口径16.2cm、器高24.3cm、胴部最大径23.3cmを測る。**92073**　ＳＸ－01から出土した小型の甕形土器で復元完形である。底部は丸底で、底部の器壁は厚いが、胴部・口縁部は薄くほぼ5mm前後の厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部下位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達するが、92161ほど胴部も張らず頸部の締まりも悪い。口縁部は外に開き端部を丸く納める。外面調整は縄蓆文を施している。口縁部から頸部が横ナデ、内面は全面がナデであるが、爪跡状に工具痕が残る。胎土は細砂粒を多く含み、2～

3㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗茶褐色＋暗黒褐色、内面が暗茶褐色＋黒斑を呈する。口径16.5㎝、器高21.6㎝、胴部最大径21.9㎝を測る。

須恵器（Fig. 96・97 PL. 33・38）

ＳＤ－07から出土した須恵器を18点図示した。土師質の特殊遺物と同じように明らかに在地の土器とは異なる形態・製作技法・文様等が見られ、韓半島の影響を受けて製作されたか、工人が吉武地区に移住したか、搬入されたものかは定かではないが、吉武遺跡群にはⅡ次調査だけではなく、Ⅲ～Ⅵ次調査、市道の調査である田・飯盛線、野方・金武線、吉武古墳群からも同様の土器が出土している。

92166　中型の甕形土器で陶質土器である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的にほぼ6㎜の厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部中位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達し、肩が張り締まる。頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で外に開き端部を上方に摘み上げ納める。外面調整は縄目の叩きの後横方向に箆ナデを施し、胴部に五条の横沈線を巡らす。胴部下は箆ナデを施す。口縁部から頸部は逆時計まわりの横ナデ、内面は叩きの後ナデ消しを施している。胎土は細砂粒を多く含み、石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が濃い青灰色、内面が赤みを帯びた青灰褐色を呈する。口径17.7㎝、器高38.2㎝、胴部最大径38.2㎝、頸部径15.6㎝を測る。**92169**　中型の甕形土器で復元完形である。底部は丸味をもつ平底で、器壁は薄く全体的にほぼ9㎜の厚さで口縁部が約1.4㎜と一番厚い。胴部は球胴形を呈し、頸部は肩が張り締まる。頸部から大きく外に開き口縁端部を上方に摘み上げ「コ」字状に成形する。口縁端部と頸部の間に一条の沈線を巡らすが、そのため沈線の下は稜をなす。外面調整は胴部中位まで横方向の叩き、下位は斜め方向の叩きを施し、口縁部から頸部は逆時計まわりの横ナデ、内面は指で成形後回転ナデを施している。胎土は細砂粒・黒色粒を含む。色調は青灰色を呈し、内外面とも一部に濃い緑色の自然釉と不純物が付着する。口径16.8㎝、器高25.8㎝、胴部最大径26.3㎝、頸部径10.6㎝を測る。**92167**　この土器はＳＤ－07とＳＸ－22から出土した資料が接合した、中型の甕形土器で復元完形である。底部は丸底で、器壁は底部がやや厚く1.6㎜、胴部から口縁部にかけては薄く全体的にほぼ7㎜の厚さがある。胴部はやや球胴形を呈し、肩はあまり張らず頸部の締まりも悪い。頸部から外に開き口縁端部を上方に摘み上げ成形する。外面調整は口縁部が逆時計回りの回転ナデを施し、胴部は格子の叩きを底部まで施す。その後、胴部上位に土器を回転させ螺旋状に三条のナデ磨り消しを巡らしている。内面の口縁部は回転ナデ、胴部から底部までは、当て具痕の磨り消しを行っている。胎土は細砂粒・黒色粒を含む。色調は内外面とも青灰色を呈する。口径14.8㎝、器高25.3㎝、胴部最大径24.3㎝、頸部径13.2㎝を測る。**92171**　これは在地の土器で、中型の甕形土器の口縁部である。胴部は張り、頸部は締まる。頸部から垂直に立ち上がり口縁端部を外へ摘み上げ成形する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が縦方向の細かな平行叩きと、叩きの後ナデを施す。内面は回転ナデを施す。胎土は細砂粒・黒色粒、1㎜前後の石英粒を含む。色調は内外面とも灰色を呈し、外面に黒斑が見られる。口径19.7㎝を測る。**92172**　これも在地の土器で、中型の甕形土器の口縁部である。胴部は張り、頸部は締まる。頸部から垂直に立ち上がり口縁端部を外へ大きく開き、口縁端部下で一条の沈線を有し、そのため段を持つ形状を呈する。端部は水引きによって成形する。外面調整は口縁部が回転ナデ、胴部が縦方向の細かな平行叩き、内面は口縁部が指押えの後回転横ナデ、胴部は同心円文の叩きを施す。胎土は僅かに細砂粒・黒色粒、1㎜前後の石英粒を含むが精製された粘土を使用している。色調は内外面とも灰色を呈し、外面の一部に自然釉が見られる。口径21㎝を測る。

高坏（Fig. 97 PL. 33）

高坏は92180・92168・92196・92170・92177・92175の6点を図示した。代表的な**92168**は脚部の透かしが台形状を呈し、三方向に配列している。坏身部分は受身部分が1.9㎝と高い。外面

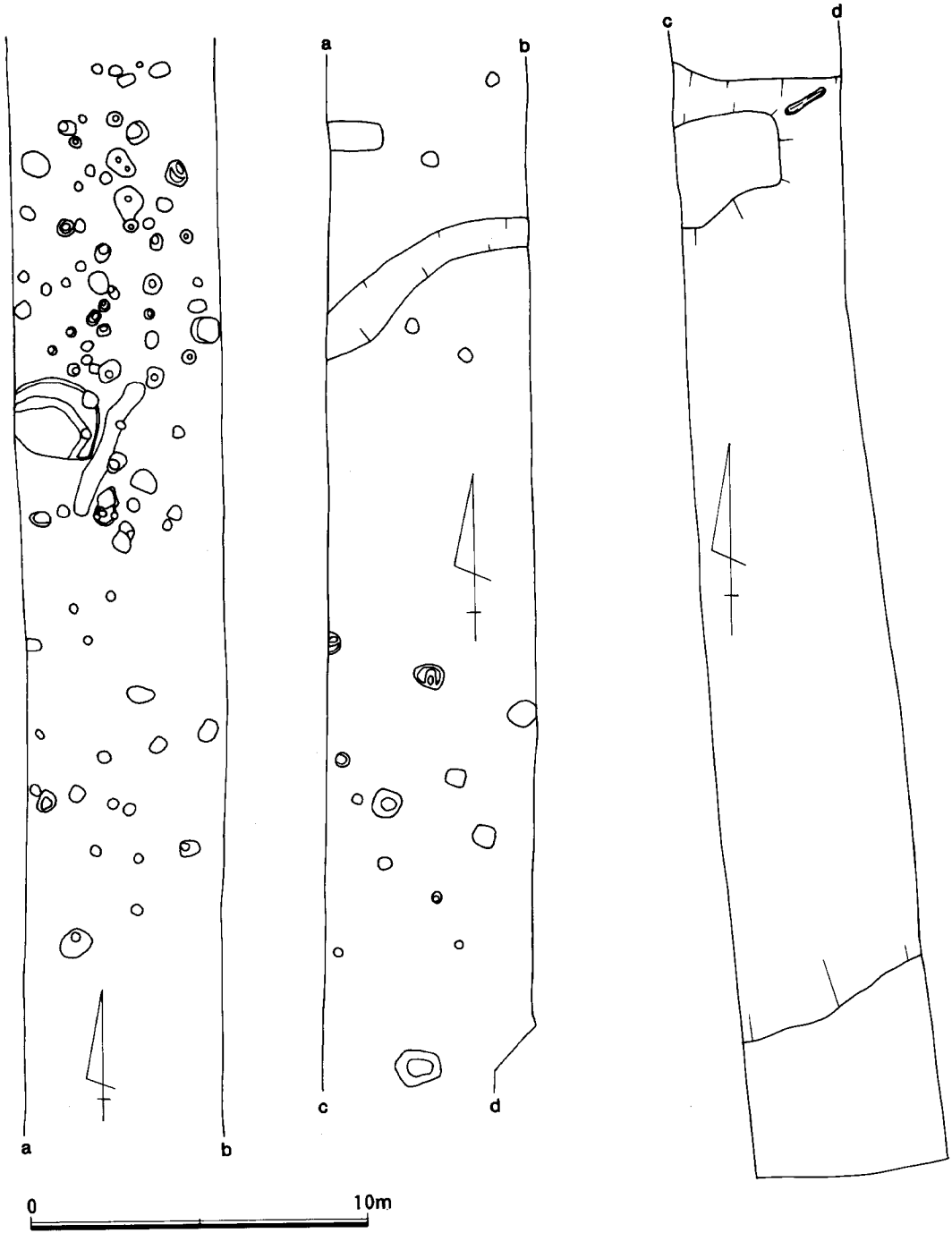


Fig. 99　X区遺構検出状態（縮尺1/200）

調整は坏身部分の底辺部が回転篦削り、他は回転ナデを施す。内面は底辺部が静止ナデ、他は回転ナデを施す。胎土は１～２㎜大の石英等を含むが、精製された粘土を使用している。色調は内外面とも灰色＋白灰色を呈し、脚部の一部に焼成の悪い部分が認められる。口径11cm、器高9.1cm、脚径9.3cm、脚高４cmを測る。他は脚部、及び坏部で、時期差もある。

坏蓋２点（92174・92179）・坏身２点（92176・92102）を図示した。**92102**は生焼け土器で、全体が赤褐色を呈する。形状からこの土器と92174の土器が一番新しい時期である。

92178　小型の直口壷である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的にほぼ6㎜の厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部上位で最大径を持つ。そこから大きく内向し頸部に達し、肩が張り締まる。頸部はやや外反しながら垂直に立ち上がり口縁部を丸く納める。内外面の調整は回転ナデを施し、外面に焼成時に付着した不純物がみられる。胎土は細砂粒を多く含み、石英・長石を含む。色調は内外面とも灰色を呈する。口径10.9cm、器高15.2cmを測る。**92173**　形状は徳利形を呈する土器で陶質土器と考えられる。底部は平底で、底部からやや内湾しながら頸部まで達し、頸部は締まる。頸部から大きく外反し口縁部に達すると思われるが、口縁部が欠損しているため不明。外面調整は横・縦のナデ、内面は工具痕と爪跡痕・横ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、３～６㎜大の石英粒も含む。色調は内外面とも青灰色を呈する。底径13.2cmを測る。**92182**　生焼けの鉢形土器である。底部は丸底で、胴部の最大径は上位にあり、内向してすぐに頸部に達する。頸部は僅かに締まるが、そのまま外反し口縁端部を丸く納める。外面調整は胴部が縦の刷毛目と篦削り、内面は口縁部が刷毛目、胴部が篦ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、細かな石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも淡灰色を呈する。口径17.5cm、器高12.9cmを測る。

Pit出土の土器（Fig. 97・98　PL. 33）

90502　Pit425と429から出土した資料が接合した大型の甕形土器で、口唇部・底部を欠損するが陶質土器と考えられる。胴部は球形を呈し、頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で僅かに外に開き端部を納めるものと思われる。頸部下に小突起を有するが、形態から頸部下に３個付くものと思われる。外面調整は口縁部は横方向のナデ、頸部は篦ナデ、胴部は篦削り後ナデを施し、内面はナデと篦削りを施す。胎土は３～４㎜大の石英・長石を含む。色調は内外面とも淡黄色を帯びた灰色＋淡灰色を呈する。口縁部付近の径35.2cm、胴部最大径70.4cm、頸部径30.4cmを測る。**90501**　Pit25から出土した土師質土器で、口縁部と底部（上げ底）が異なるが形状・調整・胎土・色調等はFig.95の92121に非常に類似する。口径17.1cm、器高18cm、底径9.1cmを測る。

ＳＤ－18・30出土土器（Fig. 97・98　PL. 38）

ＳＤ－30からは須恵器が１点（92181）と土師器４点（92155～92158）を図示した。

92181　須恵器の直口壷で胴部より下が欠損する。口縁部と頸部の間に一条の稜（三角突帯）を巡らす。外面調整は口縁部と胴部が逆時計まわりの回転によるナデ、頸部が静止ナデ、内面は口縁部が回転ナデ、胴部が静止ナデである。胎土は微砂粒の精製された良質な粘土を使用している。色調は内外面とも暗青灰色を呈する。口径8.6cmを測る。土師器は鉢形土器（92157）、小型壷形土器（92155・158）、坩（92156）がある。**92157**の鉢形土器の底径は8.4cm、小型壷の**92155**の口径は12cm、器高14.4cm、**92158**は口径が9.8cm、器高が15.7cm、**92156**は口径が13.4cm、器高10.3cmを測る。

ＳＤ－18からは小型丸底壷が出土した。全面に刷毛目を施し、口径は6.1cm、器高6.6cmを測る。

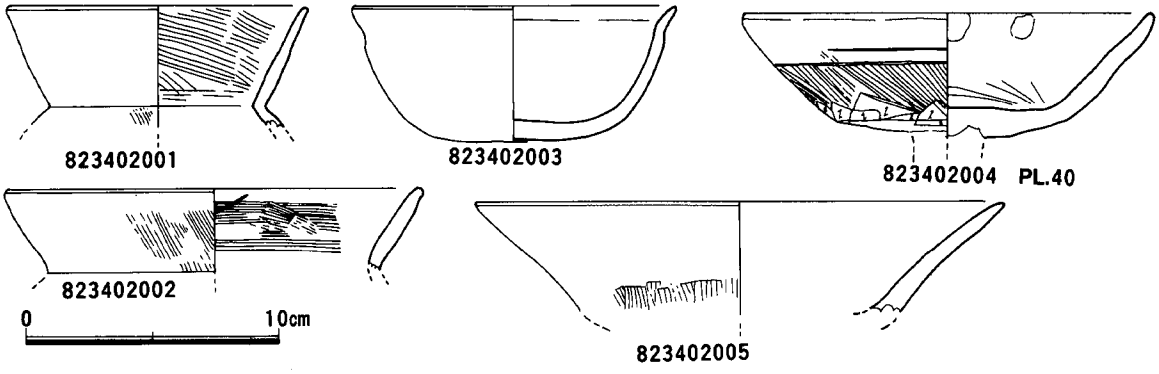


Fig. 100　X区出土遺物実測図（縮尺1/3）

第七節　第二次調査X区－古墳時代の遺構－

検出遺構

X区は第二次調査地点のⅧ区から約100m西側に位置し、市道田・飯盛線と直角に交わる幅10mの農業用道路部分の調査である。調査区のすぐ西に日向川が流れていることから遺構の流失も考えられたが、遺構の密度・遺存状態は悪いが、溝・柱穴不整形土壙が検出された。調査範囲は第3期圃場整備事業範囲の幅10m、長さ100mで、調査面積1,000㎡である。

溝状遺構

日向川の支流に属する旧河川と思われる大溝が一条検出された。幅27m、深さ1mで西から東に流れる状況と考えられる。Ⅷ区からは100mほどの距離があるが、Ⅷ区から検出したSD－02と合流する可能性が高い。この他に幅1.5m、深さ0.5m、長さ7mの小溝を大溝の北側から検出した。不整形土壙2基、Pit等を検出したが、Pitは調査範囲が狭いため建物と認定できるものはないが、大きさ・規模等から掘立柱建物の可能性を考えられるPitもある。

出土遺物（Fig. 100）

X区からはSD－02上層から出土した5点の土器を図示した。下層からは遺物は出土していない。他の溝・柱穴及び不整形土壙からは遺物は出土していない。X区の遺物番号は0を基本にした。

02001　土師器の坩形土器の口縁部である。頸部が締まり、口縁部はいわゆる「く」字状を呈するが、甕形土器と違い口縁と頸部の間が膨らむ形状を呈する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が刷毛目を施し、内面は口縁部が刷毛目、胴部が篦削りである。胎土は細砂及び2㎜大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は内外面とも茶褐色を呈する。口径12cmを測る。**02002**　土師器の甕形土器の口縁部である。頸部はあまり締まらず、口縁部は「く」字状を呈する。調整は内外面とも斜めの刷毛目調整を施す。胎土は細砂及び3～4㎜大の石英・赤色・雲母粒を含む。色調は内外面とも明茶褐色を呈する。口径16.6cmを測る。**02003**　土師器の椀形土器の復元完形品である。端部が丸まった平底を呈し、やや内湾し外に開きながら立ち上げ、頸部で更に外反させ口縁端部を丸く納める。外面調整は口縁部が横ナデ、胴部から底部が篦ナデを施す。内面は口縁部がナデ、胴部下が指押えである。胎土は細砂及び1㎜大の石英・赤色・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗褐色を呈する。口径13cm、器高5.4cmを測る。**02004**　土師器の高坏の坏部で、脚部を欠損する。外面に二条の沈線を巡らし、下の沈線部分から刷毛目を施す。また底部近くには篦削り・指押え・篦ナデを施し、口縁部のみナデを行っている。内面は口縁部が指押え後篦ナデ、胴部が篦ナデである。胎土は細砂及び1～2㎜大の石

英・長石・雲母粒を多く含む。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。口径16.2cmを測る。

02005 土師器の高坏の坏部で、坏部の底面と脚部を欠損する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が刷毛目を施す。内面は全面ナデ仕上げを行っている。胎土は細砂及び1～3mm大の赤色粒・雲母粒を多く含む。色調は内外面とも明茶褐色を呈する。口径21cmを測る。

第四章　ま　と　め

今回の報告で吉武遺跡群第Ⅰ・Ⅱ次調査の報告は終了するが、飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）のなかで、その対象がすべて遺跡群の範疇で、改良組合の方々にはほんとうにご迷惑をかけた。

今回の報告で、第Ⅱ次調査のⅤ区から検出した縄文時代の貯蔵穴、第Ⅰ次調査の古墳時代の掘立柱建物群・住居址等、第Ⅱ次調査のⅧ・Ⅸ区から出土した陶質土器、Ⅵ区から検出した条里制の溝等数多くの発見を報告できたことは喜びに堪えない。

そのまとめとして時代ごとに問題点を導き出し今後の研究課題になれば幸いである。

縄文時代の遺構

ここでは貯蔵穴の時期、切り合い関係と時期について多少触れておく。出土した土器から中期がＳＵ－02、05、08、10、11、13、20、22、28～31、33～36、38～41、43、45、46で、後期初頭に位置づけられるものとしてＳＵ－09、15、16、32、44がある。

弥生時代の遺構

第Ⅰ・Ⅱ次調査で検出した甕棺墓は合計で227基であるが、この結果、前期に属する甕棺墓が69基、中期甕棺墓139基、後期甕棺墓19基である。特にⅡ区は46基中44基が前期末であり、列埋葬である。これに対してⅣ区では、一ケ所に埋葬されている。時期的にはⅣ区が古く、同時期にⅡ区とⅣ区に埋葬されている所から別々の集落が営まれていたことが窺える。中期はⅡ区には小児甕棺墓２基しか検出されず、Ⅲ・Ⅳ区に集中的に見られる。後期はⅣ区に19基検出され散発的な広がりが見られる。

竪穴住居址・掘立柱建物はⅡ区から住居址が49軒（前期９、中期21、後期12、不明７）、掘立柱建物が34棟（中期27、後期７）、Ⅳ区から住居址が24軒（前期16、中期８）、掘立柱建物が７棟（前期５、中期２）がある。

Ⅴ区からは環濠集落と考えられる遺構が検出されたが、竪穴住居址は検出されていない。Ⅸ区からは中期の住居址が３軒、溝が８条、甕棺１基、掘立柱建物19棟が検出され、後期には溝５条、掘立柱建物21棟が検出された。大溝（ＳＤ－01）がⅡ区とⅣ区との間、Ⅸ区の西側に流れるが、市道田・飯盛線には検出されず西に流れを変えることが判明している。Ⅷ区とⅨ区との間に流れる大溝（ＳＤ－02）はⅩ区に検出されている。両方とも弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土していることからそれ以前から流れていたと考えられる。

弥生時代の住居址は第一次調査Ⅱ・Ⅳ区に集中している。二～六次調査においては散発的にしか検出されていない。甕棺墓をみると六次までで数千基に及ぶが、その痕跡である住居址があまりにも少ない。削平が著しい部分があるとしてもあまりにも少ない。今後周辺部で検出される可能性が高く、それは大集落であり、吉武遺跡群の人々の生活空間がいかに広かったかを物語ることになる。

古墳時代の遺構

Ⅰ・Ⅱ次調査で、古墳時代の中心的遺構はⅧ区とⅨ区・市道田・飯盛線の調査範囲で検出された掘立柱建物、溝、住居址等である。ここで方向が一致する建物をみると

第１グループ　Ⅷ区のＳＢ－14を基本とするとＳＢ－16・19が同一方向で、Ⅸ区ではＳＢ－86グ

ループＳＢ－55・71・73・84・87・91・97・100・106が合致

第２グループ　Ⅷ区のＳＢ－07を基本とするとＳＢ－27・28が同一方向で、Ⅸ区ではＳＢ－62・66・69が合致

第３グループ　Ⅷ区のＳＢ－02を基本とするとＳＢ－03・15が同一方向で、Ⅸ区ではＳＣ－80グループＳＢ－79・85・101・102、市道ＳＢ－04が合致

第４グループ　Ⅷ区のＳＢ－25を基本とするとＳＢ－18・20が同一方向で、Ⅸ区ではＳＤ－07と平行に建てられたものＳＢ－50・52・56・60・78・93・105・107・109が合致

第５グループ　Ⅷ区のＳＢ－10を基本とするとＳＢ－13・29・23が同一方向で、Ⅸ区ではＳＢ－93グループＳＢ－77・78・92・98・110が合致する。

以上のように５つの方向を持つグループに分けた。これらの建物の時期を出土遺物より考察してみた。柱穴掘方から出土する土器は土師器・須恵器で、不整形土壙（ＳＸ）から出土する土器と時期差はない。土師器では布留併行期のものが主である。新しい時期として小型丸底壷があり、須恵器では、Ⅱ式からⅢ式が主である。Ⅷ区ではＳＸ－16・18出土の小型丸底壷が最も新しく、Ⅸ区でも同様なことがいえる。これからして掘立柱建物は新布留式土器の時期か、それより僅かに新しい時期を設定しても良いと考えられる。Ⅷ区及びⅨ区から出土した土器で在地の土器とは考えにくい一群が出土した。いわゆる陶質土器及び朝鮮半島系土器と称せられる土器に酷似する一群である。これらの土器群は吉武遺跡群第Ⅲ・Ⅳ次調査からも出土している。土師器では鉢形土器・甑・壷形土器・甕形土器に縄蓆文や平行叩き・格子叩きを施し、焼成・胎土・色調も在地の土器とは異なり一目でその違いが明らかである。

須恵器では高坏・坏蓋・坏身・甕形土器・埦形土器・徳利形土器等が見られる。これらのことは何を物語るものであろうか今後の研究課題として取り上げれば面白い課題となろう。

奈良時代以降

第Ⅵ区から磁北N-1°-Wの方向を持つＳＤ－20が検出された。南北が調査範囲外であったため追跡調査はできなかったが、早良区の奈良時代の条里制の方向は南北基区軸線方向は国土地理院座標軸北から7°20′西に偏していることから国土地理院磁針方位は西偏6°20′であり、これを加算すると検出された溝は条里制の区割境溝の可能性が高い。まだ調査されていない部分もあることから今後この溝の延長上の区割り溝が検出される可能性がある。

参考文献

吉武塚原古墳群　福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集　福岡市教育委員会刊　1980年
田村遺跡群Ⅲ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集　福岡市教育委員会刊　1987年
田村遺跡群Ⅳ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集　福岡市教育委員会刊　1987年
田村遺跡群Ⅴ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集　福岡市教育委員会刊　1988年
田村遺跡群Ⅵ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集　福岡市教育委員会刊　1989年
田村遺跡群Ⅶ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集　福岡市教育委員会刊　1990年
吉武遺跡群Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集　福岡市教育委員会刊　1986年
吉武遺跡群Ⅳ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集　福岡市教育委員会刊　1989年
吉武遺跡群Ⅶ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集　福岡市教育委員会刊　1995年
吉武遺跡群Ⅷ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集　福岡市教育委員会刊　1996年
吉武遺跡群Ⅸ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集　福岡市教育委員会刊　1997年
吉武遺跡群Ⅹ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集　福岡市教育委員会刊　1998年
吉武遺跡群Ⅺ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集　福岡市教育委員会刊　1999年
吉武遺跡群Ⅻ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集　福岡市教育委員会刊　2000年
四箇遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集　福岡市教育委員会刊　1987年
入部Ⅴ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集　福岡市教育委員会刊　1995年
入部Ⅵ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集　福岡市教育委員会刊　1996年
橋本榎田遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集　福岡市教育委員会刊　1997年
武末純一　「朝鮮半島系の土器」「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書124集1995年 抜刷

Tab. 3　1・2次（Ⅱ区・Ⅸ区）住居址計測一覧

1次Ⅱ区

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 縦×横×深さ(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
1次Ⅱ区	SC-1000		北東−南西	N−22°30′−E	3.15×3×0.12	9.6	方形					Fig.9	
		1						円形	16	16	9		
		2						円形	24	20	19		
		3						円形	24	24	26		
		4						方形	48	46	20		
	SC-1001		北西−南東	N−66°30′−E	3.6×3.3×0.13	11.9	方形					Fig.9	
		1						方形	44	40	10		
		2						方形	24	20	4		
	SC-1002		西−東	N−90°−E	3.8×3.5×0.2	12	方形					Fig.8	
	SC-1003		北−南	N−8°−W	5.18×1.2+α×0.1	6.21+α	方形					Fig.9	
	SC-1004		北西−南東	N−44°−W	4.7×4.5×0.1	21.15	方形					Fig.8	
		1						方形	78	66	24		
		2						不整方形	40	34	16		
		3						方形	68	52	34		
		4						方形	44	40	20		
	SC-1005		北西−南東	N−40°−E	3.9+α×2.55×0.1	9.95+α	長方形					Fig.8	
	SC-1006		北東−南西	N−34°−E	4.3×3.7×0.22	15.91	方形					Fig.8	
		1						不整方形	28	26	14		
		2						方形	46	38	24		
		3						方形	44	36	14		
		4						不整方形	28	28	12		
	SC-1007		北−南	N−12°30′−E	3.46×2.56×0.1	6.02	長方形					Fig.9	

2次Ⅸ区

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 縦×横×深さ(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
2次Ⅸ区	SC-80		北東−南西	N−45°−E	6.2×7.7×0.14	47.74	方形					Fig.65	
		1						楕円形	130	80	50		
		2						円形	110	105	20		
		3						円形	60	60	50		
					ベット状遺構								
					長方形	2.6							
					長方形	3.6	合計						
					長方形	3.15	12.5m²						
					長方形	3.15							

Tab. 4　1次Ⅱ区掘立柱建物計測一覧

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模	桁行		梁行		床面積	形状	柱穴規模(cm)			挿図	備考
					桁行×梁行	実長(m)	柱間(m)	実長(m)	柱間(m)	(m²)		長径	短径	深さ	番号	
1次Ⅱ区	SB−50	1	東−西	N−90°−E	2×2			3.6	1.9	15.1	楕円形	40	32	26	Fig.11	
		2							1.7		方形	34	32	24		
		3				4.2	1.6				方形	54	52	34		
		4					2.6				方形	48	40	44		
		5						3.6	1.2		方形	60	54	44		
		6							2.4		方形	36	36			
		7				4.2	1.9				円形	20	20			
		8					2.3				円形	26	24			
	SB−51	1	北−南	N−15°−E	1×1			2.5	2.5	6.5	不整方形	48	44		Fig.10	
		2				2.6	2.6				方形	36	36	10		
		3						2.5	2.5		不整方形	40	34	8		
		4				2.6	2.6				楕円形	44	30	10		
	SB−52	1	北西−南東	N−52°30′−W	2×1			2.15	2.15	12	長方形	36	30	20	Fig.10	
		2				4	2				方形	54	50	12		
		3					2				長方形	52	44	8		
		4						2.8	2.8		長方形	44	40	12		
		5				4.3	2				楕円形	52	38	12		
		6					2.3				不整長方形	50	48	12		
	SB−53	1	北西−南東	N−34°−W	1×1			2.8	2.8	11.2	楕円形	58	42	12	Fig.10	
		2				4	4				楕円形	88	66	14		
		3						2.8	2.8		方形	70	66	16		
		4				4	4				楕円形	80	62	16		
	SB−54	1	北西−南東	N−17°30′−W	2×1			2.8	2.8	13.4	方形	42	36	10	Fig.10	
		2				4.7	2.5				方形	38	36	10		
		3					2.2				隅丸長方形	54	32	8		
		4						2.8	2.8		長方形	56	42	10		
		5				4.8	2.3				長方形	78	60	10		
		6					2.5				円形	40	34	10		
	SB−55	1	西−東	N−81°−E	1×1			2.7	2.7	7.8	不整長方形	74	54	14	Fig.10	
		2				2.9	2.9				不整方形	58	48	28		
		3						2.7	2.7		長方形	50	40	14		
		4				2.9	2.9				隅丸長方形	70	52	14		
	SB−56	1	西−東	N−80°−W	1×1			2	2	4.6	楕円形	36	32	10	Fig.10	
		2				2.3	2.3				長方形	100	62	14		
		3						2	2		不整長方形	56	42	10		
		4				2.3	2.3				不整長方形	58	48	10		
	SB−57	1	北−南	N−6°−E	2×1			3.1	3.1	10.9	隅丸三角形	54	42	20	Fig.11	
		2				3.5	2				方形	38	38	34		
		3					1.5				方形	92	90	18		
		4						3.1	3.1		隅丸三角形	50	42	10		
		5				3.5	1.5				楕円形	56	40	12		
		6					2				楕円形	44	34	6		
	SB−58	1	西−東	N−75°−W	3×1			4	2	25.2	円形	58	54	16	Fig.11	
		2							2		長方形	100	66	16		
		3				6.25	1.65				円形	40	40	14		
		4					1.8				楕円形	54	36	40		
		5					2.8				円形	40	34	40		
		6						3.9			方形	40	40	26		
		7				不明										
		8				6.3	2.1				不整長方形	102	64	26		
		9					2				隅丸長方形	64	50	26		
		10					2.2				楕円形	64	56	26		
	SB−59	1	北西−南東	N−67°−W	2×2			3.6	1.8	13.7	円形	56	52	40	Fig.11	総柱
		2							1.8		方形	52	50	32		
		3				3.8	2				長方形	62	48	48		
		4					1.8				隅丸三角形	110	90	42		
		5						3.6			円形	60	56	32		
		6				不明										
		7				不明										
		8				3.8	1.8				円形	48	44	42		
		9				2					隅丸三角形	90	84	40		
	SB−60	1	西−東	N−90°−E	2×2			3.8	1.9	16	楕円形	46	34	18	Fig.11	総柱
		2							1.9		長方形	42	36	8		
		3				4.2	2.1				円形	36	36	16		
		4					2.1				円形	40	38	28		
		5						3.8	2		長方形	70	66	10		
		6							1.8		円形	58	52	28		
		7				4.2	2.1				長方形	48	40	10		
		8					2.1				不整円形	48	44	20		
		9									方形	36	34	20		
	SB−61	1	西−東	N−86°−W	2×1			2.5	2.5	8.5	円形	46	40	28	Fig.10	
		2					1.8				方形	32	30	26		
		3				3.4	1.6				長方形	36	28	20		
		4						2.5	2.5		円形	40	36	38		
		5				3.4	1.85				円形	48	48	18		
		6					1.55				楕円形	28	22	25		
	SB−62	1	北東−南西	N−15°30′−E	1×1			2.4	2.4	6.2	長方形	58	48	18	Fig.10	
		2				2.6	2.6				円形	68	60	24		
		3						2.4	2.4		不整方形	62	54	15		
		4				2.6	2.6				長方形	86	72	18		

Tab. 5　1次Ⅱ区不整形土壙計測一覧

地区名	遺構番号	形状	柱穴規模 (cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
1次Ⅱ区	SK—01	不整形	230	120+α	16	Fig.12	
	SK—04	長方形	200	85	20		
	SK—05	楕円形	150	80	6	Fig.12	
	SK—06	楕円形	160+α	80	20	Fig.12	
	SK—08	長方形	180	85	42	Fig.12	
	SK—09	長方形	70	40	34		
	SK—12	不整長方形	210	65	28	Fig.12	
	SK—13	不整長方形	90	50	12	Fig.12	
	SK—14	不整長方形	205	120	10	Fig.12	
	SK—16	長方形	215	120	32	Fig.12	
	SK—24	長方形	315	85	28	Fig.12	
	SK—28	長方形	130	75	12	Fig.12	
	SK—100	方形	175	174	12	Fig.12	
	SK—101	方形	208	166	12	Fig.12	
	SK—102	楕円形	190	90	12	Fig.12	
	SX—01	長方形	380	280	46	Fig.12	
	SX—02	円形	280	270	12	Fig.12	
	SX—03	不整楕円形	300	200	44	Fig.13	
	SX—04	不整形	230	185	16	Fig.13	
	SX—05	不整形	260	210	14	Fig.13	
	SX—06	円形	235	210	30	Fig.13	
	SX—07	隅丸方形	260	200	32	Fig.13	
	SX—08	隅丸三角形	270	260	48	Fig.13	
	SX—09	楕円形	240	120+α	32	Fig.13	
	SX—10	楕円形	230	130	12	Fig.14	
	SX—11	不整長方形	270	80	12	Fig.13	
	SX—12						
	SX—13	不整長方形	176	78	20	Fig.14	
	SX—14	不整長方形	400	252	35	Fig.14	
	SX—15	不整長方形	260	120	32	Fig.13	
	SX—16	長方形	250	190	15	Fig.14	
	SX—17	長方形	254	135+α	16	Fig.14	
	SX—18	楕円形	260	122	12	Fig.14	
	SX—19						
	SX—20	長方形	240	200	20	Fig.13	
	SX—22	不整三角形	110	85	10	Fig.14	
	SX—23	楕円形	254	250	20	Fig.14	
	SX—24						
	SX—25	方形	230	210+α	10	Fig.13	
	SX—26	方形	310	270	36	Fig.14	
	SX—27	楕円形	495	340	12	Fig.14	
	SX—28	不整形	180+α	180	14	Fig.15	
	SX—29	不整形	222	210+α	12	Fig.15	
	SX—30	不整方形	198	170	18	Fig.15	
	SX—31	不整方形	130	114	16	Fig.15	
	SX—32						
	SX—33	方形	320+α	232	12	Fig.14	
	SX—38	不整円形	340	295	8	Fig.15	
	SX—39	方形	260	206	14	Fig.15	
	SX—42	方形	250	240	12	Fig.15	
	SX—43	隅丸長方形	318	230	12	Fig.15	
	SX—45	不整方形	300	220	20	Fig.15	
	SX—46	不整長方形	200+α	140	8	Fig.15	
	SX—47	方形	196	195	15	Fig.15	

Tab. 6　2次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧－1

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
2次Ⅷ区	SB−01	1	北西−南東	N−48°30′−W	1×1	3.1	3.05	3		9	長方形	44	34	62	Fig.45	
		2							2.95		方形	44	40	46		
		3					3.1				長方形	40	32	40		
		4							3		方形	40	40	54		
	SB−02	1	北西−南東	N−36°−W	5×2	9		3.5	1.7	31.5	楕円形	56	50	52	Fig.50	
		2							1.7		不整円形	44	40	58		
		3				4.2	1.8				長方形	50	46	56		
		4					1.7				不整形	44	3	58		
		5					1.7				隅丸方形	50	44	42		
		6					1.5				不整形	50	48	38		
		7					2.2				不整形	50	30	46		
		8							1.8		隅丸長方形	74	60	32+α		
		9							1.7		不整形	60	54	44		
		10					1.9				長方形	56	44	50		
		11					1.9				方形	28	26	30		
		12					1.7				不整形	50	34	32		
		13					1.7				長方形	54	46	48		
		14					1.8				長方形	50	40	42		
		15					1.86				方形	66	60	42		
		16					1.52				不整形	62	40	44		
		17					2.12				長方形	60	44	42	柱痕あり	
		18									方形	44	42	44		
	SB−03	1	南東−北西	N−32°30′−W	2×1	2.5	1.28	2		5	長方形	65	50	40	Fig.46	
		2					1.22				方形	42	42	40		
		3							2		長方形	52	38	40		
		4					1.2				不整長方形	64	46	40		
		5					1.2				方形	44	42	36		
		6							2		隅丸長方形	56	48	46		
	SB−04	1	北東−南西	N−42°−E	1×1	2.9		2.6	2.6	7.54	長方形	65	50	36	Fig.45	
		2					2.9				長方形	76	62	34		
		3							2.5		隅丸長方形	34	26	20		
		4					2.78				方形	38	34	24		
	SB−05	1	東−西	N−90°−W	1×1	2	2	2		4	隅丸方形	26	22	18	Fig.45	
		2							2		円形	30	30	14		
		3					2				方形	30	28	25		
		4							2		円形	30	30	28		
	SB−06	1	南東−北西	N−41°−W	1×1	2	2	1.9		3.8	隅丸方形	22	20	28	Fig.45	
		2				2538										
		3					2				円形	26	24	38		
		4							1.9		不整形	26	20	20		
	SB−07	1	北西−南東	N−54°−W	5×3	9.4		4.8	1.2	45.12	方形	30	26	22	Fig.50	
		2							1.8		方形	34	32	25		
		3							1.8		方形	40	38	25		
		4					1.5				方形	30	30	20		
		5					1.6				円形	30	28	24		
		6					1.7				円形	46	42	28		
		7					2.5				方形	42	36	30		
		8					2.1				円形	42	40	36		
		9							1.7		不整長方形	55	42	32	柱痕あり	
		10							1.55		円形	22	22	22		
		11							1.55		楕円形	42	26	22		
		12					2.2				不整形	56	56	28		
		13					2.3				円形	36	32	18		
		14					1.8				方形	48	46	30		
		15					1.7									
		16							1.34		円形	24	22	30		
		17					1.66				長方形	60	40	28		
		18					1.64				方形	42	40	28		
		19					2.4				方形	40	38	28	柱痕あり	
		20							1.72		長方形	38	30	24		
		21					2.36				円形	38	38	36	柱痕あり	
		22					1.94				方形	46	44	34	柱痕あり	
		23					1.5				方形	36	34	26		
		24									方形	48	46	50	柱痕あり	
	SB−08	1	西−東	N−89°−W	3×2	5	1.5	5		25	不整形	36	34	25	Fig.49	
		2					1.65				方形	38	36	35		
		3					1.85				楕円形	55	38	28		
		4							2.5		方形	64	60	48		
		5							2.5		不整形	40	36	38		
		6					1.9				楕円形	80	56	44		
		7					1.6				不整方形	56	48	26		
		8					1.5				不整形	56	30	28		
		9							2.5		不整方形	48	40	30		
		10					1.5				方形	70	70	38		
		11					1.66				不整方形	54	50	36		
		12									円形	35	32	26		

Tab. 7　2次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧 ― 2

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積(m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB−09	1	北東−南西	N−39°−E	4×1	6		3.2	2.9	18.3	方形	60	60	34	Fig.48	
		2					2.8				楕円形	50	42	22		
		3					3.2				隅丸長方形	70	50	40		
		4							3.2		方形	48	44	30		
		5					3.2				不整長方形	80+α	60	24+α		
		6							1.3		隅丸方形	50	42	24+α		
		7									楕円形	32	24	22		
	SB−10	1	北東−南西	N−16°−E	3×1	5		2.5	2.5	12.5	方形	42	36	20	Fig.47	
		2					1.7		1.8		方形	42	36	22		
		3				3.8	1.55				楕円形	50	35	20		
		4					1.75				円形	32	32	20		
		5							2.5		隅丸方形	46	44	34		
		6					1.54				方形	42	38	26		
		7					1.74				円形	28	26	18		
		8					1.72				長方形	40	30	26		
	SB−11	1	北西−南東	N−73°−W	2×2	3.5	1.8	2.7		9.45	円形	28	28	20	Fig.49	
		2					1.7				方形	32	28	25		
		3							1.4		楕円形	32	24	30		
		4							1.3		隅丸方形	34	30	15		
		5					1.7				方形	45	42	30		
		6					1.8				円形	32	30	30		
		7							1.3		円形	40	40	18		
		8					1.82		1.4		円形	20	18	10		
		9					1.7				円形	32	30	30		
	SB−12	1	南東−北西	N−58°30′−W	2×2	3	1.5	3		9	円形	36	30	34	Fig.48	
		2					1.5				長方形	46	30	42		
		3							1.4		楕円形	38	28	38		
		4							1.6		方形	32	30	32		
		5					1.5				円形	26	22	42	柱痕あり	
		6					1.5				円形	30	28	28		
		7							2.9		円形	36	36	18		
		8					1.46				円形	20	20	16		
		9									不整方形	40	32	30		
	SB−13	1	北西−南東	N−74°30′−W	2×1	4.2	1.9	2.4		10.08	方形	42	40	16	Fig.46	
		2					2.3				方形	22	22	20		
		3							2.4		隅丸長方形	38	30	30		
		4					2.3				長方形	54	40	34		
		5					1.9				円形	34	34	20		
		6							2.4		円形	32	32	18		
	SB−14	1	東−西	N−84°30′−E	6×4	7.3		6	1.1	43.8	隅丸長方形	32	26	18	Fig.51	
		2							1.9		隅丸方形	28	20	12		
		3							0.4		隅丸方形	50	34	30		
		4							1.5		隅丸方形	32	24	12		
		5							1.1		方形	30	28	20		
		6					1.95				円形	36	36	18		
		7					0.95				円形	36	36	18		
		8					1.35				円形	30	28	12		
		9					1				楕円形	40	25	10		
		10					1.1				円形	30	26	18		
		11					0.95				楕円形	76	18	6		
		12							1.1		方形	48	42	36		
		13							1.16		楕円形	48	18	10		
		14							0.64		円形	50	50	22		
		15							1		楕円形	82	36	34		
		16							1		隅丸方形	40	30	24		
		17							1.1		隅丸方形	40	32	28		
		18					1.14				円形	26	26	26		
		19					1.26				隅丸方形	36	22	28		
		20					1.2				楕円形	40	22	20		
		21					1				方形	28	28	22		
		22					2.26				方形	36	34	16		
	SB−15	1	南西−北東	N−50°30′−E	2×1	4.5		2	2	9	方形	40	38	44	Fig.46	
		2					2.2				方形	42	40	36		
		3					1.3+α				隅丸方形	44	40	30		
		4							0.8+α							
		5					2.1				楕円形	50	26	36		
		6					2.4				方形	32	30	35		
	SB−16	1	東−西	N−86°−E	3×2	4	0.6	3.4		13.6	円形	26	26	12	Fig.49	総柱建物
		2					1.9				方形	34	30	34		
		3					1.5				方形	44	36	36		柱痕あり
		4							1.7		隅丸長方形	80	42	34		
		5							1.7		円形	34	30	40+α		
		6					1.6				不整円形	62	50+α	56		
		7					1.7				隅丸長方形	50	36	40		
		8					0.7				円形	34	28	30		
		9							1.7		隅丸長方形	68	36	42		
		10					0.6				長方形	82	60	18		
		11					1.9				円形	40	34	40		
		12									長方形	38	28	46		
	SB−17	1	北東−南西	N−74°30′−E	2×1	3.4	1.66	3.4		10.89	隅丸方形	40	28	26	Fig.47	
		2					1.74				円形	30	30	20		
		3							3.4		円形	26	26	20		
		4					1.7				円形	42	40	25		
		5					1.6				隅丸方形	50	40	22		
		6							3.4		隅丸方形	46	40	18		

Tab. 8　2次Ⅷ区掘立柱建物計測一覧 － 3

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB－18	1	南西－北東	N－27°－E	2×2	3.8	2	3.4		12.92	円形	40	40	28	Fig.49	
		2					1.8				円形	38	36	10		
		3							1.7		円形	54	32	8		
		4							1.7		方形	22	20	12		
		5					1.9				方形	46	38	24		
		6					1.9				方形	35	30	24		
		7							1.7		方形	32	30	34		
		8					1.86				円形	38	38	26		
		9									楕円形	48	26	20		
	SB－19	1	北－南	N－6°－W	2×2	3.7		3.2	1.6	11.84	楕円形	48	34	30	Fig.48	総柱建物
		2							1.6		方形	30	26	20		
		3					1.9				方形	38	38	20		
		4					1.8				円形	30	28	26		
		5							1.6		方形	40	36	30		
		6							1.6		不整形	40	34	24		
		7									方形	58	58	30		
		8							1.6		隅丸方形	44	32	34		
		9									隅丸方形	42	34	26		
	SB－20	1	南西－北東	N－24°30′－E	3×1	8		2.9	2.9	23.2	隅丸方形	42	28	26	Fig.47	
		2					1.6				円形	42	40	25		
		3					3.5				方形	40	34	30		
		4					2.9				方形	42	40	34		
		5							2.9		隅丸方形	30	26	35		
		6					3				隅丸方形	45	40	34		
		7					2.85				隅丸方形	45	44	30		
		8					2,15				方形	64	60	32		
	SB－21	1	北東－南西	N－49°30′－E	2×1	3.5		2.3	2.3	8.05	円形	20	20	22	Fig.46	
		2					1.8									
		3					1.7				円形	24	22	14		
		4							2.3		方形	22	20	20		
		5					1.7				隅丸方形	34	28	22		
		6							1.1		円形	26	20	20		
		7									円形	14	14			
	SB－22	1	北西－南東	N－-25°－W	1×1	2.9	2.9	2.85		8.26	方形	28	26	20	Fig.45	
		2							2.8		長方形	38	23	18		
		3					2.9				長方形	50	32	28		
		4							2.85		円形	34	32	32		
	SB－23	1	南東－北西	N－75°－W	1×1	3	3	3		9	隅丸方形	56	44	50	Fig.45	
		2							2.8		方形	42	42	38		
		3					3				方形	44	42	35		
		4							3		方形	46	42	32		
	SB－24	1	北東－南西	N－22°－E	2×1	5.5		2.8	2.8	15.4	円形	50	50	10	Fig.46	
		2					2.9				不整形	30	25+α	18		
		3					2.6				長方形	34	24	16		
		4							2.8		長方形	44	30	25		
		5					2.6				不整円形	60	58	12		
		6					2.9				方形	35	30+α	26		
	SB－25	1	南東－北西	N－64°－W	2×2	5.06	2.18	4.8		24.28	長方形	50	36	34	Fig.48	
		2					2.62				楕円形	52	36	28		
		3							3		円形	32	32	34		
		4							1.8		円形	36	30	10		
		5					2.96				長方形	44	30	34		
		6					2.1				方形	38	32	10		
		7							1.7		方形	50	40	44		
		8					2.1				円形	40	38	10		
		9									円形	26	24	22		
	SB－26	1	北東－南西	N－74°－E	1×1	2.25	2.25	1.5		3.38	隅丸方形	40	30	6	Fig.45	
		2							1.5		楕円形	50	36	14		
		3					2.25				長方形	60	40	14		
		4							1.5		長方形	80	60	18		
	SB－27	1	北東－南西	N－34°－E	2×1	5.4		3.2	3.2	17.28	円形	26	24	34	Fig.46	
		2					2.9				長方形	66	54	32		
		3					2.26				隅丸方形	44	42	16		
		4							3.2		隅丸長方形	64	40	32		
		5					2.7				隅丸方形	36	30	12		
		6					2.7				方形	28	28	15		
	SB－28	1	南東－北西	N－49°－W	2×1	3.12		3	3	9.6	方形	74	70	68	Fig.47	
		2					1.55				隅丸長方形	74	48	52		
		3					1.6				不整方形	40	40	34		
		4							3		長方形	54	54	28		
		5					1.5				長方形	70	54	54		
		6					1.7				不整形	84	75	68		
		7									方形	104	98	30		
	SB－29	1	北－南	N－9°－E	3×1+α	4.8	1.3	1.6		7.68+α	方形	42	34	42	Fig.48	
		2					1.8				隅丸方形	46	40	30		
		3					1.7				楕円形	50	28	36		
		4							1.6		長方形	32	26	30		
		5									長方形	34	28	12		
	SB-30	1	北西－南東	N－24°30′－W	2×1	3.3		1.6	1.6	2.64	長方形	50	30	36	Fig.47	
		2					1.6				不整形	54	40	36		
		3					1.7				隅丸長方形	65	38	40		
		4									不整形	40+α	40	34		

Tab. 9　2次区区掘立柱建物計測一覧－1

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
2次区区	SB−50	1	北西−南東	N-59°−W	2×1			2.5	2.5	10.83	方形	40	34	18	Fig.67	
		2				3.98	2.42				不整長方形	38	28	8		
		3					1.56				不整形	50	38	6		
		4						2.68	2.68		不整形	40	30	10		
		5				4.04					楕円形	34	24			
		6														
	SB−51	1	北−南	N-3°−E	2×1			2.94	2.78	11.64	隅丸方形	34	28	24	Fig.67	
		2				3.96	2.26				不整形	66	36	14		
		3									隅丸方形	42	38	32		
		4														
		5				3.84	1.74				隅丸方形	36	36	10		
		6					2.1				楕円形	40	34	20		
		7									隅丸方形	46	42			
	SB−52	1	北西−南東	N-63°−W	2×1	6.44	2.64			21.25	不整形	58	30	20	Fig.67	
		2					3.8				不整形	42	32	18		
		3						3.18	3.18		隅丸方形	36	32	8		
		4				6.26	3.24				不整形	32	30	10		
		5									不整長方形	32	24			
		6						3.3								
	SB−53	1	北西−南東	N-76°−W	2×1			5.02	5.02	32.01	隅丸方形	60	54	14	Fig.68	
		2				5.7	3.78				長方形	90	64	34		
		3					1.92				隅丸方形	70	60	24		
		4						5.3	5.3		隅丸方形	42	34	10		
		5				6.04	3.4				隅丸方形	50	44			
		6					2.64				隅丸三角形	50	38			
	SB−54	1	北西−南東	N-20°30′−W	2×1			3.5	3.5	22.47	隅丸方形	40	34		Fig.68	
		2				6.42	3.7				楕円形	60	44	16		
		3					2.72				隅丸方形	124	114	30		
		4						3.46	3.46		円形	56	52	22		
		5				5.82	2.88				隅丸方形	44	38	20		
		6					2.94				方形	44	34			
	SB−55	1	北−南	N-1°30′−W	2×1	4.94				16.8	隅丸方形	40	34		Fig.68	
		2														
		3						3.34	3.34		隅丸方形	30	28	34		
		4				4.94	2.34				方形	38	30	8		
		5					2.6				不整形	110	80	12		
		6						3.4	3.4		隅丸三角形	46	34	14		
	SB−56	1	北東−南西	N-28°−E	2×1	5.52	2.32			22.8	隅丸三角形	64	48	28	Fig.69	
		2					3.2				長方形	48	36	18		
		3						3.78	3.78		隅丸方形	60	46	42		
		4				5.7	2.34				楕円形	50	38	16		
		5									長方形	40	30			
		6														
	SB−57	1	東−西	N-80°−W	2×2			5.88	2.64	44.81	楕円形	54	38		Fig.73	
		2									方形	34	32			
		3				7.62	3.48				方形	32	26			
		4							4.14		不整長方形	80	62	42		
		5						5.62	2.62		不整形	96	78	28		
		6							3		方形	42	40	12		
		7				7.3					楕円形	42	34	20		
		8														
	SB−58	1	東−西	N-74°30′−W	2×1	3.28	1.6			8.86	不整長方形	50	32	36	Fig.68	
		2					1.68				楕円形	44	36	42		
		3						2.7	2.7		円形	44	42	32		
		4				3.16	1.56				方形	30	26	36		
		5					1.6				楕円形	36	26			
		6						2.7	2.7		不整楕円形	54	34			
	SB−59	1	北−南	N-8°−E	2×2			4.22	1.94	21.1	楕円形	30	26	32	Fig.73	総柱建物
		2							2.28		方形	28	26	22		
		3				5	2.54				円形	26	26	12		
		4					2.46				不整楕円形	44	30	30		
		5							1.7		隅丸三角形	28	24	24		
		6									不整形	36	32			
		7														
		8														
		9									隅丸長方形	56	46			
	SB−60	1	北東−南西	N-24°−E	2×1			3.5	3.5	18.97	隅丸方形	40	30	22	Fig.68	総柱建物
		2				5.42	2.64				楕円形	40	32	10		
		3					2.8				不整形	52	32	8		
		4						3.36	3.36		不整形	90	40	18		
		5				5					隅丸方形	40	30			
		6														
	SB−61	1	北−南	N-4°−E	2×1	4.54	2.78			18.07	不整形	34	24		Fig.69	
		2					1.76				方形	30	28			
		3						3.6	3.6		不整形	46	40	16		
		4				5.02	2.64				長方形	62	50	18		
		5					2.38				不整形	50	48	28		
		6						3.54	3.54		不整形	74	64	54		

Tab. 10　2次区区掘立柱建物計測一覧－2

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB-62	1	北西-南東	N-53°30′-W	2×1+α			3.6	2.3	11.2+α	円形	30	18	28	Fig.73	
		2				4.06	2.24				楕円形	24	20	16		
		3					1.84				不整形	20	18	16		
		4						2.76+α	1.78		楕円形	30	26	30		
		5							0.98+α		隅丸方形	18	16	5		
		6									不整楕円形	28	24	9		
	SB-63	1	北一南	N-4°30′-W	1×1			2.12	2.12	7.75	隅丸方形	32	28	38	Fig.66	
		2				3.1	3.1				隅丸方形	22	20	18		
		3						2.5	2.5		隅丸方形	34	28	36		
		4				2.9	2.9				隅丸方形	32	32	8		
	SB-64	1	北一南	N-6°-E	1×1			2.5	2.5	7.83	方形	38	32	28	Fig.66	
		2				3	3				隅丸方形	38	36	36		
		3						2.61	2.61		不整方形	36	26	30		
		4				3	3				楕円形	44	30	10		
	SB-65	1	北一南	N-3°30′-E	1×1			2.38	2.38	7.38	隅丸方形	30	24	22	Fig.66	
		2				2.9	2.9				長方形	24	20	22		
		3						2	2		楕円形	46	42	28		
		4				3.1	3.1				円形	30	26	16		
	SB-66	1	北東-南西	N-43°-E	1×1			2.7	2.7	8.99	円形	26	22	18	Fig.66	
		2				2.96	2.96				方形	22	20	16		
		3						2.9	2.9		方形	26	26	22		
		4				3.1	3.1				隅丸三角形	30	28	19		
	SB-67	1	北東-南西	N-61°-E	1×1			2.65	2.65	8.37	楕円形	24	20	24	Fig.66	
		2				3.1	3.1				隅丸長方形	42	32	12		
		3						2.7	2.7		隅丸方形	30	30	12		
		4				2.8	2.8				楕円形	30	26	10		
	SB-68	1	北東-南西	N-15°-W	2×2	4.32	2.36			17.11	円形	24	22	10	Fig.74	総柱建物
		2					1.96				楕円形	30	20	11		
		3						3.94	2.04		方形	44	40	40		
		4							1.9		方形	52	50	34+α		
		5				4.26	2.02				方形	36	32	22+α		
		6					2.24				楕円形	20	16	14+α		
		7						3.96	1.96		方形	48	40	84		
		8							2		方形	42	38	62		
		9									円形	24	22	28		
	SB-69	1	北東-南西	N-40°-E	2×1			3.3	3.3	13.79	円形	50	46	10	Fig.69	
		2				3.86	1.82				円形	34	30	28		
		3					2.04				不整長方形	58	40	26		
		4						3.1	3.1		円形	24	24	16		
		5				4.18	2				方形	24	22			
		6					2.18				隅丸方形	28	26			
	SB-70	1	東一西	N-69°-E	1×1			3.1	3.1	12.77	円形	42	38	30	Fig.66	
		2				4.04	4.04				円形	36	36	18		
		3						3.16	3.16		楕円形	42	38	26		
		4				3.7	3.7				不整楕円形	46	28	26		
	SB-71	1	東一西	N-88°-E	2×2	5.12	2.4			20.68	不整楕円形	42	32	22	Fig.74	
		2					2.72				円形	20	18			
		3						4.04	2.64		方形	122	96	28		
		4							1.4		不整楕円形	32	24	24		
		5				5.08	2.88				隅丸三角形	42	38	16		
		6					2.2				円形	30	30	26		
		7						3.98	1.7		長方形	66	44	30		
		8							2.28		方形	32	30	32		
	SB-72	1	北西-南東	N-27°30′-W	2×2	4.2	1.78			16.63	楕円形	34	24	22	Fig.74	
		2					2.42				隅丸方形	36	28	6		
		3						3.84	1.8		楕円形	48	40	8		
		4							2.04		隅丸三角形	60	52	22		
		5				4.08	2.12				円形	28	24	22		
		6					1.96				隅丸方形	30	22			
		7						3.96	2.16		円形	14	12			
		8							1.8		隅丸三角形	36	24			
	SB-73	1	北一南	N-4°-W	1×1	3.42	3.42			10.26	方形	52	48	22	Fig.66	
		2						3	3		方形	46	46	36		
		3				3.41	3.41				方形	24	24	28		
		4						2.96	2.96		方形	38	36			
	SB-74	1	北一南	N-13°30′-E	1×1			3.06	3.06	10.89	不整楕円形	32	26		Fig.66	
		2				3.56	3.56				方形	26	24	18		
		3						3	3		方形	22	20	14		
		4				3.3	3.3				不整楕円形	44	32	28		
	SB-75	1	東一西	N-79°-W	1×1			2.34	2.34	7.07	隅丸方形	34	28	18	Fig.67	
		2				3.02	3.02				隅丸方形	22	20	12		
		3						2.3	2.3		円形	20	20	22		
		4				3	3				隅丸方形	34	32			
	SB-76	1	北一南	N-11°-W	2×1	3.92				9.02					Fig.68	
		2					2.24				方形	22	18			
		3						2.3	2.3		楕円形	38	28	40		
		4				3.9	2.4				長方形	44	34	20		
		5					1.5				長方形	30	24	12		
		6						2.2	2.2		円形	30	28	4		

Tab. 11　2次Ⅰ区掘立柱建物計測一覧－3

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB－77	1	北西－南東	N－70°－W	2×2					12.11					Fig.74	
		2							1.74		隅丸三角形	32	28			
		3				3.5	1.4				隅丸方形	48	46	28		
		4					2.1				隅丸方形	26	22	22		
		5						3.46	1.34		隅丸三角形	28	24	16		
		6							2.12		円形	22	22	24		
		7					1.64				隅丸方形	30	26	16		
		8									隅丸方形	30	22			
	SB－78	1	北西－南東	N－57°－W	2×1	4.44	1.9			16.42	楕円形	34	30	22	Fig.69	
		2					2.54				隅丸方形	26	22	14		
		3						3.6	3.6		隅丸長方形	40	32	8		
		4				4.56	2				隅丸方形	40	34	48		
		5					2.56				隅丸方形	28	24			
		6						3.24	3.24		不整形	40	36			
	SB－79	1	北西－南東	N－36°30′－W	1×1			2.66	2.66	8.75	円形	28	28	8	Fig.67	
		2				3.06	3.06				不整形	40	38	10		
		3						2.7	2.7		円形	24	24	4		
		4				3.24	3.24				隅丸方形	28	26			
	SB－80	1	北東－南西	N－63°30′－E	1×1			2.5	2.5	7.25	不整形	22	20	16	Fig.67	
		2				2.64	2.64				隅丸方形	32	30	12		
		3						2.4	2.4		隅丸方形	24	22	12		
		4				2.9	2.9				円形	18	16			
	SB－81	1	北－南	N－1°－E	2×1			3.1	3.1	19.72	方形	22	18		Fig.69	
		2				6.36	3.28				方形	30	28	26		
		3					3.08				方形	30	24	6		
		4						3.04	3.04		方形	74	62	20		
		5				6.08	2.9				方形	36	30	28		
		6					3.18		2		方形	28	24			
	SB－82	1	北東－南西	N－31°－E	2×2			3.1	1.86	11.75	不整方形	34	34	32	Fig.75	
		2							1.24		方形	48	46	40		
		3				3.24	1.78				方形	26	26	30		
		4					1.46				方形	46	46	6		
		5						3.3			不整形	58	52	54		
		6														
		7				3.56	1.14				不整方形	40	38	18		
		8					2.42				方形	28	24	22		
	SB－83	1	北西－南東	N－54°30′－W	2×1	4.04	2.2			10.67	不整方形	54	50		Fig.69	
		2					1.84				隅丸長方形	40	30			
		3						2.4	2.4		方形	20	18	22		
		4				3.85	1.74				不整方形	50	34	28		
		5					2.1				円形	36	34	50		
		6						2.5	2.5		楕円形	50	40	50		
	SB－84	1	東－西	N－89°30′－W	2×1			3.5	3.5	20.48	円形	28	26	10	Fig.70	
		2				5.6	2.4				方形	20	14	10		
		3					3.2				円形	18	18	18		
		4						3.2			方形	24	20	18		
		5				5.85	2.7				長方形	40	24	12		
		6					3.15				方形	30	28	9		
	SB－85	1	北東－南西	N－58°－E	2×1	3.9	1.95			10.46	楕円形	34	20	10	Fig.70	
		2					1.95				方形	32	24	10		
		3						2.55	2.55		円形	48	40	24		
		4				4.1	1.5				不整方形	40	30	20		
		5					2.6				楕円形	30	24	4		
		6						2.55	2.55		長方形	70	54	14		
	SB－86	1	北－南	N－5°－W	3×1			2.88	2.88	25.67	方形	36	24	24	Fig.72	
		2				7.62	2				長方形	44	34	36		
		3					3.32				楕円形	44	30	30		
		4					2.3				楕円形	28	24	8		
		5						3.3	3.3		隅丸三角形	20	14	22		
		6				7.78	2.48				楕円形	24	14	38		
		7					3.5				長方形	34	26	22		
		8					1.8				不整方形	48	42	25		
	SB－87	1	北－南	N－10°30′－W	3×1	6.26	1.3			25.12	方形	24	16	12	Fig.70	
		2					2.5				不整長方形	46	24	24		
		3					2.46				方形	24	20	22		
		4						4	4		方形	28	24	20		
		5				6.26	2.8				方形	24	20	24		
		6					3.46				不整楕円形	30	18	22		
		7						4	4		不整方形	24	14	12		
	SB－88	1	北東－南西	N－35°－E	2×2			2.9	1.32	10.03	長方形	46	34	24	Fig.74	
		2							1.58		方形	40	34	20		
		3				3.04	1.24				方形	50	44	46		
		4					1.8				楕円形	50	32	10		
		5						2.88			不整方形	36	24	36		
		6														
		7				3.46	1.64				楕円形	28	20	10		
		8				1.84					不整方形	30	28	15		

Tab. 12　2次区区掘立柱建物計測一覧－4

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB−89	1	東−西	N−71°30′−E	2×1	3.7	3.7			13.32	隅丸方形	28	22	21	Fig.70	
		2						3.6	1.74		隅丸長方形	44	30	30		
		3							1.86		不整方形	34	24	24		
		4				3.6					方形	34	30	40		
		5						3.4	2.1		方形	26	20	24		
		6							1.3		円形	24	20	7		
	SB−90	1	北−南	N−14°−W	2×2			3.46	2.4	14.87	楕円形	44	28	18	Fig.74	
		2							1.06		楕円形	30	18	14		
		3				4.2	2				円形	40	36	14		
		4					2.2				隅丸長方形	50	40	30		
		5						3.54	1.8		方形	38	34	12		
		6							1.74		長方形	30	22	28		
		7				4.2					不整方形	44	36	18		
		8														
	SB−91	1	北−南	N−2°−W	1×1	3	3			5.7	不整形	32	26	26	Fig.67	
		2						1.8	1.8		方形	26	22	12		
		3				2.8	2.8				隅丸三角形	28	22	14		
		4						1.9	1.9		不整楕円形	26	24	18		
	SB−92	1	北西−南東	N−67°−W	4×1			3	3	21.9					Fig.73	
		2				7.18	1.68				方形	38	30	32		
		3					1.84				長方形	30	20	12		
		4					2.06				方形	28	26	20		
		5					1.8				方形	30	22	18		
		6						2.9	2.9		方形	24	24	14		
		7				7.3	2.16				不整楕円形	24	20	22		
		8					1.5				不整楕円形	24	18	12		
		9					1.94				方形	28	24	30		
		10					1.7				方形	24	20	24		
	SB−93	1	北東−南西	N−24°−E	2×2			3.6	2.48	15.48	方形	16	12	12	Fig.75	
		2							1.12		不整楕円形	24	20	16		
		3				4.3	2.5				方形	20	18	14		
		4					1.8				方形	22	18	18		
		5						3.46	1.04		楕円形	35	28	26		
		6							2.42		円形	32	30	10		
		7				4.12	1.48				円形	18	18	7		
		8					2.64				長方形	22	18	11		
	SB−94	1	北東−南西	N−37°−E	2×2			4.22	2.04	21.97	円形	26	26	9	Fig.75	
		2							2.18		楕円形	20	18	16		
		3				4.86	2.54				不整方形	38	32	16		
		4					2.32				方形	28	24	20		
		5						4.52	2.16		隅丸三角形	26	24	24		
		6							2.36		方形	38	32	42		
		7				4.84	2.7				円形	24	24	28		
		8					2.14				楕円形	28	16	7		
	SB−95	1	北西−南東	N−27°−W	1×1			1.9	1.9	4.3	円形	28	28	16	Fig.67	
		2				2.24	2.24				楕円形	42	18	20		
		3									楕円形	24	16	14		
		4														
	SB−96	1	北西−南東	N−74°30′−W	1×1	2.92	2.92			5.96	隅丸方形	132	30	44	Fig.67	
		2						2.04	2.04		楕円形	36	28	24		
		3									楕円形	40	26	28		
		4														
	SB−97	1	北−南	N−7°−W	2×2	3.22				10.05					Fig.75	
		2					1.72				不整形	38	24	16		
		3					3.12	1.72			不整形	38	28	18		
		4									方形	32	28	46		
		5				2.92	1.74				円形	30	30	22		
		6					1.18				不整形	28	26	26		
		7						3.12	1.24		不整方形	30	24	22		
		8									円形	20	18	13		
	SB−98	1	北東−南西	N−20°30′−E	2×1			2.7	2.7	14.25	長方形	64	30	22	Fig.70	
		2				5.2	2.2				不整長方	100	40	26		
		3					3				不整方形	32	18	14		
		4						2.74	2.74		円形	20	18	12		
		5				5.06	2.3				不整形	32	22	14		
		6					2.76				隅丸三角形	30	24	12		
	SB−99	1	北−南	N−1°30′−W	2×1	6.1	3.26			16.47	方形	40	34	20	Fig.71	
		2					2.84				不整形	38	30	12		
		3						2.24	2.24		不整形	40	30	32		
		4				5.58	2.16				不整方形	40	30	44		
		5					3.42				長方形	48	30	22		
		6						2.7	2.7		不整長方形	100	40	24		
	SB−100	1	東−西	N−81°30′−E	2×1	3.96	3.96			15.21	方形	50	44		Fig.70	
		2						3.84	2		不整方形	44	36	54		
		3							1.84		不整楕円形	30	20	16		
		4				3.7	3.7				隅丸方形	40	30	38		
		5				2.9	3.82	2.2			隅丸方形	34	28	6		
		6							1.62		隅丸方形	26	24			

Tab. 13　2次区区掘立柱建物計測一覧 ー5

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m²)	形状	柱穴規模(cm) 長径	短径	深さ	挿図番号	備考
	SB−101	1	北東−南西	N−55°30′−E	2×1			2.8	2.8	12.21	方形	50	44		Fig.71	
		2				4.36	1.96				方形	60	50	30		
		3					2.4				隅丸方形	70	54	8		
		4						2.7	2.7		楕円形	56	42	18		
		5				3.9					長方形	50	32	26		
		6														
	SB−102	1	北東−南西	N−55°30′−E	2×1			3.8	3.8	17.94	方形	40	34		Fig.71	
		2				4.72	2.72				不整方形	50	40	30		
		3					2				長方形	56	46	46		
		4						3.2	3.2		不整形	40	26	30		
		5				4.6	2.6				方形	40	34	40		
		6					2				長方形	36	20			
	SB−103	1	東−西	N−77°30′−W	2×2			5.02	2.8	48.12	不整三角形	56	38	24	Fig.76	
		2							2.22		方形	40	38	16		
		3				9.02	4.32				不整方形	34	28	16		
		4					4.7				方形	98	78	8		
		5						5.3	3.48		円形	24	22	20		
		6							1.82		不整形	60	40	14		
		7				9.08	4.04				方形	62	50	16		
		8					5.04				方形	100	62	14		
		9									方形	36	28	9		
	SB−104	1	北東−南西	N−65°30′−E	2×1	4.54	2.36			18.24	不整方形	50	40	12	Fig.71	
		2					2.18				楕円形	24	18	10		
		3						3.8	3.8		不整方形	50	34	8		
		4				4.8	2.7				方形	50	34	10		
		5					2.1									
		6						3.7	3.7		楕円形	74	50	10		
	SB−105	1	北西−南東	N−60°−W	2×1	4.64	1			18.28	方形	30	30	8	Fig.71	
		2					3.64				隅丸方形	34	30	8		
		3						3.3	3.3		隅丸長方形	64	44	6		
		4				4.6	2.3				長方形	56	44	18		
		5					2.3				円形	32	30	6		
		6						3.94	3.94		円形	40	34	10		
	SB−106	1	北−南	N−12°−W	3×1	3.58	0.74			14.57	方形	30	24	6	Fig.72	
		2					1.66				楕円形	34	26	6		
		3					1.18				方形	32	28	6		
		4						3.66	3.66		方形	26	20	4		
		5				3.98	1.38				方形	34	30	18		
		6					1.6				不整形	38	26	14		
		7					1				方形	36	30	8		
		8						3.24	3.24		長方形	34	20	4		
	SB−107	1	北西−南東	N−58°−W	2×1			3.88	3.88	22.04	方形	26	18	12	Fig.72	
		2				5.68	2.46				不整方形	34	28	14		
		3					3.22				不整形	104	54	14		
		4						3.86	3.86		方形	44	34	8		
		5				5.24	2.7				長方形	70	44			
		6					2.54				楕円形	30	18			
	SB−108	1	東−西	N−81°30′−E	2×1	4.56	3.06			12.22	長方形	46	34	20	Fig.72	
		2					1.5				方形	34	26	10		
		3						2.5	2.5		不整形	56	30	16		
		4				4.22	2.04				不整形	82	62	52		
		5					2.18				方形	40	34	10		
		6					2.5	2.68	2.68		隅丸方形	44	38	34		
	SB−109	1	北西−南東	N−54°30′−W	2×2	4.38				18.75					Fig.75	
		2					2.54				円形	38	34			
		3						4.28	2.32		円形	32	32	32		
		4							2.96		不整方形	44	42	22		
		5				4.18	2.58				方形	38	34	10		
		6					1.6				円形	16	14	12		
		7						4.08	1.64		方形	46	44			
		8									円形	24	22			
	SB−110	1	北西−南東	N−70°30′−W	2×1	4.26	1.94			11.08	隅丸長方形	54	38	10	Fig.72	
		2					2.32				方形	60	50	44		
		3						2.6	2.6		方形	38	34	30		
		4				4.06	2.32				隅丸長方形	50	42	12		
		5					1.74				不整楕円形	78	58	18		
		6						2.3	2.3		不整形	46	40	8		
	SB−111	1	東−西	N−75°30′−W	2×2	4	2.42			14.8	方形	24	20	12	Fig.75	
		2					1.58				円形	28	24	8		
		3						3.68	2.68		不整長方形	70	54	12		
		4							1		不整形	34	30	24		
		5				3.84	1.52				不整方形	34	32	24		
		6					2.32				楕円形	58	50			
		7						3.7	1.78		方形	38	34			
		8							1.92		不整楕円形	28	20			

Tab. 14　2次（Ⅷ・Ⅸ区）不整形土壙・Pit・井戸計測一覧

2次Ⅷ区

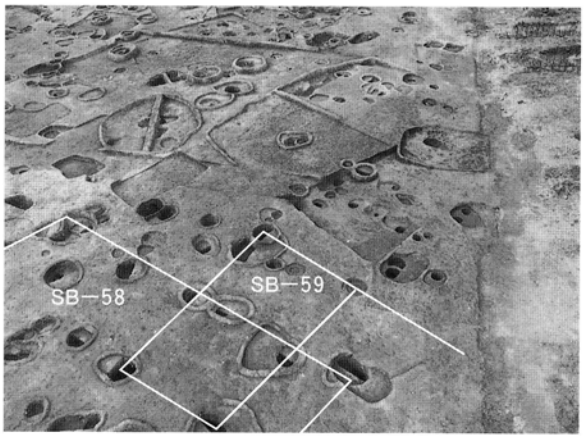
地区名	遺構番号	形状	柱穴規模（cm）			挿図番号	備考
			長径	短径	深さ		
2次Ⅷ区	SX−01	半円形	510	200+α	24	Fig.52	
	SX−02	不整長方形	210	160	20	Fig.52	
	SX−03	不整長方形	808	350	35	Fig.54	
	SX−04	半円形	125	100+α	4	Fig.52	
	SX−05	隅丸三角形	180	142	5	Fig.52	
	SX−06	不整形	470	300	10	Fig.54	
	SX−07	長方形	250	130	28	Fig.52	
	SX−08	不整形	240	182	14	Fig.52	
	SX−09	不整形	320	310	36	Fig.54	
	SX−10	不整形	365	320	30	Fig.54	
	SX−11	不整形	740	270	20	Fig.54	
	SX−12	不整形	500	460	32	Fig.53	
	SX−13	楕円形	260	165	10	Fig.52	
	SX−14	不整形	510	315	32	Fig.54	
	SX−15	楕円形	528	360	10	Fig.53	
	SX−16	不整円形	280	250	8	Fig.54	
	SX−17	不整形	322	200+α	28	Fig.52	
	SX−18	不整長方形	375	220	38	Fig.52	
	SX−19	隅丸方形	250	215	16	Fig.52	
	SX−20	半円形	150	115	10	Fig.52	
	SX−21	方形	285	110+α	21		
	SX−22	不整形	162+α	120	10	Fig.52	
	SX−23	不整形	415	370	30	Fig.52	
	SX−24	不整形	356	220	10	Fig.53	
	SX−25	不整形	325	290	30	Fig.53	
	SX−26	不整形	210	82	16	Fig.53	
	SX−27	長方形	1160	500	45	Fig.53	
	SX−28	不整形	304	226	10	Fig.54	
	SX−29	不整形	304	226	10	Fig.53	
	Pit−02	円形	70	65	33	Fig.53	
	SE−01	円形	144	135	82	Fig.53	

2次Ⅸ区

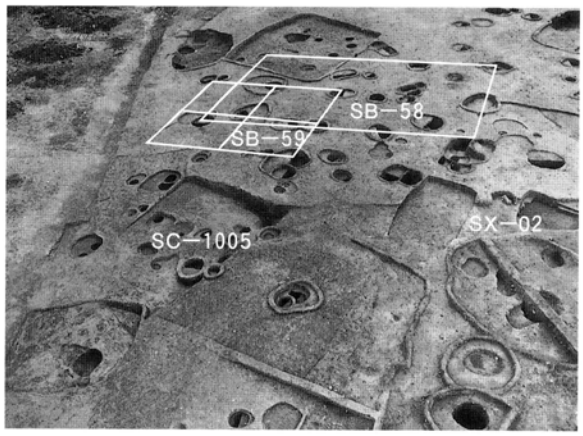
地区名	遺構番号	形状	柱穴規模（cm）			挿図番号	備考
			長径	短径	深さ		
2次Ⅸ区	SX−01	不整長方形	354	220	45	Fig.77	
	SX−02	隅丸三角形	285	250	12	Fig.77	
	SX−06	不整形	420	160	5	Fig.77	
	SX−07	不整長方形	250	122	10	Fig.77	
	SX−08	不整方形	244	230	18	Fig.77	
	SX−09	円形	162	142	12	Fig.77	
	SX−10	不整形	496	86	15	Fig.77	
	SX−11	不整楕円形	235	128	18	Fig.77	
	SX−12	不整形	306	204	10	Fig.77	
	SX−13	方形	194	105	10	Fig.77	
	SX−14	方形	176	120	6	Fig.77	
	SX−15	不整形	290	86	10	Fig.77	
	SX−17	不整形	204	105	44	Fig.77	
	SX−19	不整楕円形	310	165	38	Fig.77	
	SX−21	不整形	685	550	45	Fig.78	
	SX−23	楕円形	230	125	12	Fig.78	
	SX−25	不整楕円形	370	215	20	Fig.77	
	SX−26	楕円形	380	256	18	Fig.78	
	SX−27	長方形	146	100	16	Fig.78	
	SX−28	不整長方形	236	122	10	Fig.77	
	SX−33	不整形	180	140	84	Fig.79	
	SX−34	方形	66	60	62	Fig.78	
	SX−36	不整方形	318	116	10	Fig.78	
	SX−38	楕円形	216	136	16	Fig.78	
	SX−39	隅丸方形	360	320	20	Fig.78	
	SX−40	楕円形	296	245	34	Fig.79	
	SX−42	不整形	578+α	370	10	Fig.78	
	SX−43	隅丸三角形	205	170	60	Fig.79	
	Pit−425	楕円形	310	220	32	Fig.79	
	SE−01	円形	225	225	155	Fig.79	

図　　版

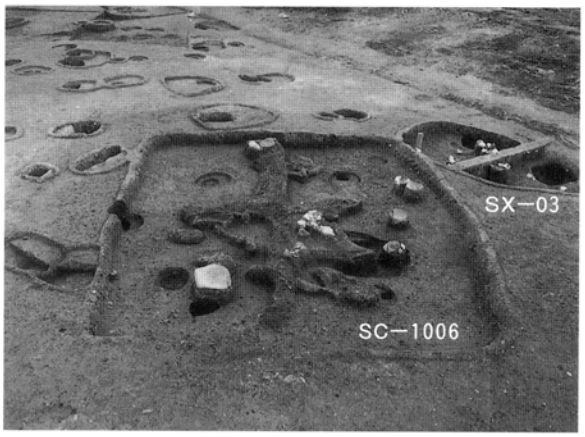
P L A T E S



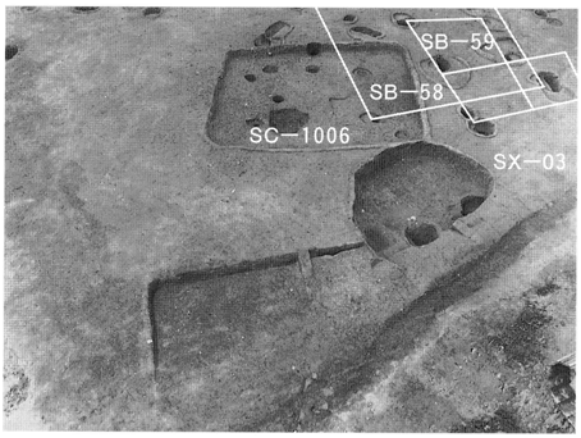
988



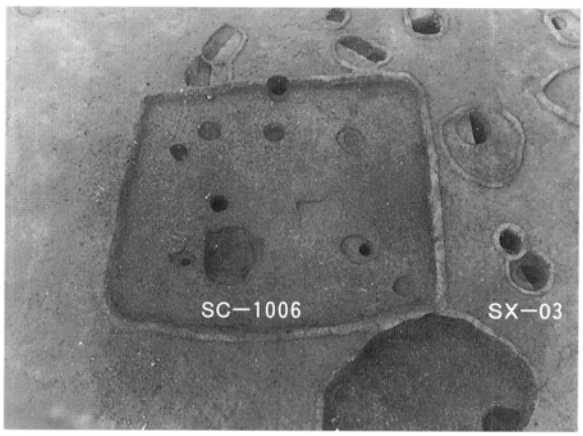
979



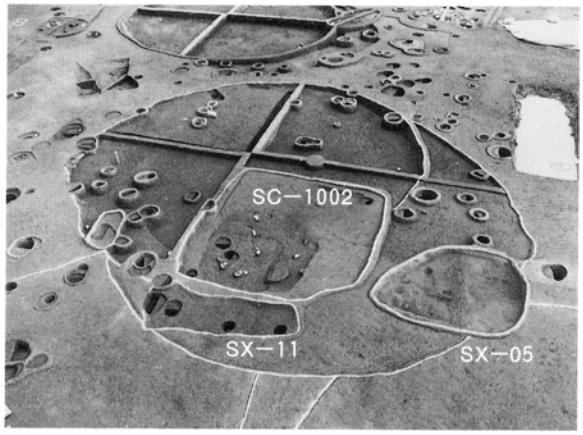
1280



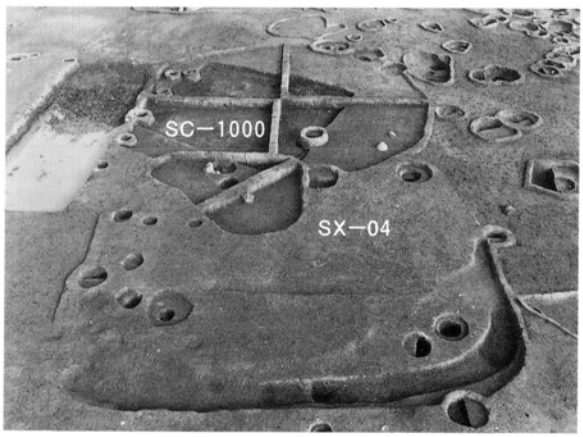
1144



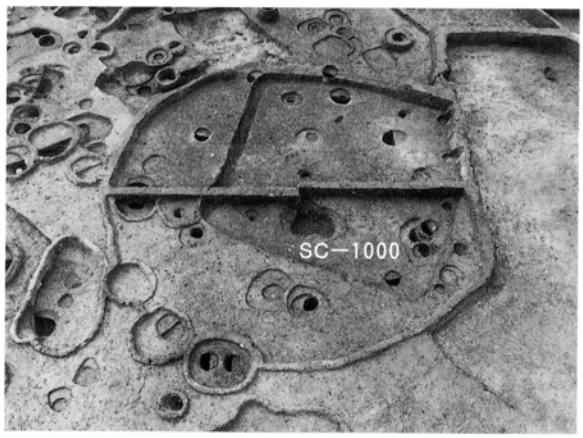
1335



1328

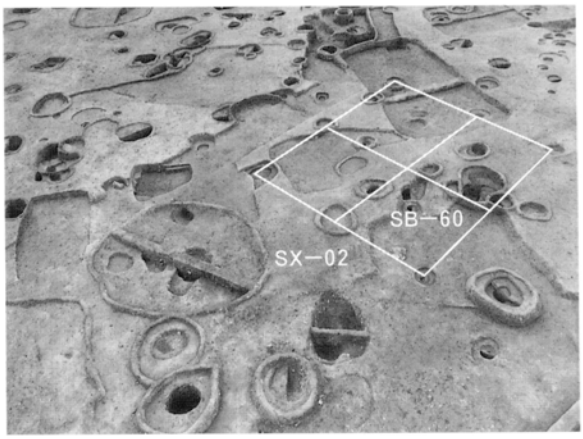


710

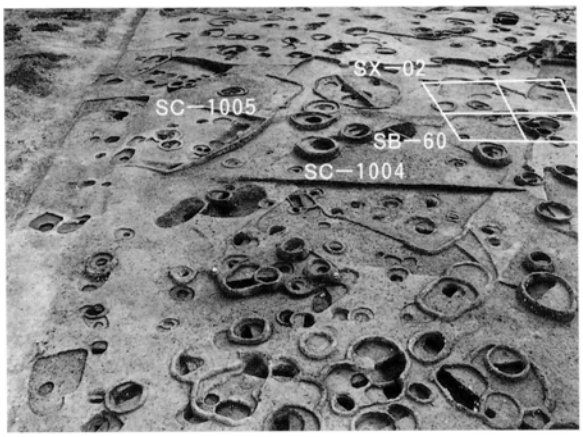


960

Ⅱ区検出遺構−1

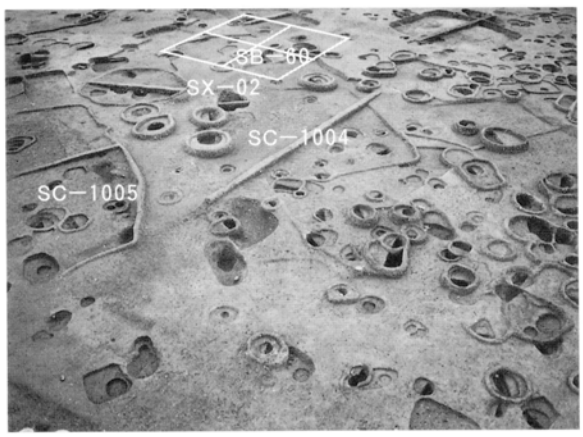


980

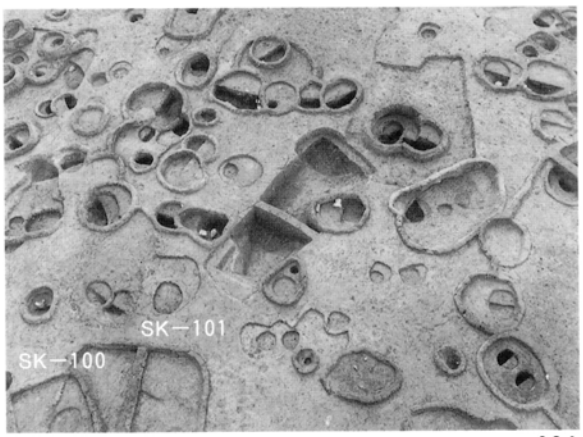


972

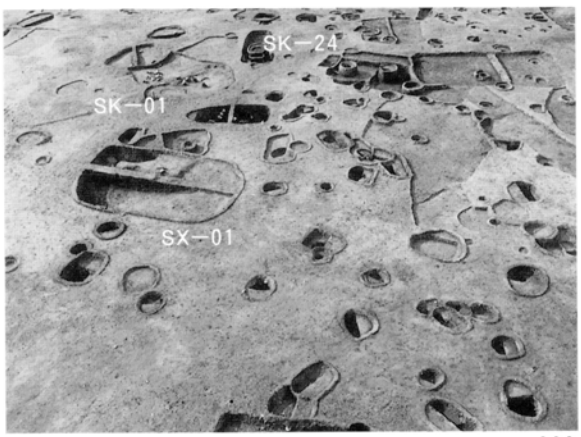
975



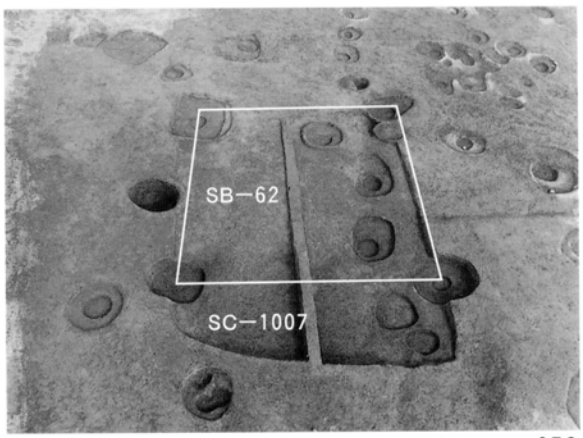
1332



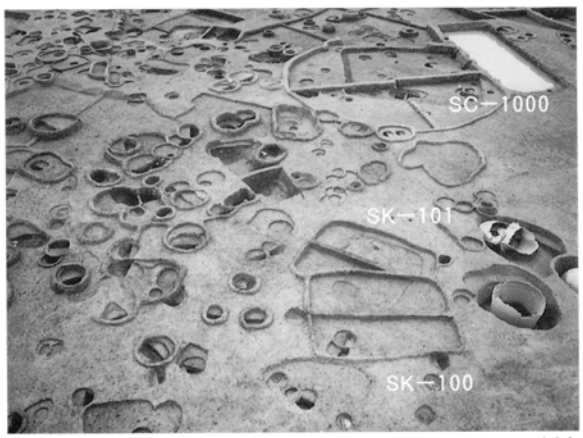
964



986

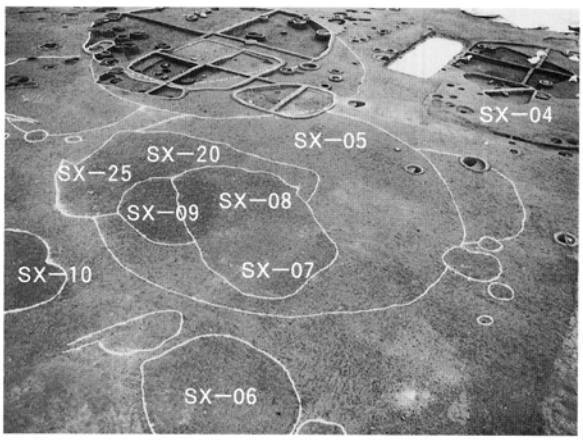


956

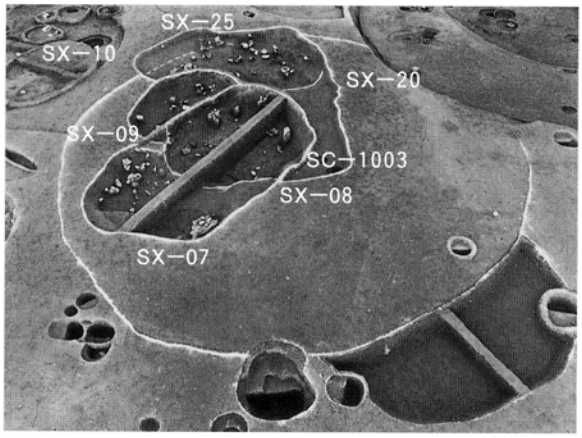


998

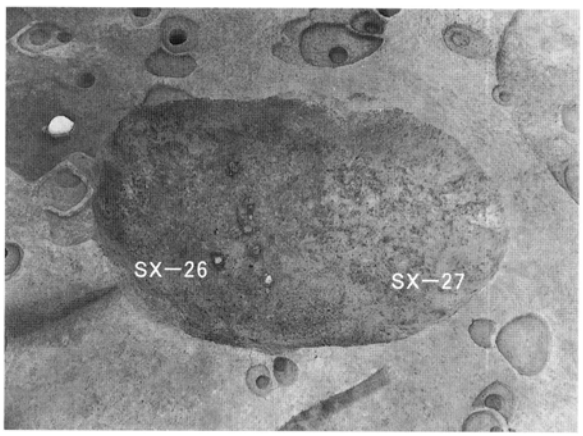
Ⅱ区検出遺構−2



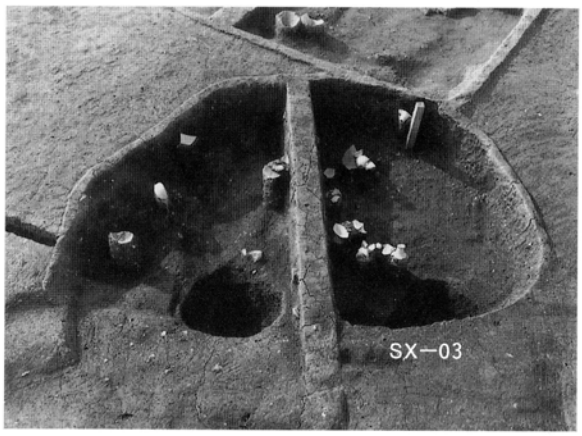
1330



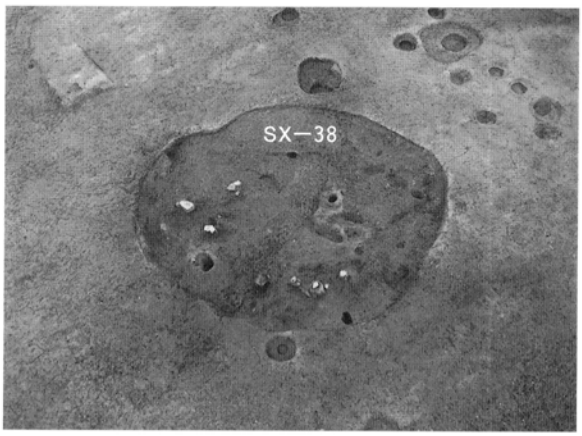
729



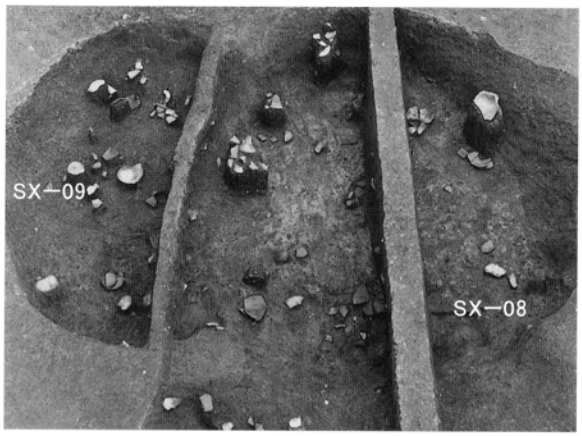
1119



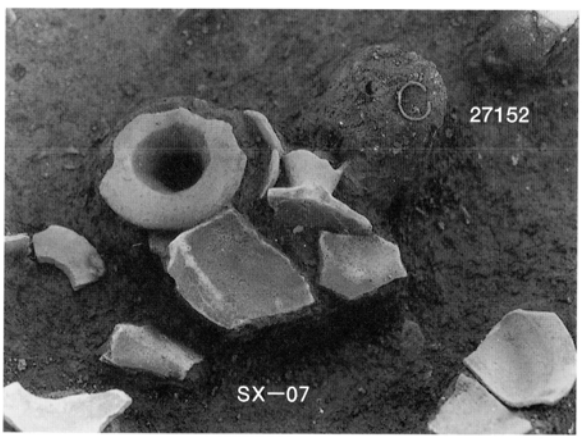
1138



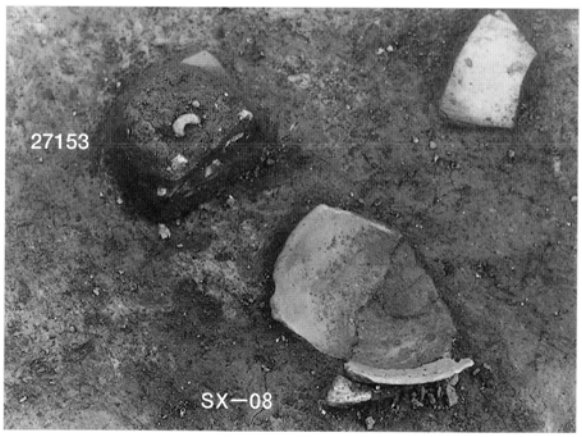
1145



1154

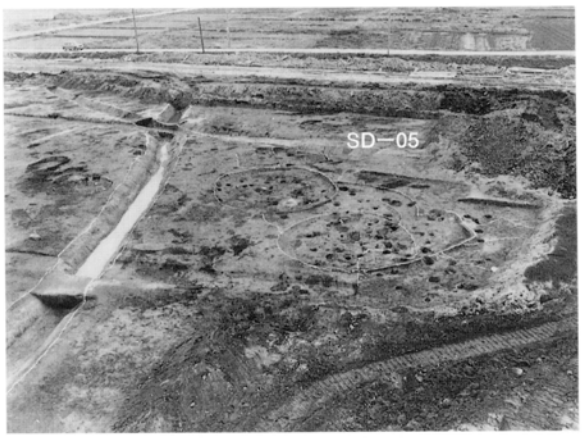


1341



1342

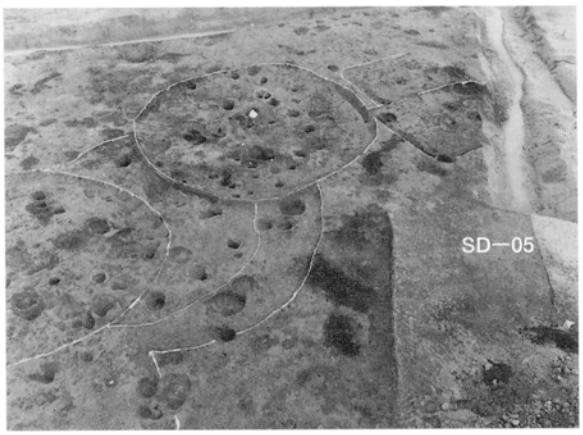
Ⅱ区検出遺構−3



114

22

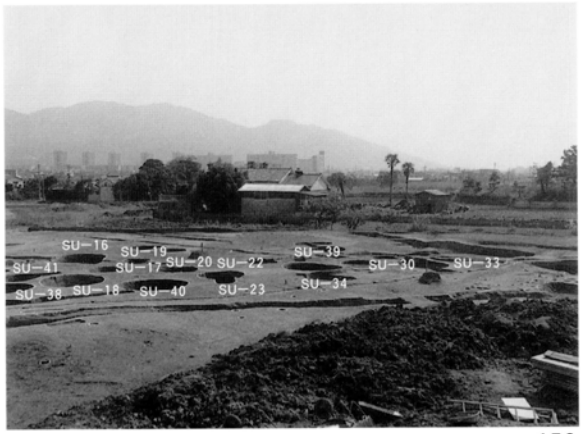
21



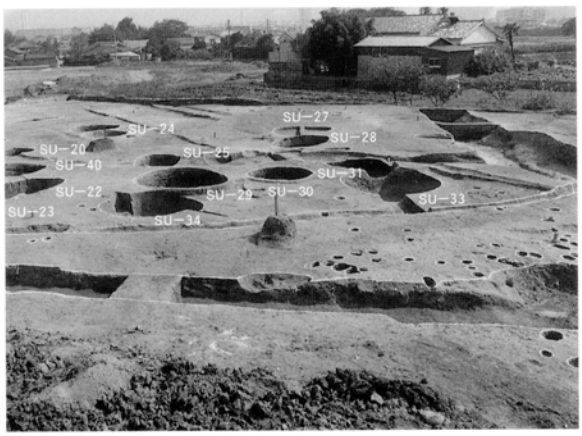
389

92

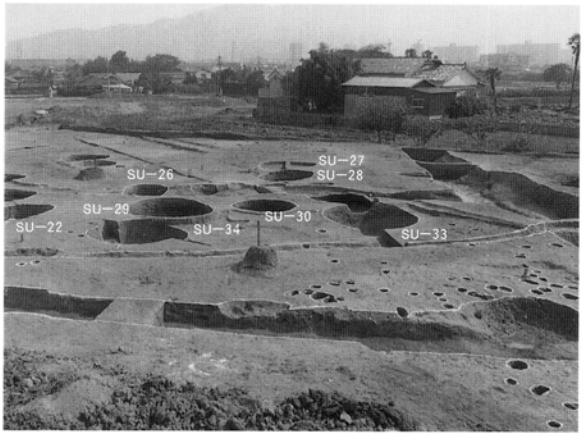
91



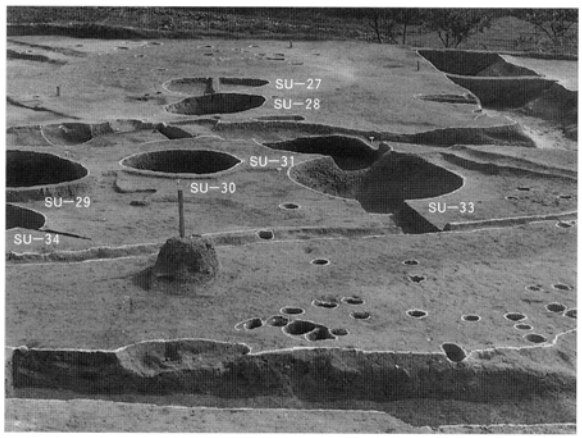
152



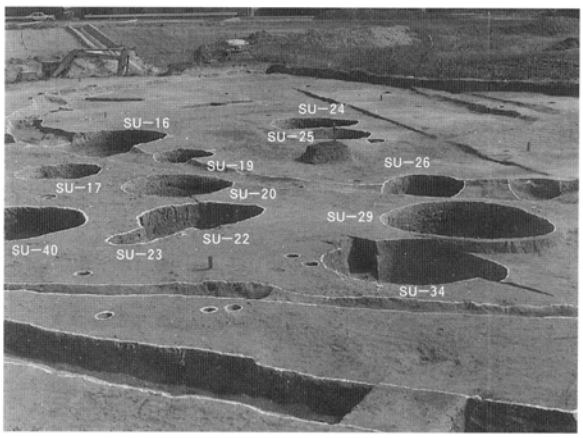
135



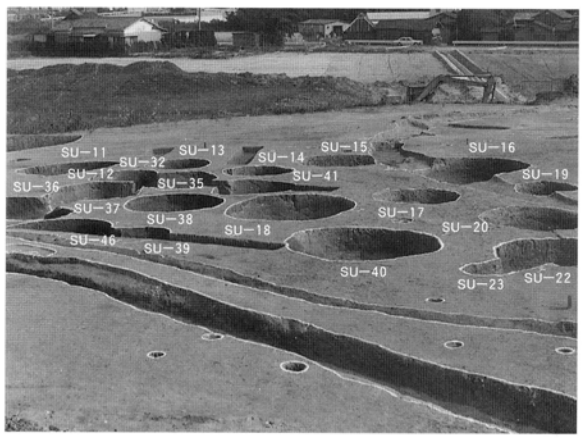
144



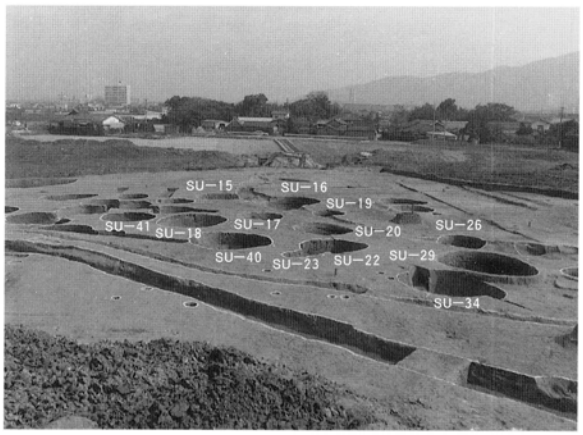
140



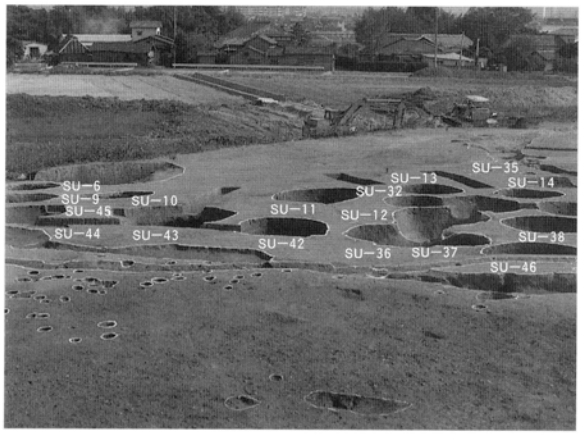
201



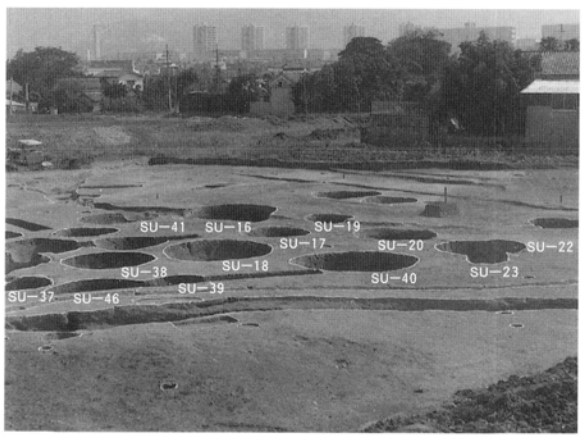
200



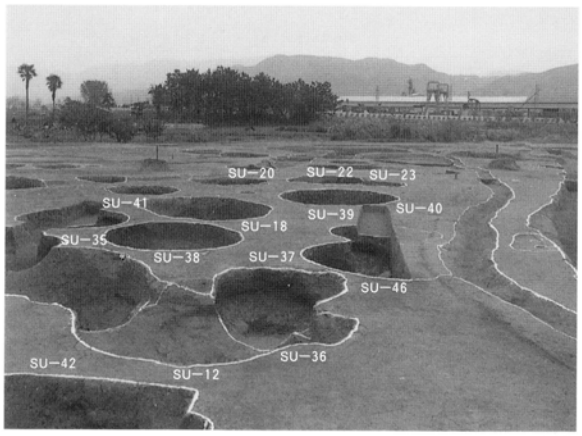
136



156

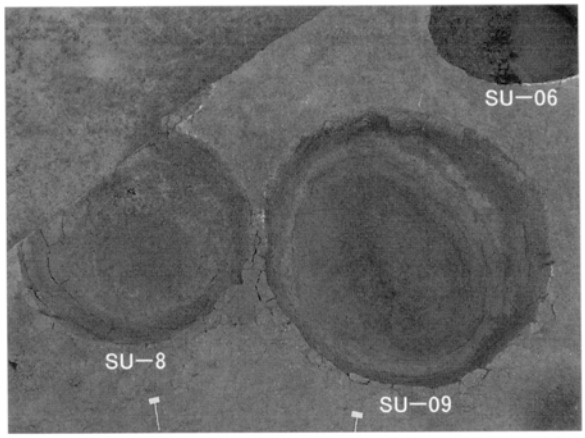


157

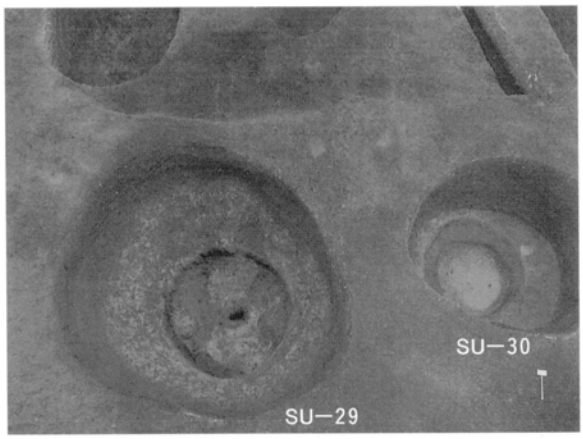


168

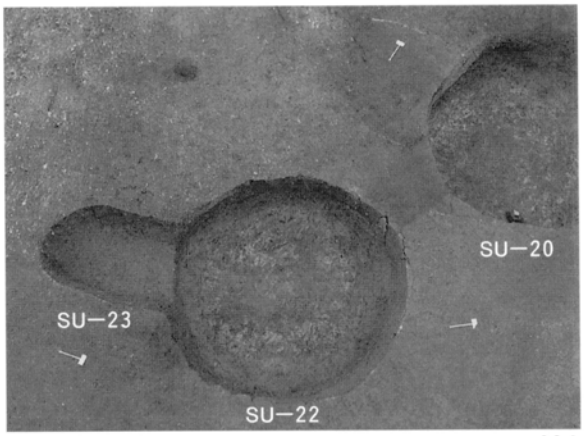
V区検出遺構



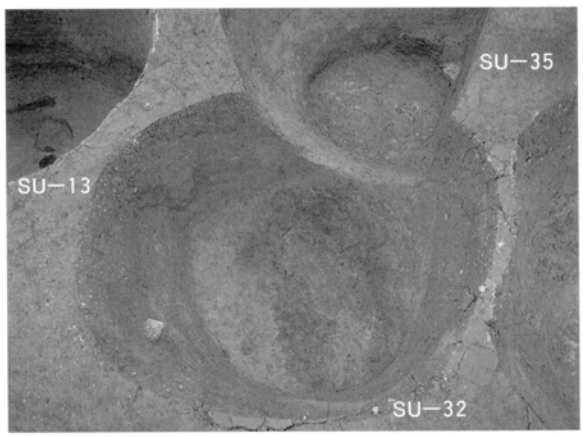
104



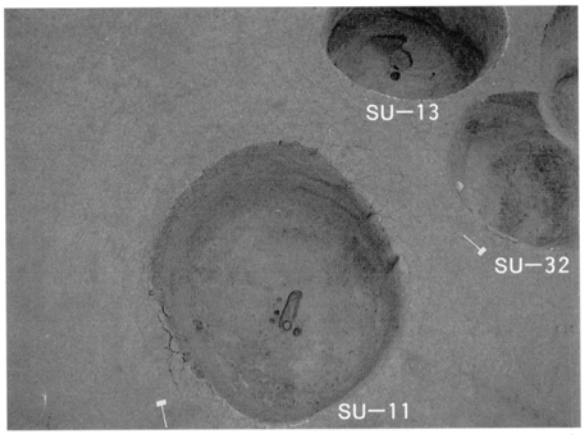
94



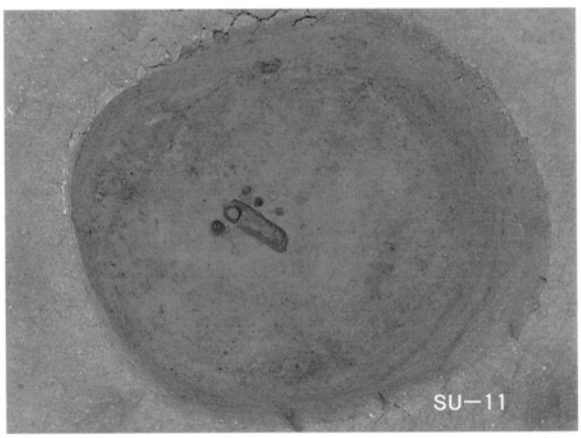
234



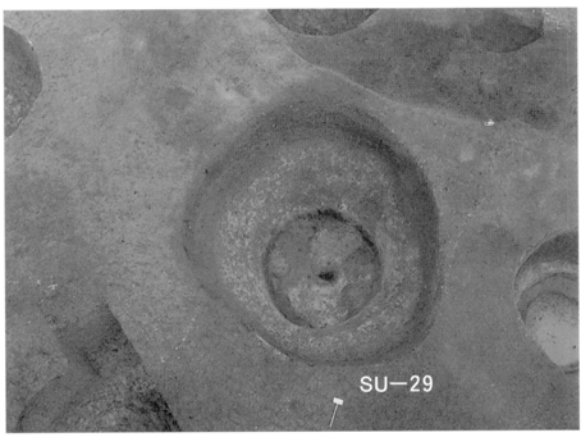
116



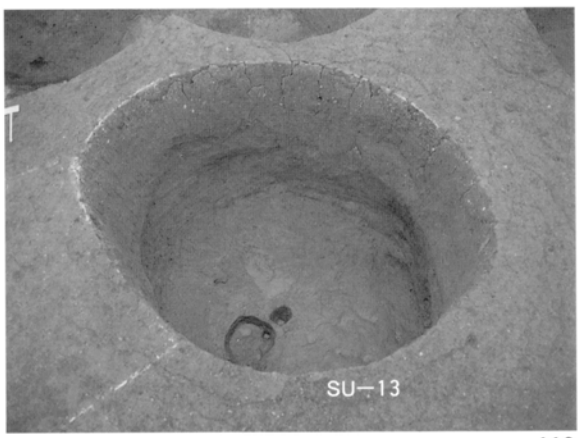
112



109

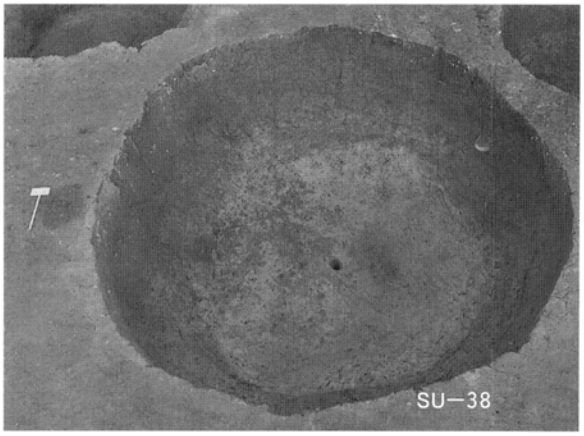


230

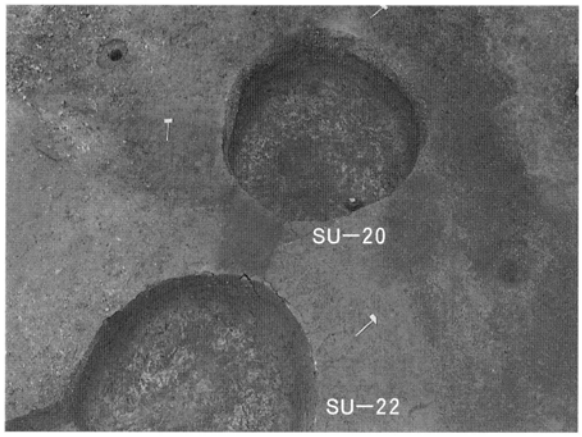


113

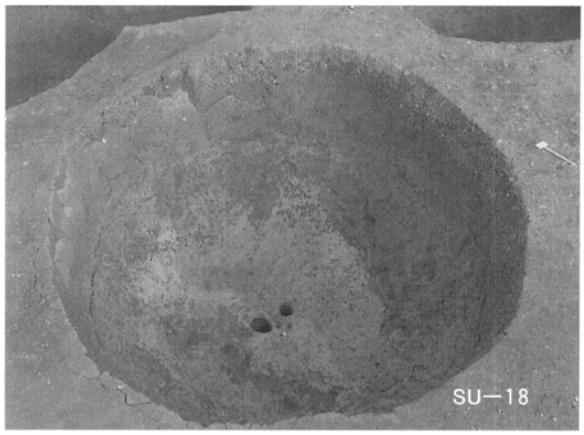
V区検出貯蔵穴−1



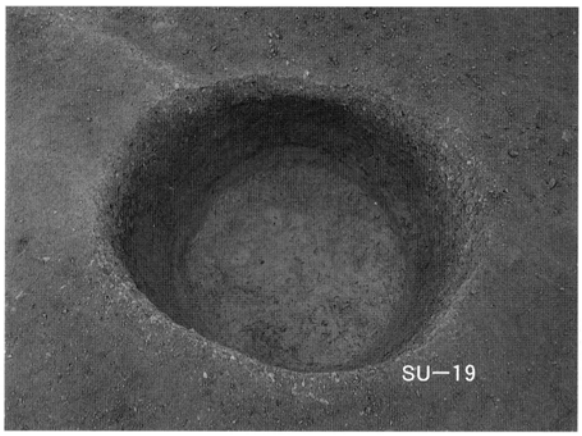
128



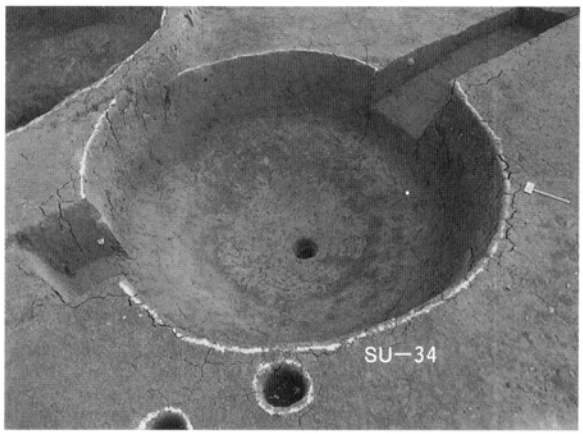
233



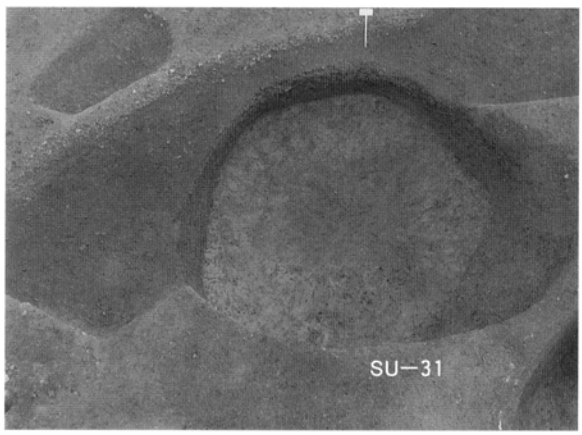
127



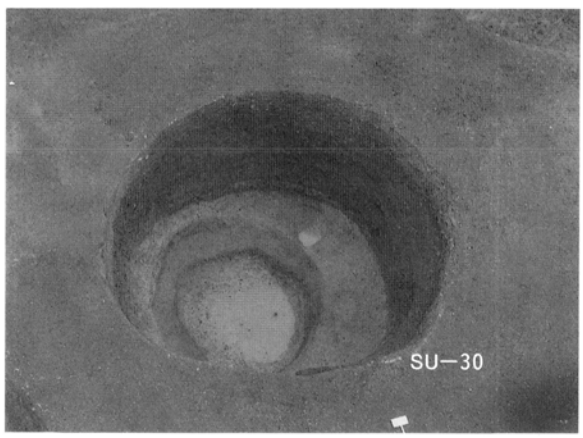
119



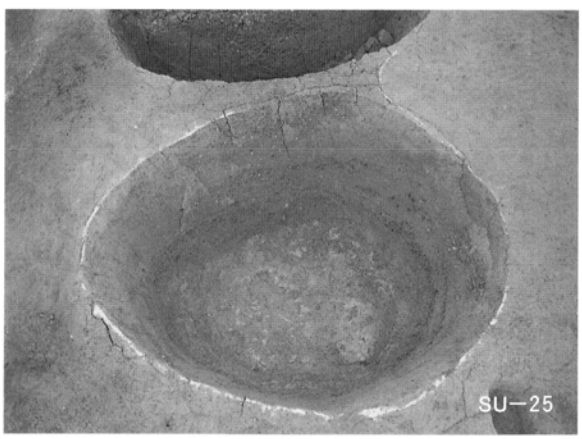
151



98

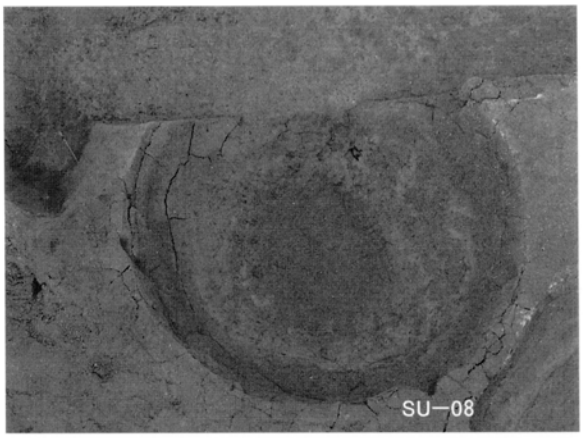


90

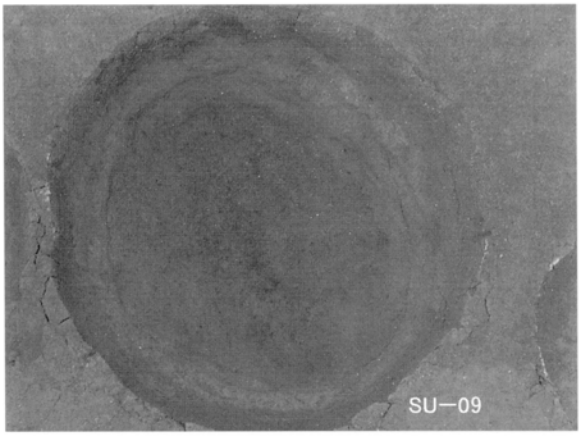


120

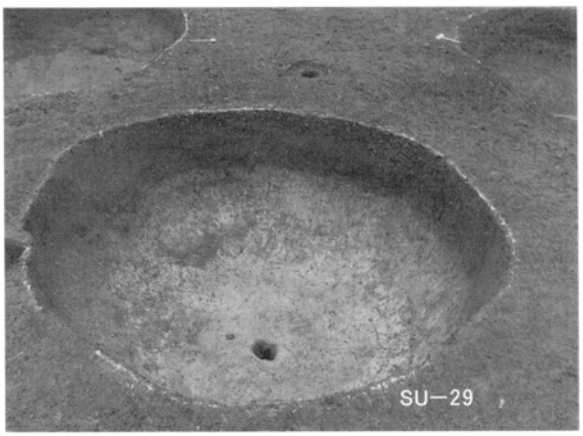
V区検出貯蔵穴−2



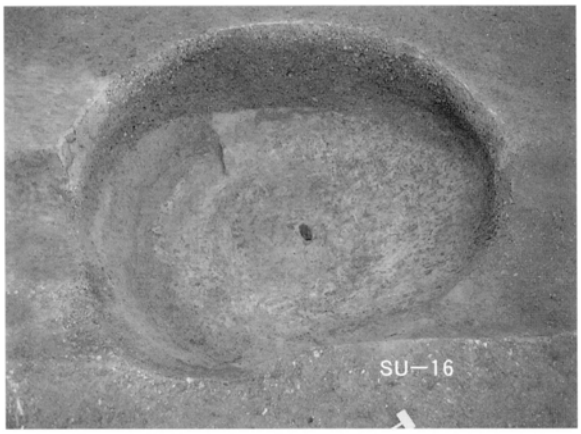
103



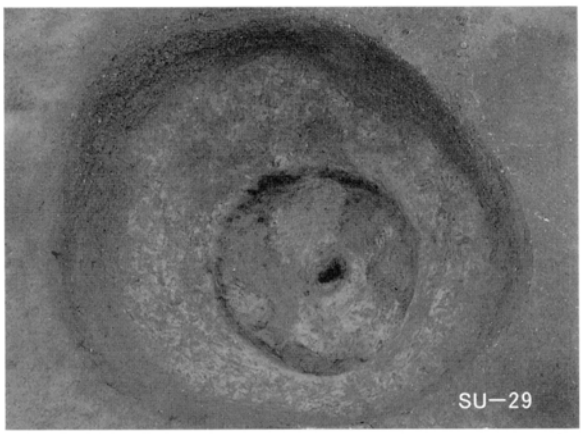
107



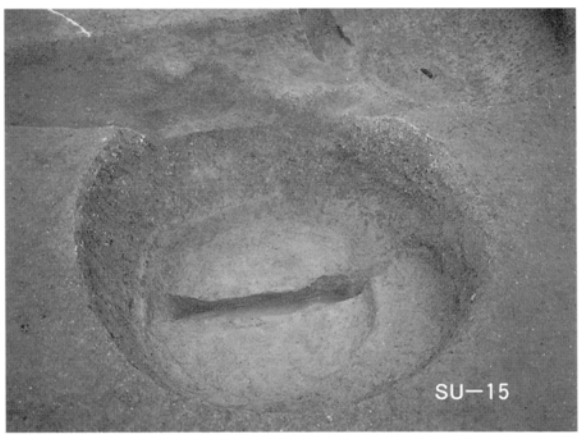
179



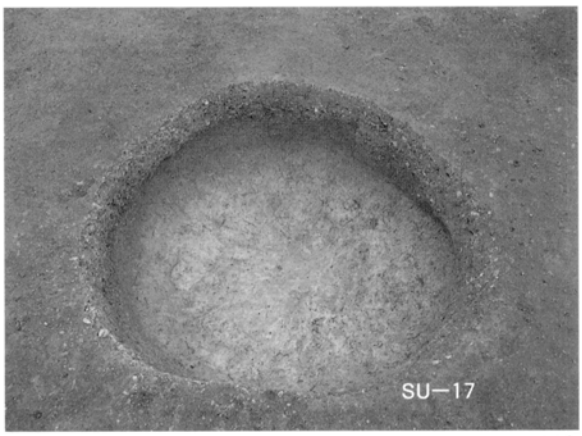
117



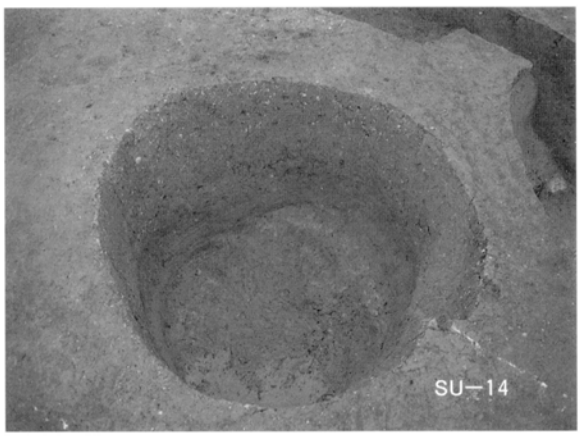
88



115



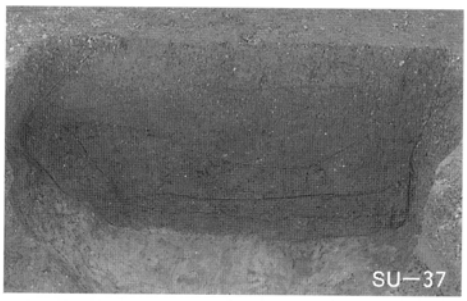
118



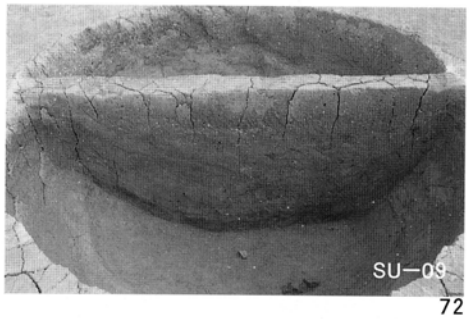
114

V区検出貯蔵穴−3

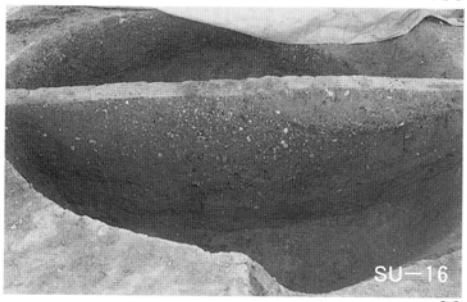
73



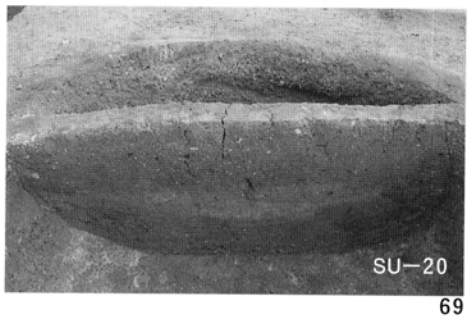
189



72

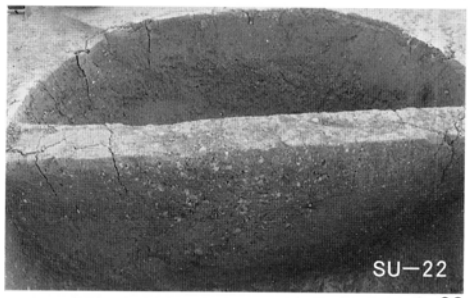


80

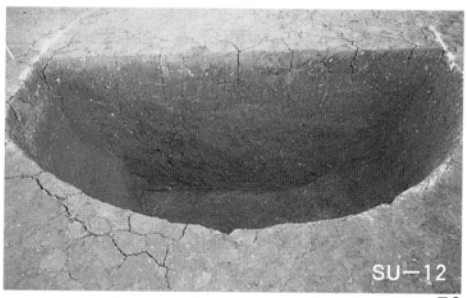


69

76

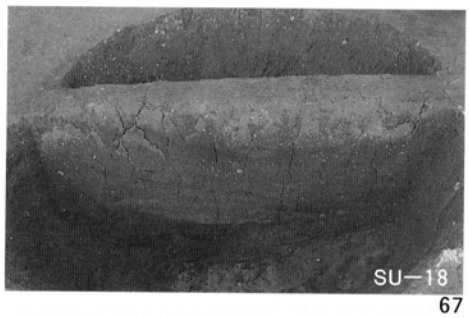


68



78

64



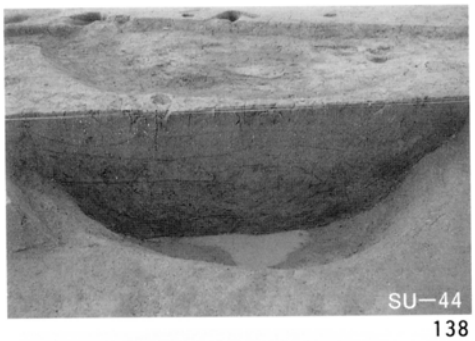
67

66

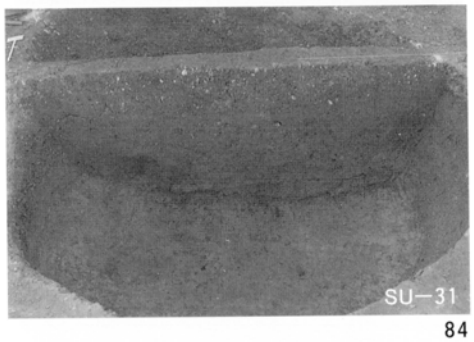
60

V区検出貯蔵穴土層断面

65

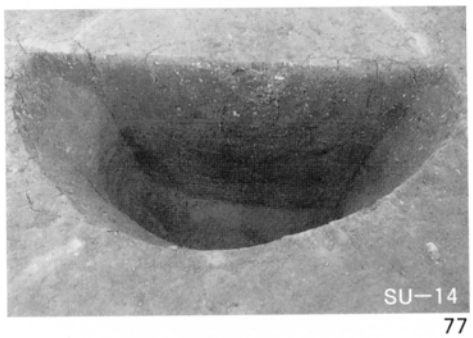


138

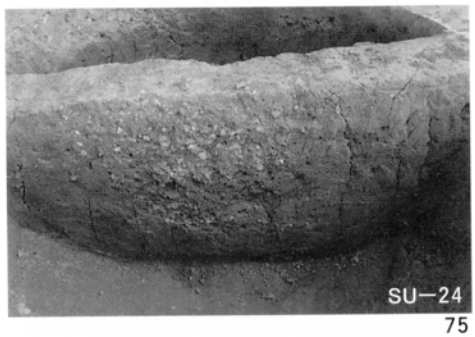


84

79

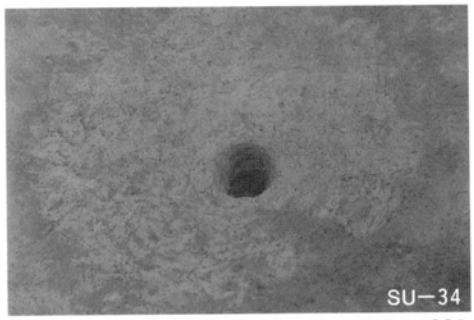


77

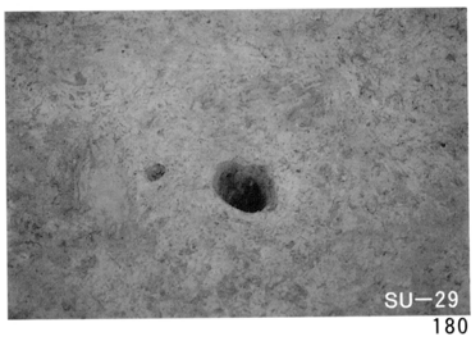


75

125



133

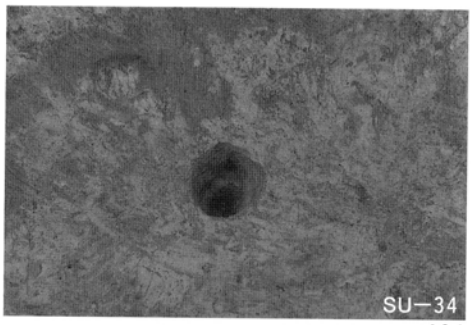


180

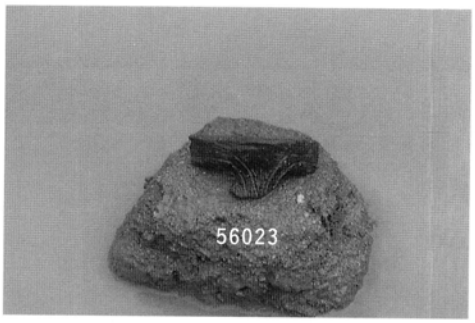
126

V区検出貯蔵穴土層断面と柱穴

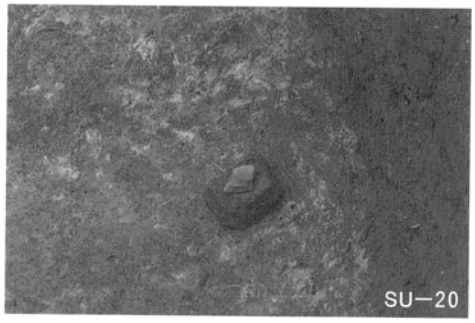
123



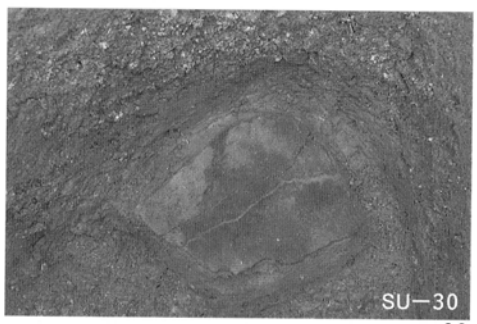
184



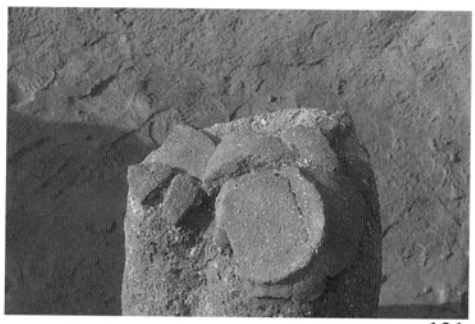
182

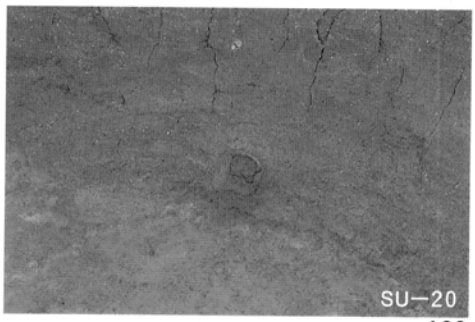


124

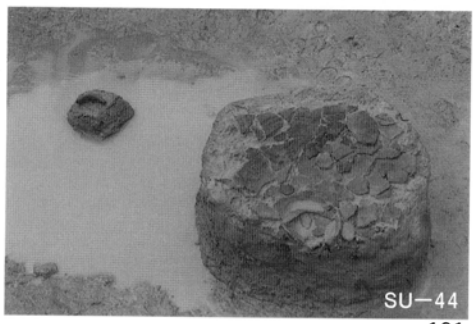


83


191



183



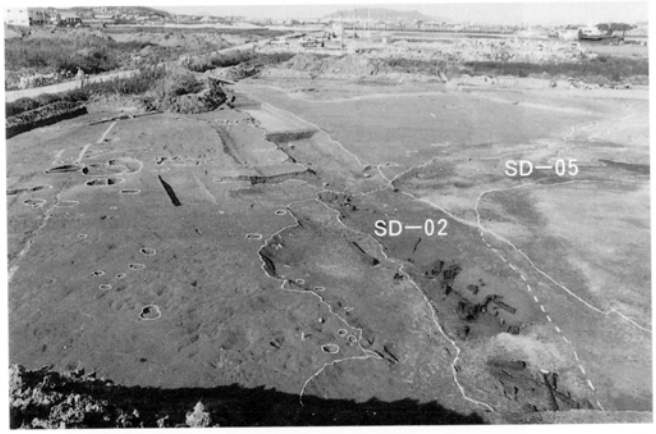
181

150

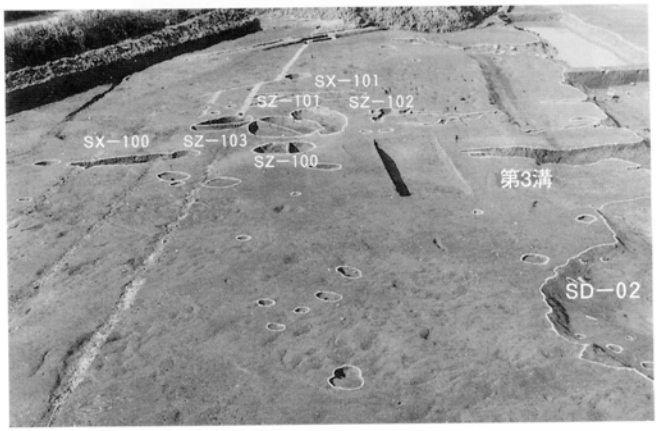
196

V区貯蔵穴柱穴と遺物検出及びVI区溝状遺構

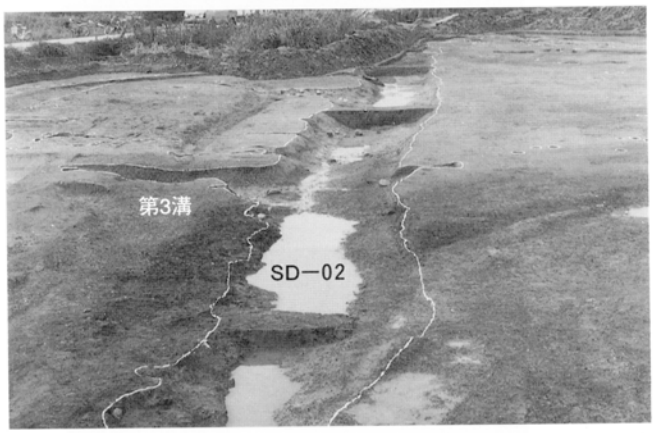
330



271



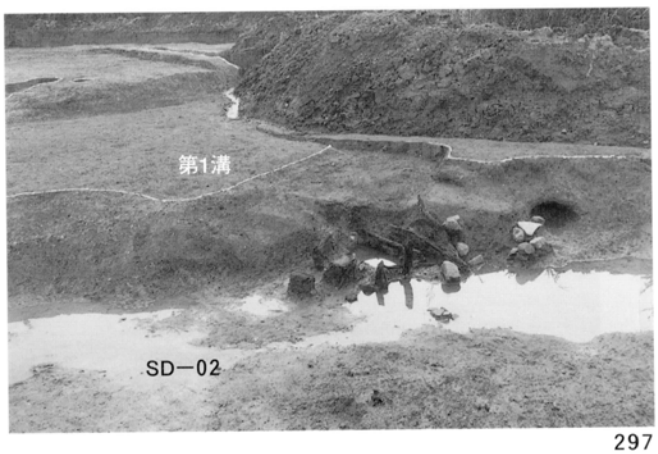
268



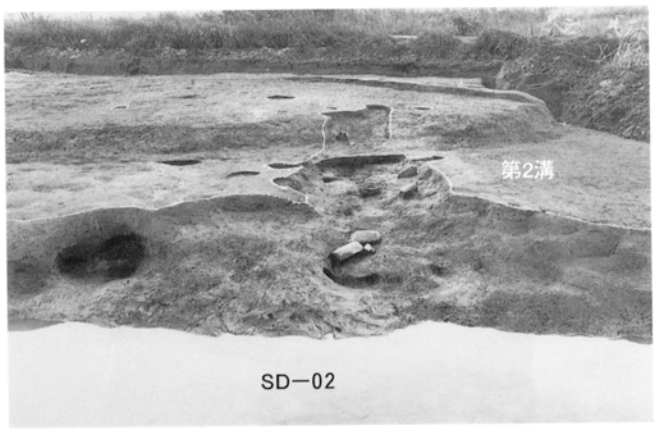
350

348

298

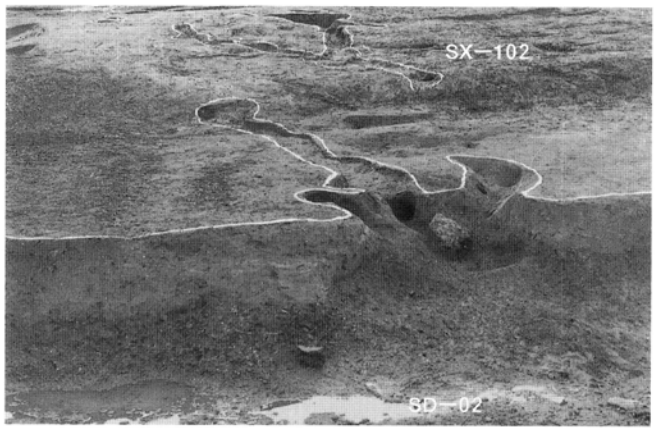


297

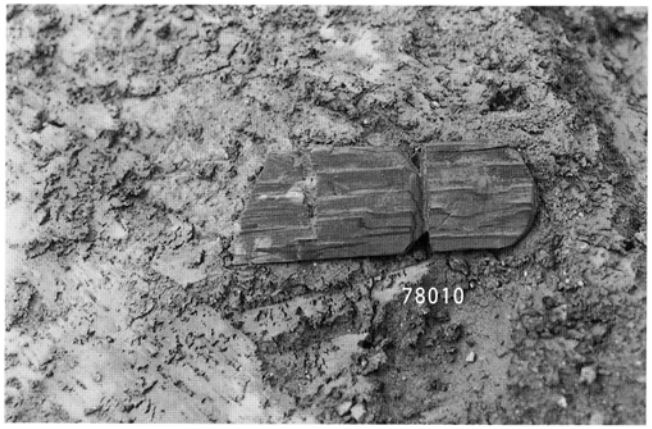


296

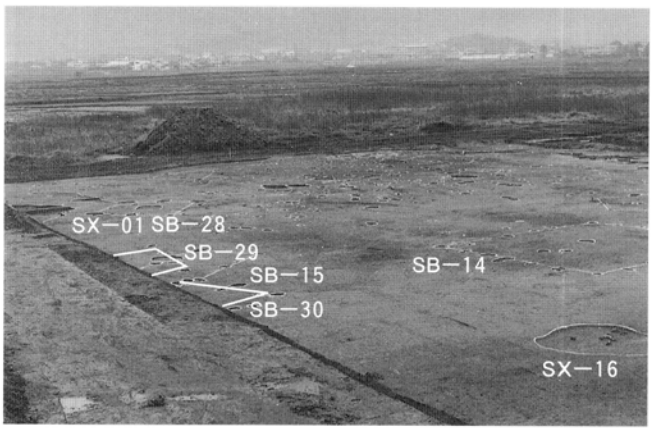
VII区検出遺構



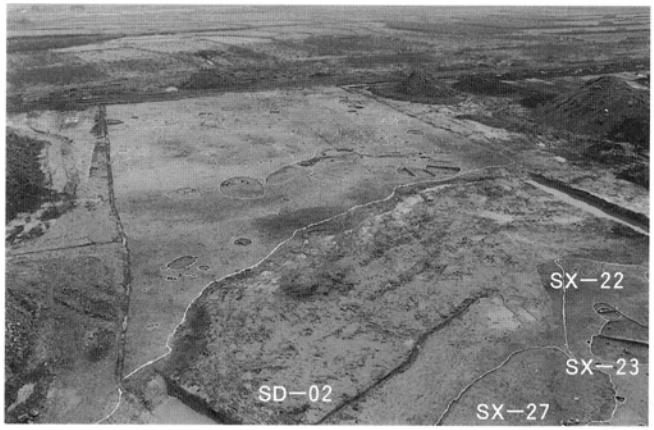
301



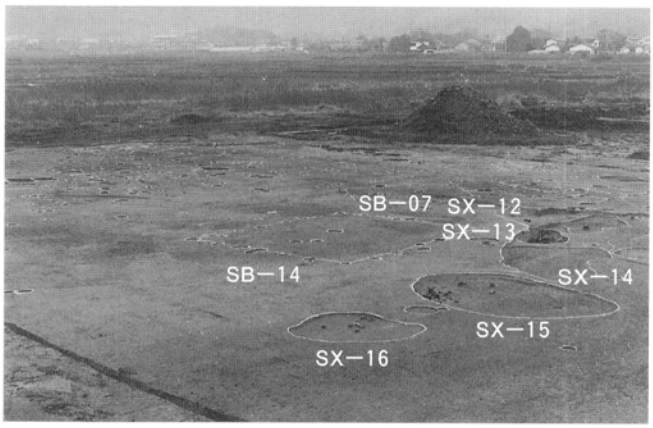
337



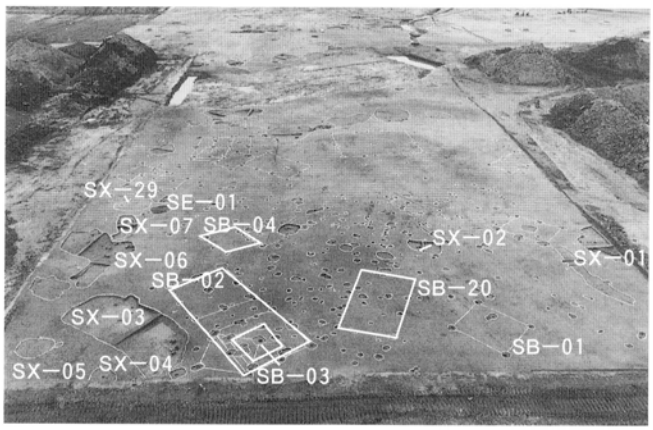
499



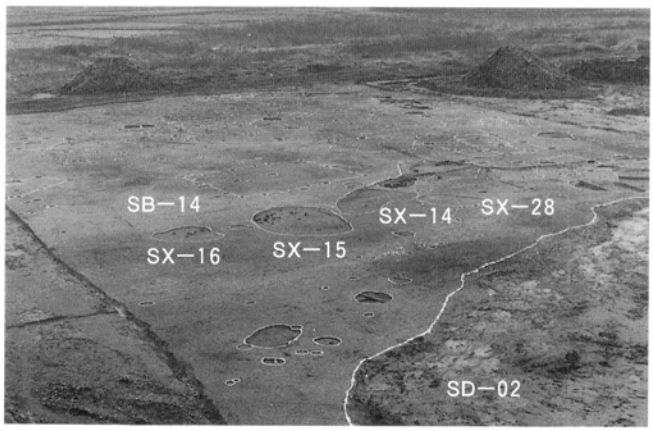
371



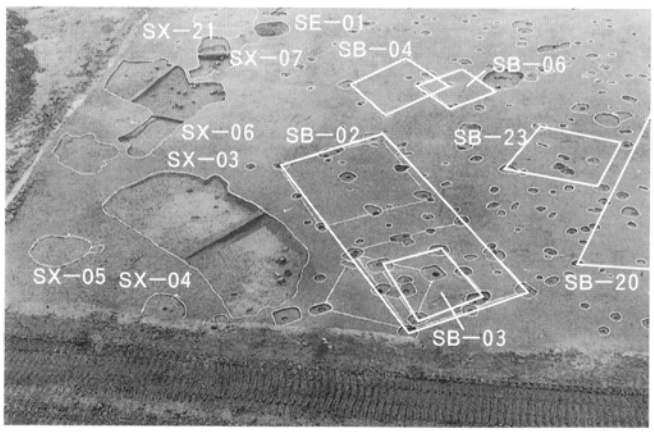
496



387

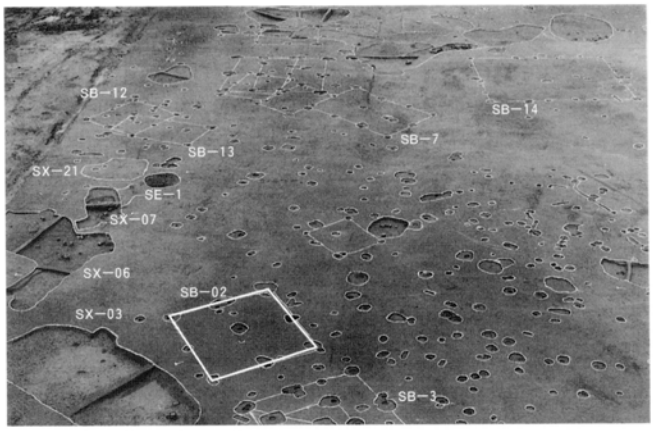


509

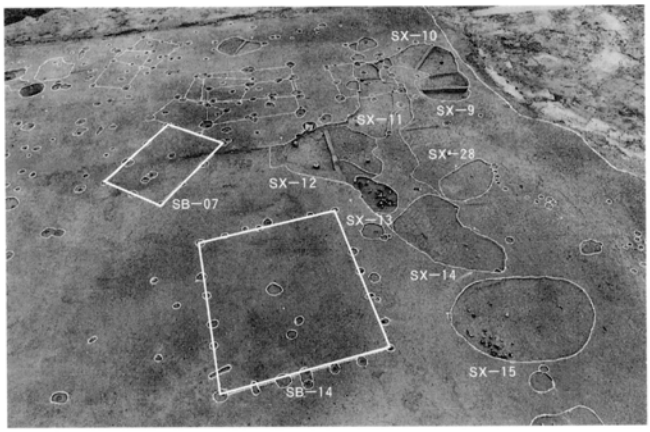


388

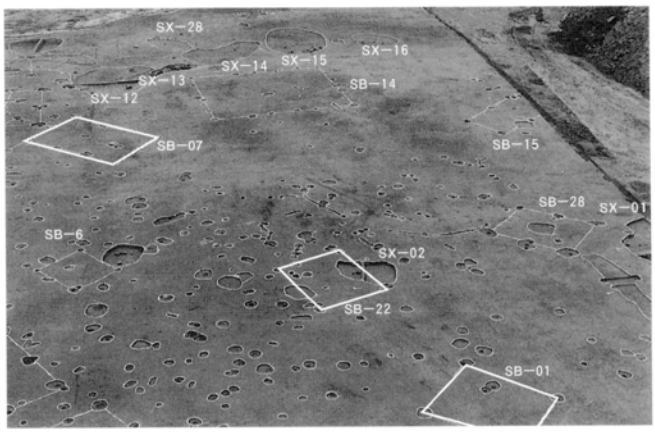
VII·VIII区検出遺構とVII区遺物検出状況



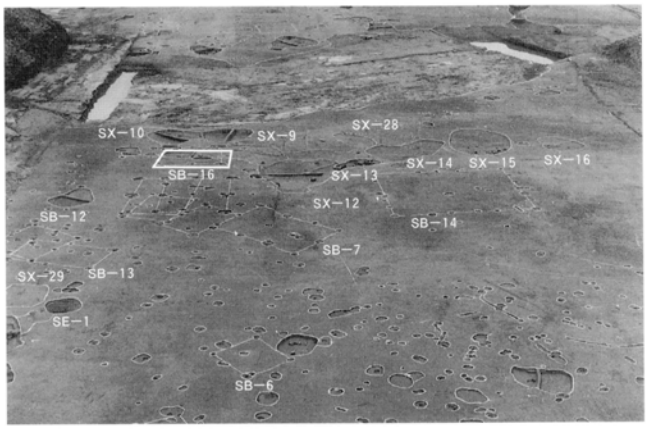
391



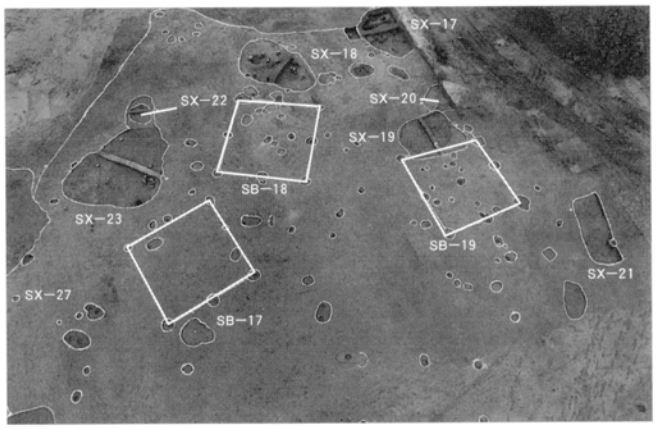
434



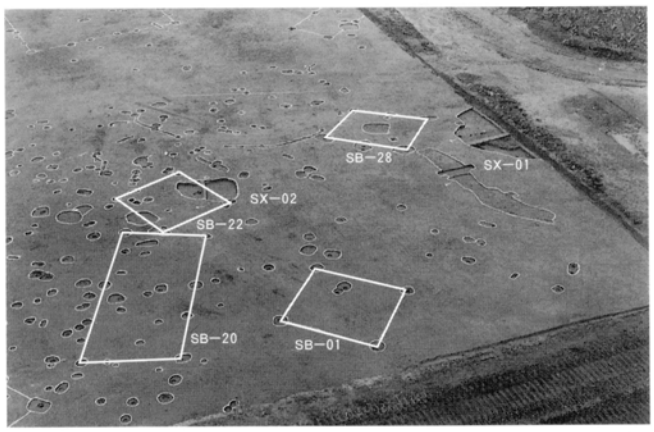
392



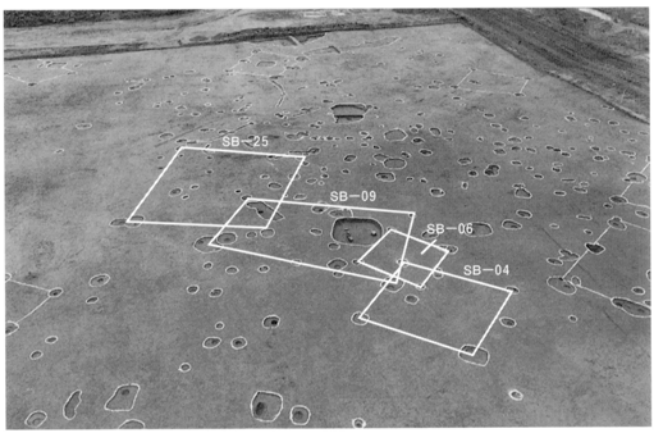
393



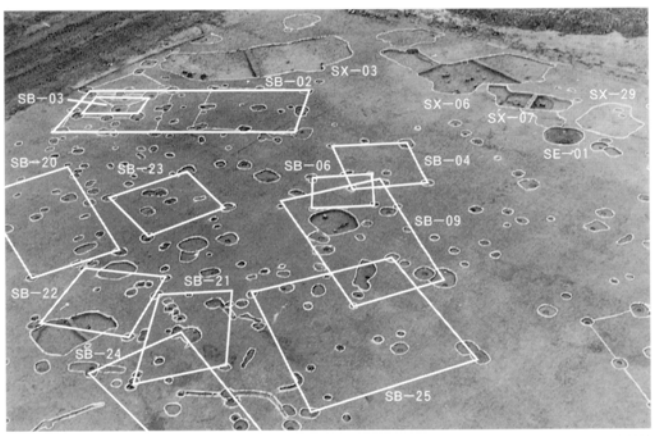
400



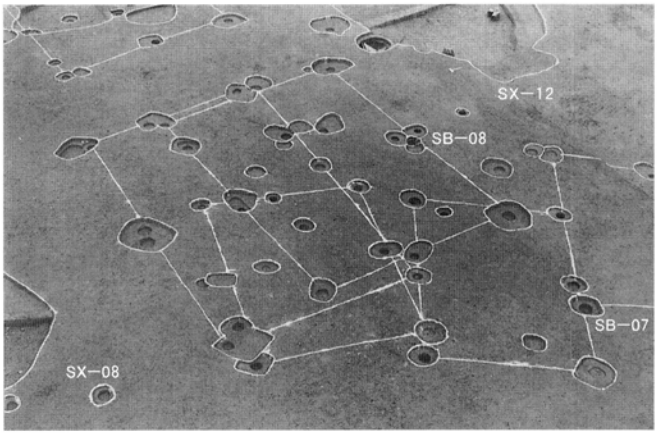
390



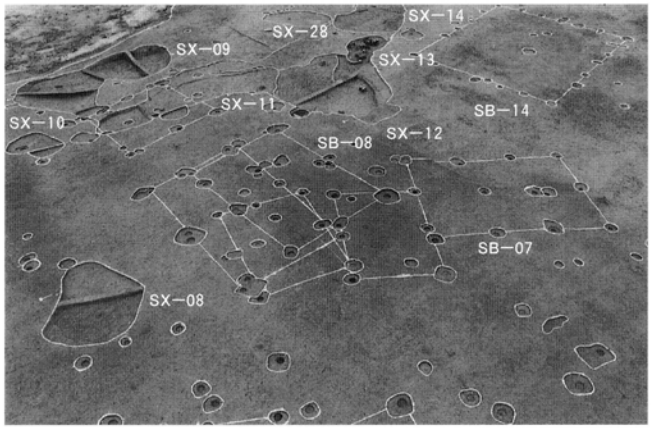
398



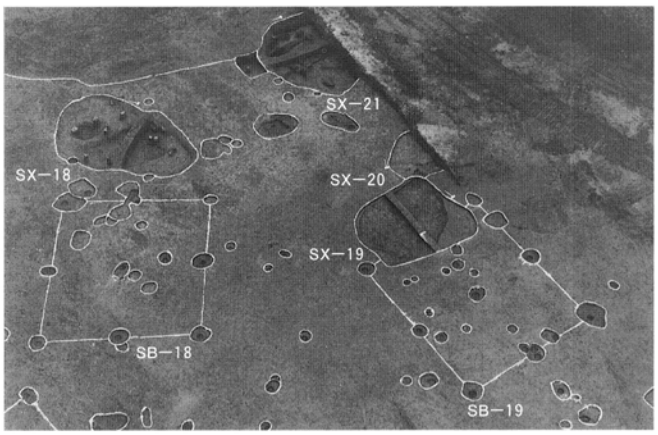
428



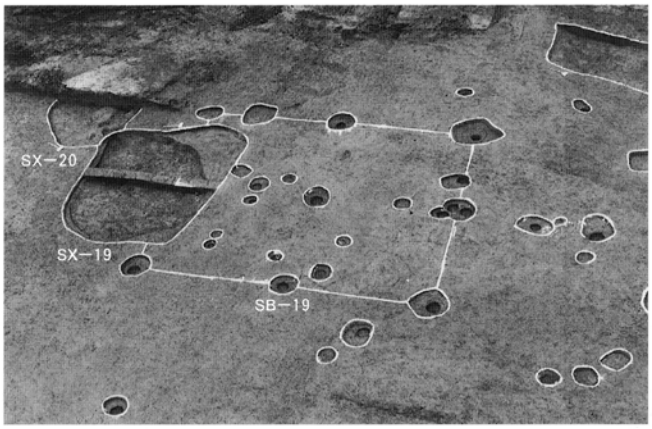
458



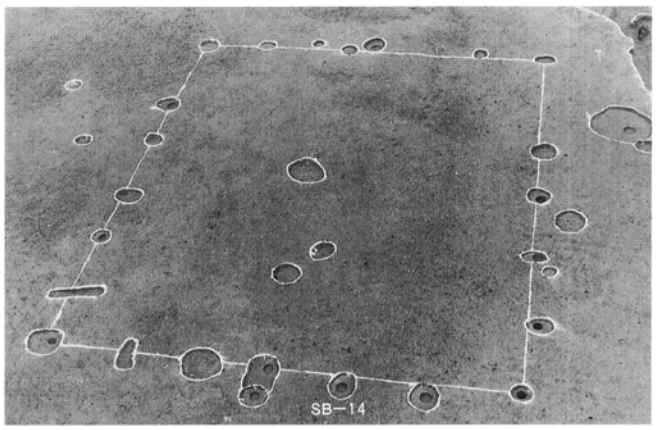
396



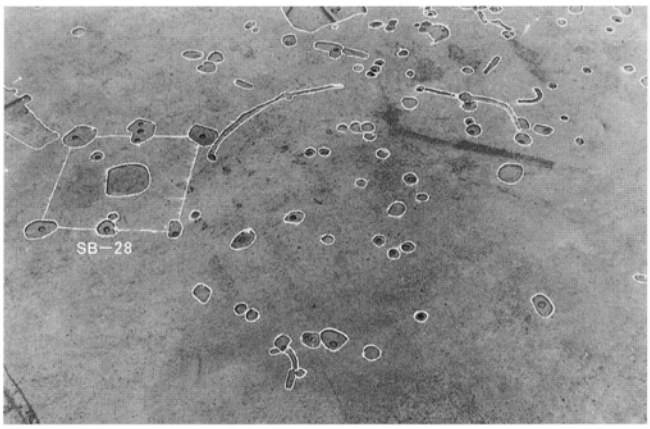
409



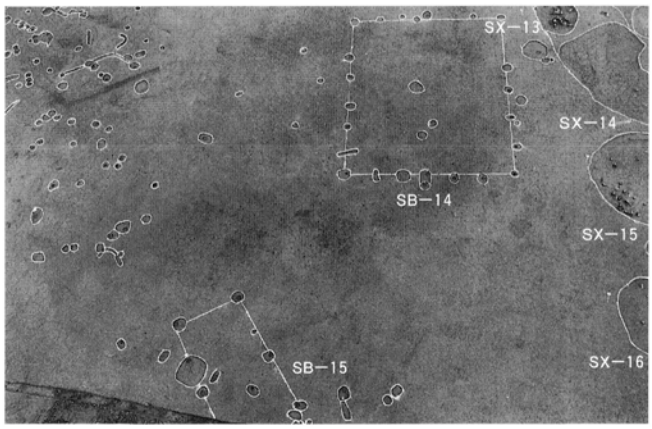
437



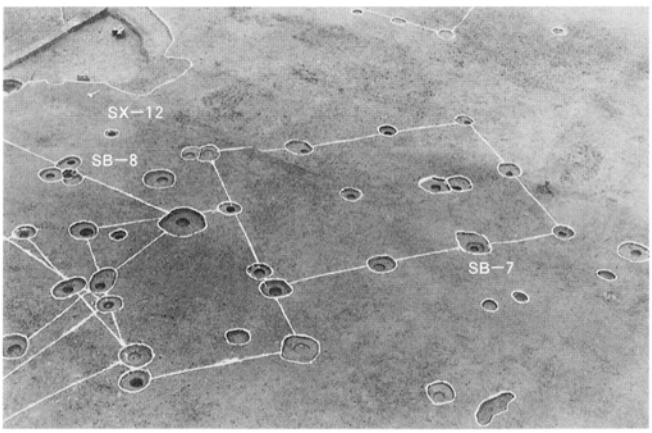
420



429

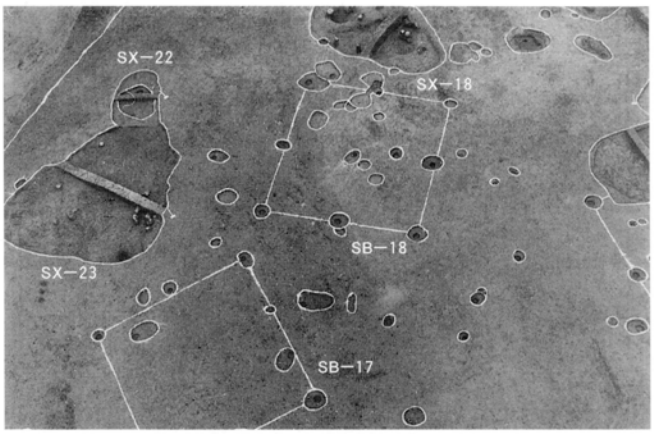


383

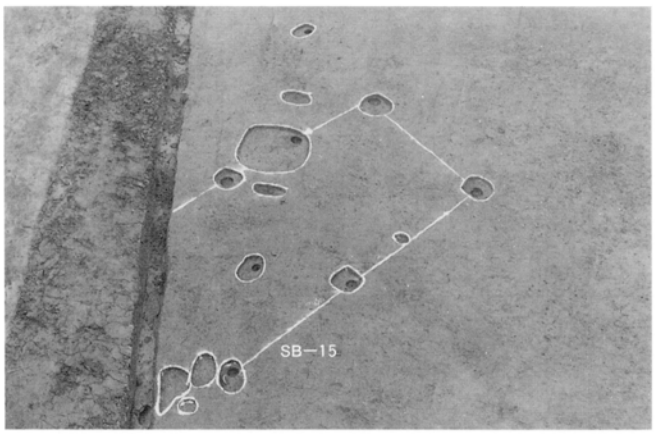


459

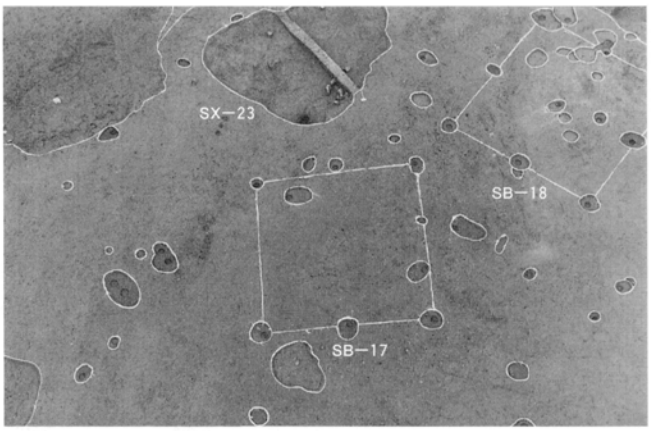
Ⅷ区検出遺構−2



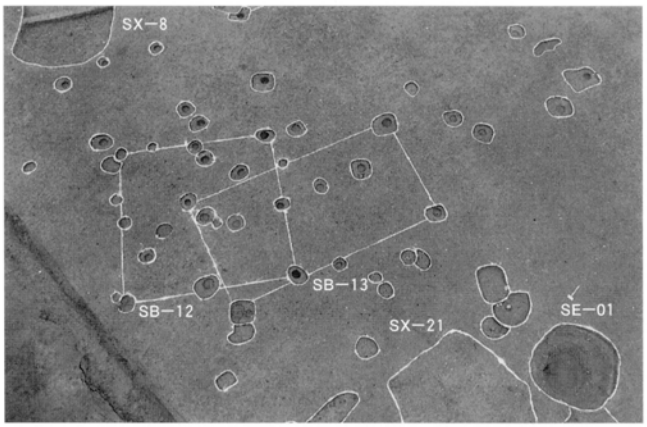
405



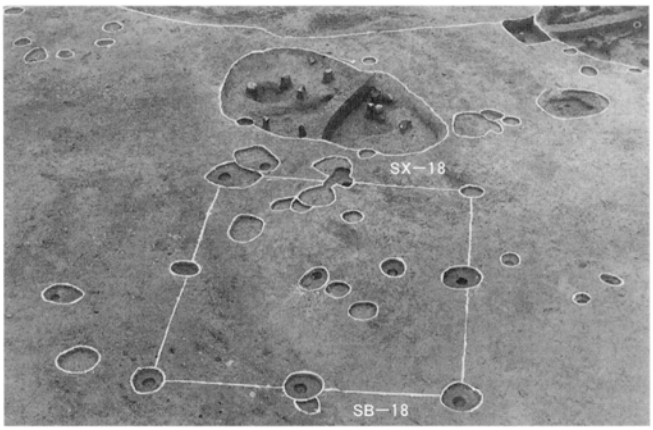
424



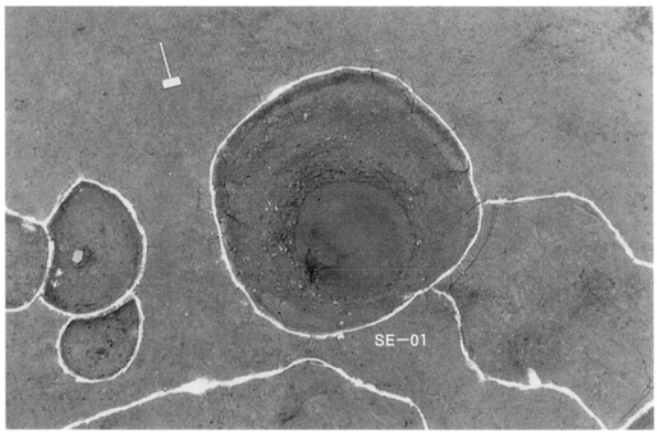
404



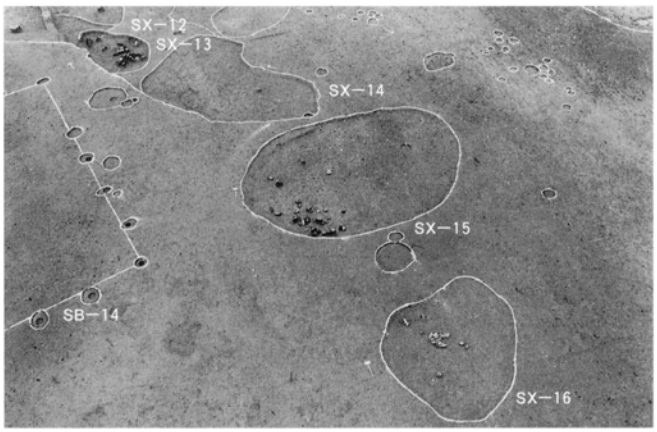
395



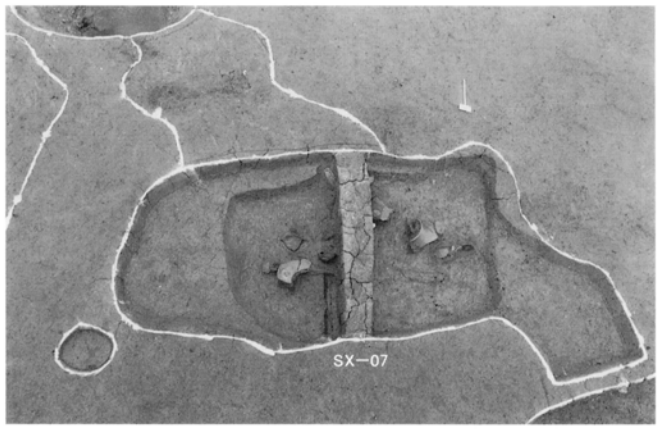
415



454

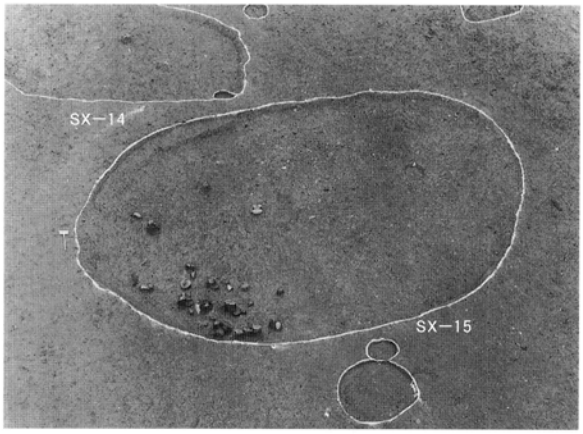


379

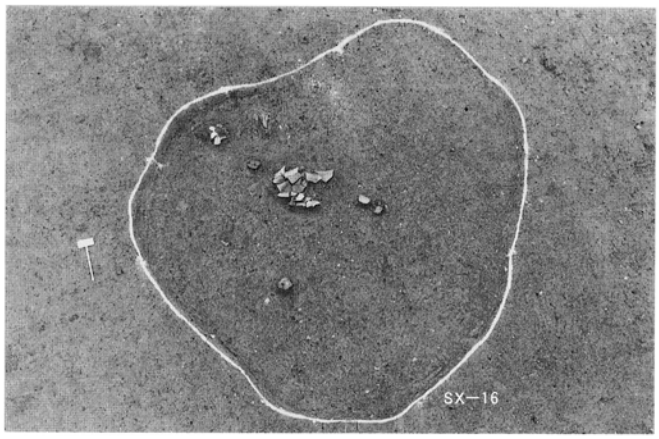


453

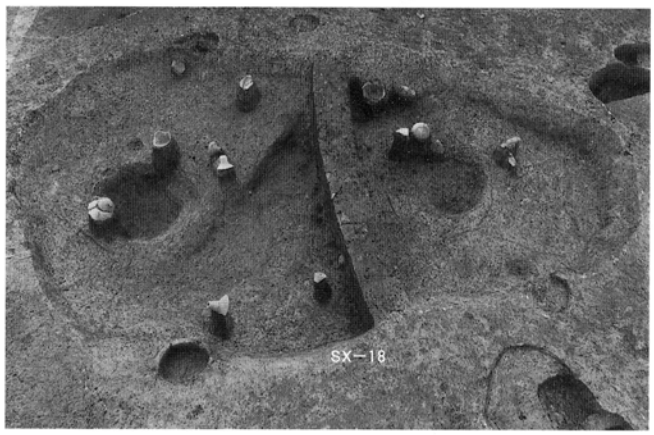
Ⅷ区検出遺構−3



419

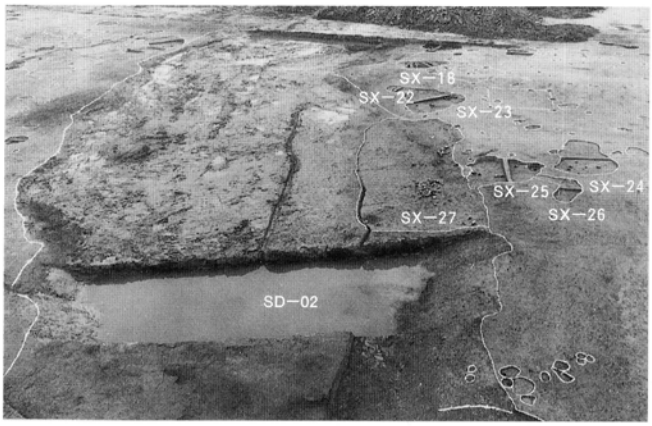


377

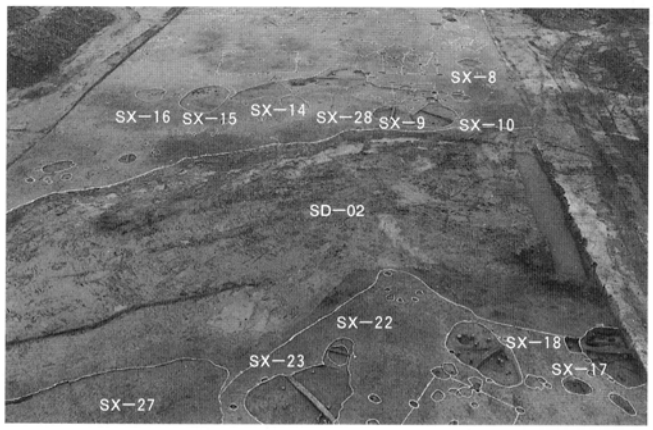


442

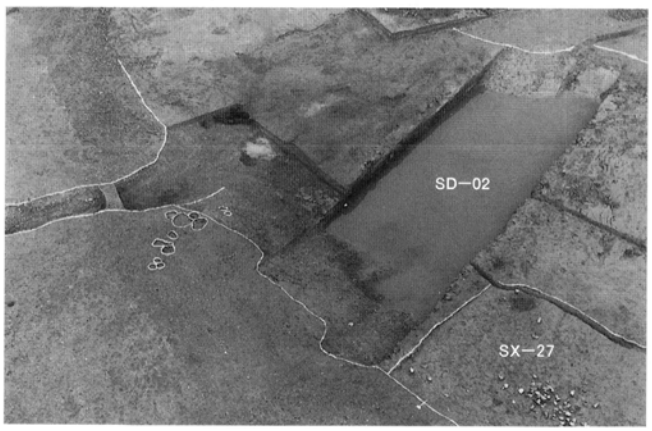
451



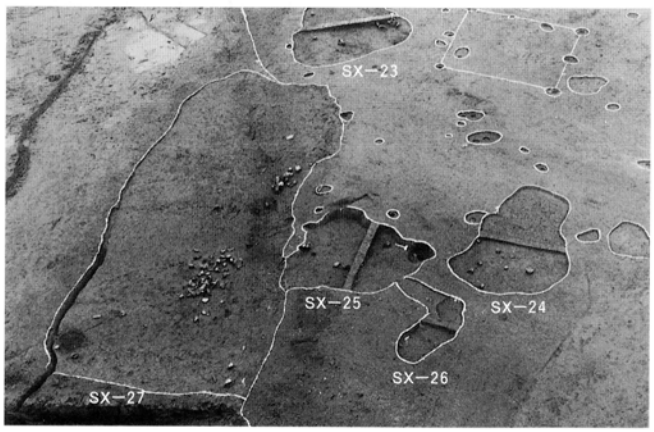
370



402



410



374

Ⅷ区検出遺構−4

486

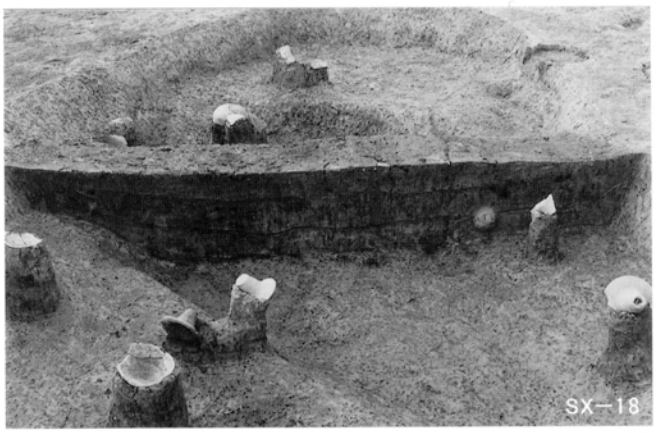
466

482

479

448

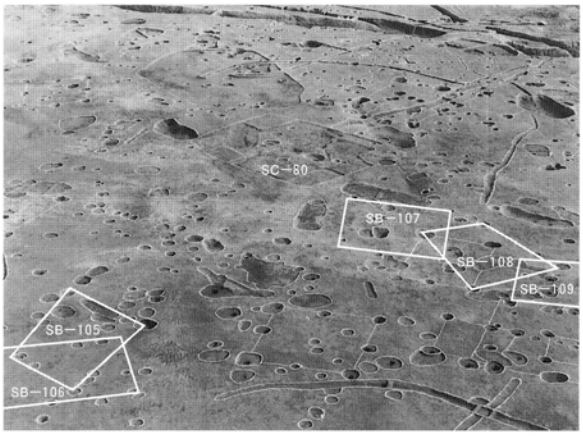
468



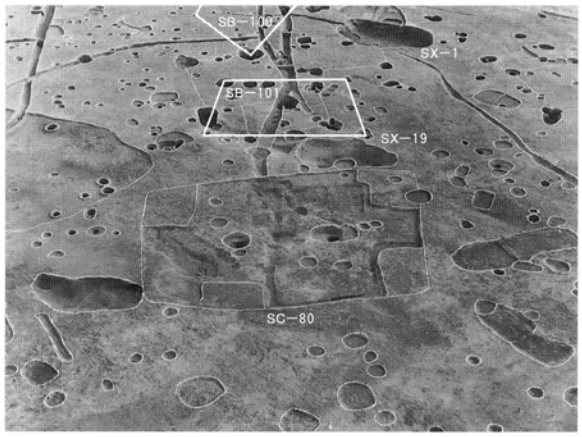
441

445

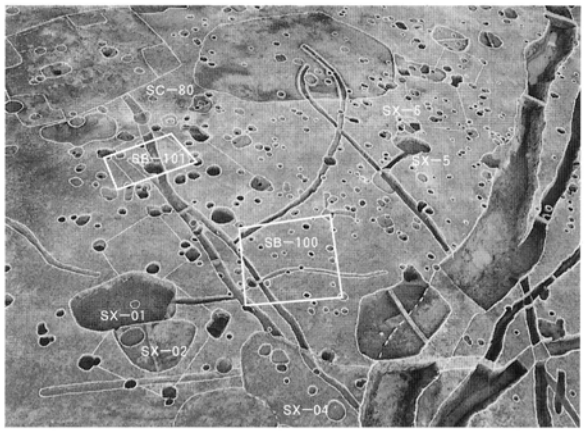
Ⅷ区検出遺構と遺物検出状況



538

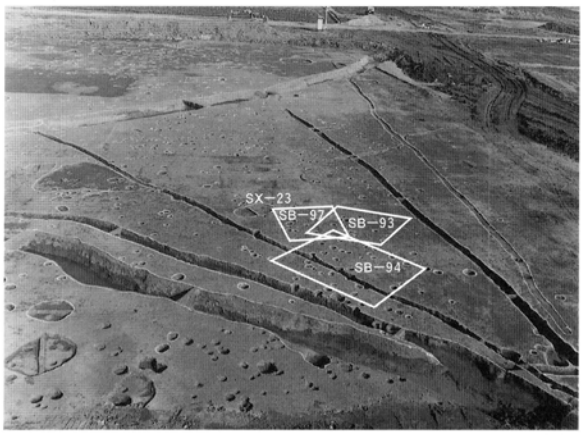


568

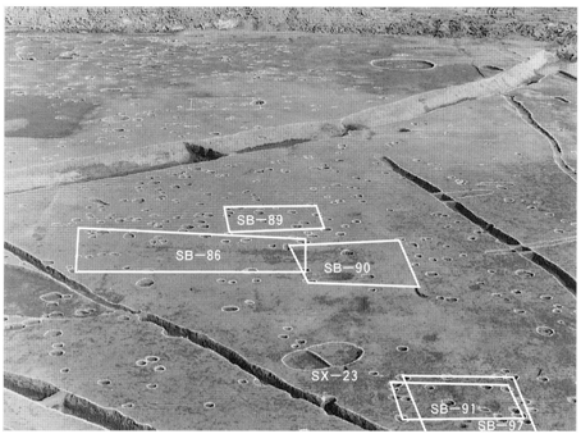


586

712

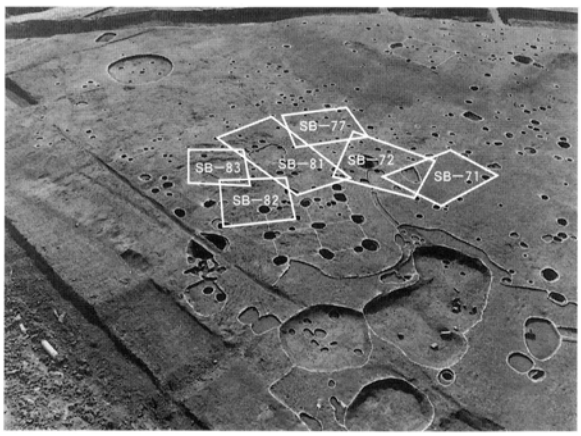


654



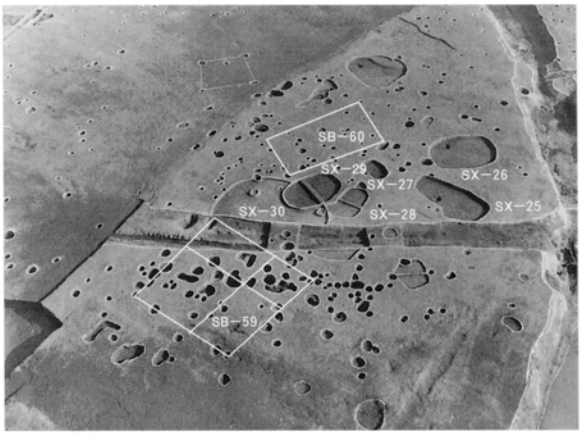
652

696

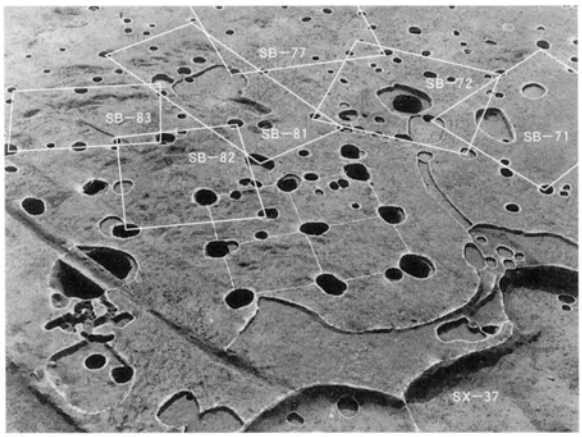


690

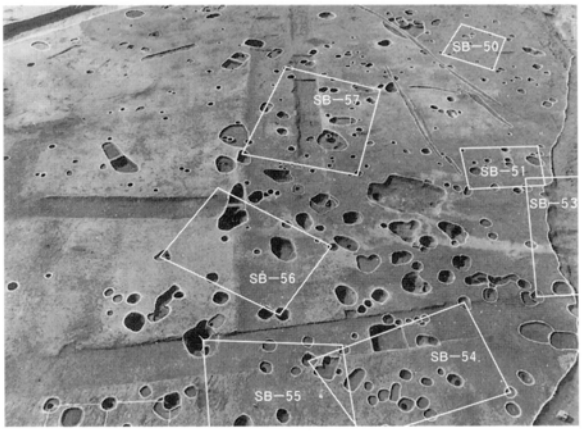
IX区検出遺構−1



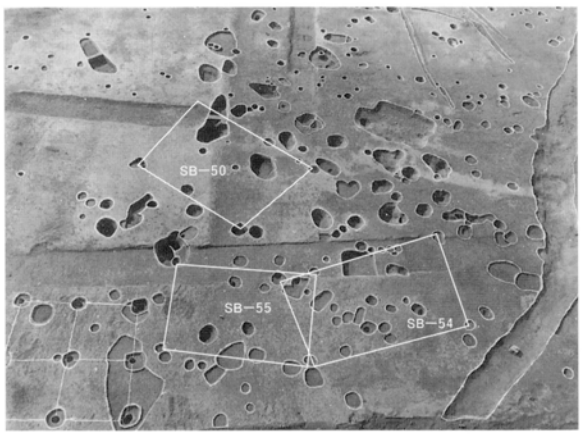
636



698



816

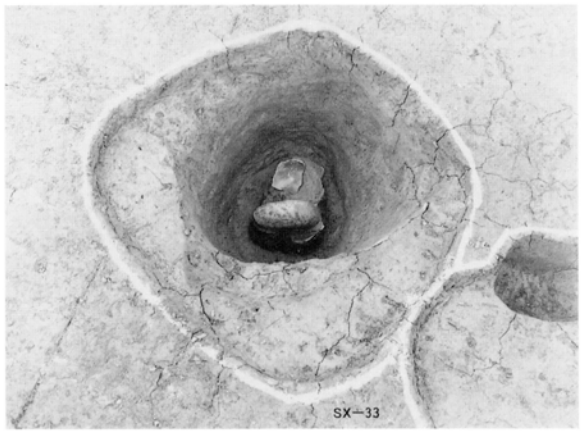


818

581

763

784



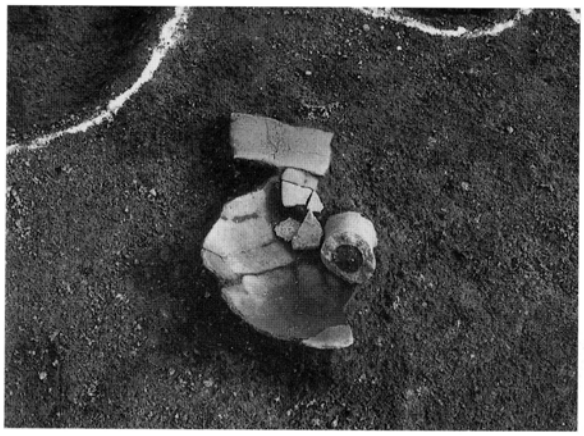
656

IX区検出遺構−2

753

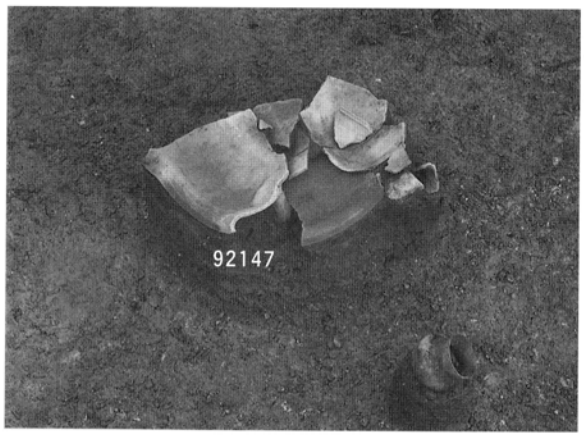
738

728

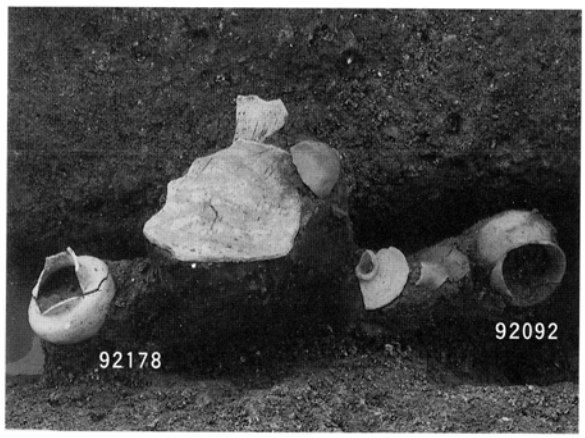


731

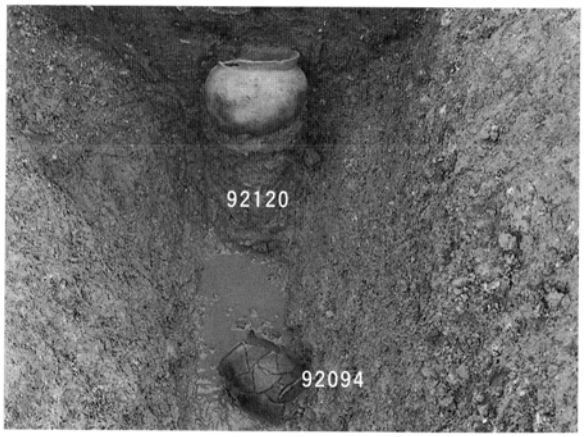
722



746

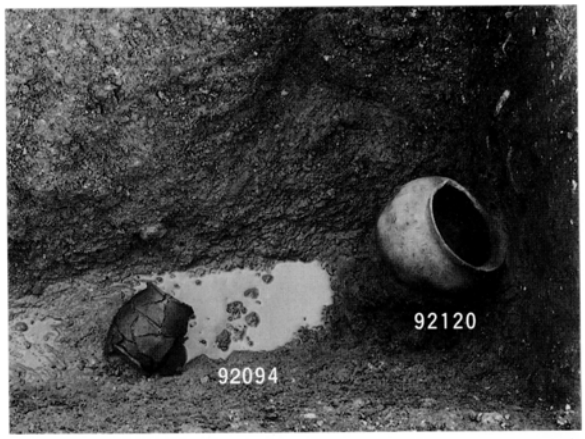


721



740

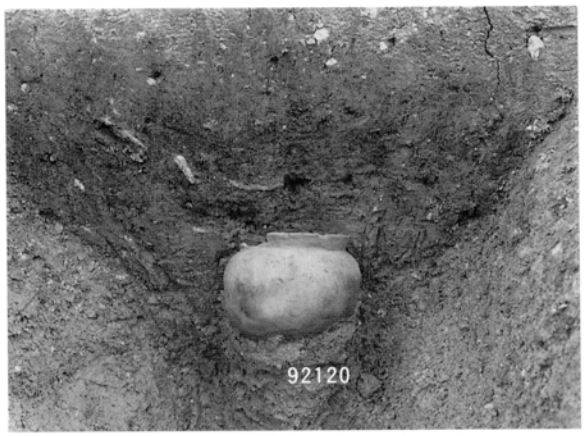
IX区遺物検出状況—1



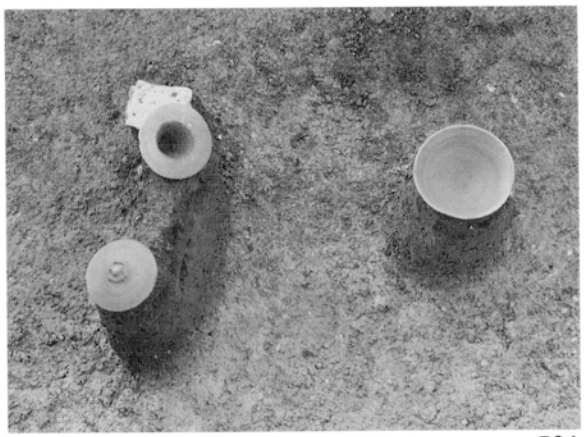
750

742

732



741



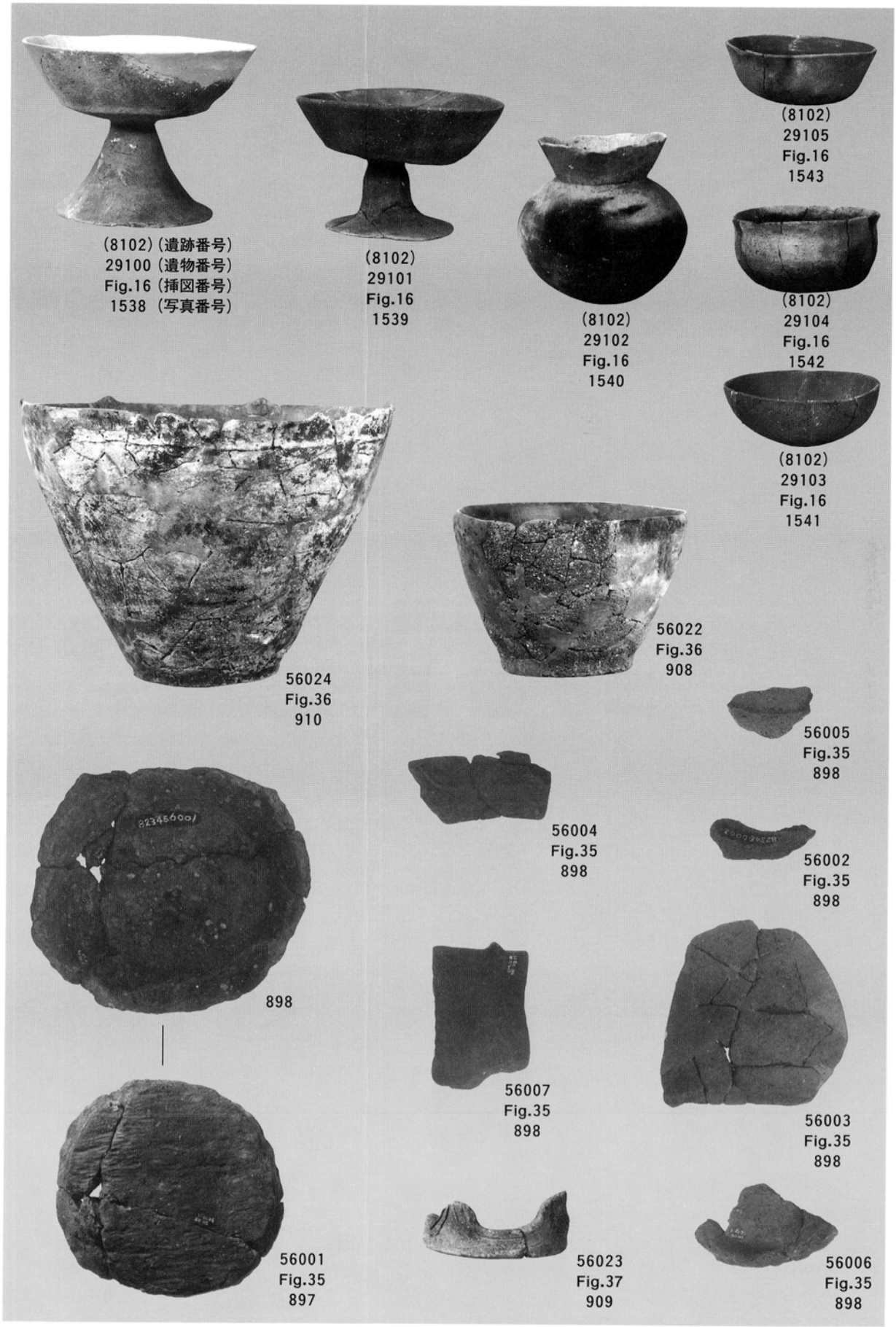
724

734

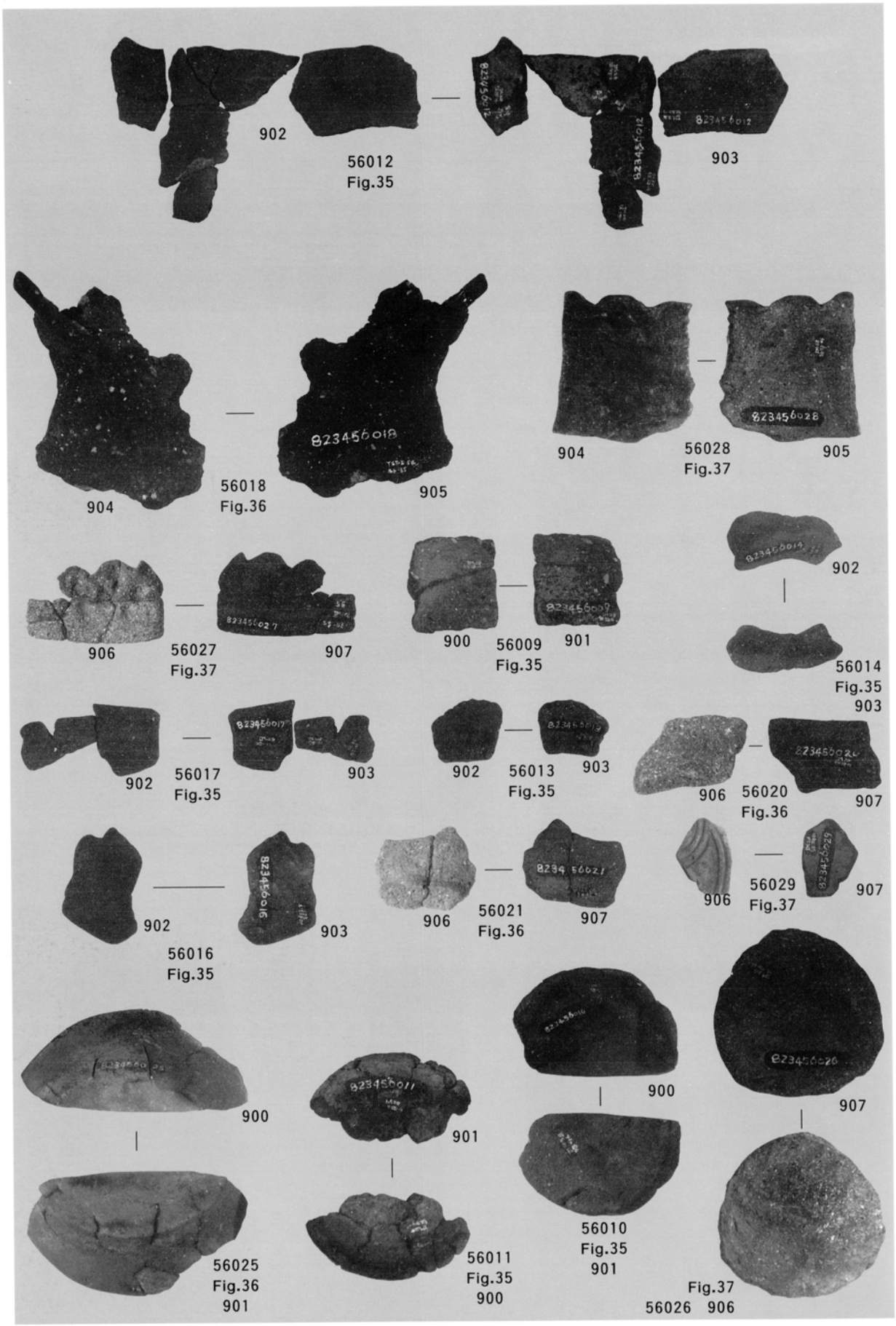
860北から

880北西

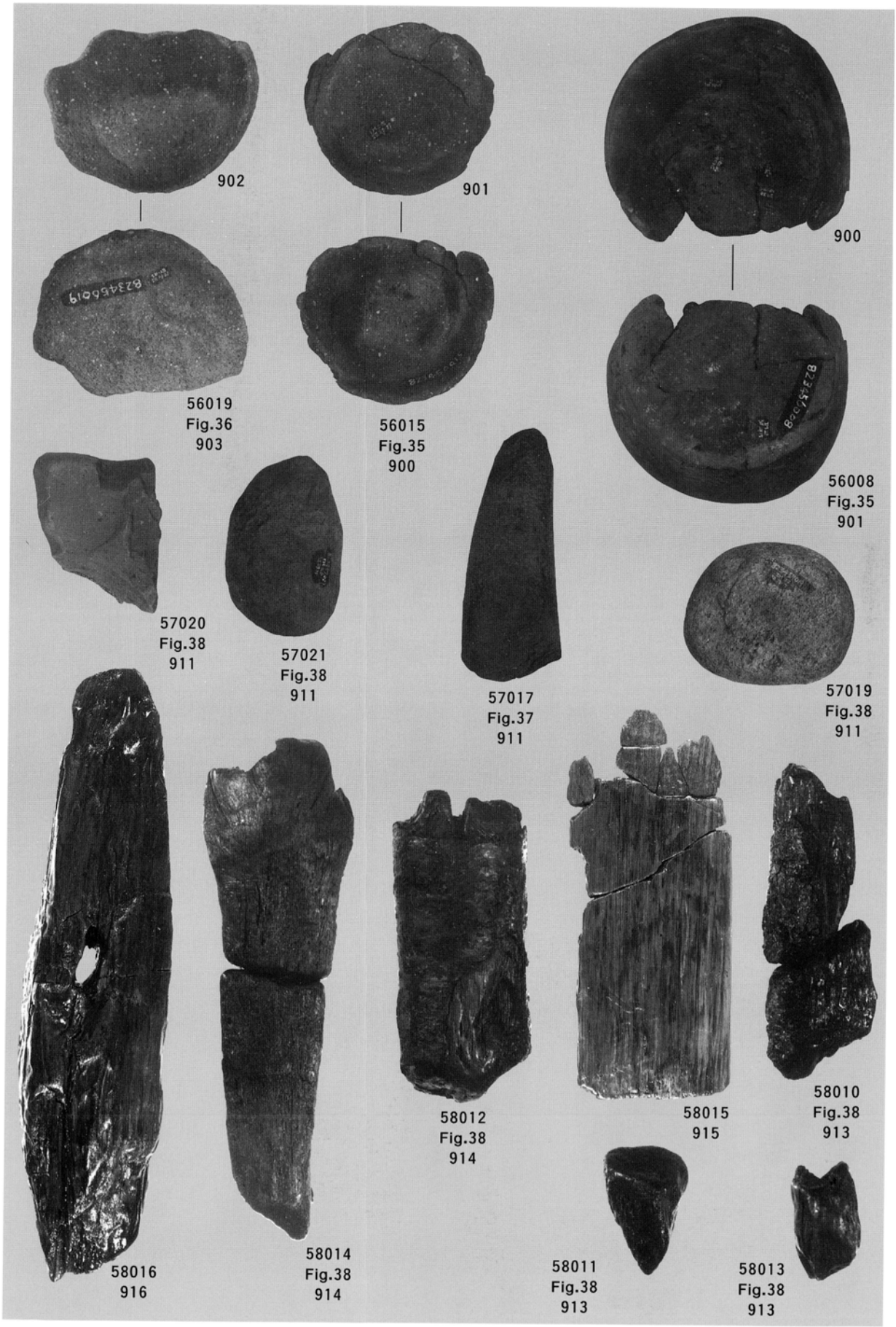
IX区出土とX区遺物検出状況－1



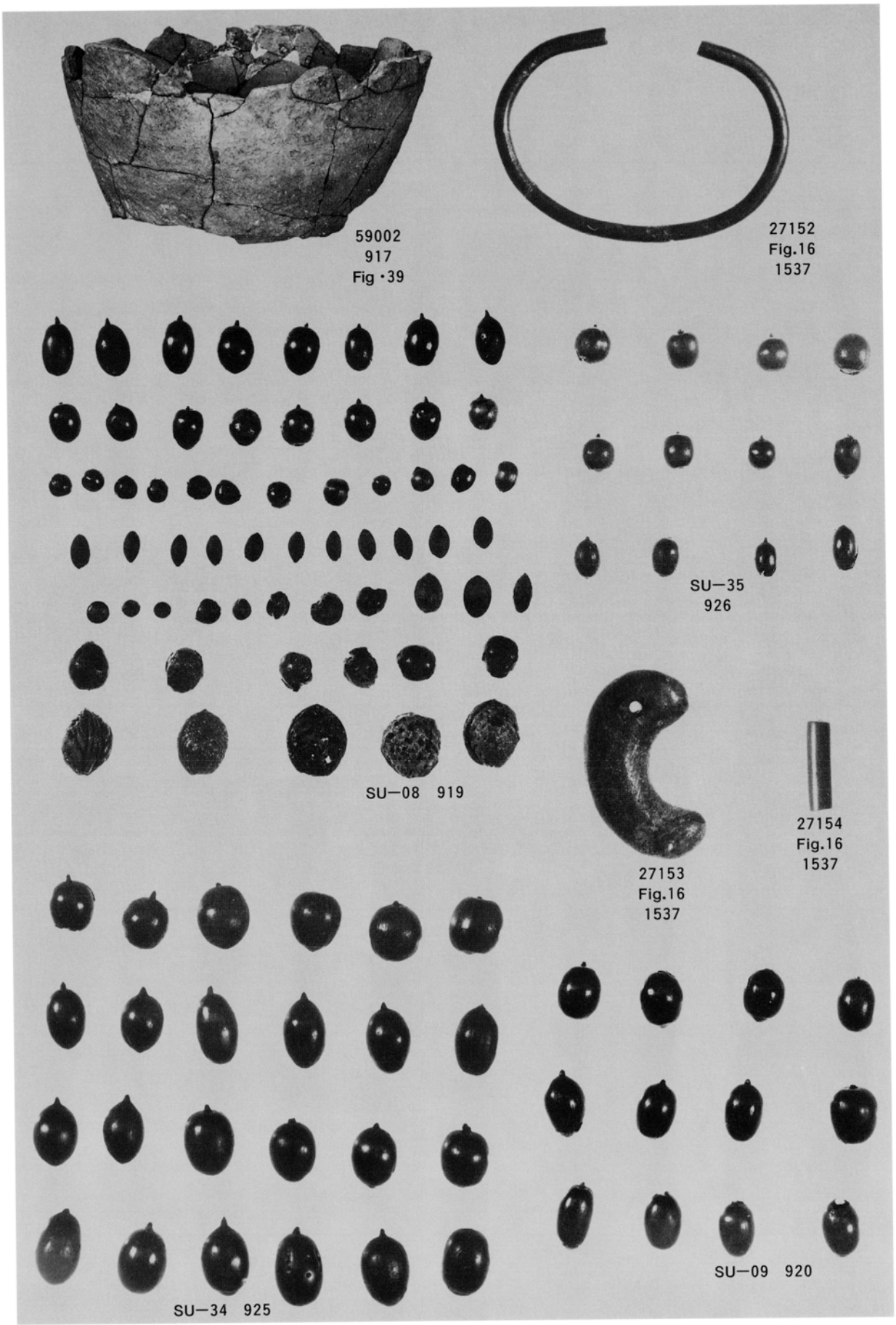
出土遺物ー1（縮尺不統一）



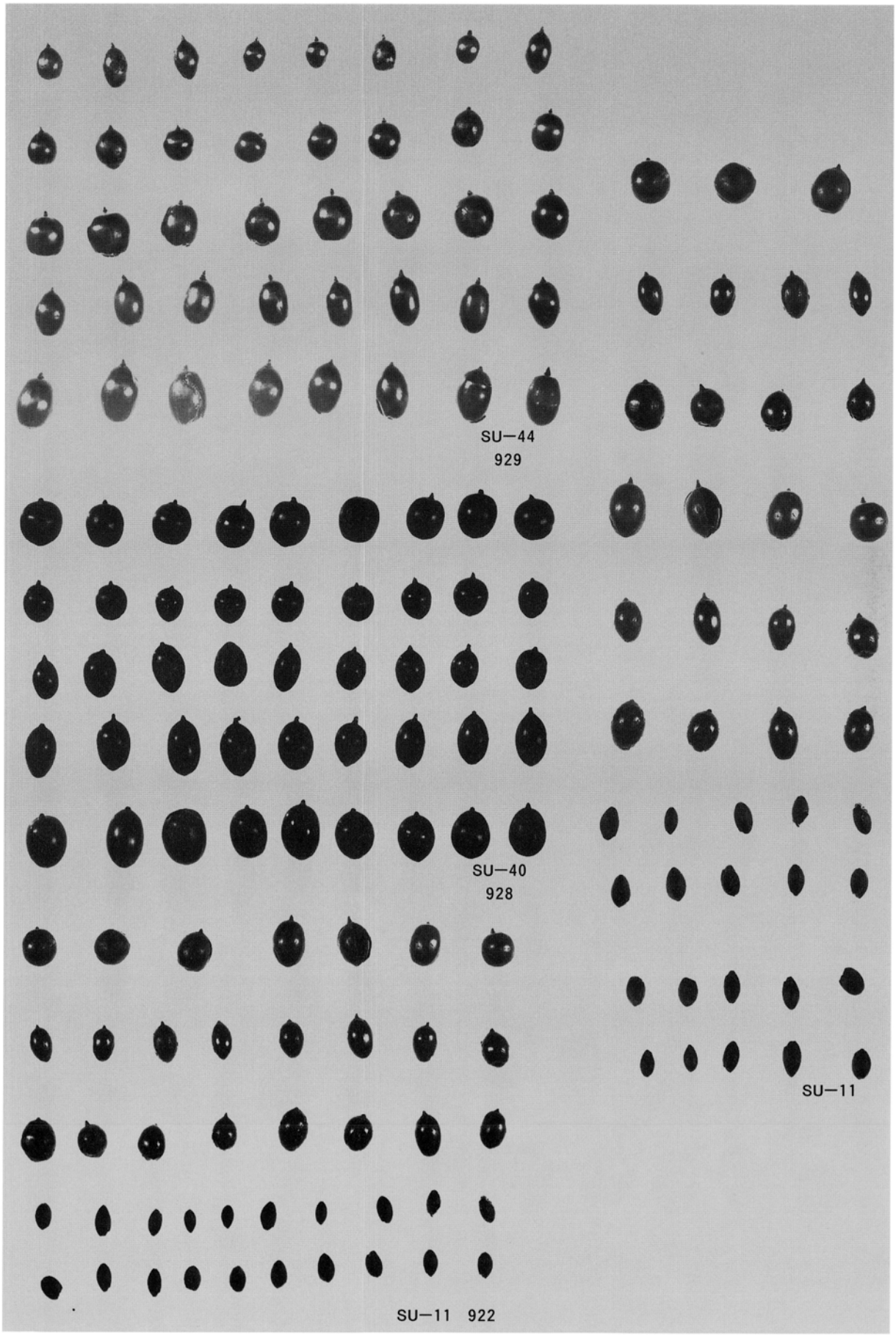
出土遺物ー2（縮尺不統一）



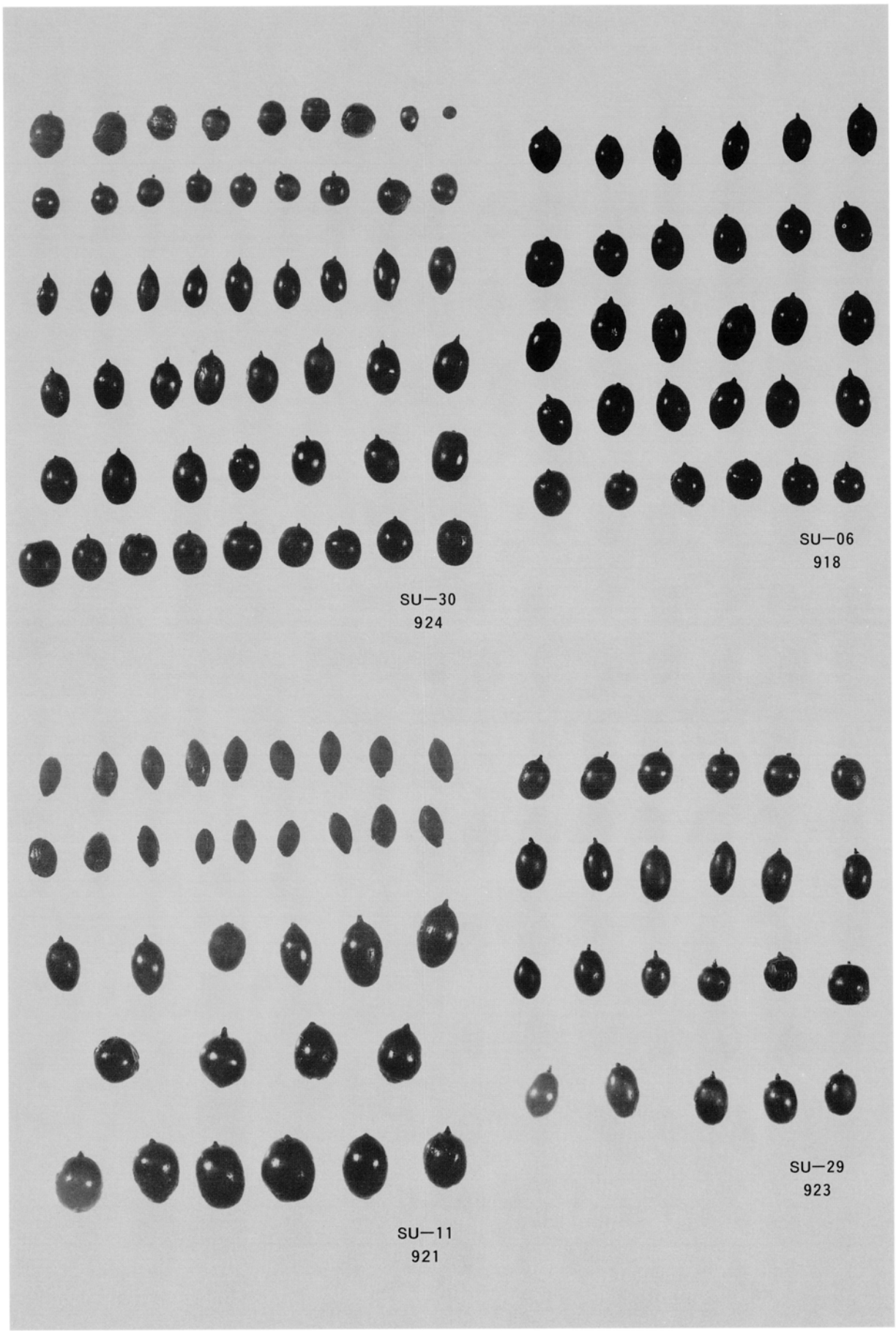
出土遺物ー3（縮尺不統一）


59002
917
Fig・39
27152
Fig.16
1537
SU−35
926
SU−08 919
27154
Fig.16
1537
27153
Fig.16
1537
SU−09 920
SU−34 925

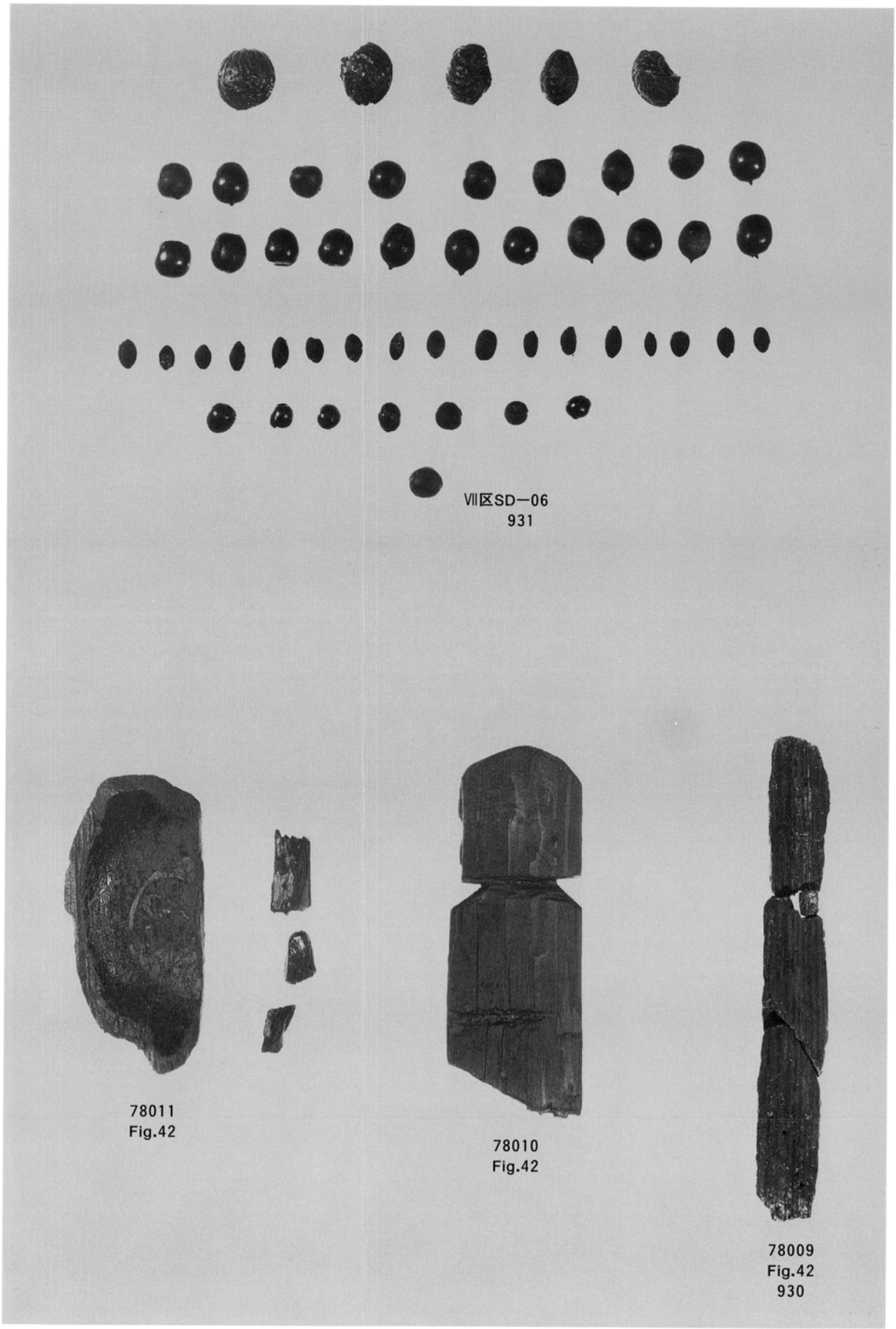
出土遺物−4（縮尺不統一）



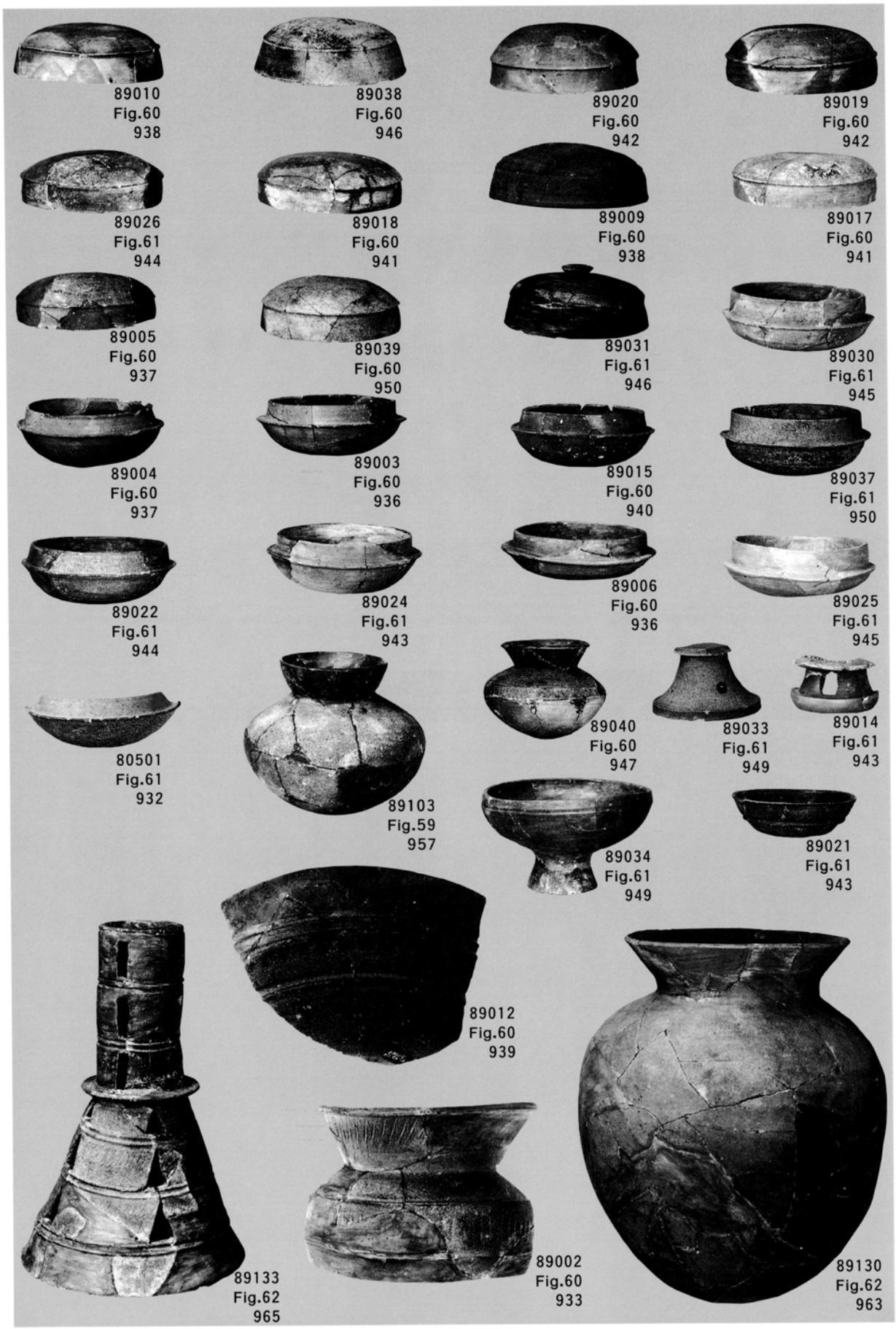
出土遺物−5（縮尺不統一）



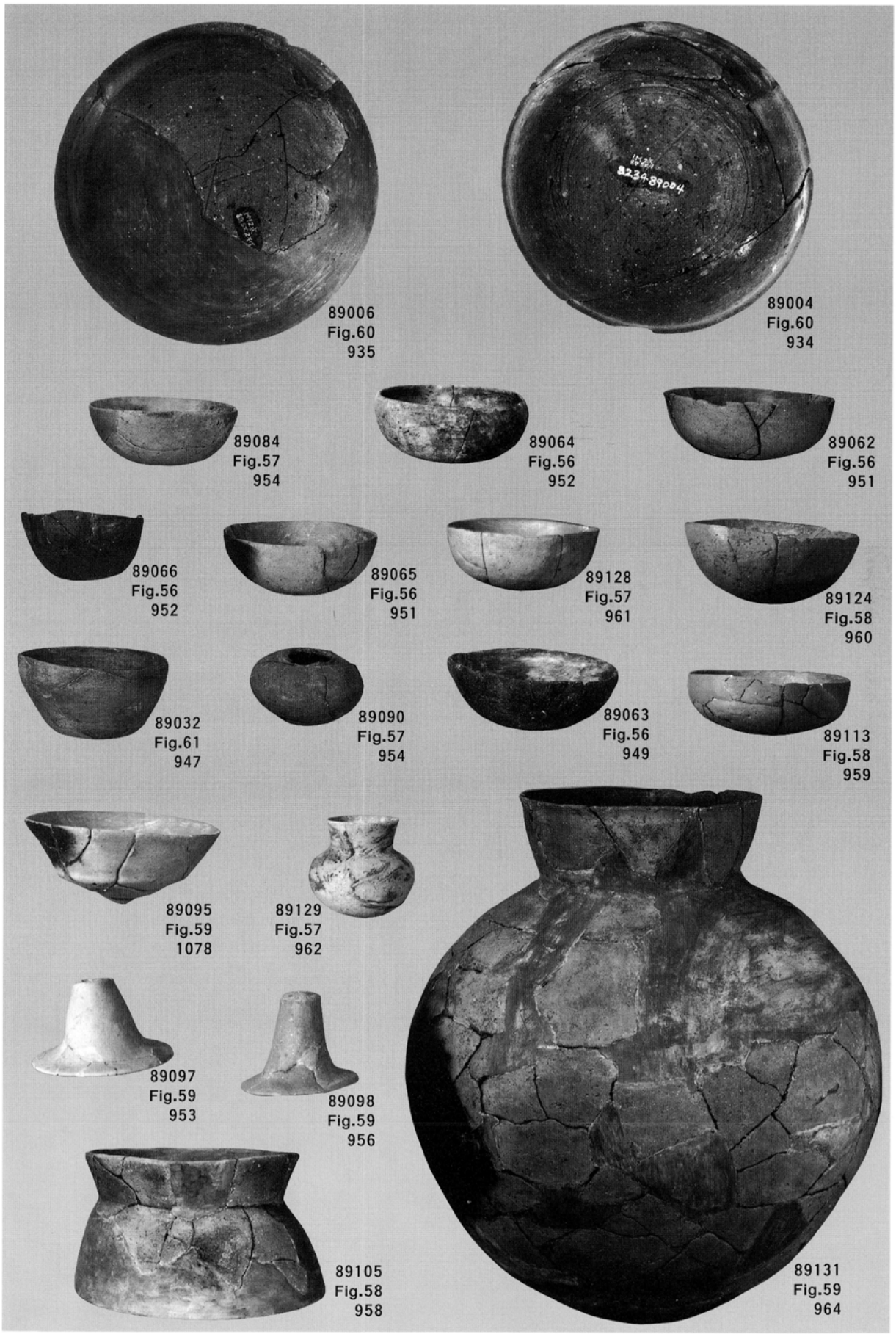
出土遺物—6（縮尺不統一）



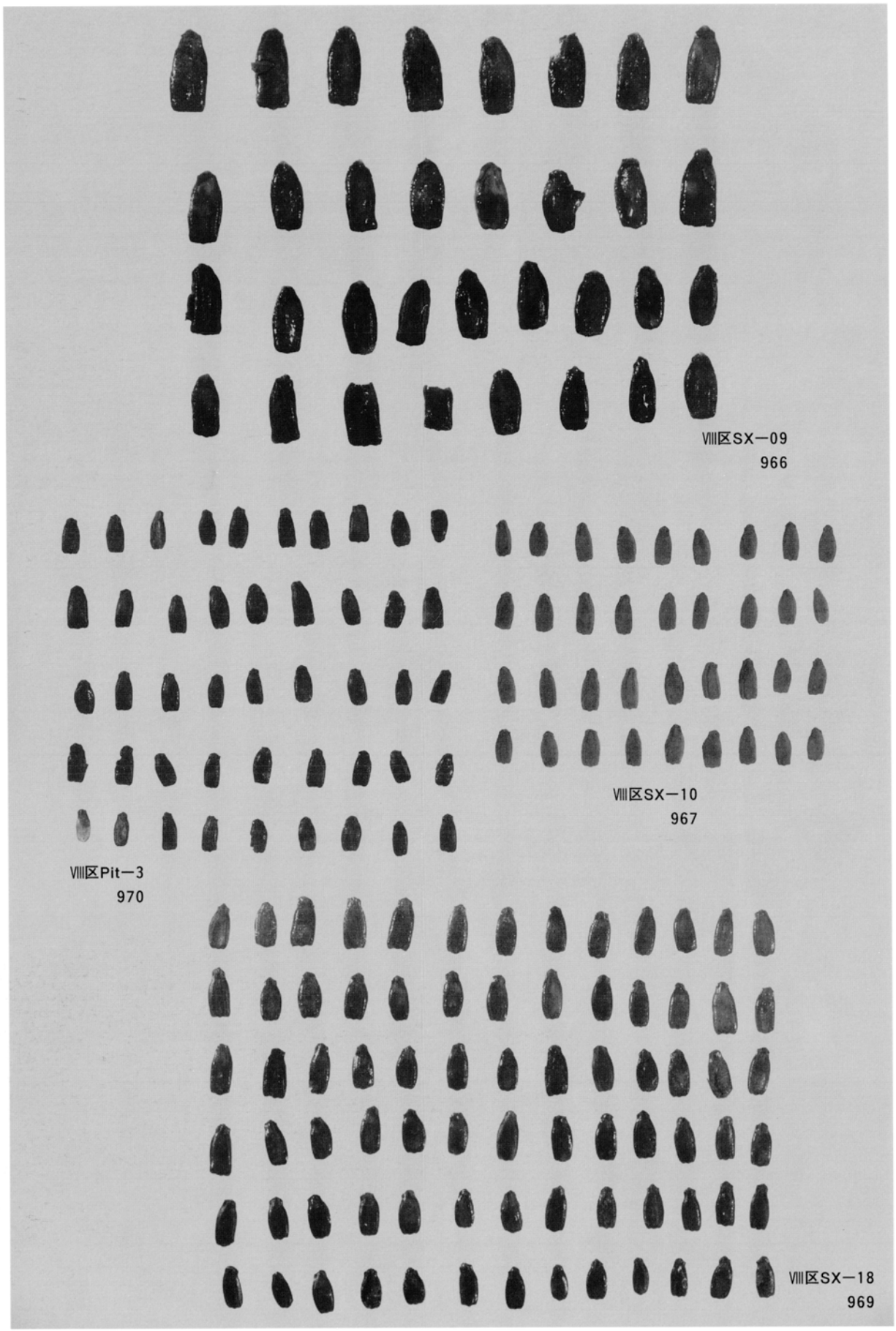
出土遺物−7（縮尺不統一）



出土遺物ー8（縮尺不統一）

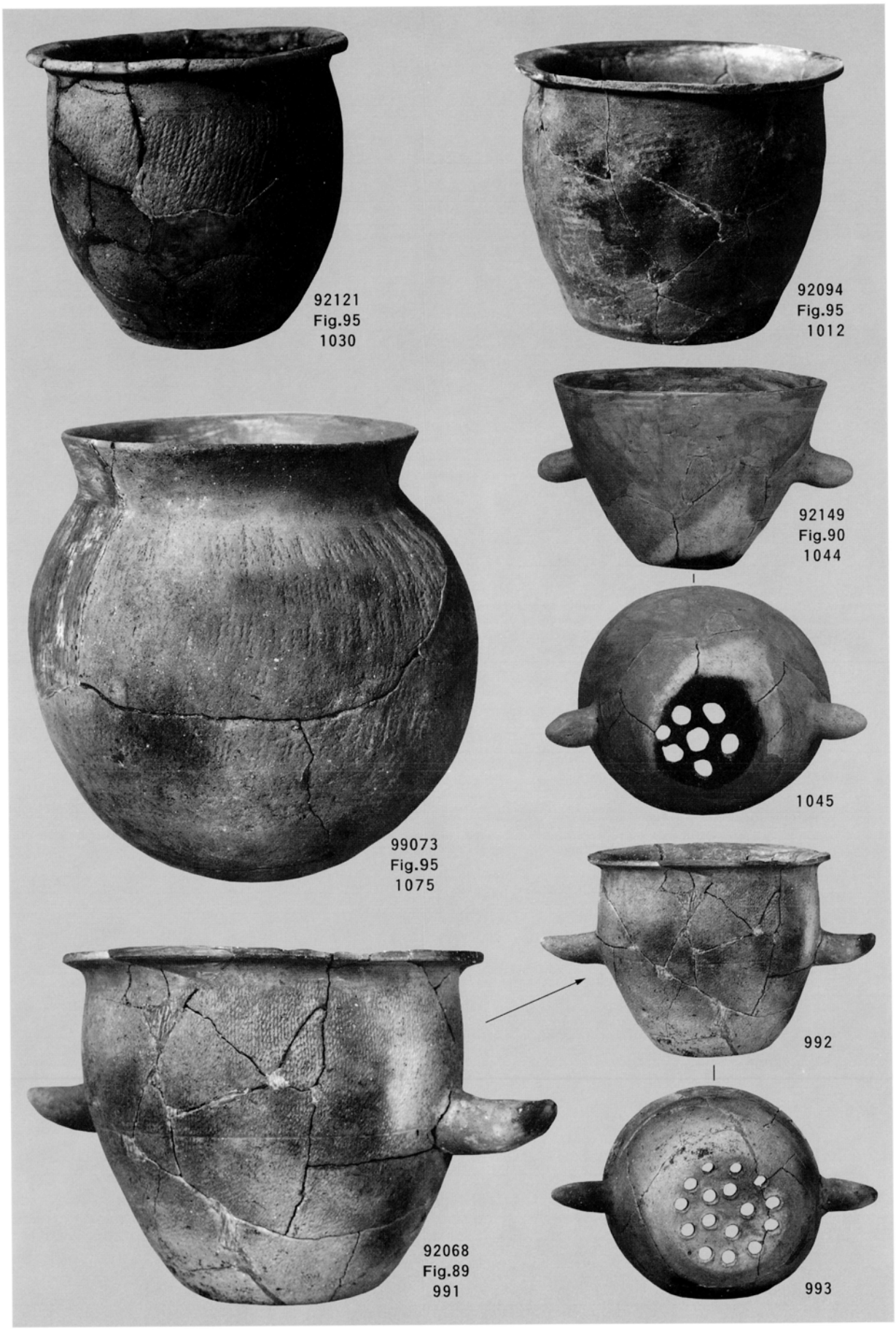

89006
Fig.60
935
89004
Fig.60
934
89084
Fig.57
954
89064
Fig.56
952
89062
Fig.56
951
89066
Fig.56
952
89065
Fig.56
951
89128
Fig.57
961
89124
Fig.58
960
89032
Fig.61
947
89090
Fig.57
954
89063
Fig.56
949
89113
Fig.58
959
89095
Fig.59
1078
89129
Fig.57
962
89097
Fig.59
953
89098
Fig.59
956
89105
Fig.58
958
89131
Fig.59
964

出土遺物－9（縮尺不統一）

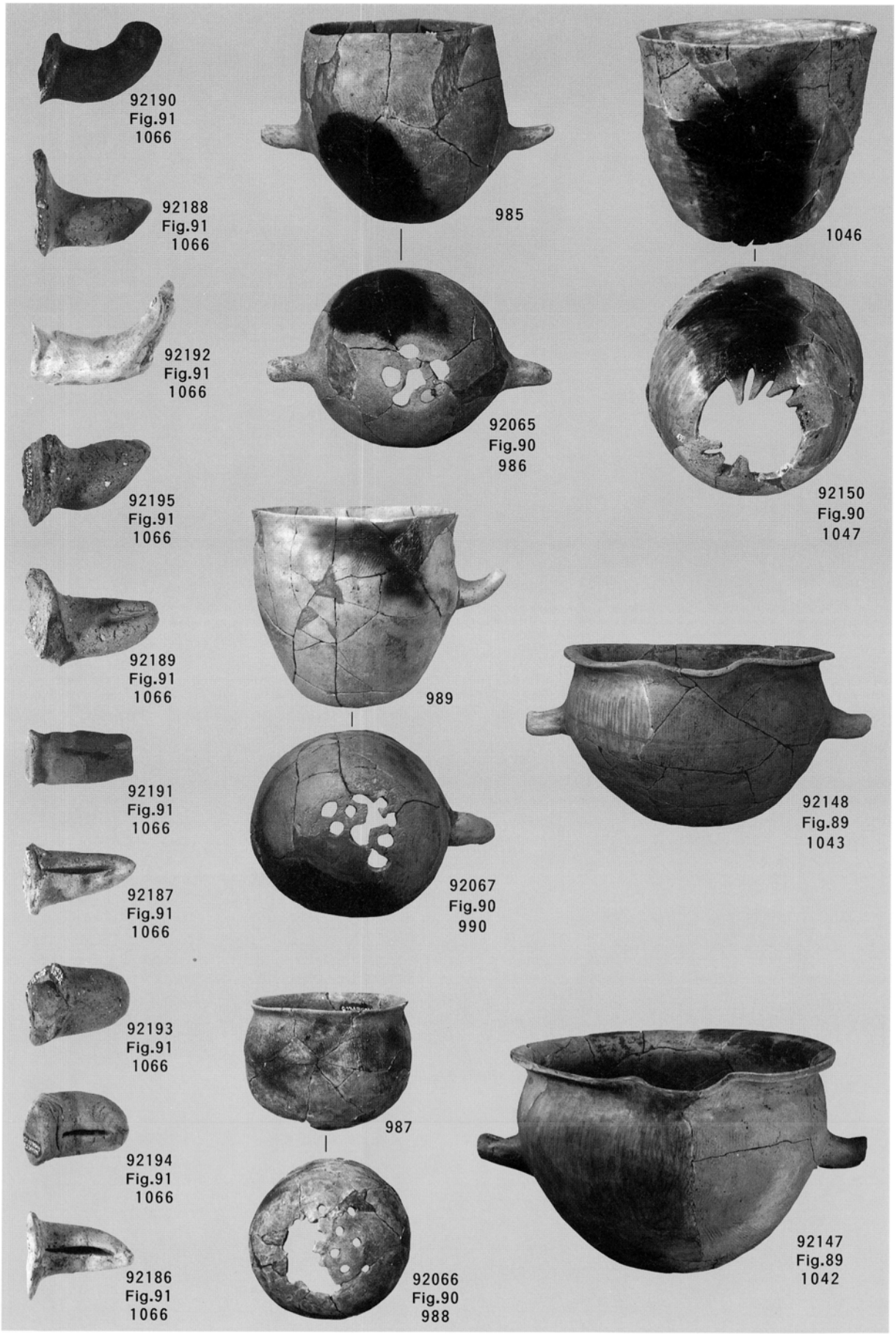


出土遺物－10（縮尺不統一）

出土遺物ー11（縮尺不統一）



出土遺物ー12（縮尺不統一）



出土遺物ー13（縮尺不統一）

92060
Fig.84
981

92070
Fig.85
995

92069
Fig.85
994

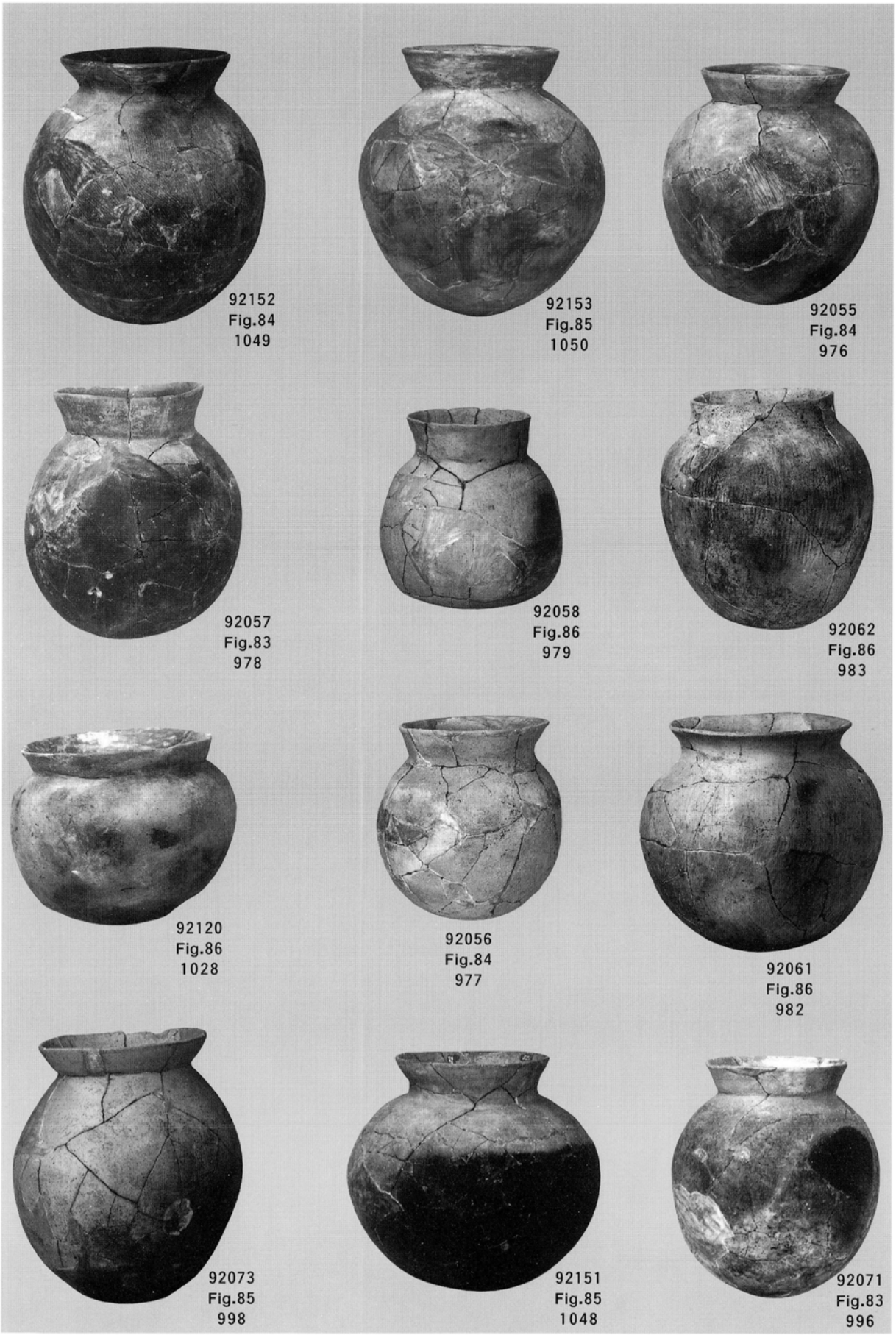
92161
Fig.95
1057

92164
Fig.83
1058

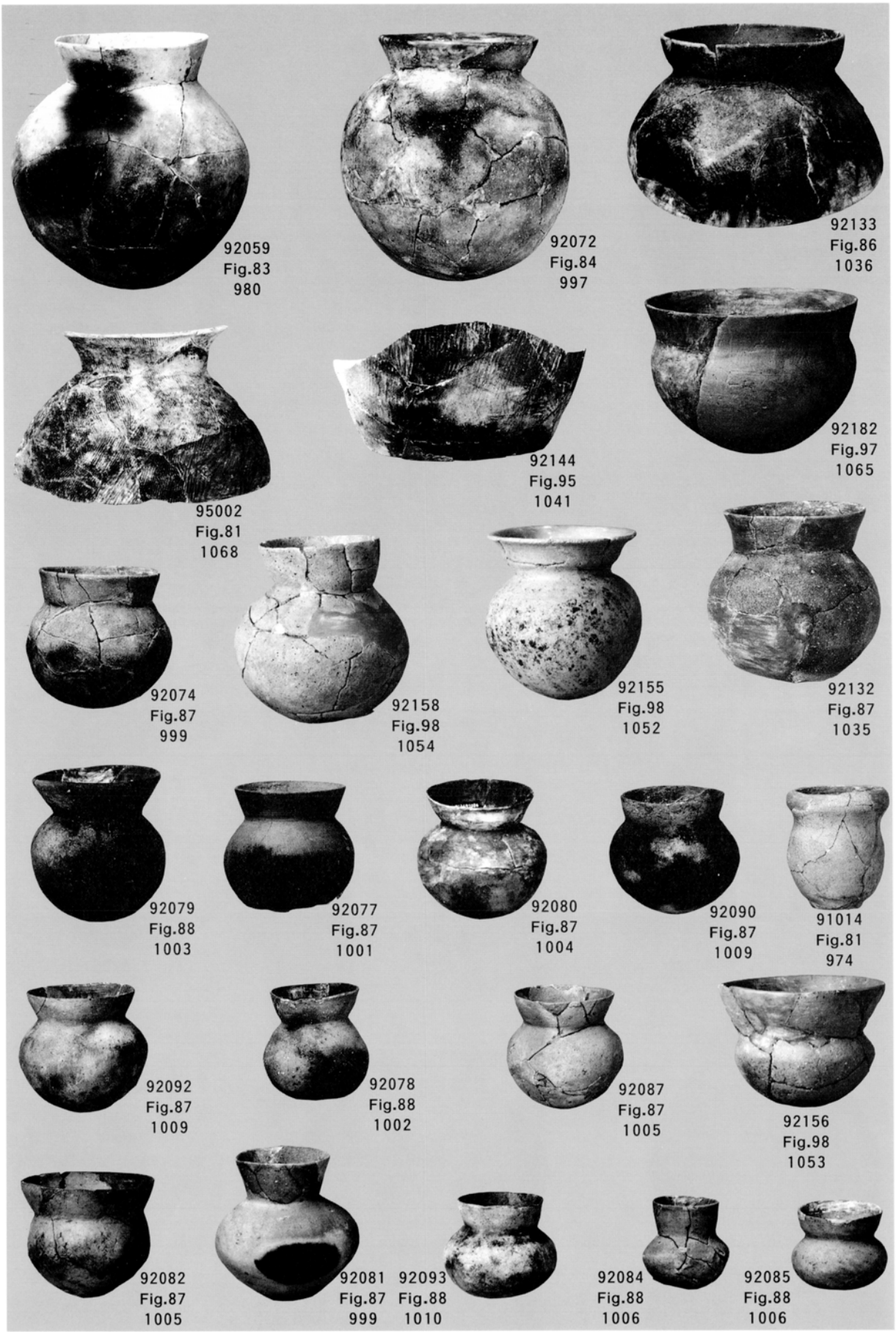
92165
Fig.86
1059

92154
Fig.83
1051

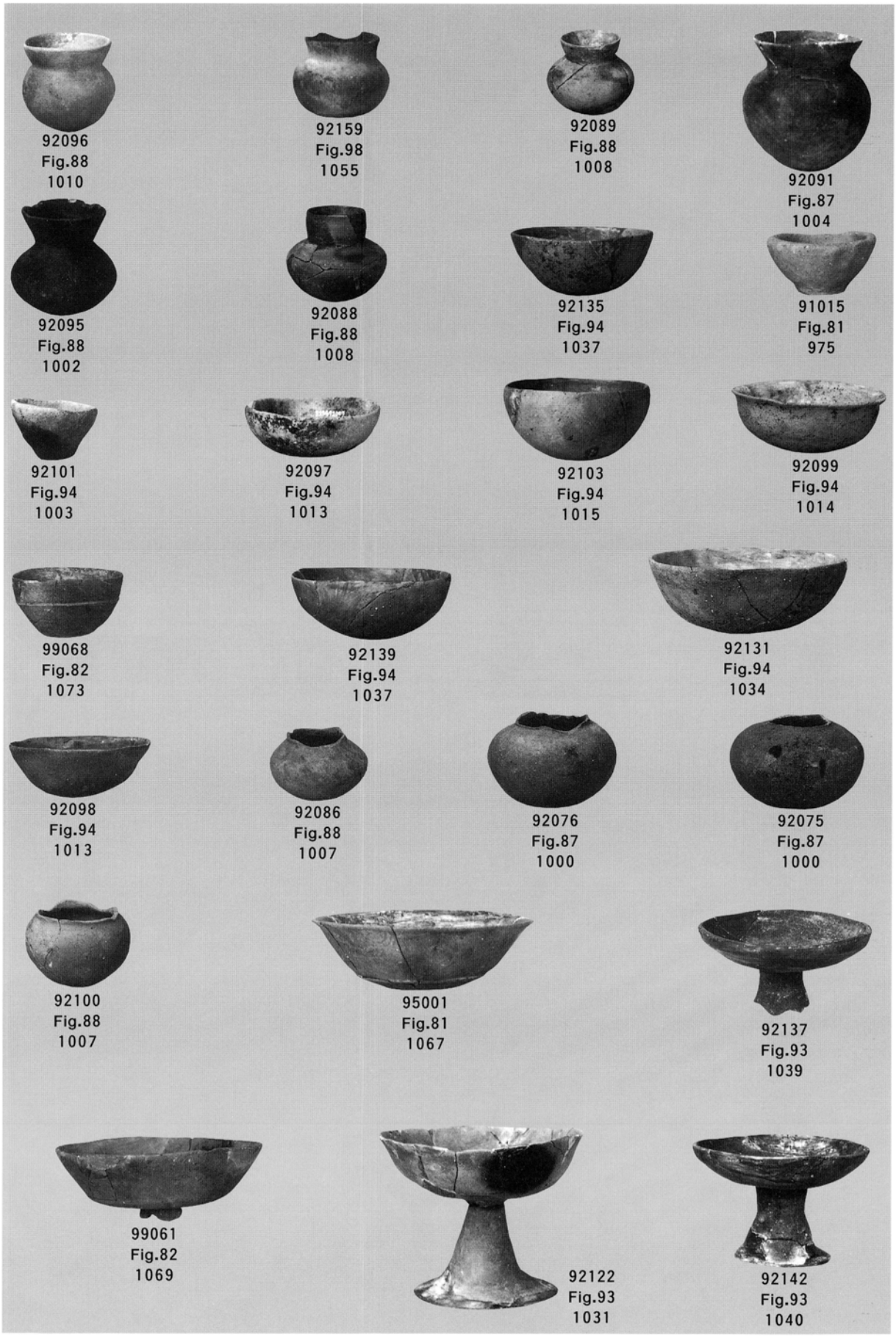
出土遺物ー14（縮尺不統一）



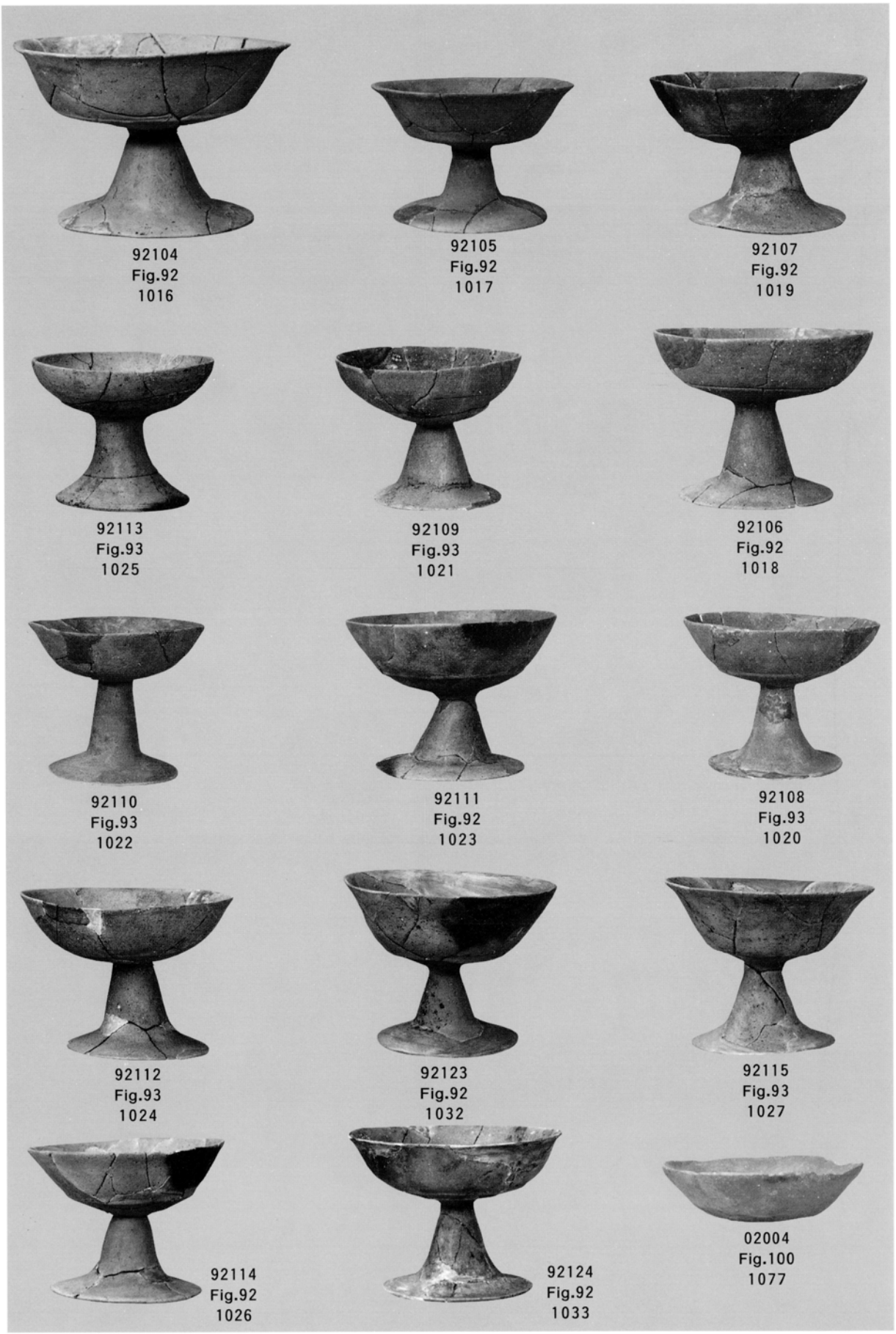
出土遺物ー15（縮尺不統一）



出土遺物ー16（縮尺不統一）



出土遺物－17（縮尺不統一）



出土遺物ー18（縮尺不統一）

吉 武 遺 跡 群 XIII

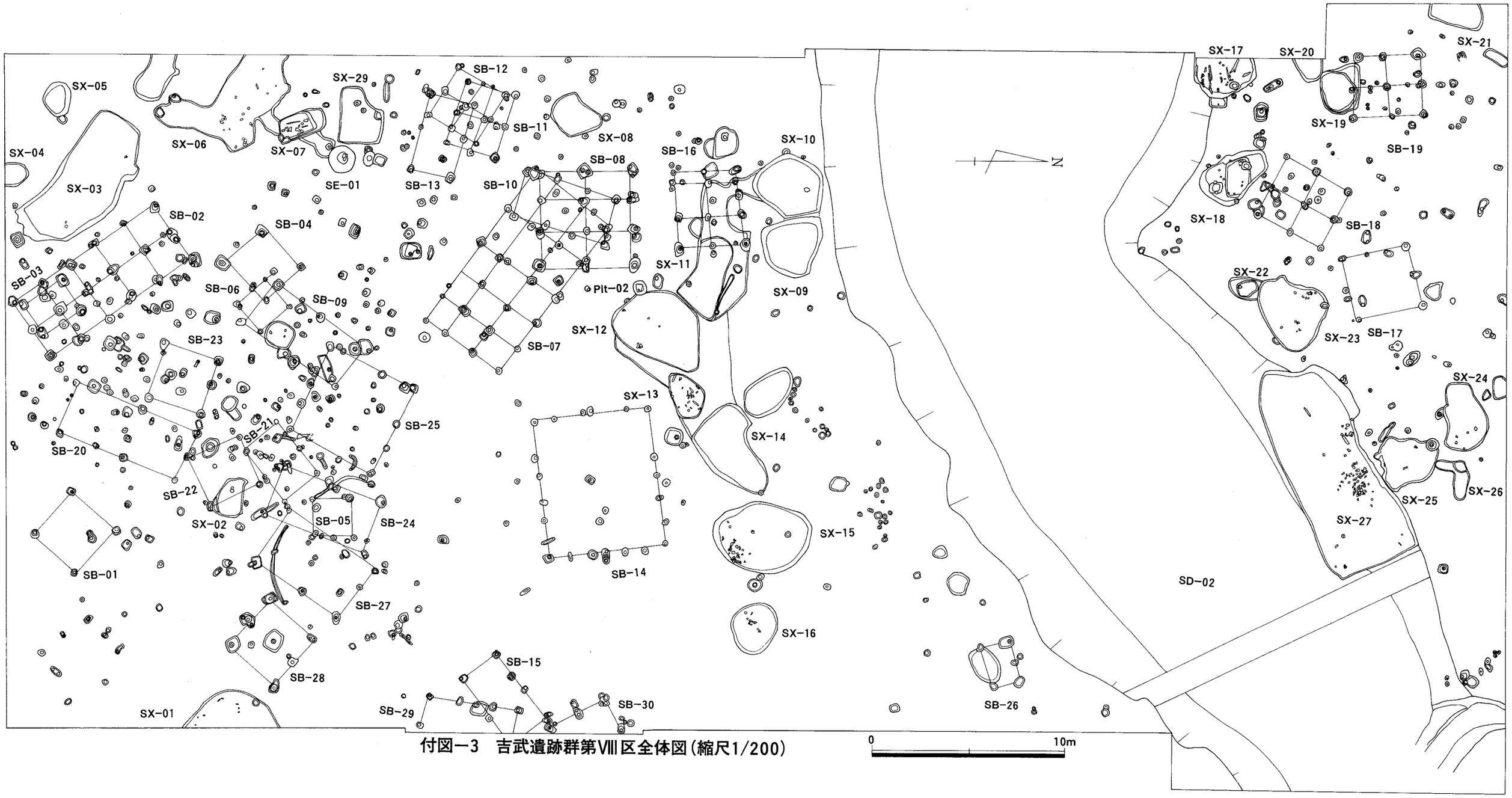
飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書6
—第Ⅰ・Ⅱ次調査の縄文時代・古墳時代
から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集

2001年3月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　下川印刷有限会社
福岡市東区郷口町8番27号



付図ー3　吉武遺跡群第Ⅷ区全体図(縮尺1/200)